
R u m b l e

久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R u m b l e

【Nコード】

N 8 3 7 4 A

【作者名】

久遠

【あらすじ】

銀髪、オッドアイの美形高校生、氷室和人。性格は鈍感朴念人。面白おかしく適当に！をモットー生きている。そんな彼の前に、幼馴染み、お隣りさん、学園のアイドル、お嬢様、などの美女がアタックを開始。彼等の青春の日々を書く。ハイテンション？学園ラブコメディー。時期は高校三年、彼の周りは戦場となる…和人「はあ…皆キャラが濃すぎる…」今日も彼の苦難と疲労に満ちた一日が幕を開ける…

プロローグ

「ZZZ…」

惰眠こそ至福の時、最高のステイタス：

別に偉人が残した言葉ではないが、これは俺の中の真理である。

俺、氷室和人は高校二年で、時刻はもう起きねば危険な領域に突入している。だが、心地よい眠りからさっぱり、きっぱり目覚める事が出来る人間がこの世のどれほどを占めているだろうか？

俺は出来ない方の人間に属する。幸い今日は邪魔者もないしな：

学校に遅刻すると言う事と三大欲求の一つである睡眠欲。当然、睡眠欲が勝利し俺はそのまま満足するまで眠るのだった：

「ふぁーよく寝た…」

寝るだけ寝たら満足だ。部屋に掛けてある時計を見ると短針が9を指していた

「9時…完全に遅刻だな…」

同じ遅刻なら焦っても仕方がない。

俺はだらだらと着替えてリビングに降りた

「飯でも食うか…」

ヤカンでお湯を沸かしつつ、カップラーメンを用意。

料理は出来ないわけじゃない。食材も恐らくあるだろう。だが、単に面倒臭い…

俺が料理を作るのは、両親が数年前に他界し、遺産目当ての親戚連中と縁を切り、爺ちゃんに引き取られ、今住んでいる家に越してきたのだが、

その爺ちゃんも俺が中三のころに死んでしまい、天涯孤独の身となり、遺産とこの家で一人暮らしをしている。そんな経緯から料理を覚えた。

元々、爺ちゃんと暮らしていた時から家事全般は俺がやってたんだが…

「沸いたか…」

過去を振り返っているとお湯が沸いたので火を止め、それをカップ麺に注ぎ、きっちり三分待ってから食べ始める。

数分で食べ終え、ゴミを捨て、学校に行く準備をし、戸締まりをして家を出た。

「いい天気だね」

夏も過ぎ去り、大分涼しくなり、紅葉が始まりつつある秋の景色を

眺めつつ、学生がいない通学路を一人歩く。

俺は光林高校の二学年に在籍している。一年から遅刻をしまくっていたのだがよく進級できたなと自分でも不思議でならない：

さらに：

「はあゝ」

大きな溜め息を吐く。その理由は道行く人、すれ違う人が奇異の視線で俺を見ると言うことだ：

たしかに、この時間に学生服を着てる人間が歩いていたら目立つかもしれないが、大きな理由は俺の容姿にある。

母さんがハーフだったため、銀髪で茶と青の異なる瞳：すなわちオッドアイという風貌である俺はかなり目立つのでこういった視線にさらされるのだ。

もういい加減、慣れはしたが気持のいい気分はしないので俺は足早に学校に向かうのだった

下駄箱で靴を履き替え、教室に向かう為、無人の廊下を歩く。それもそのはず、現在、二限目の途中：

すなわち授業中である

教室の前にたどり着き、普通なら躊躇する場面を遅刻常習犯である俺は普通に教室後ろのドアを開け中に入る。その瞬間：

「そこ!!」

「危な!」

現国の教諭である御堂女史がチョークを投げつけてくる。間一髪でそのチョークを避けると、チョークは壁にあたり粉々に砕けた

それを見届けると御堂女史は忌々しげに舌うちし、授業に戻っていった

俺もそのまま席につき、何事もなかったかのように授業が再開した

現国の教諭、御堂真希。彼女のポリシーは罰はチョークで与える…

当たれば物凄く痛い、避ければ罰は清算されるという、美人だが変わった先生である。

クラスメートもその性格を熟知しているのでとりわけ驚いたりはいない

席についた俺は現国の教科書を机から取り出す。そこに隣に座っている俺の数少ない友人…白樺華蓮が小声で話しかけてきた

「おはようございます和人様♪120ページからですよ」

「おはよう華蓮。いつもサンキュ」

俺の言葉にいいえと微笑む華蓮。

整った容姿に、茶色のさらさらの長い髪をストレートにした、おし

とやかな癒しオーラをかもしだしている華蓮は、その人望も厚く、誰からも好かれている。

彼女に告白し散っていった男共は二桁を越えている…

そして、何故か俺を様付けで呼ぶ。何度訂正しても止めてはくれず、理由を尋ねてもはぐらかされてしまうので、もう諦めた…というより、慣れた

そんな華蓮のサポートもあり、現国の授業を乗り切り休み時間になる

「よう、和人。おそよう」

「おう、冬至。おそよう」

俺に声をかけてきた黒髪の眼鏡をかけた青年、時雨冬至は数少ない俺の友のなかでも貴重な男友達だ。

冬至は積極的でリーダーシップもあり、サッカー部の部長でさらに学級委員もやっている。当然、人望もあり、皆から好かれている親友が学級委員なので遅刻をとにかく言われないのは助かる。しかし問題は…

「和人！！また遅刻！？」

「げっ…彩花」

長い黒髪を黄色いリボンでポニーテールにし、少し吊り目で強気な態度。だが誰が見ても美人だと答えるであろう容姿の橘彩花。この

中で一番付き合いが長い中学時代からの友人であり、

俺んちの隣に住んでいる。

さらに、剣道部主将でお節介やきで面倒見もいい。当然、人望もあって…以下略

「昨日、言ったわよね！？私、朝練があるから起こしにいけないって！そしたら一人で起きるって！」

「……過ぎ去りし過去より未来に目を向けないと…」

「うっさい！！携帯に電話までしてあげたのよ」

「んなこといわれてもな～別に頼んでないし…」

……はっ、ま、まずい、地雷踏んだ。

彩花さんはゴゴゴという効果音が聞こえるくらい怒っていらっしやる

「流石に私の朝練の時間に起こすのは可哀想だと思って情けをかけたのに…いいわ！明日から絶対に叩き起こしてやる！！」

「あ、彩花。わ、悪かったと思ってるよ。だから…」

「駄目！！もう決定事項よ！」

すでに決まってしまった事らしい…

「和人様、お昼は？」

午前の授業を乗り切り昼休みとなる。隣で華蓮が可愛らしいお弁当を広げながら聞いてくる

「いい…あんま腹減ってねーから」

かなり遅めに朝食を食べたからな。

「駄目よ！ちゃんと三食食べなさい！」

俺の前の席を陣取った彩花が怒ったように言う。昔のとある出来事があり、その影響からか彩花はなにかと過保護に俺の事を気にかけてくれる。

まあ元々のお節介やきという性格も理由の一つだろうが…

「相変わらず。橘さんは和人の保護者みたいだね」

「ち、違うわよ！ほっとくと和人の奴、餓死しかねないから…」

彩花の隣の席に座り、購買の戦利品を抱えている冬至がからかうような口調で話している

「へいへい。食べばいんだろ。じゃ、これは頂き♪」

「あー！ー！ー！」

彩花の卵サンドを ひよいとつまみ一口で平らげる

「美味しい！さすが涼香おねえさんだ」

涼香おねえさんは彩花の母親で、以前おばさんと言ったとき、すさまじい殺気をぶつけられたので以来、こう呼んでいる。明るく、活発に人だ

「ち、ちょっと！何て事すんのよ！！」

勝手に卵サンドを食べられ怒る彩花。それを見て華蓮は自分のお弁当箱を差し出す

「和人様。私のも食べますか？」

「いや、悪いからいいよ。ありがとな」

「私のは無断で食べといて！！」

「ま、彩花だし…俺、飲み物買って来る」

「どういう意味！？こら！待て和人！」

尚も食ってかかる彩花から逃げるように俺は自販機に向かった

昼食時ともあって、自動販売機は結構混んでいる。

だが…

「ひ、氷室だ…」

俺を見ると、列がわれ、自販機までの道ができる。

俺は中学時代は相当荒れており、世間で言う不良だった。高校に入ってからそんなことはないのだが、その先入観、容姿、遅刻多数という、普段の素行から未だに不良のレッテルが張られたままなのである

（こういう時は便利だね）

とりあえずジュースを買って早々に退散することにしよう…だが、自販機には先客がいた

「あれ、おっかしいな…なんでだろう？」

（水野さん、マズインじゃないか？）

（ああ…我が学園のプリンセスが氷室の毒牙に…）

小声ではなす生徒。っていつても聞こえてるんだが…まあ無視して、自販機に目を向ける

自販機に悪戦苦闘をしているのは学園のアイドル。水野ひかりだった。面識はないが、確かに美人だと思う。

ストレートの長い髪に、可愛い髪飾りがよく似合っている

（何やってんだろ？）

様子を伺うと、どうやら自販機が百円玉に反応しないでジュースが買えないらしい

（他の硬貨なり、紙幣で買えばいいのに…）

学園のアイドルは意外とアホな子なのではないかと思った

「えい、この…」

（とはいえ、このままだとジュースが買えんな）

ギャラリーも関わると自分が危ういと思ってるのか、成り行きを見守っている

俺は不良らしく彼女の前に割り込む

「あ…」

突然割って入った俺に驚き、恐怖から少し震えている水野。俺は金を入れて彼女の方を見ないで問う

「どれ？」

「え？」

突然、話しかけられ怯えた反応を示す水野

「だから、どれを買おうとしてたんだ？」

「え、えっと…レモンティーを…」

俺はレモンティーと自分のコーヒーを買い、レモンティーを水野に渡す。

「ほら、これやるからその120円は代金でもらうな」

「え？ えっと…その…あ、ありがとう」

レモンティーを受け取ると、水野は120円を差し出す

「別に礼はいいよ。あのままじゃ俺が飲み物買えなかったし」

しどろもどろにお礼を言う水野に俺は金を受け取りつつそう答え、とつとと教室に退散した。

この出来事は瞬く間に噂になり、呆然とレモンティーを持ち、ひかりは…

（確か…氷室くんだよな。不良って聞いてたのに…）

少し赤くなった顔で、ひかりは和人の事を考えていた

「お前、学園のアイドルからカツアゲしたんだって？」

「はぁ!？」

五限目の休み時間。トイレから帰ってきた冬至がそんなことを言い

出す。

「時雨さん、和人様がそのようなことをなさる訳がありません」

まったくその通りですよ。華蓮さん

「どうかなく水野さんは綺麗だからちよっかい出したくなっただんじやないの」

そう不機嫌そうにいい捨てる彩花。くそ、昼のこと根に持ってやがる…

「はあゝ。もう呆れて頭にもこないな」

「まあ、誤解だとは俺も思うけどな。何があったんだ？」

冬至に言われ、昼のことを説明する

「なんだ、いいことじゃないか…なのに何であんな噂になるんだ？」

「不良って先入観があるし、周りの奴らが勝手に捏造したんだろ。傍から見れば盗ったようにも見えるからな」

「それは…悲しいですね」

「まったく！和人、気にしちゃ駄目よ！」

「ああ。んな事でいちいち気にしてたら学校にも来れん…全然気にしてねーよ」

不愉快な思いをしている二人にそう言う。そして冬至がこの空気を
変えるために、からかい始めた

「それにしても珍しいよな。自分から人に関わろうとしない和人が
そんなことをするなんて…さしものお前も学園のアイドルの前では
一人の男だったか…」

冬至の言葉を聞き、彩花と華蓮から殺気が出ている…怖！

「んなんじゃない。ああでもしないとジュースが買えなかったんだ
よ」

「不健全な奴だな。健全な男子なら関わりをもったらもう少し反応
があるぜ。ま、お前みたいなのが案外、ああいう子のハートを射止
めるんだろうな…今回の事で向こうは興味を持ったと思うし…頑張
れよ！」

「いや、正直、俺はそんなに興味はないんだが…」

応援されたところで、俺は特に恋愛感情など無い…俺の言葉に二人
の殺気が四散する。なんだったんだ一体…

そしてまた授業が始まる…

仲間と過ごす平和な日常。だが、俺は物足りなさを感じていた。

時は進み、物語は三年の春から始まる…

プロローグ（後書き）

とうとう始まった！

和人「今回の話しはあまりあらずじに関係してないよな」

ま、プロローグだし…

和人「にしては長いな…」

僕の辞書には計画性という文字はないんだよね！

和人「……ま、いいけど。ああ、次回は彩花があとがきに来るから、迂濶な事を書くと……」

そ、そこで黙らないでくれ

和人「次回は、キャラが増えるらしいから楽しみにしてくれる人がいたら待っててくれ」

では、優しい文でのご感想をお待ちしております。

第1話：新学期 前編

季節は春…一年でもっとも俺を眠りの世界に誘う季節。

しかし…

「こら、起きろ!!」

「Z Z Z ……」

「起きろって言ってるでしょ! この!」

「ぐっ…!?!」

惰眠を満喫していたら、鳩尾に肘を落とされました…い、痛い…

「ゴホ…あ…彩花…俺を殺す気か!?!」

「やっと起きたわね。おはよ和人♪」

「ふざけんな!! 永久の眠りにつくところだったわ!」

「あんたならあれくらいやっても大丈夫よ」

「…釈然としないけど。とりあえず。おはよう彩花」

「のんびり挨拶してないで、さっさと着替える! まったく…今日から三年なのよ」

挨拶は重要だぞ。人として…ま、それはいいとして

「あのさ…」

「何よ？」

「そこにいられると着替えられないんだが…俺の裸体がそんなに見たいのか？」

その言葉に彩花の顔が真っ赤に染まる

「そ、そんな分けないでしょ！馬鹿！スケベ！痴漢！」

「待てや！痴漢はどう考えてもおかしいだろ！って、居ねえし…」

あのアマ…言うだけ言っというて逃げやがった…

とりあえず、待たせるのもなんなので制服に着替え、洗面所で身だしなみをチェックし、リビングに向かった。

「和人、朝ごはんはトーストでいいよね？嫌だって言ってももう焼いてあるんだけど…」

「ごほ、ごほ、いつもすまん…お前には迷惑ばかりかけて…」

「いいのよおじいちゃん。って、何やらさんのよ!!！」

ナイスなノリツツコミですね

そんなことを思いつつ、ソファアに座り、俺はテレビをつけ、それを見ながら彩花が用意したトーストを食べ始めた。彩花も隣に座ってコーヒーを飲みつつ、テレビを見ている。

「時間はまだかなりの余裕があるな」

「感謝しなさい。余裕があるように起こしてあげたんだから」

「遅刻なら遅刻で別に…いえ、なんでもありません」

途中で彩花が睨んだので語尾を変える…だって怖いんだもん…

だが、やられっぱなしは悔しいな…ふっふっふ、ここは反撃に出ねば…

「にしてもさ…」

「ん？」

コーヒーを口に含んだところを見計らって俺は告げる。

「この状況、新婚夫婦みたいだよな」

「……………っ！？ケホ、ケホ…」

咽とる、咽とる。ちょっとやり過ぎたかな

「大丈夫か？」

背中をさすってやる

「あ、ありがと。もう大丈夫って、あ、あんたが変なこと言うからじゃないの！」

「少しからかっただけだよ」

「何よ：一瞬本気にしちゃったじゃない…」

小声で何かを呟く彩花

「何か言った？」

「な、なんでもないわよ！ほ、ほら食べ終わったんなら食器貸しなさいよ！」

まだ半分近くコーヒーが残っているカップを強引に奪うと彩花は台所に行ってしまった。訳がわからん…

「そろそろ行きましようか」

洗い物を済ませた彩花が戻って来てそう告げる

「そうだな」

俺達は鞆を持ち、閉じまりをして外に出た

「じゃ、頑張ってね和人♪」

彩花愛用の水色の自転車の後ろに座り、そんな事をのたまう

「俺にこげと？」

「何よ、女の子にこがせる気？」

「俺的価値基準で言うとお前は女の子のカテゴリーに……さて、じゃしっかり捕まってるよ！」

属していないと言おうとしたところで彩花の殺気が強まったのを感じて慌てて誤魔化し、自転車をこぎはじめた。

朝の心地よい空気の中、平坦な道をかっ飛ばす。彩花は俺の腰に若干強めに抱きついており：何やら柔らかい感触が背中に：こ、こいつ、結構スタイルが：って、なに考えてんだ俺は：

そんな考えを振り払うために俺は口を開く

「にしても：お前、太った？去年よりも重いような……痛！こ、こら暴れるな！危ないって！」

「ガルルル、ガウツ！」

「痛い！って、噛みつくな獣！」

肩を噛みつかれた。あ、あまりの怒りに獣化してやがる

「グルウウウ」

「怖！どっから声だしてんだよお前…」

そもそも人間が出せるような声じゃないような…このままでは彩花は人の道からコースアウトしてしまう…

「じ、冗談だよ。剣道やってるし、十分スリムだって…さっきのは、俺に自転車こがしてる腹いせだって」

その言葉に唸り声と攻撃が収まる

「そうよねーまったく変なこと言わないでよ…今度、言ったら…」

そこで黙られると滅茶苦茶怖い…さらに殺気を感じる。今後、女性に体重の話題を避けようと心に誓った

そんな事をしているうちに学校前の急な登り坂に差し掛かろうとしていた。

あの攻撃の中でこぎ続けていた俺の根性とバランス感覚を誉め称えたいと思う。

「ふうーじゃラスト気合いいれますか」

「頑張れ和人♪」

気安く言うがこの坂は自転車通学者の三人に一人しか立ちこぎで登り、残りは押して登る。そんな急な坂を二人乗りで登ろうというのだから無謀に近い。だが…

「はあ、はあ…：ぜはー…：ど、どうだ…：」

登りきった。汗だくだく

「流石、和人！」

まったく、途中で何度落としてやろうかと思ったことだろうか…

「はあ、はあ。と、とりあえず、じ、自転車を、置きに…：行こう…：ぜ」

息を整えつつ自転車置き場に向かう

「お疲れ和人。大丈夫？」

「しんどい…：」

「ご褒美にジュース奢ってあげる」

彩花は機嫌がいいようだ。だが、褒美がジュースだけっていうのはあまりにも、つりあわない気がそこはかとなくする

「何よ…：いらなの？」

「え、エスパー!？」

「声に出てたわよ。さ、馬鹿やってないで早く行きましょ」

自転車を置いて、俺達は玄関に向かった

玄関前にある掲示板には人だかりが出来ていた。クラスの発表がさ
れているのだ。

「これじゃ、見えないわね…」

「だな…」

しかし、此処でこうしている訳にも行かず、どうしようか考えてい
ると…

「おーい、二人とも」

人混みから冬至が抜け出てやってきた

「おはよう。冬至」

「おはよ」

「二人ともおはよう。橘さんご苦勞様。大方こいつを起こしに行っ
てたんでしょう?」

「ええ、もう大変だったわよ…」

いや待て、俺の方がはるかに大変だったと記憶しているが、気のせ
いなのでしょうか…

「あはは、クラス発表見てきたけど、二人とも同じクラスでD組。
俺と白樺さんは残念ながらC組だ」

「な、何ですと！」

「そ、そんなに驚くような事じゃないじゃない」

彩花が呆れたように言うが、俺にとっては一大事だ

「お前らが居なかったら…誰が彩花の暴走を止めるんだ…」

「な、なんですってー！！！」

「さらに、冬至！お前以外が委員長になったら気分よく遅刻が出来ないじゃないか！」

「遅刻をしないという選択肢はないのか…」

「はっはっは、何を馬鹿な…そんなことが出来るならとつくにやっている！」

「威張るようなことか！！！」

彩花のツツコミが冴えてるな

「ま、冗談はともかく、そろそろ教室に行くか。違うクラスなのは決定事項だしな」

「そうね」

「だな」

クラスも分かったので俺達は三年の教室に向うことにした

「俺はここだから。和人、あんまり橘さんに迷惑をかけるなよ。橘さんもほどほどにね」

「そうだぞ彩花、ほどほどにしとけよ」

「あんたが言うな!!」

そんなやりとりをし、冬至と別れ、D組の教室に到着し、中に入る俺を見た瞬間、クラスの雰囲気が変わったのは気のせいではないだろう

「和人…」

心配そうに俺の名を呼ぶ、彩花

「…気にしないで、適当に座ろうぜ」

とりあえず窓際の前から三番目辺りの席に彩花と座った。すると、後ろから声をかけられた

「あら、ごきげんよう氷室さん。私と同じクラスになれてさぞ光栄でしょう」

金髪のセミロングのお嬢様オーラを出している美人がそんな事を言ってくる

「???」

誰だっけ…まったく記憶にない。こんな存在感がある人間を忘れる訳はないと思うのだが…

「あら、あまりの嬉しさに声も出ないのかしら? お気持ちは分かりますが、無反応は失礼ですわよ」

話せば話すほど接点が分からない。彩花なら知ってるかも…。そう考え、小声で彩花に聞く

「なあ、この人誰だっけ」

「な!」

小声で話したつもりが聞こえてしまったらしい…地獄耳だな

「誰って、北條さんでしょ、北條紗耶香さん。うちの生徒会長で、あの有名な北條財閥の令嬢で、成績優秀、スポーツ万能で学園でも有名人。あの水野ひかりと並んで学園のダブルプリンセスって呼ばれてるのよ?」

「北條紗耶香……やっぱり知らないな」

評判はどうあれ、会った記憶が皆無である

「ふふふ、忘れたとは言わせませんわよ。去年の夏、模試であなたは前回からトップだった私を抜いて、全国トップを取った男…私は

その屈辱を胸に再びトップにかり咲いた私の名を忘れたとは言わせませんわ!」

そんな北條さんの話を聞いた彩花が驚愕の表情を浮かべる

「あ、あんた模試でトップ取ったことあるの?」

「みたいだな」

「みたいだなんて、自分の事でしょ!?!」

確かに去年の夏に冬至に付き合わされ模試を受けたけど…

「面倒くさいから結果を貰ってなかったからな。あと北條さん。

悪いけど、会った事ない人の名前まで覚えてられない」

俺の言葉を聞くと北條さんは俯く

「……ふふふ…氷室和人…私を此処まで狼席を働いた人類はあなたが初めてですわ……これから私の名前を脳裏に刻みつけて差し上げますわ!」

はぁ…なんか変な人に目をつけられた…

第1話：新学期 前編（後書き）

更新完了！

彩花「うっさい！最初の投稿からどれだけ経ってるとおもってるの！」

だって俺の執筆時間って大学の講義中がほとんどなんだもん…ほら、夏休みに入っちゃったから…でもまた大学が始まったから執筆再開！

彩花「はあ…ま、今回は私と和人の絡みが多かったから勘弁してあげる」

サックス！さて、今回の話には新キャラが登場！まずはお嬢様。次回のはあの人が登場するよ！

彩花「プロローグに少し出てたあの子ね」

うん。だから次回も頑張りますので感想お願いします

彩花「よろしくね」

第2話：新学期 後編

自転車二人乗りでの登校に加えて、変なお嬢様に絡まれ、普段の登校時の数倍は疲労感を感じていた。

まだ、初日：しかも登校してきたただけなのにな：

「はあゝ」

溜め息を吐き、視線を前に向けると：

「……………」

「……………」

前に座っていた女子生徒と目があった：

マジマジと顔を見る。

どこかで会ったような：

エナメルのような細く綺麗な明るい茶色の長い髪をストレートにし、鈴のついた可愛い髪飾り。幼い可愛らしさと大人びた凛々しさが融合したような整った顔立ちに茶色の大きな瞳。
かなりの美少女だ：

容姿情報を脳内の検索プログラムにかけてみる：

その間、彼女は頬を赤く染め、ちらちらとこちらを見ている。

検索が終り、去年の冬…自販機での出来事が検出された。

「水野さんだよね？」

俺の前に座っていたのは、学園のアイドル水野ひかりだった

「は、はい…え、えっと…今更かもしれないけど…紅茶、ありがとうございました」

ぺこりと可愛らしく頭を下げる水野さん、あんな事くらいで律儀な人だ

「別に気にすんな…。っていうか逆に迷惑かけちゃったしな」

一時期、噂になった事があった…俺は気にしなかったが、彼女には迷惑だっただろう

「い、いいえ！そんな事ありません！」

「そ、そうか…ならいい」

そんなに必死に弁解しなくても…

「あう」

自分でもそう思ったのだろう、水野さんは恥ずかしげに唸っている。にしても、噂では凜とした雰囲気美人だと言う事だったらしいが、実際はこの小動物の可愛らしさ…普段は猫被ってんのかな？

「そういや自己紹介がまだだったね、俺は氷室和人。スリーサイズは秘密…ってかわからん。趣味は昼寝で特技は二度寝、時々三度、四度寝までするけどな。ま、気軽に和人とでも呼んでくれ。んで隣の猛犬が橘彩花、近付くと噛まれるからを付けろ」

「ガウ!!」

「痛っ! だから噛むな! ドウドウ…」

「私は馬か!!」

だから猛犬だって…

「つたく…すぐ噛みついてくるのは止めい! 人として問題あるから」

「だって…和人って美味しんだもん…」

あ、あかん…もう手遅れだ…

心の中で、まっとうな人間だった頃の彩花にお悔やみを申し上げ、彩花を貰ってくれる素敵な男性が現れるのを神に祈った後、呆けている水野に視線を戻す

「ま、これからよろしくな水野」

「み、水野ひかりです。こちらこそよろしくです」

そのまま俺は後ろを向き、不機嫌そうなお嬢様をみる

「えっと…名前なんだっけ？」

「北條！！北條紗耶香ですわ！！」

「そうそう、北條も改めてよろしく」

社交的に挨拶をしたのだが、北條は名前を忘れていたことに憤慨し、無視されてしまい、後ろで

「信じられませんわ！こうも簡単に人の名前を忘れるなんて！！」

ミシミシと机に怒りをぶつけていた。俺は火に油を注ぎそうなので気にせず、水野と彩花と三人で会話に参加していた

「意外だな…氷室くんってもっと怖い人だと思ってた…橘さんは何時からの付き合いなの？」

「小学校の頃から知ってるは知ってたんだけど、話すようになったのは中三の時からだね。和人は根は優しいよ。なのに外見とか昔の事で和人が怖い人だと皆が思ってる…」

「まったくだな…入学式に遅刻して、呼び出しをバックレただけなのに…酷いと思わない？」

「あはは…何て言ったらいいのか…」

苦笑いを浮かべながら困ったように言う水野。それに対し、その時の事を思い出した彩花が俺を睨みながら、激昂する

「あたり前でしょ！！大体、なんで起しに行っただけなのに二度寝なんてするのよ！？」

「はっはっは、あの時は三度寝までしたぞ」

「威張るようなことか!!」

猛る彩花をどうやって沈静するか、考えを張り巡らしていると教室のドアがけたたましく開き、背の低い男が慌てた様にこっちに走ってきた。

「大変だ! 大変だよ和君!!」

「和君は止めろ!!」

走ってきたのは、背が小さく、一見すると女にしか見えない可愛い顔立ちの男。

一文字啓、通称ハジ。

こいつは、情報収集を趣味…いや、生き甲斐としており、何処からともなく取り出す、各項目別に情報が整理されている通称ハジモバイルを手にもやら興奮している。こいつとは、去年の

冬…水野との一件を聞きにやって来た時に知り合い、今や貴重な男友達NO2のポジションにいる。ちなみにNO1は冬至。

「で、何が大変なんだ?」

「今日このクラスに転校生が来るんだよ!」

「三年のこの時期にか?」

「そう！何か訳ありっぽいよね！僕の勘だとそれには和君が関わっている！」

それは…予感でも確信でもなく、単なるハジの期待だった…

「それで、和君は橘さんに怒られる…」

それは…期待でも予感でもなく、単なるハジの確信だった

「でも、和君の生活は劇的に変わるはずだよ！」

それは…確信でも期待でもなく単なるハジの予感だった…

水野の隣の空席に座り、尚も熱く妄想を語るハジを無視し、彩花は北條と俺は水野と話をしていた。

「水野って意外とアホな子だろ？」

「なっ！？いきなり失礼だね君は！」

「だって、自販機ん時さ…別の硬貨なり、紙幣で買えば問題なく買えただろうに」

「うっ…じ、じゃあ！あの百円はいつ使えばいいの？」

「コンビニなり、人相手に使えばいいだろに…」

「……………氷室くん、結構頭いいね」

「頭の良し悪しは関係ないだろ…」

「ううゝ意地悪…」

(……不思議)

氷室くんと話していると、素の自分が出せた…

みんなはアイドルだとか言うけど…本当の私は普通の女の子なのに…

いつからか皆は私をアイドルと呼び、その期待に答えるため、勉強や運動を頑張った。生活態度もキャラを作って、みんな理想の水野ひかりを演じていた。

時折、アクシデントが起こると素に戻ってしまい、不完全な演技だった…自動販売機の件がその例…

それまで私は、男の子は下心ばかりだと思っていた。親切にしてくれる裏には告白の成功や電話番号の交換などがあった。実際、今まで何度もそのケースがあった。

でも、彼は…氷室くんは違った。何も要求することなく、ぶっきらぼうだったが純粋な親切だった。

あの日から私は氷室くんを目で追っていた。とは言っても、クラスも違い、接点も無いので、遅刻してくる彼を窓際の席から眺めたり、彼のクラスを通る際に覗いたりする位だった。

三年になり、クラス分けを見ると私の名前の近くに彼の名前を見つ
け、教室に入ると既に氷室くんは来ていて、後ろを向いて話をして
いた。私は彼の前の席に座り、間近で彼を見ながら、話しかけるタ
イミングを見計らっていた。もっと彼の事が知りたかったから：

そして今、彼と話をしている：最初はアイドルとしての仮面をつけ
ていた。でもいつの間にか仮面は外され素の私で：それも前から友
達だったように話せている：

これも氷室くんの魅力だろう：噂を聞いて、怖い人だと思っていた
以前の自分が馬鹿馬鹿しくなる：

彼はアイドルとしてではなく、素の水野ひかりを見てくれている：
今思えばあの件以来、私は彼に惹かれていたんだと思う：

「……い、おーい」

話しているうちに考えごとをし、ボーっとしていた。慌てて私は答
える。

「な、何？」

「まったく、アホ面でボケーっとしてんじゃねえよ。ふむ、罰として
お前にはクイーンオブアホアホガールの称号をやろう」

「いない…」

「だな、長すぎるな。アホアホガールにしよう」

「長さの問題じゃないよ！」

「なんだ、不服か？じゃ捻がないがアホでいこう」

「ううゝ意地悪」

高校生活は残り一年…もっと早く…彼に会いたかったな…。

でも……

「あはは、冗談だ…」

会えなかったよりはいい…残り一年。沢山、彼のことを知り、自分を知ってもらう…

「氷室くん…」

「ん？」

「改めてこれからよろしくね♪」

「ああ。よろしくな！」

水野ひかり頑張ります！

第2話：新学期 後編（後書き）

更新〜今回のゲストは水野ひかりさんです。

ひかり「水野ひかりです！執筆お疲れ様。前回よりもかなり更新が早いね」

暇な講義ん時とかに書いてるからね。後、PC使ったから

ひかり「今回は私をメインに書いてくれたんだよね」

まあね。頭の中の構図だと結構メイン扱いになってるから

ひかり「やった…これで氷室くんと…：キヤー！」

い、痛い…恥ずかしがるのは可愛いと思うんだけど叩かないでくれい

ひかり「ねえ、もう一人の新キャラがないがしろにされてたけど…」

聞いちゃいねえ……ふう〜ハジのことか？あいつの登場は次の話の布石だからね

ひかり「じゃ、次って…」

そうです！訳あり転校生です！

ひかり「うう〜競争率がどんどん高くなる…」

そう言う話だからね。さて、じゃ今回はこの辺りで…

ひかり「感想、よろしく願います♪」

第3話：再会

「おゝし、席に着け」

朝のドタバタした時間が終りを告げ、HRが始まった。俺のクラスの担任は、『魔弾の射手』の称号を持つ、チョーク投げの達人、現国教諭の御堂真希である。俺と目が合うと不適な笑みを浮かべ：

「氷室お：私のクラスとは嬉しいぞ。最後の一年で決着をつけてやる」

決着とは言わずもがなチョーク投げ攻防戦の事である。初対戦から二年：様々な色のチョークが襲いかかり、避け続けた結果、ヒットせず：奥の手の黒チョークの攻撃も避ける事に成功し、御堂女史の宿敵という不名誉な称号を与えられた。

ちなみに黒チョークは先生の特注品で、投げやすい形状をした最終兵器である。黒板に黒いチョークを使っても文字が分からないため、チョークとしては機能しない。なら、チョークじゃなくともいいんじゃないか問いかけた所、ポリシーの一言で片付けられた。

「橘、あんまり氷室を甘やかすなよ。遅刻しなくなったら私は困る」
堂々と教師にあるまじき事を言う：流石の彩花も苦笑いを浮かべるしかないようだ。

「さてと：じゃ連絡事項だが：まあ、三年だしやる事は分かってるだろうから省略。必要最低限の事だけを伝える」

おいしい…そんなんでいいのかよ…

「一文字がいるから知ってるだろうが転校生がこのクラスに来る。今は校長室で話を聞いてるから始業式が終わるまで対面はおあずけだ。それに伴って席替えをする。余った所を転校生の席にするから、悪いが北條、クジを作って転校生が来るまでに席が替えを完了させておいてくれ」

「分かりました」

その返事に満足したように頷き、白紙を北條に手渡すと教室を出て行ってしまった。

「よっしゃ、御堂先生なら堂々と遅刻できる」

「するな！」

「……皆さん、クジはこちら側から回していきますので記入をお願いします。」

俺と彩花の漫才の合間にあみだを完成させた北條が皆をまとめ、書いた人間から始業式に向かうのだった。

始業式。何処の学校にもある当然の行事で基本的には学校長の長話で幕を閉じる。そんなもんを楽しみにする生徒はまず居ないだろう。だがこの学校は少し違った。

「皆さんおはようございます。早速ですが私から言いたいの是一只だけです。」

いきなり結論にぶつとび、長話とは無縁の校長。狩谷美鈴。そしてこの人の異名は…

「青春を満喫しなさい。恋愛、略奪、不倫、愛があれば法など関係ありません。全ては正当化されます。私は全力で恋愛のサポートすることを誓います」

『愛の伝導師』である。

「しかし、愛なき行動で相手を傷付けた場合…問答無用で断罪します！皆さん、いいですね！？」

その基準を決めるのは誰なんだろうか…

視界の端に頭をおさえ、頭痛薬を服用する教頭先生が見えた…心中御察します。

教室に戻り、クジの開封及び席決めが始まる。

「げっ…」

「何よそのリアクションは！」

窓際の一番後ろと言う好ポジションに喜んでいたのも束の間、俺の二つ隣に座った彩花。射程距離に入ってしまった…

「こんにちは」

「ん？水野が前の席か？」

「うん。よろしく」

「ああ」

「……私の時と随分態度が違うじゃない……」

「そ、そげんことなかですわ」

「様々な方言が混ざってワケわかんないよ氷室くん」

「い、いや……えっと……そ、そう恥ずかしくって……ほ、ホントは彩花が近くで嬉しいな」

「えへへ♪」

何とか誤魔化せた……正直俺のキャラじゃないが、死ぬよりは……

「ふーん……氷室くんは橘さんが近くで嬉しいんだ」

「み、水野？」

「ごめんね……私が氷室くんの前にいるより橘さんの方がいいよね」

目が据わつとる！？これがあの水野ひかりなのか？とても同一人物とは思えん……そもそも何で俺は攻められてるんだ？

「い、いや……水野とはもっと親しくなりたかったから、近くで嬉し

いぞ」

「うん♪私も！」

どうやら機嫌が直ったみたいだ…。つ、疲れる…

「どうやら転校生は僕の後ろ。つまり和くんの隣の席だね」

「ハジが水野の隣か…」

「うん。で、僕の言ったとおりの展開だね」

あの人悶着あるってやつか…エスパーか？もしくは何か仕組やがったか…

「おゝ見事な布陣だな」

とか言いつつ御堂女史は俺を見て不適に微笑む。

なるほど…俺が一番後ろだから避けられた時に、巻き添えを喰う事がないから思いきり投げられると言うわけか…

「よし、じゃお待ちかねの転校生だ」

御堂女史は廊下で待機している転校生に合図を出す。

【うぼおー！！】

入ってきた転校生を見て男子生徒は立ち上がり、妙な雄叫びをあげる。野生の血が目覚めたかのように…。

…皆、俺の事を不良だなんだ言うが、実は俺が一番まともなんじゃないかと思いつつ、前に座っているハジを始めとする男どもが立ち上がったために、見えなくなってしまった転校生の姿を見てみたいと思った。

「おら！騒ぐな！」

チョークを構えた御堂女史が一喝し、騒ぎは収まる。皆が席についたところでようやく俺は転校生の姿をみる事が出来た…

「——っ！」

見た瞬間、驚愕で固まる。

赤みがかかった茶色い髪をツインテールにし、両側に結ばれた黒いリボン…強気な印象を与える吊りあがった目に、凛々しく整った顔立ち、均衡のとれた抜群のプロポーション。可愛いというより、美人と形容するのがふさわしい女性。男性陣が騒ぐのも無理は無いが、俺の脳裏には一人の女の子が浮かびあがる…

「…琴…乃…」

大人びているが間違いない…引越す前に隣に住んでいた幼馴染みの春日琴乃だった。

「春日琴乃です。よろしくお願いします」

「今日はこれで終りだから質問は後にしろ。で、春日の席は水室の隣だ。あそこに空いてる席があるだろ？」

「――っ！」

俺と目が合い、琴乃は一瞬驚いた表情をしたものの、すぐに平静をし、こちらに歩いてきて無言で俺の隣に座った。

正直参っている…今更どう接すればいいのだろう…。喧嘩別れ…いや、俺が悪いんだ…逃げるようにして引越した俺が…いまさらどんな顔して会えばいいんだか…

「な、なんか空気が重い…」

御堂女史が教室を去り、ハジが早速、突撃リポートを慣行しようとしたが…

「……………」

「……………」

近付き難いオーラを出している二人…和人と琴乃。互いに無言で座っているだけだが、それが不気味だった。

「……彩花」

「な、何？」

突如、無言を保っていた和人に名を呼ばれ流石の彩花も驚く

「帰ろうぜ…」

「…へ？」

立ち上がり、鞆を掴むと…

「じゃ、またな。水野にハジ」

固まっている二人に挨拶をし、呆然としている彩花の鞆を持ちつつ、手を引いて二人は教室から出ていってしまった。

「……和く…ん」

去り行く和人の後ろ姿を見て琴乃は呟くが、その言葉は誰の耳にも届く事は無かった…。

第3話：再会（後書き）

更新！

彩花「な、なんか凄いことになってるわね…」

そうだね！

ひかり「こ、これからどうなっちゃうんですか？」

さあね！

彩花「…他人事のように言うわね…」

別にそう言う訳じゃないんだけどね…ただ自分でもどうしようかなって…次回で回想入れて、仲直りさせるが、引っ張るか……あとがき読んでくれた人が感想で道を示してくれれば…

ひかり「人任せですか…」

彩花「なにせよ続きをさっさと書けば文句はないわ」

分かりました。サー！

ひかり「感想をよろしくお願いしますね」

彩花「読んでくれてる人がいればね…」

第4話…リフレイン

—Side Ayaka Tatibana

どういう関係なんだろう…

あの後、私と和人は無言のまま帰宅した。

その間、私はずっと和人の様子がおかしくなった原因を考えていた…いや、考えるまでもない…

春日琴乃。三年という珍しい時期に転校してきた…

彼女と和人の反応からして二人は知り合い…しかも何か分けありのようだ…

自室のベットに仰向けで寝転びながら、お気に入りの熊のぬいぐるみ『ミル』に話しかける

「ねえミル…大丈夫だよな？」

返事があるわけでは無いが不安を打ち消すように話し続ける

「やっと…笑えるようになったんだし、もう昔みたいにはならないよね？」

中学時代に荒れていた理由の一つが彼女の様な気がしたのだ。

また…昔のようになってしまったら、どうしようという恐怖心があ

った…

時間は少し遡り、和人達が去った後の教室

――Side Kotonokasuga

私は何をやっているんだ…

去り行く彼をただ見送るだけだった…なんの為に…私は此処にいる！？

全てを詫びるんじゃなかったのか！？

その為に転校し、彼に会いに来たんじゃないのか！？

自分に問掛ける。だが彼を前にしたら…何も言えなかった…

彼の名前を呼ぶ事さえ出来なかった…。今更、何て彼を呼べばいいのか分からなかったから…

昔のように和くんとは呼べる訳がない…。だからといって、氷室くんと他人行儀で呼ぶのも…拒絶してるみたいになってしまう…

「大丈夫だった？春日さん」

これからどうしようかと思案していると、クラスの男子が話しかけ

てきた。正直うつとうしいが邪険にする訳にもいかない…

「大丈夫です…」

「ついてないよな、氷室の隣なんて」

「気を付けろよ…あいつ、根っからの不良だから…」

「不良？」

「ああ。最近は大人しいけど、中学の時は荒れに荒れててな。誰ともつるまずに一人で喧嘩に明け暮れて、病院送りにした人数は図りしれないっていう噂があるんだ。あの、銀の髪と誰ともつるまないスタイルからついたあだ名が『銀狼』だ。今でもその名を聞くと多くの不良が逃げたすんだぜ」

得意げに語る一人の男子生徒。

信じられない…。私が知っている彼は、強く、優しい…。不良なんてイメージじゃない…

「つたく、同じクラスかよ…ついてねーな」

「でも、彼、ちょっとカッコいいじゃない」

「やめときなって、今でこそ大人しいけどキレたら何するかわからねーんだぞ？」

私に何か忠告をしているが、頭の中に入ってこない…

彼が荒れた理由はひとつしかない…

私のせいだ…私が和人を…和くんを追い詰めたから…

思い出すのはあの雨の日の公園…

『和くんなんて大っ嫌い!!』

「―――っ!」

どれほど、後悔したかわからない。この心にも無い一言で決別してしまった…

本当は大好きなのに…。もし、できるならあの頃に戻って私を止めたい。

過ぎた時間はもう戻らない…。

「春日さん気分でも悪いの?」

「顔色が悪いよ」

「転校初日で疲れたみたい…ごめんなさい。もう帰ります」

鞆を持ち、教室を出て岐路に着く。帰りながら私は何回後悔したか分らない。あの日の事を考えていた。

小学校5年の紅葉が始まりつつあった季節。その日が私と和くんの決別の日だった。

その頃、和くんはクラスの女の子に人気があった。ただでさえ人目を惹くオッドアイに銀髪。整った容姿に、運動はできるし、頭もいいし、優しい。人気が出ない訳がない：

家庭科の授業で作ったクッキーを渡してる子も居たし、バレンタインでチョコをあげてる子も居た。

そんな場面を見る度に、胸が締め付けられる様な痛みを感じた…。

そんな時、私は勇気を振り絞って映画に誘った：

「映画？」

「うん♪今、人気のラブロマンス！」

「ら、ラブ！？なあ、せめてアクションとかにしない？」

「……嫌ならいいよ。一人で行くから…」

「別に、嫌じゃないけど…」

「ホント！？じゃ、明日の十時公園に集合！」

「公園？ 駅じゃなくて？」

「駅は混むから見付けにくいの…だから公園」

「分かった…」

約束をして家に帰り、私は早速準備を始める。私と和くんとの初デート…。

「映画見て、ご飯食べて…ふふ…明日は二人っきり…」

「あら♪デート？いいわね」

明日の事を考えていると何時の間にか部屋にはお母さんが居た。

「お、お母さん！い、いつからいたの！？」

「ご飯できたから呼びに来たのよ…ノックもしたわ。返事が無かったから入ってみたんだけど、琴ちゃんがベットで悶えてるから…」

「も、悶！？へ、変な事言わないで！！」

「自覚してないのね…」

呆れたように言うとお母さんは冷めないうちに降りてきなさいとだけ告げ部屋から出て行った。

「で、明日の目標は？」

ご飯を食べていると、お母さんが楽しそうに聞いてくる

「目標？」

「ちゅーまででは行くんでしょ？」

その言葉に、私は飲みかけていた水を吹いてしまった。

「……行儀悪いわね」

「け、ケホ…ゴホ…お、お母さんが変な事を言うからでしょ!？」

「そんなに変な事は言っていないでしょ…ね♪それよりどうなの? 告白とかは？」

「こ、告白!？」

「あら、しないの? もう、ぐずぐずしていると和人君取られちゃうわよ」

ふふふと笑うお母さん。その後も、散々からかわれ、今日の夕食は拷問のように感じた…

「まったく! お母さんたら…」

準備を済ませ、後は明日に備えて寝るだけだ。でも、お母さんの告白だのちゅーだの言ってたのが頭から離れない。

でも、楽しみ。だって、初のデートで映画だもん。もしかしたら…

ドキドキとわくわくでその日は寝つくのに時間がかかった…。

「最悪…」

デート当日、天気は雨だった…。予報だと一時止むらしいが、昼頃にまた降りだすらしい。計画が台無しだ…

「ベンチに座って、待ってようと思ったのに…」

待ち合わせに公園を指定したのは、公園のベンチで彼を待ちたかったからだ…。でも…これじゃ座れない。

「まあ…仕方ないよね」

気を取り直し、身だしなみをチェックをして、傘を持ち、家を出た。

「遅いな…和くん」

公園で待つが和くんは来ない。時間は既に十時を過ぎていた

「映画始まっちゃう…」

時計と公園の入り口を交互に見ながら、イライラは募る。

「琴乃!!」

待ち人が来たのは、また雨が降り始めたお昼頃だった…。傘も指さずに濡れている彼に気が付かず、私は何度後悔したか分からない台詞を言う。

「和くんなんて大っ嫌い！」

そう言って、私は呆然と立ち尽くす和くんの脇を走ら抜け家に帰った。

本当は大好きな癖に…。

「ただいま…」

家に帰ると、真剣な表情で電話をしているお母さんがいた。

「どうしたの？」

電話を終えたお母さんの様子が変わったので、私は聞いた。お母さんは暗い表情で…

「……和人君のお父さんとお母さんが事故で……………」

私はこの時、初めて、和くんが遅れた理由を知った…

部屋に戻り私は泣いた。

悲しかったこともあるが、それよりも自分が許せなかった…

傷付いている和くんにあんな言葉をぶつけてしまった…

「少し考えれば分かるじゃない！あの、和くんが遅刻するなんて理由があるって！」

お葬式には和くんの姿は無く、学校にも来なかった。

それから暫くして和くんが引っ越し、転校したと聞いた…

第4話：リフレイン（後書き）

更新！

和人「……コメディだよな？」

あ、あはは…今回から数話はシリアスですな～

和人「俺が出ていないな…」

ちよつとね、書き方とか変えてみた。そしたら巧く書けなくて…

和人「更新が遅れたわけか…」

…そうです

和人「読んでくれる人がそこそこは居るみたいだから、期待を裏切るような事はするなよ…」

ど、努力します。

和人「それで次回はどうなる？」

そうだね～次回辺りで話を進展させないと…四話なのにまだ学校は初日のままだし…

和人「そうだな…。では読者の皆様、次話でお会いしましょう」

感想を書いてくれてありがとうございます～頑張りますので引き続き

きよろしくお願いします。

第5話：リフレインver和人

—Side Kazuto Himuro

琴乃が過去を振り返っている頃、和人も同じく昔を思い出していた。

氷室家と春日家は家が隣同士で子供の頃から二人は仲がよく、家族ぐるみの付き合いをしていた

「和ちゃん♪」

満面の笑みで、スープを掬ったスプーンを差し出してくる、見た目高校生くらいの美少女。銀のウェーブかった長い髪とクリッとした碧眼が可愛らしい、ハーフ。

氷室・レミリア。俺の母親である。性格は…

「……母さん…自分で食べるから…」

超絶子煩悩である。拒否され、いじけたようにスープの具をつついてる母さん。

「母さん、こんな可愛くないガキは放っておいて、私たちだけでいいじゃないか…」

20代前半に見える黒髪の優男。

氷室健介。俺の父親である。対面からスプーンを母さんに運んで「はい、あ〜ん」とか言ってるが…

――ダン!!

一瞬で父さんの表情が凍りつく。父さんの前にはテーブルに突き刺さっているフォーク。

「…あ、あの…か、母さんや？」

「…健ちゃんでも、和ちゃんの悪口は許さない…」

隣で物凄い殺気を出している母さん。母さんの父親…つまり、爺ちゃんが武術の師範とかで、母さんも幼い頃から鍛錬を積んでいたらしい。いわば達人クラス。

今は引退したとか言ってるが、強さは顕在。普段は片鱗すら見せないが、怒りの沸点を超えると目が武術家に戻る。

「ち、違う！悪口じゃない！！お、親と子のスキンシップだ！！」

「……………」

必死に言い訳するが、まだ目が据わっている母さん。暴れられても困るので助け舟を出しておくかな…

「母さん、はい」

フォークでトマトを刺し、母さんの口元に持っていく

「和ちゃん、あ〜ん♪」

すると途端に上機嫌になり、トマトをパクつき食事を再開し始めた。
やれやれだ…

どうにか機嫌も直り、安心からため息を吐く父さん。

「所で明日だが…朝早いから寝坊するなよ。和人」

「明日って？」

「もう、和ちゃんたら。家族で買い物に行くって言ったじゃない…」

「……今聞いたんだけど…」

「それはそうよ♪だって、ついさっき決まったことじゃない…」

……理不尽だが突っ込んだところで無意味なんで黙っておく

「俺、行かないよ…」

……言った瞬間、ガッツポーズをする父とこの世の終わりのような
顔をする母

「なななな、何で！？折角の日曜日の母子の触れ合いなのに！！」

いつの間にか父さんは抜け物になっているし…

「琴乃と映画見る約束したから…」

「おゝ、手が早えゝな。可愛い幼馴染とのデート。人生の勝ち組が
め！まあ、俺も美人の奥さん貰ったから人生の勝者なんだがな」

ガッハツハと愉快に笑う父。明日、母さんと二人きりというのが嬉しいんだろう…。対照的に剥れる母さん。

そんなやり取りが何時までも続くと…この時は思っていた

翌朝

「じゃ、行って来るからな。戸締りしっかりしろよ」

「……和ちゃん」

「来週は、暇だから…」

「ホント!? じゃ、今回は健ちゃんで我慢する」

朝早くに両親は車で出かけていき、それを見送った後、部屋で宿題を片付けていた。

「そろそろか…」

時間を見ると待ち合わせの時間に近づきつつあったので、俺は準備をし玄関に向かった。

出かけようとした時に電話が鳴り、琴乃からかなと思いつつ、電話を取ると…

「……は？」

言われたことが理解できなかった……

「…………父さんと母さんが…死んだ…?」

居眠り運転のトラックと正面衝突したらしいが…そんなことはどうでもいい…。重要なのは父さんと母さんはもう居ないという事実だけだった。

病院に駆けつけると爺ちゃんが俺を抱きしめ、親戚が遺産がどうか、誰が引き取るか話をしていた。

その時、思い出したのは琴乃との約束…

父さんと母さんを失った今、俺に残っているのは琴乃だけだった。

病院を飛び出し、琴乃と待ち合わせた公園に急ぐ。

だが…その結果は…

「和くんなんて、大っ嫌い!!」

拒絶の言葉だった…

後はよく覚えていない…

いつの間にか家に帰り、葬式を終え、身よりの無い俺を爺ちゃんが引き取り、今のこの家に来た…

「はぁ…」

過去を思いだし、溜め息をつく。

琴乃と話せなかった…

原因は俺だ…

引っ越す前に、謝り、話をしていればこんなことにはならなかった。

「明日…ちゃんと話をしないとな…」

なんで琴乃が来たのか分からないし…また拒絶されるかもしれない…それでも…

「たった一人の…幼馴染みだもんな…」

そう言うと、和人は携帯を取り出し、誰かと話し始めた…

第6話：歯車

翌日の教室。珍しく遅刻をしないで、若干早めに登校した和人と彩花。

現在、先生が来るまでの時間を新しいクラスメイトとの談笑で過ごす生徒達

「……………」

何よ…心配して損した…

不機嫌な彩花の視線の先には…

「しかし…無愛想になったよな。昔は、和くん、和くんって、子犬みたいで可愛かったのに…」

「う、うるさいな…昔の事はいいだろ！」

楽しそうに会話する。和人と琴乃。

既に来ていた琴乃の隣に和人が座り、昨日のような空気になるのではないかと思った矢先に、挨拶を交し、談笑を始めたのだ。

彩花だけではなく、クラスの誰もが驚きの表情で二人を見ていた。

（回想）

受話器を取り、数年ぶりとなる電話番号をプッシュする。

数回のコール音の後、電話が繋がる。電話の先は…

「もしもし、春日ですが…」

琴乃の実家である。

久しぶりに聞く、穏やかな声…

「…お久しぶりですね。瑠璃お姉さん」

「え…。その声……か、和人くん？…和人くんなのね!？」

電話の相手は春日瑠璃。琴乃のお母さんである。

「ええ、ちょっと聞きたいことがありますて…」

「……琴ちゃんの事？」

「いえ…、それは本人から直接聞きます。聞きたいのは、今、琴乃が住んでいる場所です」

「……………聞いてどうするの?」

「…実は、今日会った時、話すことができてなくて…だから、これから話をしに行きたいんです。お願いします。教えてください」

真意を尋ねる瑠璃お姉さんに、俺は自分の気持ちを伝える…。もう、お互いに過去に囚われたくは無いから…

「ふふ…よかった…」

「？ 瑠璃お姉さん？」

本当に、優しい声…久しぶりに聞く…受話器の向こうで、微笑んでいる瑠璃お姉さんの姿が浮かぶ…

「ごめんなさい。なんでもないわ。琴乃ちゃんの居場所だったわね…」

瑠璃お姉さんの言う住所をメモ用紙にめもる。

「…はい…どうも、ありがとうございました」

「いいのよ。琴乃ちゃんの事、よろしくね♪今度、二人で遊びにいらっしやい」

「あはは、機会があれば…。では、失礼します」

電話を切り、受話器を置く。

「よし！行くか！」

メモを片手に気合いを入れ、家を出た。

「……………此処だよな…?」

住所の場所は、住宅地から離れた場所にあった…

先程の気合いは何処に行ったのか、意気消沈している…

だってなあ…

もう一度、塀にかかっているプレートを見る

『撫子女子寮』

……………見間違いじゃない。

夕刻時×アポなしの男×IN女子寮Ⅱ怪しい男

「……………で、出直すか…」

そう呟き、その場を後にしようとしたが…

「あら、お客様？」

……時、既に遅し…寮の人らしき人に声をかけられてしまった。

落ち着け…冷静に話せばわかって貰えるさ…

「初めまして、自分は氷室和人といいます。此方に春日琴乃さんが在住していると聞きました、馳せ参じた次第でございます！」

ヤバイ……これじゃ、怪しい人だ……

緊張から変な言葉になってしまった……。此处は撤退し、後日また来よう。

菓子折りでも持ってくれば、ある程度はましな印象があたえられるはずだ……。うん、そうしよう。

そう考え、逃げようかと思ったのだが……

「これはご丁寧に。私、撫子寮の管理人をしています、小松原惟子と申します。」

にっこりと微笑んで、挨拶をしてくれた……

「……………」

「琴乃ちゃんですね？呼んできますので待っててください」

啞然としていると、惟子さんがそう言って、寮の中に入っていく。

「いい人それで助かった……」

心底安心した……

——ボタン——！！

暫く待っていると、ドアが閉まる大きな音がし…

——バタバタバタ！

廊下を走る音が聞こえてくる。

そして…

——ガチャガチャ！

慌てて玄関を開けようとする音が聞こえてた後…

「はぁ、はぁ…か、和…くん？」

息を切らせながら琴乃がやってきた。

「……よう、久しぶりだな。って、言っても学校で会ったな」

「…え？あ…うん…」

突如現れた俺に心底驚いている琴乃。正直、会ってからどう話をするかとか全然考えてなかったんだけど、狼狽する琴乃を見てたら、冷静になれた…

「ちよつといいか？学校で話ができなかったから…話をしに着たんだ…」

「……………うん…」

落ち着いて話をするため、場所を移動。やって来たのは近くにあった児童公園…。

俺と琴乃の別れの場所でもある公園。話にはうってつけの場所だ

「まず最初に…」

「ごめんなさい！」

ベンチに腰掛、話を切り出そうとした矢先、琴乃が謝りだした…

「な、なんでお前が謝るんだよ？」

「だ、だって、私…酷い事言っちゃったから…」

言われて考える。確か、こっちに来てからは口を利いてないはずだから…別れのときのあれか…

「大嫌いって奴か？別に普通だろ。あんだけ待たされたら…」

「でも…おじさんとお婆さんが…」

「知らなかったんだろ？だったら怒るだろう。悪いのは俺だよ…」

そう、悪いのは俺…

「あの後さ、お前と会って話をしていれば、よかったんだ。でも、俺はそれが出来なかった。心が弱かったから…。それどころか、あの日、父さんと母さんが死んだ日の事を思い出さなくなくて、お前

の事を忘れようとしてたんだぜ？最低だよ…ごめんな」

「悪くない！和くんは悪くないよ！」

…昔からそうだ…。自分の考えは変えず、一途に貫き通す。変わってないな、その性格。

何を言っても、自分が悪いといい続けるだろう…これじゃ、解決しない

「ならさ…どっちも悪かったって事で手打ちにしないか？」

「え？」

「お互いにきちんと謝ってさ…。幼馴染として、友達として、また…やり直そう」

「そんな…和くんが謝ること…」

「お前が自分が悪かったと思っているように俺も俺が悪かったと思ってるんだよ。だからさ、お互いにお互いを許すことで、もう自分を責めるのは止めないか？折角再開したんだから、俺はお前と仲良くしたいんだ」

「私も…」

「ん？」

「私も仲良くしたい…」

あの日…ほんの少しずれた歯車が…

「じゃ…改めて…」

噛み合い…

「「ごめんなさい！」」

再び、時を刻だす…

「ところで…」

「？」

「お前、なんで転校してきたんだ？」

俺の問いに、琴乃は顔を赤くしたまま、怒鳴るだけで答えてくれなかった……

第7話：聖戦

始業式から一週間たった昼休み…

新しいクラスメイトにも慣れ、各自友人と集まり、昼食を取っている。

まあ…俺達も例外じゃ無いんだけど…

購買で買ってきたサンドイッチを食べながら視線を隣に向ける…

「彼女でも無いのに、合鍵を持っているのはおかしい！」

「あんたには関係無いでしょ！」

「関係はある！私は幼馴染みだ！私の方が、合鍵を持つのにふさわしい！」

「だったら、私はお隣さんよ！和人の面倒は私が見るんだから！」

……これだ

琴乃が打ち解けたのはいいが、事ある事に、彩花とやりあっている。

「仲がよろしいですね」

「「何処が!?!」」

にっこりと微笑む華蓮に二人が声を揃えて反論するが、息は合って

いる。

「では、此処は間をとって、私が…」

「「却下!!」」

「……ふふ、本当に仲がよろしいですね…」

何故か、華蓮まで加えて、三人で不穏な空気を作っている。

そんな三人。いや、彩花と琴乃を見ていると、ハジが口を開いた。

「……二人は水と油だね」

「となると、和人は火だな」

「? どういう意味? 水と油っていうのは分かるけど…」

ハジと冬至の言葉にひかりが返す。冬至は笑いながら

「和人って言う、火が二人を熱するから余計に反発するって事だよ」

「……………」

「白樺さんも結構、積極的なんだね。さりげなく、漁夫の利を得ようとしてるし…」

「あの手のタイプは敵にまわすと怖いぞ…。うーん、それにしても…やるなく和人。まあ、和人なら当然って気もするけどな。さて、

「一体誰が勝つかな…」

冬至の言葉に複雑そうな顔のひかり。そんなひかりにハジは…

「水野さんも積極的にいかないと…負けちゃうよ？」

ハジの目線の先には、三人をなだめている和人の姿があった。

どうにか騒動は静まり、食事が再会される。

「さて、お三方。今日は例の日だから、戦闘準備をして置くように！」

「へー、今日なのか…して、ターゲットは？」

「卵だ！」

和人と冬至の意味不明の会話に首をかしげる、琴乃達。

「悪いけど…俺はサッカー部があるから行けない」

「あ、私も剣道部があるから…」

「な、何！？お前ら、あの時の戦友の誓いは嘘だったのか！？」

冬至と彩花の言葉に和人が問うが…

「んな事、言われてもな…」

「部活なんだからしょうがないでしょ!!」

「くっ！華蓮：聞いての通りだ……。今回は俺とお前の二人だけで戦いに望まなくてはならない…」

「頑張りましょう：何があっても、私はあなたの側にいますから…」

「華蓮…。俺もお前を必ず護る！だから、絶対生き残ろう！」

手と手を取り合い、見つめ合う、和人と華蓮。

「な、なによ！し、仕方ないじゃない。部活なんだから！華蓮ばかりさ…」

後半の弦きは、小さくて和人の耳には届かない…。そして、鈍感な和人は彩花の心情に気がつくはずも無く…

「だから、部活に行けばいいじゃないか。華蓮がいるから気にしないでいいぞ。な、二人で頑張ろうな」

「はい♪」

「…か、和人の馬鹿！ー！ー！！」

「…お、おい！つ、机は洒落に…う、うわあああ！！」

彩花が机を持ち上げ、和人に投げる。和人は華蓮を逃がし、自分が逃げる間を失って、そのまま机の餌食になった…

「……ねえ、それで結局何の話？」

「ああ…それはね……」

ドタバタの原因となった意味が分からず、疑問府を浮かべている、ひかりと琴乃に冬至が苦笑いをしながら説明を始める…

放課後

各自、部活や帰宅の教室を後にする。そして、和人は華連、そしてひかり、琴乃という増援を引き連れて学校を後にした。

「しかし…あれほど騒ぐ事なのか？」

呆れたように言うのか琴乃。

「…貴様は戦場という所を理解していないようだな…」

真剣な表情で告げる和人。昼間の攻撃では傷一つ負っていない。和人曰く、あの程度で怪我していたら、身がもたないらしい

そして、四人は駅前の方向に歩いている。向かう先は…

「大袈裟だなく、たかがタイムサービスでしょ？」

大型スーパー『トミタ』である…。そして今日はタイムサービスの

日。

お一人様限定の商品を多く得るために、いつもは彩花達に増援を頼むのだが、今日はこの二人が手伝ってくれるらしい…

だが…

「甘い！これだから新兵の世間知らずは…。これから向かう所の厳しさを分かってない！」

しかも、今日は卵。お一人様12個入り、一パック五円の価格破壊。

超激戦区。歴戦の猛者が集うのだ

だが、二人は事の重大さが分かっておらず、ノーリアクション＆苦笑い

「……………もういい。新兵に構っていたらこちらも危うい…お前らはもう助けん！俺達だけでも戦うぞ戦友！」

「はい♪」

俺は、頷く華蓮の手を取って走り始める

「お、おい！和」

「ま、待ってよ」

慌てて二人が追い掛けてくるが立ち止まる訳には行かない…。急がねば不戦敗になってしまう。

「ちい！遅かったか…」

トミタ店内の一角が人混みで溢れ帰っていた。

店員が手渡す卵を取るために皆が手を伸ばす。

「まだです！まだ間に合います！和人さん！」

悪態をつく俺に華蓮が言う。

「そうだな！じゃ行くぞ華蓮！新兵共も続け」

目の前の光景に啞然とする二人を叱咤し、俺と華蓮は突貫していく

「はあ…はあ…やった…」

人混みから這い出て戦利品を確認。卵の場合、人混みで割れてしまう恐れがあるため、入手難度は最上級に位置するのだ…

「全機…損害なし。ふう」

「お疲れ様です」

疲れたような息を吐く俺に、帰還した華蓮が告げる。手には損害なしの戦利品。

毎回思うが、淑女のような華蓮はどうやって、戦場を駆け抜けているのだろう…

疲れている様子もない…

不思議だ…

「あのお二人は大丈夫でしょうか？…」

人混みに紛れて姿は見えない…

「戦を甘く見た罰だな…世間の荒波にせいぜい揉まれて、考えを改めればいいさ…」

少しは社会の生存競争を知った方がいい…

あの後、人混みが無くなり、ヘタリこんでいる二人を連れて、会計を済ませて、店を出た。

「あ、甘く見ていた…」

「ふ、二人とも…いつもあんな事してるの？」

今日のことがいい教訓になったようだ…。当然、二人は敗残兵。卵は無い…

「情けない…。母親に頼まれ、子供も参加する戦場でこの体たらく。お前らも将来結婚して、主婦になるんだから、今のうちから慣れておいて損はない…」

「結婚…」

「主婦…」

二人の顔が赤く染まるが気にせず和人は続ける。

「華蓮を見ろ！何時、お嫁に行ってもいいくらいだ。」

「ふふ…ありがとうございます」

この言葉に、華蓮は微笑みながら答えるが…他の二人は冷たい視線を送る…

「和は…彼女のような……」

「人がタイプなの!？」

「は、はぁ!？って、何で怒ってんだよ？」

「「知らない!!」」

この後、華蓮が和人の手を繋ぎ、余計に不機嫌になる二人に必死に弁解する和人だった…

第8話…お嬢様の目標 前編

—Side Sayaka Houjou

高校生活最後の1年がスタートしました…

私は、生徒会長になるに当たってひとつの目標を立て、それを成し遂げるために日々努力しています。

その目標とは…

『遅刻撲滅運動!!』

…今まで何度も達成目前にまでいったことがあります…

ですが…

たった一人の生徒により、悉く失敗…

その人のクラス委員長に掛け合い、注意を促すように言っても、怖いから注意をする事ができないと泣き出す始末…

しかし…今年度は同じクラス！

私は学級委員に就任し、このクラスの遅刻をゼロにして、目標への近道をしたいと思っています…。

学校が始まり、数日間彼を観察していますが…遅刻はあまりしてい

ないようです。ですが…ついに今日、彼は遅刻をしてきました…。早速、注意をしたいと思います…

「氷室さん!？」

だらしなく机に突っ伏している彼に私は声をかけます。彼は面倒くさそうに起き上がり、私の方を向き…

「…えっと…ほ…田中？」

「——っ!?! 北條!! 北條紗耶香ですわ! 何で「ほ…」がでかかっていて、田中になりますの!?!」

信じられませんわ! 名前を忘れるなんて!

「あ、そうだった。北條、北條。んで、何か用？」

くっ、相手のペースにさせられてはいけません! 冷静に…落ち着いて…

「氷室さん。最近遅刻が目立つようですが…」

「? 今日遅刻したくらいだろ? ここんところは彩花に、叩き起こされて連行されたから、遅刻はしてないぞ?」

えへんと誇らしげに言う氷室さん。お、落ち着け…怒っちゃ駄目。怒鳴っちゃ駄目…

「で、ですから、今日遅刻したでしょう?」

「ああ：彩花は朝練で先に行っちゃったからな。これで、気兼ねなく二度寝ができる♪」

「ですから！遅刻をお止めなさい！！」

もう：限界だった。この男は私の宿敵だ。中途半端に言っても効果は望めないでしょう：

「ふう：いいか、よく聞け：」

私の両肩を掴み、真剣な表情で私の目を見る氷室さん。

ドキドキと鼓動が早まります：

「できるようならとくにやっている！」

——プツン：

今、私の中で何かが切れました。

私は肩を掴んでいる彼の手を振り払って：

「あなたは何歳なんですの！？そんな我侬が通用するはずが無いでしょう！？」

「出来ないものは仕方が無いだろ！？」

「努力もしていないのに、分かりませんわ！！」

「努力はしてるぞ？目覚まし時計は当然駄目。無意識に壊しちゃっ

てて過去、どれだけの犠牲があったことか…。で、冬至に言われて、消防士さんが使う目覚まし時計を通販で買ったんだ。あの、空気で盛り上がるやつ。だが、盛り上がった布団の上で俺は起床した！つまり！ある程度の睡眠時間を満たし、自然に起きるしか無いんだ！」

「威張るような事ですか！！」

「怒鳴るな！！大体、お前には関係ないだろう！？」

「関係ありますわ！！私は学級委員として…生徒会長として…」

「知るか！生徒会長だからって、俺の私生活に口出しする権利は無いだろ！？」

「でしたら、遅刻をお止めなさい！！」

「無理だ！！」

熱くなり、口論に発展してしまう。そこに…

「二人とも落ち着きなさいよ…」

橘さんが間に入る。

「北條さん。こいつに何を言っても無駄よ。私も散々に言ってきたけど…こいつが自力で起きる可能性はツチノコを見つけた方が簡単なんじゃ無いかと言われているわ…」

心底疲れたように言う。隣では氷室さんがうんうんと、頷いている。

「北條さん…こいつを遅刻させないで来させる手段は一つしかないわ…」

「方法があるんですの!？」

その方法をこっそり橘さんが耳元で囁く…

「お前ら…何、企んでやがる…」

訝しげに氷室さんが見ているが…

「本当に…大丈夫なんですか？」

「さあ？後はあなた次第ね。頑張ってみて」

ギュッと私の手を握り、あるものを渡す橘さん。

翌朝…

閑静な住宅地のとある家の前に、黒塗りの高級車が停まっており、車から一人の美女が降りてくる。

「立川、ご苦労様ですわ。此处からは歩いていきます」

「畏まりました。お気をつけください」

和風建築の一軒家。その門に掲げられているのは『氷室』という表札。

立ち去る車を見送り、私ははポケットから鍵を取り出し、玄関の鍵を開けた。

先日、橘さんから預かったのは氷室さんの家の合鍵。私の目的を果たすために……。氷室さんを遅刻させないために、提案した案が、私が学校に連れて行くことでした。

「ドキドキしますわね……」

恐る恐る中に入り、向かう先は二階にあるという、彼の寝室。初めて入る男性の部屋に心臓の鼓動が早まります。

「……失礼しますわ……」

ノックをし、中に入ると……

「Z Z Z……」

ベットの上ですうすうと眠っている氷室さん。銀の髪が朝日に照らされ、きらきら光っていて、どこか幻想的な雰囲気を出しており、思わず見惚れてしまいます……

はっ！？ いけません！ 当初の目的を果たさなくては……

何としても遅刻をせずに、彼を連れて行かなくては……

【任務1 難度S 氷室和人を起せ！】

「氷室さん、何時まで寝ているつもりなんですか！？このままでは遅刻してしまいますわ！」

掛け布団を取り、大きな声で彼を揺すりますが…

「…彩花。後2時間…」

とか言い、寝返りをうち、また夢の中。どうやら、私を橘さんだと思っているようです…

何でしょう…この気持。なんとなく、ムカムカしてきましたわ。起きない事に腹を立てたのか、間違えたことが気に食わないのか…自分でも分かりませんが、とりあえず、起きないと…

「駄目です！起きてください！」

「す…」

先程よりも、強めに揺すりますが、効果無し。ですが、諦めません。どうにかして起そうと、考えます。その時でした…

「……っ！？ひ、氷室さん！？」

ガシッと手を捕まれ、凄い力で引っ張られて、そのままベットに引きずり込まれてしまいました。

「あう、あう…」

ああ、彼の顔がこんなに近くに…。顔が熱くなっているのが自分でも分かります。

掛け布団と取ったことで寒いと思ったのか、彼は私を抱き枕のように抱きかかえ、あどけない寝顔を見せています…

「きゅ…」

ああ、私の意識が遠のいていきます…。彼を…起さなきゃ…い…けな…いの…

男性に免疫のない、沙耶香はあまりの衝撃に気絶する。その間、時間は刻一刻と過ぎていく…

——Side Kazuto Himuro

心地よい、暖かさと。優しい香りを感じながら、ゆっくりと意識が浮上していく。

「……………What!？」

驚きのあまり、英語になってしまった。だって…目の前には

「すう…すう…」

何故か、眠っている女性の姿。その距離、わずか数センチ。俺の手

は彼女の背中に回っており

「うわ！？な、なんだ！？何が起こってるんだ！？」

貞操の危機！？

パニックになりつつ、とりあえず女性を引き離そうとするが…

「嫌だ…」

ガシッと右腕にしがみつかれる。離れない！？

「つて、お前は…北條！？」

そこで、この女性が見慣れた人だという事に気がついた。だが、過程がまるで分からない

昨夜は確かに一人で寝た。鍵もかけた。うん、これは間違いない。なのになんでこいつが此処に？

とりあえず起こそうと、空いている手で揺そうとするが…

「お兄様…」

迷子の子供のような、寂しそうな声での呟き…

「……………」

起こそうと動かした手を、頭に置いて、撫でる…

事情は分からない…ただ、夢の中くらいは悲しみを忘れて欲しい…。
自分と似た部分を感じて、そう思った。

第9話：お嬢様の目標 中篇

—Side Kazuto Himuro

暫く、頭を撫でていると：

「う…んん…」

ゆっくりと眠りから覚め、目を開ける北條。

「……………」

「おはよう！いい朝だな！」

捕まれていた腕を離され、サッと距離を取り、誤魔化すように爽やかな朝を演出しようと、努力したが：

「い、嫌！！ふ、不潔！ケダモノ！」

全ては徒労に終わった：

「ま、待て、落ち着けて！」

「来ないでくださいまし！」

手あたり次第に、物を投げつけてくる…って、全部俺の私物。壊れないことを祈ろう：

「もう…お嫁に行けませんわ…」

ピタリと攻撃が止み、今度は泣き出す始末

「ま、まあ元気出せ！いざとなったら俺が貰って…って、ちゃうわ！
！そもそもなんもしてねえ！」

必死で言い訳というか…弁解をする。ああ…俺も泣きたいよ……

どうにか北條を落ち着かせ、リビングに案内し、座らせる。その間、
コーヒーマーカーをセットし、俺は制服に着替た…。今思うと、素
肌にワイシャツでは、

まあ、勘違いしても仕方が無いな…

パジャマ買おうかな…

「ほら、コーヒー」

「あ、ありがとうございますわ…」

コーヒーを渡し、対面に座る。

「んで…何で家にお前が居るんだ？」

「……橘さんに合鍵をお借りして、氷室さんを起こしに来たんです
わ。遅刻を防ごうと思いましたが…」

…彩花。貴様が事の発端か！

「……それで、起こしに来たのに、何で隣で寝てたんだ？」

「——っ！？貴方が引っぱりこんだんですわ！そしたら意識が遠のいて…」

なるほど

「またやっちゃったのか…」

「また？」

「ああ、前にも彩花に怒鳴たことがあってな…そんなときも同じことをしたらしい…」

あの時は、怒れる彩花にしこたま殴られた…。まあ、ダメージを受けないように流してはいたから痛くはなかったんだが、殴られたらいい気分はしない…

「悪かったな北條。不快な思いさせて…」

「も、もういいですわ…過ぎた事ですし…それ程不快じゃありませんでしたし…」

「は？」

「い、いえ何でもありませんわ！」

変な奴だな

顔を赤くし首を振る北條。

ふと、さっきのお兄様という呟きを思い出したが…

……気軽に聞いていいことじゃないな

そう考え、話題を変える

「ところでさ」

「なんですか？」

「言い難いんだけど……お前、学校行かなくていいのか？」

「…え？」

俺は時計を指差し北條に現実をつきつける。時間は二限目が始まる頃…

「…………ち…遅刻ですわ！」

「うむ。遅刻だな」

「何を落ち着いていますの！？」

「いや、俺にとってはいつもの事だし…」

悪いが、今更慌てる程の事でもない…

「っっっ！行きますわよ！」

凄い剣幕で詰め寄られる。

朝飯食ってのんびり行こうかと思ってたのに…

「分かった。鞆持ってくるから暫し待て」

その後、走って登校したが、結局遅刻は変わらなかった。ま、当たり前なんだけど…

だから、ゆっくり行こうって行ったのにさ…

――Side Sayaka Houjou

「はぁ…」

学校から帰宅した私は、制服のまま自室のベットに倒れ、ため息を吐く。

「遅刻してしまいましたわ…」

初めて、遅刻してしまった…。橘さんに鍵を返す際に

「気にする事無いわよ…」

そう言ってくれました。遅刻をしたのはショックでしたけど…本当に気にしてるのは

「氷室さん…」

何故？

どうして、彼の名を呟くと胸が熱くなるのでしょうか。

目を瞑ると、彼の寝顔が浮かぶ…

「和人さん…」

男性に抱きつかれたのに…不快じゃない。むしろ、彼の温もりをもっと感じていたいと思ってしまう…

「私…どうかしていますわ」

顔が熱い…

悶々とそんな事を考えていると…

携帯電話が鳴り、その音で我に返る。

「も、もしもし…」

多少上擦った声になってしまいました…。

『北條さん？彩花だけど。今、時間大丈夫？』

電話の相手は番号を交換したばかりの橘さんだった。

「平気ですわ。それで、どうしましたの？」

『ねえ、北條さん。今日のリベンジしたくない？』

「？」

電話なのにひそひそとある提案をする橘さん。

「やりますわ！」

その提案は私にとって、願ってもいない事で、私は乗る事にしました：

翌朝

「じゃ、行くわよ！」

氷室さんの家の前で、私と橘さんは待ち合わせをしていた。

昨日の提案は氷室さんを二人で協力して、学校に連れていくという事でした。

橘さんは剣道部の朝の練習があるので、昨日よりも早い時間帯に、和人さんを連れて行くという話なのですが：

「それなら、私は必要無いんじゃないですか？」

勢いで引き受けましたが、橘さんが連れていけばいい事だと思うのですが…

「…その方法は前に試したたわ。だけど、あいつは！」

わなわなと怒りに震える彩花

「学校行った後で、私が朝練をしている隙に家に帰ったのよ！信じられる！？それで平然と遅刻してきたのよ！？」

「……」

流石ですわ。一筋縄では行きませんわね…

「だから、あいつが帰らないように捕縛していて欲しいのよ」

そんな話をしながら、氷室さんの部屋の前にやって来ました…

【任務1 難度SS 氷室和人を起こせ！】

前回より、難度が上がっている。

その理由は……

「「……可愛い……」」

二人の口から言葉が漏れる…

ベットでは和人が変わらず熟睡している。だが、着ているものが、昨日のようなワイシャツでは無く、パジャマだった。

カッコいい系統に属する普段の和人とは違い、可愛らしさを演出している。青のチェックのパジャマと、何故か枕元にはプリチーなクマのぬいぐるみ、さらにはあどけない寝顔も合わさり、凶悪なまでの可愛らしさを演出していた。

「くっ！？精神攻撃とは…やってくれるわね！あ、駄目よ！迂濶に近付いたら昨日の二の舞よ！」

「可愛い…可愛いですわ…」

ふらふらと近付こうとする紗耶香を制する彩花。彩花自身も抱きつきたい衝動を懸命に押さえ込む。

「このままじゃ…朝練に遅れる…」

焦る彩花。ゾンビのように手を伸ばす沙耶香。眠れる和人。

その間にも時間は刻々と過ぎていく…

第10話..お嬢様の目標 後編

時は西暦19××年。

駅前のとある喫茶店である事件が起こった

事件の発端となったのは無垢な美少年。銀の髪とオッドアイという特徴的な容姿の少年は、同じく銀髪の母親と来店し、パフェを注文。周囲のお姉様やマダムがたから熱烈な視線を浴びつつも笑顔で少年はパフェを食べ続け、対面に座っている母親までもが視線を釘つけにし…

「おかーさん?どうしたの?」

視線に気付き、スプーンを口に入れたまま、首を傾げる。その瞬間

女性客の鼻血でフロアは染まった…

その少年の名は氷室和人という。

「……………」

幾分成長したが、まだ健在の可愛らしさの片鱗が二人の少女を襲っていた。

意を決して彩花は和人を起こすべく近付こうとするが…

「…起こしてしまいますの？」

「そんな残念そうな声出さないでよ。わ、私だって…起こしたくないんだから」

あの寝顔をもっとみたいという衝動に刈られ、足が止まる。さらに、起こそうとする度に、紗耶香が残念そうに問うのだ。そんなやり取りが何度か続き…

「大体ね、あんたは和人を遅刻させたくないんでしょ？」

「それはそうですが…あれを起こすなんて事は私には…」

長いこと直視すると理性を失ってしまう紗耶香はチラチラと和人を見る。

「このままじゃ、朝練が…仕方ないわ」

もう、起こすしかない。

とはいっても、真正面からでは返り討ちにあうのが関の山である。

そこで彩花の取った手段は…

「起きろー！ー！！」

「橘さん！？」

目を瞑りながら、和人に突っ込んでいく彩花。

完璧な目測で、ベットの間近にやってくるとそのまま倒れこみ：

「――ぐっ!？」

スヤスヤと寝ていた和人の腹部に肘を落とした。

「ごふ、げほ……。てめえ、彩花」

「おはよ♪和人。よく眠れた？」

「ふざけんな!天に召されるわ!」

「あんたなら大丈夫よ!」

「氷室さん、大丈夫ですよ?」

和人の近くにやって来て、心配そうに沙耶香が問う

「おい、聞いたか?彩花さんよ。これが一般人の見解だ。ありがとうな東條。心配しなくても大丈夫だ」

「……………」

「あれ?えっと…西條だっけ?」

和人の発言にフルフル怒りに震える沙耶香。

「…南條?」

「ワザとですわね!?! 絶対に嫌がらせしてますわね!?!」

「……さて、顔を洗ってくるかな」

逃げて誤魔化そうと部屋から出て行こうとするが…

「ちょ、ちょっと!」

「……馬鹿——!!」

彩花の制しを聞かず、怒り心頭で北條が椅子をぶん投げた。

「あ、危な!」

背後からの不意打ちだが、和人は避けるのに成功する。魔弾の射手の攻撃を避けているので反射神経は伊達ではない。

「ううつ…グス…馬鹿…馬鹿、馬鹿——!!」

次々とテレビのリモコン、コンポのリモコンなど、手に取ったものを投げる沙耶香。目からは涙が…

「な、何も泣くこと…」

「そ、そうよ。落ち着いて」

二人は必死に宥めるが、沙耶香が冷静になるには数分を要してしまった…。

「はぁ：朝練遅刻だわ」

「ごめんなさい：私のせいで…」

「ううん。悪いのは全部あいつだから」

「まさか泣くとは…」

予定の時間より、数分遅れで三人は登校し始めた。彩花の自転車は和人が押し、鞆まで持たされている。

「あんたが名前を間違えるからでしょ！そりゃ傷つくわよ」

「い、いや、寝起きで頭が回らなくなてな…」

「……橘さんには気が付いていましたわ」

「そ、それは…」

ジト目で二人は和人を見る。

「そ、そうだよ。北條ってのが覚えづらいんだよ」

「なっ！そんなことどうしようもありませんわ」

「ああ、だから名前で呼ぶよ。沙耶香って呼ぶから。俺も和人でいい」

「な、ななな…」

「そうよね。確かに橘さん、北條さんじゃ他人行儀だもんね。私も彩花でいいから沙耶香って呼ぶけどいい？」

彩花がそれに賛同するが、当の沙耶香は顔を真っ赤にしている

（お父様以外の男の方に名前を呼び捨てにされるなんて…でも、嫌じゃ無いですわ…）

「おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですわ。おーるおーけー」

「……口調変わってるわよ」

「き、気にしないで下さい。あ、彩花さん。か、かか、和人…さん」

「うーん。呼び捨てで構わないんだけど。まあ、いいか」

「そうね。沙耶香の性格なら、さん付けが妥当でしょ」

和人と彩花は満足げに頷き、三人は何時もより楽しく登校した。

学校に到着した三人。彩花は剣道場に行くため校門前で別れるのだが…

「じゃ、私は朝練に行くけど…和人。もし帰ったら…」

「あゝ、流石にあんなことがあれば目が覚めた。それに帰ったら誰かさんがまた泣きそうだしな」

「な、ななな、和人さん!!」

睨みながら釘を刺す彩花に和人は沙耶香をからかうような返答をし逃げるように玄関に駆けていく。それを沙耶香が追いかける

そんな二人を苦笑いで彩花は見送り、朝練に向かうのだった。

「ようやくですわ…」

長かった。一番の問題児である和人さんが登校している今、私の目標実現は近い。

しかし…私は忘れていた。

このクラスにはもう一人。問題児がいるという事を…

「なあ、ハジ。琢磨のヤツは今日は来るのか？」

「多分、粗方声はかけ終わったと思うし。でも、来たとしても遅刻だね。昨夜は遅くまで泣いてただろうし」

「はあ…あいつも懲りないな」

「立ち直りは早いけど」

和人とハジの会話を聞き、沙耶香は今、その人物について思い出した。

常盤琢磨。我が学園のエロ男の色情狂という噂が名高い生徒で。大半の女性徒は彼にナンパなりの誘いを受ける。

沙耶香も声をかけられたことはあった。

遅刻数で全校NO1を誇る和人の次点が琢磨である。

和人の寝坊とは違い、近くの女子高など他の学校へも朝からナンパに勤しんでいるというのが遅刻の原因となっている。

「一文字さんは常盤さんとは親しいのですか？」

「うん。小学校からの付き合いだし、腐れ縁」

「あいつ、始業式から学校来てないだろ。それは新入生に声を掛けまくってるかららしいよ」

「で、大概振られて落ち込む。僕の予想だと今日くらいから来ると思うよ」

同じクラスでありながら、まだ一度も姿を見ていないのはそういった理由からである。

（こんなこと、考えては駄目なんですけど…。どうか今日だけは休んでください）

遅刻撲滅運動。欠席なら遅刻とはカウントされないので本日無遅刻が達成される。

そんな邪な事を考えていると…

「ちっ、氷室が来てやがる…」

教室に入ってきた御堂先生が舌打ちをし、不機嫌そうにHRを始めるのだった。

昼休みも終わり、午後の授業に突入。調査を行ったところ、本日は遅刻者はいない。

もう少し…あと二時間で無遅刻の完成となるという所で

「おっはよー女の子達！やっぱり、君たちが一番だよ！！」

授業中だというのに、嫌にハイテンションで彼がやって来てしまった。

「そ、そんな…」

うなだれるように机に突っ伏す沙耶香。

遅刻がなくなる日は…まだ遠い…

「ほう：私の授業に堂々と遅刻してくる挑戦者は氷室だけかと思つてたぞ」

「げっ、御堂先生！ヤバ！今、現国！？って、ギャーーーー！！」

そして、拓馬は御堂先生の数本のチョークの散弾投擲によって、粛清された。

第10話：お嬢様の目標 後編（後書き）

いつもご愛読感謝です。

お久しぶりです。久遠です。

なんだかんだで10話目。皆さんには感謝ですね。

霞「……ねえ、私の出番はまだ？」

おっと、フライングだね霞ちゃん。次だから慌てないで

霞「じゃ、とうとう：私との出会いのお話ね♪」

うん。中学時代の和人のお話。では予告編をどうぞ！

「和人や、本当に優しい人間は本当に辛いことを知ってるんじゃない」

「もう…生きていても仕方ないの…」

「生きてくても生きられない人間も居るんだ！死ぬなんて絶対に許さない！」

次回『師と銀狼と白姫 前編』をお楽しみに

霞「シリアスモード満点！」

まあ、ギャグは殆ど無いね次回は

霞「頑張って書いてよね」

了解です。では、今回は此の辺で：

霞「感想をどしどし書いてね。待ってまーす」

励みにりますので、どうぞよろしくお願いします。

第11話：師と銀狼と白姫 前編

――Side ????

「カー！ット！お疲れ様Soraちゃん！いい声だったよ」

「ありがとうございますディレクター♪」

都内にあるテレビ局のスタジオで、歌番組の撮影が終了した。

笑顔でスタッフに挨拶をしているのは、去年デビューし、大ブレイク中の新人歌手Sora。

その白く長い髪と明るく元気な笑顔、そして美しく、優しい歌声が人気を呼んでいる。

「ふう…」

楽屋で疲れたようにため息を吐く。

やっと人並みの幸せが掴めるようになった。今の私は恵まれていると思う

だけど…

何故だろう…

「昔の…辛かったときの方が楽しかったなんて」

そんな私の元にマネージャーがやって来て：

「霞、お疲れの所悪いんだけど…」

「また仕事？今日はこれで終わりだったはずだよ？」

「いえね…仕事じゃなくて、その…今、事務所に貴方を訪ねてきた
っていう弁護士が来てるのよ」

弁護士？私の所に？一体：

「分かったよ♪じゃ、早く戻ろう！」

この弁護士さんが持ってきたもの：

それが、私の本当に求めるものの道しるべになるなんて：

このときは考えもしなかった：

——Side Kazuto Himuro

俺の住んでいる。ここ春ヶ丘市は、海があり、山があり、温泉やその他の観光地があり、アリーナなどの施設もあり、それなりに賑わっている。

さらに、東京まで電車で1時間ちょっと。

そんな事もあり、GWなどの長期休暇では大量の観光客が訪れる。

ここ光琳高校でもGWの予定で話題が挙がるようになってきていた。

昼休み。男四人で教室で昼食を取っていると琢磨が話をはじめた。

「なあ、聞いたか？Soraちゃんのライブの話！」

「僕が知らないわけ無いじゃん。5月5日に春ヶ丘アリーナでのライブ！タクは行くんでしょ？」

「当たり前！あゝあ、どうにかしてナンパできないかな」

「芸能人までナンパする気か？お前は」

琢磨とハジの会話に呆れながらつつこむ冬至

「んだよ、時雨。いいじゃんかよ」

「いい悪いじゃなく不可能だと思うんだが…」

「そうとも言い切れないよ」

珍しく琢磨を弁護するような事を言うハジ

「まだ不確定だけど…凄い情報が入ってきたんだ。だから分かんないかも…」

「本当か？まあ、一文字が言うなら本当なんだろうが…」

「よっしゃ、なんか燃えてきたぜー！ー！」

「タク、熱くなるのはいいけど…僕の感だと……和くんがまた波乱を起こす気がする…」

ハジの言葉に今まで黙って惣菜パンを食べていた和人がうんざりしたように口を開く

「またそれか…。お前の言葉は予言じみてて当たるから嫌だな」

「氷室！そのリアクションはなんだよ！S o r aちゃんと会えるかもって言ってるんだから喜べ！」

当初は和人にビビリがちだった琢磨も、慣れたのか平気で喋るようになり、それを若干嬉しく思う冬至は笑みを浮かべる。

「ん？冬至なんか嬉しいことでもあったのか？機嫌よさそうだけど…」

「いや、なんでもない。で、どうなんだよ和人。芸能人との波乱を予告された気分は」

「そう言われてもな…そもそも、そのS o r aって誰だ？」

「なっ！？お前、知らないのか！？」

「テレビとか見ないからな…」

ならば教えようと、興奮気味に琢磨が熱弁を語ろうとしたところで…

「あ、そろそろ休み時間終わりだ」

「次の時間ってなんだった？」

「英語だよ。僕、今日当たりそうなんだよね…」

その場を立ち去ろうと背を向ける三人

「って、聞けよ!! ま、待てよ! 置いてくなくよ」

三人の後を情けない声を出しながら慌てて追いかける琢磨。

「では、此処の和訳を…一文字さん♪」

「はい。えっと…『私は、あなたと一緒に居たい。なのにあなたは
何故分かってくれないの…』かな?」

英語の授業中、そんな言葉が耳に入ってきた。

『ボクは先輩と一緒に居たいんだよ!! なのに、どうして分かって
くれないの!?!』

似たような事を昔、言われたな…

ボーッと窓の外を見ると、そこには青く、何処までも続いている空
が見える。

あいつの名前と同じ美しい空が…

その空を見ながら、俺は過去を思い出す…あいつとの出会いを

（回想）

「またか氷室…」

「……………」

中学に入学してまだ間もない頃…

それにも関わらず俺は生徒指導室に呼び出されていた。

「三年との喧嘩…まったく、入学早々何回目だ！」

「……………」

「今回こそは、共犯者を名乗らせるぞ！言え！誰と一緒に喧嘩したんだ！？」

「誰も…俺一人だ…」

「嘘をつけ！！三年は五人が怪我をしたんだぞ！お前は無傷だ！！どう考えても仲間が居たとしか考えられん！！」

「……………」

「大体だな！その髪の色といい、カラーコンタクトといい！どれもこれも校則違反だ！！」

またそれか…

「……これは…生まれつきだ」

「ほお…お前のような輩ほどそういう事を言うんだがな…」

「……………」

「ふん！まったく、貴様の親はどういう教育をしたんだ！？ええ！？」

「！？」

何を言われても頭には来なかった…だが…

「な、なんだその目は…ひ！？」

父さんと母さんの悪口だけは許せなかった。

結局、この教師を殴ってしまい、二週間の停学処分になった。

「帰ったか和人」

家に帰って俺を出迎えた電話中の人物

氷室玄統斎。母さんの武術の師にして父親。俺の祖父である。

「ただいま…」

両親を失った俺を引き取ってくれた人で、俺に残された唯一の肉親。

剣術、拳術、合気道、柔術、あらゆる武術を独自に昇華した総合戦闘術…氷室流の当代で、銃弾さえも避ける事が出来るという、日本で三本の指に入るであろう武術家である。

正直、人間離れしているが、本当に凄いのは…

「おおすまんの家のもんが帰ってきおってな…なあに、心配いらんわい。今日は夜までないとふいーばーじゃ」

物凄い色魔…つまりはエロ爺で女性にモテルスキルの全てを取得したと豪語している所である。

今も、何処かのOLさんをナンパしているのだろう…

「ふう…さて、和人や、話がある。ついて来い」

俺に待っているように手で伝え、電話を終えたかと思うと、真剣な表情で俺を見てになり、ついて来るように言う。

先程のないとふいーばーとか言ってた人間と同じとは思えないほどの威厳をだしている。本当に同一人物かどうかと思うこともしばしば…

逆らったところで俺の命がやばいので素直についていく

「先程の、学校から連絡があったんじゃが…先生を殴ったそうじゃの…」

「……………」

爺ちゃんの畳がある和風内装の部屋で、正座で向かい合うと話を切り出した。無言の俺に…

「ふん、別に咎めはせん」

「？」

「お主が誰よりも優しい子だというのは分かっているし…殴ったのも余程の理由があったんじゃろう…」

「そんな事…俺は優しくなんか…」

「和人や、本当に優しい人間は本当に辛いことを知ってるんじゃ」

「……………」

「その経験があるからこそ、他人が辛いときに助け、協力したくなる。気持ち分かるからじゃ」

「お主は、父と母を失い。孤独という辛さを知っとる」

爺ちゃんは二カッと笑って、ごつごつした硬い手の平で…

「じゃから、お前は優しい。ただ今は、まだ自分の辛さで精一杯で

他人のことまで頭が回らないだけじゃよ」

「爺ちゃん…」

「さて、話しは終わりじゃな。折角、明日から学校に行かなくて済むんじゃ。山籠りに行くぞ！」

「……話って…その事？」

「そうじゃよ？嬉しいじゃろ。付っきりで強くしてやるぞ！そうじゃの…そろそろ生身で熊の二、三匹を倒せるようにならんといかん」

ガッハツハと強引に笑う。

「では、出発は明日の昼過ぎじゃ。それではワシは菜穂子ちゃんとのふいーばーしに行くかの…」

元から容姿のせいで、周囲からは浮いていたが、上級生との喧嘩や先生を殴った事で完全に不良のレッテルを貼られ。

銀髪と何時も一人で居ることから、銀髪の一匹狼という意で『銀狼』と呼ばれるようになった。

だが、少しも辛くはなかった。

俺には爺ちゃんが居たから…

そう考えていた俺お前に、中二の夏の終わりに…

俺は翼を失った白く美しい少女に出会った

第11話：師と銀狼と白姫 前編（後書き）

更新完了！

さて、まずは：すいません！！

予告まで話が進みませんでした！！

続きは以下次号って事でお願いします。

さて、Rumbleも11話です。ひとえに読者様の応援のお陰です
ね。感謝感謝です。

これからも頑張っていくしますので応援をよろしくおねがいします。

第12話：師と銀狼と白姫 中編

何も変わらないはずの毎日。それが、少し変わったのは…

中学二年の夏の終わりだった。

「はっ、はっ、はっ」

深夜の、人気のない海辺。夜空に浮かぶ満月が海面に映り、美しく幻想的な夜。

そこで日課のランニングをしていると…

「…?」

波の音にしては不自然な水の音がした。

その音の元を探るように、辺りを見回すと…

海に入り、沖の方に歩いていく人影らしきものが見えた。

おかしい…

こんな時間に泳いでいるのか?とも考えたが、それはない。何故なら、その人影の肩の辺りまで水に浸かっている。

そんな深さで泳ぐこともせず、ただ沖に歩いている。

遠いにも関わらず、その人影が明確に見えるのは髪が月光に反射し

て、白く光ってるように見えたからだ。

髪の長さからして女性…

嫌な予感がした

「…！？」

その予感は的中した。

頭さえ、海水に浸かりながらも、その人は浮かんでこない。予感がしたときから体が動き、俺は海に飛び込み、その人影を目指して泳いでいた。

「はぁ…はぁ…」

「ケホ！…ケホ！…コホ！…はぁ、はぁ、は、離して…」

水中で白髪の少女の右手を掴み、左腕で抱きかかえるような形で引き上げる。苦しそうに咽かえっている事から、最悪の事態になる前に救出に成功した。

しかし、少女から出た言葉は助けたことからの感謝の言葉とは程遠かった。

「離して…離してよ！！」

暴れる少女。そこで、違和感を感じた。

掴まれた右腕と、足で必死に抵抗し、俺を引き剥がそうとするが…

（左腕が…動いてない）

ピクリとも動かず、ダラリと力が入っていない左腕。

「じっとしてろ…」

「嫌！ボクに構わないでよ！！ほっといてよ！！」

喚き、暴れる少女に若干手こずったが、ようやく浜辺に戻ってきた。

よく見ると少女は俺と同じか年下くらいで、白く長い髪と整った顔立ちで美少女と言って差し支えない容姿をしていた。

着ている服が、病院の入院患者の着ている服なので、春ヶ丘総合病院の患者なのだという事が伺えた。

浜辺で力を抜いた俺の手を振り払うと、少女は睨みながら…

「どうして…邪魔するの？」

「……お前…何をする気だった？」

「キミには関係ないでしょ！！」

「……何をする気だったんだ！！」

「…死ぬ…死ぬつもりだったんだよ！！いいでしょ！？関係ないんだから！今度は邪魔しないで！！」

ザブザブと海に入っていこうとする少女の腕を掴み、それを阻止する。

「離してよ!! どうして邪魔するの!?!」

「逃げるなよ…」

「何も知らないくせに! 無責任なこと言わないでよ!!」

「だとしても…自分から死ぬなんてのは逃げでしかない!!」

「もう…生きていても仕方ないの…」

「生きてくても生きられない人間も居るんだ! 死ぬなんて絶対に許さない!」

許せなかった…

俺の両親のように、死にたくなっても死んでしまう人間が世の中には沢山居る。なのに、自分から死のうとするこいつが許せなかった。

「……話して見ろよ…死にたい理由を」

「……………」

「…………死ぬ覚悟があったんだ、俺に事情を話すなんて、それに比べたら大したことないだろ」

俺の言葉をどう思ったのかは分からない。

それでも少女は、自分に何があったかを話してくれた。

少女は生まれつき病気で…それを治す薬を投与していた。

やがて、その薬の甲斐あって少女の病気は治った…しかし、その代償があった。

髪の色素。髪が白くなってしまったのだ…

「そのせいで…ね。小学校の時にボクは虐められた。毎日泣いた…そんなボクにお父さんはスケッチブックとクレヨンを買ってくれた」

少女は絵を書いた。何枚も何枚も…。才能と努力の結果、少女の絵は世間に評価され、そのお陰で学校の虐めもなくなり、絵を通して友達も出来た

「嬉しかった…。絵は好きだったし、書いたのを見てくれた人が喜んでくれるのが…。でもね、それももう書けなくなっちゃったんだ…」

中学にあがった頃、不良グループがちよっかいをかけてきた。理由は俺と同じ、髪の色が気に入らないというもの…

「無視したり、相手にしなかったり、先生に言ったりしてやり過ごしてたんだ。でもね、それが気に入らなかったみたい…」

放課後、不良グループの女子生徒が男子生徒を呼び、少女を地面に組み伏せ、ナイフで衣服を切ろうとした。

「当然、抵抗したんだよ。そしたらね、相手の激情に触れちゃって

…」

脅しのつもりだったナイフが…少女の左腕を…切り裂いた。

「……あとは、キミも気がついたでしょ。左腕が動かないの…神経を切られちゃってね。私、左利きだからもう絵は書けない」

生甲斐だった絵は書けない。右手で書こうにも、タッチなどの繊細な部分でどうしても差が出て、満足な絵を書けなくなっていた。

「服を着るのも一苦労だし、ご飯食べるのにも時間がかかる。生きてても皆に迷惑かけるだけ…」

「……………」

「絵を書かなきゃ、また気味悪がられるだけ。キミもそう思うでしょ？」

自嘲気味に問う少女…だが、俺は

「別に…俺はいいと思う」

「？」

「俺の髪もお前と同じような色。俺の場合は目も違う」

こいつは俺と同じ辛さを知ってる。外見で世間から迫害を受ける辛さを…

だからこそ、気持ち分かる。

俺も自分の境遇を少女に話した…。爺ちゃん以外の人間とこんなに長く会話するのは久しぶりだった…

「……………」

「だから、お前の気持ちは多少なりとも分かる…けどな、死んじや駄目だ。残される人の気持ち、考えたか？」

「——っ!？」

「生甲斐はまた見つければいい…。他人にどう思われようと、自分を理解してくれる人が一人でもいれば、それでいいんじゃないか？」

「……だけど…ボクにはもう」

「居るだろう？両親とか心配してくれる人は…なんなら、俺をそこに含めてもいい」

俺はこいつの辛さが分かる、だからこそ、こいつがして欲しい事が分かる。そして自分がして欲しい事をこいつにする。

「…一緒に新しい生甲斐を見つけよう。だから、自分から死ぬなんて馬鹿な真似はもう絶対にするな…」

「う……っ、うああ…!!」

堰を切ったかのように泣きじゃくる少女を優しく、優しく抱しめる。

人の温もり…

それが、辛かったときに俺が最も欲しかったものだったから……

「俺は…氷室和人……」

「ボクは……美空霞」
みそら かすみ

翼をなくした白い少女。その名の通り美しい空に再び飛び立てるように…

「…とりあえず、家に来いよ。海水気持ち悪いだろ？」

新しい翼を少女に…俺はその翼を捜す。

互いの事を話しながら家に帰ってきた。聞いた話だと霞は俺の一つ下らしい

「ただいま…とりあえず、先に風呂に入れよ。一人で大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ!! い、意外とえっちだね先輩は!？」

親切心から言っただが…

風呂の場所を教えると、顔を真っ赤に染めた霞は一目散に消えていった…

呼び方は霞と先輩という風になった。初めてだな、他人から先輩なんて呼ばれるのは…

「ふう…やれや…れ？」

「和人、こっちこいや」

何時の間にか居た爺ちゃんが、ちよいちよいと手招きする。呼ばれたので俺は近くに行くと…

―ガシッ！

「よくやった！！」

「……は？」

「お持ち帰りとはの！ふふ、お楽しみじゃのう和人。いいか、色々と注意事項があるぞ。おぬし達は若い！ゆえに諸々に気をつけるんじやぞ…」

「……………」

「で、あの子は誰じゃ？」

「…普通、真っ先にそれを聞かないか？まあ、いいや、爺ちゃんちよつといいかな」

霞が風呂に入っているし、丁度いい。居間で爺ちゃんに事情を話す

「なるほどの…流石ワシの孫じゃ。女の連れ込み方も並ではないの」

本当に嬉しそうに語る爺ちゃん。

「それに、口数も増えて…」

「爺ちゃんとは喋ってただろう？普段から」

「いやいや、それでもそんなに柔らかくはなかった…。女が出来る
と変わるもんじゃの…」

出会ってからまだ数時間とたっていないが…変わるものなのか？

「とりあえず、今日は客間に泊めて明日病院に送ってくよ」

「なんじゃ？お前の部屋じゃないのか？」

「…当たり前だ」

「つまらんの～。まあよい、和人、布団はワシが敷いておくから着
替え持って行ってやれ、お前のワイシャツなんかグツとくるじゃ
ろうて」

：言ってる意味はよく分からないが、着替えは必要だ。Tシャツと
ジャージでいいかな…

「覗くなら、ばれないように気配を消すんじやぞ、その鍛錬はした
じやろう」

とか言ってる爺ちゃんを無視し、着替えを取りに部屋へと向かう

和人が出て行った後、居間では：

「…昔のあやつの目に戻ったの。本人は気づいてないじやろうが、近づきづらい雰囲気緩和されておる…」

本当に嬉しそうに笑う玄統斎

「霞ちゃんといったか…あの子には感謝じゃの……」

そう呟くと、玄統斎は立ち上がり：

「さて、布団でも敷いて寝るか…年寄りには夜更かしは辛いわい…」

居間を出て行く玄統斎の、その瞳は孫への慈愛に満ちていた。

第13話：師と銀狼と白姫 後編

さて…どうしたものか……

「先輩？聞いてる！？」

「ん？ああ…」

「つて、違うよ！そこは青を使うって、さっき言ったでしょ！」

出会ってから数日が経過した。病院を退院した霞とはすっかり、打ち解け、頻繁に会うようになった。

今は、俺に絵を教えてくれている。

「きちんとやれば、先輩ならいい絵が書けるよ！私が保証しましょう！」

霞先生から出された課題は空。一見、単純に見えるが、絵に関しては単純な物ほど奥が深い。

しかし、俺は絵よりも気になる事があった。

楽しそうに教えている霞だが、時折、一瞬だけ表情が曇り、右手で左腕を握るのだ。

早く…何か見つけないと…

霞が楽しく、夢中になれるものを……

「~~~~~」

「霞？」

「あ、ごめんね。邪魔だったかな。これね、ボクの大好きな歌なんだ」

きっかけは、不意に訪れた。何気なく口ずさんだ霞の歌。

前から声が綺麗だとは思っていたが……その歌声も綺麗で……澄ん
いて……スツと心に響く

そうか……

「これだ……」

「？ 先輩？」

霞の新しい翼……

翼は見つかった。後は……それを大きくし、大空へ羽ばたけるように
俺が……助ければいい。

翌日

駅前にある楽器屋……

「毎度どうも。何かあったら言ってくださいね」

さて、次は…

少し、歩いたところにあるCDショップ…

昨日霞が歌っていた曲は、数年前のメジャーな音楽で、女たらしの爺ちゃんは当然のごとく知っていた。

俺はそのCDと譜面と…そして…

【ギター入門 虎の絵巻】

楽器屋で買ったギターが入ったケースを持った左手に力を込める。

準備は整った…後は、俺の努力と才能次第だ

「ほお、ギターか……和人、ちょっと貸してみなさい」

今日は霞は家には来ない。なので、早速練習を始め、不協和音を奏でていると爺ちゃんにギターをぶんどられた

「♪~~~~♪♪」

「上手いね…」

「ほっほっほ、言ったじゃろ！女子にモテる術は心得ているとな。
尺八からふるーとまで何でもいけるぞい」

左右の手の動きがまるで生きてるかのよう動き、複数のギターが音を奏でているような旋律

「俺にも…出来ると思う？」

俺の弦きに爺ちゃんはギターを弾くのをやめ

「当たり前じゃ、誰の血を引いていると思っておる。自分の力を信じるんじゃ！和人ならすぐに弾けるじゃろう」

音楽の成績は元々悪くなかった。

そのお陰と爺ちゃんの特訓の甲斐もあって…

「~~~~♪~~~~♪」

三日後にはそこそこ弾けるようになった。

「ほらの、言ったとおりじゃ（冗談じゃったんじゃが…末恐ろしいヤツじゃ）…誰の孫じゃとおもっとる」

「凄い…凄いよ先輩！うわーギターなんて弾けたんだね。しかもボクの好きな曲…」

「歌えよ…これは、お前の為に練習したんだ」

「先輩？」

まだ、喋りながらギターを弾けるほど器用じゃないので、演奏を止めて、俺は霞に語る

「その手じゃ絵は書けない。だけど…歌なら…」

「歌?…ボクが…」

「お前は声が綺麗だ…才能があると思う。だから、歌でもきつと人を感動させる事が出来る。俺が音を奏でる。だから、お前は歌ってくれ」

そう言って、俺は霞の好きな曲を弾く

「…先輩…分かった。ボク歌うよ…先輩の言葉を信じてみる」

最初はお互いに上手いとはいえなかった。しかし、日に日に…

「…いい歌じゃ…」

上達し、人に聞かせる事がなんとか出来る位のレベルまで来た…

「…思ったとおり、霞には歌の才能もあったな」

「それを言うなら先輩だって…ギター上手くなったじゃない。あんな短期間で…」

しかし、弾けるのはまだ一曲だけだ…

「ふむ、では。すてっぷあっぷじゃの…」

何時の間にかコーチになりつつある爺ちゃんがニヤリと笑い、そんな事を言う

「ステップ…」

「アップ？」

「そうじゃよ。今のままじゃと、他人のものを歌っているだけに過ぎん。それでは本当に伝えたい思いを伝えられん…」

練習中に幾度と無く聞かされた…爺ちゃんが言う音楽の定義。

「音楽とは、思いを伝えるためのものじゃ。思いを込めなければ、いい音楽は生まれん。そこでじゃ、二人が思いを伝えるために…」

さつと、数枚の紙の束を俺と霞の前に差し出し…

「音楽を作るんじゃ!!」

そう宣言した。

俺の前に出された紙束は…

「楽譜？」

「ボクのは…ノートだ…」

「そうじゃ、和人は曲。霞ちゃんは詩を書くんじゃ」

とんでもない無理難題を言う爺ちゃん…

「待ってくれ、俺は曲の作り方なんて知らない…」

「ぼ、ボクも詩なんて…国語の成績最悪なのに…」

「大丈夫じゃ、基本は何を伝えたいか…それを考え、形にするのじゃ」

そう言われてもな…

「曲を作る場合はそれを考えに考えるんじゃ。すると、ふと頭の中にメロディーが流れる…後はそれを再現すればいいんじゃ」

無茶言ってくれる。まだ、弾けるようになって間もないんだぞ…

「霞ちゃんじゃが…字は書けるかの？」

「う、うん。右手で絵を書いていたし、練習したから…書けるけど…」

それを聞き、爺ちゃんは電子辞書を取り出し…

「それを霞ちゃんにプレゼントじゃ。必要になると思って買ったんじゃないぞ」

「あ、ありがとう玄ちゃん。で、でも…これでどうすれば…」

「まずは、自分の伝えたいこと、そのあらゆる単語と表現力を書き出して…詩を作るんじゃ…」

いきなりそう言われても…霞の表情にも困惑が見て取れた

「歌を作るには二通りあっての、詩を先に書いてから曲にするか、曲を書いてから詩にするか…じゃが、今回はそれを同時に行う」

そんな俺たちには目もくれず、どんどん話を進めていく爺ちゃん。

「お主らの思いの全てを…ぶつけて作るんじゃ。さすればおのずと、素晴らしい歌が生まれるじやろう」

頑張るのじゃぞ

とか責任に言うだけ告げて、爺ちゃんはナンパにいそいそと出かけて行く。

後に、残るのは唾然と立ち尽くす俺と霞

「と、とりあえず…やろっか？」

「やるのか？」

「うん…ちよっとまだ混乱してるけど…でも、ボクもね、先輩の曲って凄く聞いてみたい。歌ってみたいんだ。だから、ボクは詩を書くよ」

「俺も、やるだけのことはやるが…」

とは言っても…

「曲なんて…ちっとも浮かんでこないな…」

「あ、あはは…」

前途多難な曲作りはこうして始まった。

浮かんできた、メロディーを再現して書き残せ！

とは言うが…そんなものは浮かんで来ない。さらに、楽譜の書き方も良く分からない。

とりあえず、楽譜の書き方を学びながら曲を考えることにした。

一方…

「うう」

辞書を片手に、頭を悩ませる霞…

「全然、わかんないよ」

前途多難である……

最初はどうなることかと思ったが、紅葉がピークに達し、秋も深まってきた頃…

「出来た…」

「やった…書けたー！ー！！」

俺たちの歌は形になった。

「ようやくたの…じゃが、まだじゃ。まだ大事なものが残っておる…」

「大事なもの？」

「そうじゃよ。曲名じゃ…」

「そんなのは後でいいよ玄ちゃん。とりあえず、歌ってみたい！ボクね、凄く楽しみなんだ！！」

「だ、そうだ…」

「そんなもの…酷い扱いじゃの…」

霞にいわれた言葉でショックを受ける爺ちゃん。だが、霞は歌いたくて仕方がないのか…

「ねえ、行こ？」

「行こうって…何処に？」

時刻はもう9時過ぎ。本当なら霞はもう帰る時間である。

「えっとね、夜景が綺麗に見える場所があるの…とっても気持ちいいんだよ。どうせならボク、そこで歌いたいんだ…」

霞に案内された場所は、女子寮や温泉旅館がある山沿い。その山道の頂上にある見晴台。

「これは…」

「ね、いい気持ちでしょ。それに…綺麗だよね」

そこからは春ヶ丘が一望でき、満点の夜空と夜の静かな海。まさに絶景…

「よく此処で絵を書いたんだ…でも、夜に来るのは初めてだよ」

夜風を気持ちよさそうに身体で受け…ながら、目を瞑る霞。

俺の演奏を待っている…そう感じた俺は、ベンチに腰かけギターで音を奏ではじめた…

その日から、俺と霞は毎晩のように、ここでライブをした。

ただ、自分の思い、気持ちを思いっきりこめた歌を…全力で歌った。

「ねえ、先輩…曲名決めたよ」

「…どんなだ？」

『Together』

「どうかな？この曲はボクと先輩が一緒に作った。どっちがかけても歌は出来ない。だから、『Together』」

「…いいんじゃないか？」

「あゝ！何、そのどうでもいいって言い方は！？」

「お前がよければ、俺は何でもいいんだ」

俺と霞。一緒に居れば、楽しく、辛いことなんて忘れられた。

だが…

一緒に居られる時間は唐突に終わりを迎えた…

「アメリカ？」

「うん…」

何時のように、ライブを終えた帰り道に霞がそう切り出した。

「向こうにね、とっても凄い医者さんが居るんだって…その人に手術してもらえば治るかもって…お父さんとお母さんが言ってたの」

感覚が無い、左腕を右手で触りながら語る

「あ、でもね。断ったんだ…」

「……何でだよ？」

「え？」

「…行けばいいだろ。治るんなら」

「——っ！？どうしてそんな事言うの！？」

「腕が治るんだ…断るような事じゃないだろ？」

「ボクは先輩と一緒に居たいんだよ！…なのに、どうして分かってくれないの！？」

「それじゃ…駄目なんだよ……」

霞にはもう新しい翼がある。一人で何処にでも飛んでいける。俺という籠で閉じ込めてしまう訳には行かない…

「何が駄目なの！？」

「お前は…治したくないのか？出来なくなった事をまたやりたく無いのか？」

「別に…アメリカなんかに行かなくても…此処にもお医者さんは…」

「その考え方が駄目なんだ…。そんな気持ちじゃ、治るものも治りっこない」

俺も正直、別れたくはない。だけど…いつかこんな時が来るような気がしてた。

出会いがある以上、別れも必ずある。それはとても辛く、悲しいこと…

「でも…嫌だ…ボクは嫌だよ…」

だが…

「別に、今生の別れじゃないんだし、また会える」

父さんと母さんの時とは違う。生きていれば、別れたとしても、どんなに離れていたとしても、いずれ会える。

「なあ、約束が必ず護れる指切りをしないか？」

「約束が必ず護れる指きり？」

「そう。約束はアメリカで左手を必ず治してくる。そして、手が治ったら左手で指切りするんだ…」

約束を護った後での指きり。母さんが教えてくれた、絶対に護る約束があったときに使う指きり

「な、なにそれ…グス…そんなの指きりじゃないよう…」

涙ぐむ霞。だけど、俺は泣けない…。俺は笑ってこいつを送り出す…

「だけど、確実に約束は護れるだろう？」

「そ、そうだね…分かった…ぼ、ボク…絶対に約束護るから…」

「ああ、約束だ。そしたら、またここでライブしよう。その時までにはもう少し、演奏を上手く出来るようにしとく」

そして…数日後に

霞はアメリカに約束を護るために飛び立っていった。

あれから…五年…

まだ、霞とは会っていない…だから俺は…待ち続ける。

—Side Kasumi Misora

「先輩…私は…」

「霞？」

事務所で弁護士から手紙を受け取り、それを読んだ霞はポロポロと泣き出す…そんな霞にマネージャーが心配そうに声をかける。

忘れようと思ったあの人の事…

でも、そんなのは無理だ：

「馬鹿みたい：私：」

両手で、丁寧に手紙を仕舞って：

「会わなきゃ：」

そう決意した。

勝手にいじけて、勝手に忘れようとして……。そんな馬鹿な私を今もあの人は待ち続けているのだろう：

「玄ちゃん：ボク：」

忘れようと誓った時から、ボクから私と呼び方を変えた。でも、それも止める。こっちが本当のボクだから：

そして、この手紙で気持ちを思い出させてくれた、今は居ない優しいお爺ちゃんに：感謝して……

五月五日。あの人の住んでいる場所でのライブ：

「マネージャー、ボクねライブの前日に先輩に会ってくる」

「……大事な人なのね？」

「うん。ボクに、歌うことの楽しさと生きる希望をくれた人に会いに行くの。明日から頑張って仕事するからいいでしょ？」

「はぁ…ライブの時間までに戻ってくるのよ？」

「うん！ありがとう。大好きだよマネージャー♪」

あの時…子供っぽい感情のせいで出来なかった約束…

今度こそ果たしに行かなきゃ！

第13話：師と銀狼と白姫 後編（後書き）

更新！

さて、霞ちゃんと和人くんの回想は今回でラストー

和人「ちょっと待て！霞って、Soraだよな？デビューしたのが去年だろ…って事は一年前には帰ってきてたのか？」

霞「そうだよ。でね、先輩に会いに行ったんだけど…まあ、いろいろあった訳なんだ」

和人「わけわからねえ…」

霞「真相は次回！」

いや、次々回位かな…今回はシリアスが続いたからコメディイを風にしようかと。

和人「そうなのか…ところで、俺ってギターの才能あったんだな…」

まあ、実際、そんな短期間で弾ける訳が無いけど…ジャンルコメディーだし、時間の都合上こうしないと…だから、そういうたつっこみはスルーの方向で…

霞「出てるキャラで人間離れしてる人とか居るもんね…」

和人「大半は俺の身内なんだが…御堂先生とかな」

ま、まあ、とにかく。次回は、久しぶりにあの人が出てきます。実は、一番好きなキャラなんだよね。彼女

霞「誰だー！ー!?」

和人「お、落ち着け！」

ではでは、よかったら感想をお願いします。

第14話..怒涛のGW 始まり

「ふぁー…よく寝た…」

ボーっと天井を見つめつつ、そう呟いてみる。

時計の短針はてっぺんを指している。

「彩花が居ないから、ゆっくり寝られた♪」

今日は彩花は居ない。それどころか学校も休み。何故なら…

「GW最高!」

五月三日。GW初日…さらに彩花は剣道部の合宿に行ってしまったので、起こしにはこれないのだ。

「さてっと…」

ちゃちゃっと着替えて、一階に降りてくる。

「あら♪おはよう和人ちゃん。いいえ、もうこんにちはね」

「はは、こんにちは。涼香お姉さん」

リビングに入ると見知ったお隣さんに挨拶をされた。

橘涼香^{たちはなすずか}。彩花のお母さんである。外見は彩花のお姉さんにしか見え

ないほど若いが、正真正銘の彩花の産みの親である。

この人と会話するときの注意事項は一つ。おばさんや歳を連想させることを決して言わないこと。以前にそう呼んだときの記憶は硬く封印してある。

「ねえ、何か失礼な事考えなかった？」

「いいえ、滅相ありません」

「そう？ならいいけど…あ、洗濯物。ちゃんとアイロンがけしいたわよ♪」

綺麗にたたまれたYシャツなど、俺の服をテーブルの上に置いてくれる。

「いつもすいません」

「いいのよ♪私はキミの保護者なんだしね♪」

爺ちゃんが死んでから、俺の保護者は彩花の両親という事になっている。

最初是一緒に住む事を進められたが、彩花という年頃の娘が居る以上、それはよろしくないので丁寧に断った。

そして、掃除や炊事などの家事は自分で行い、洗濯だけは涼香お姉さんがやってくれるという今の体制ができた。

その理由は、学校など、普段家に居ないので洗濯物が安心して干せ

ない…

それを聞いた専業主婦の涼香お姉さんが、一緒に洗うついでだとかでお姉さんがやってあげるといふ事になった。まあ、彩花は複雑な顔をしてたけど…

「じゃ、私は帰るけど…折角のGWだし、和人ちゃんはデートとか行かないの？」

「あはは、行きたいのは山々なんですが…相手がいませんよ」

「あらあら…最近の子は見る目ないわね。なら、彩ちゃんなんてどう？」

「彩花に俺なんて釣り合いませんよ。あいつはあれで学校では結構モテるようですし…」

主に下級生の女子性徒にだが…

「ふふ、まあいいわ。じゃあね和人ちゃん。折角の休みなんだし、家でゴロゴロしないようにね」

微笑を浮かべ、涼香お姉さんは帰っていく…

「ふう…涼香お姉さんにも言われたし…腹も減ったし、今日の飯は外食にするかな」

一人で外食ってのも寂しいものであるが…

そう思いつつ、俺は青いロングTシャツにジーンズ。黒い薄手のジ

ヤケットを羽織って家を出た。

「ここか…」

ランチを食うべく、彷徨い歩き、一軒の喫茶店に辿り着いた。

洋風喫茶『ブロッサム』

料理も美味しく、ケーキも美味しい。そして店もいい雰囲気で人気の喫茶店：

だが、琢磨が言うにはバイトの女の子が可愛いらしい。

まあ、最後のは置いといて…。

料理を作る身としては、美味しい料理には興味がある。

ーカラン

小奇麗なカウベルの音が客の来店を告げ…

「いらっしやいま…ええー！？」

それとは対照的に、素っ頓狂なウエイトレスが応対した。

って…

「かかか、和人くん！」

そのウエイトレスは俺の目の前に座り、今年仲良くなり、名前で呼び合うまでの仲になった学園のアイドル。水野ひかり嬢だった。

えっと…

つつこんだ方がいいのだろうか…

「あはは、い、いらっしやいませ」

苦笑いを浮かべるひかり。うん、これはいい。問題は着ているユニホームである。

上半身は浴衣のような和服だが、したはフリフリのスカート。おまけにサイズがやや小さめの割烹着。

「……………恥ずかしくない？その格好？」

はっ！じ、地雷踏んだ…

「……………お客様、こちらにどうぞ」

営業スマイル。だが、内心絶対に笑っていない。なぜなら…

案内する際に足をさりげなく踏みやがった。

「…………ご注文がお決まりになりましたら御呼び下さい」

そういうとひかりは去って行ってしまった。その際にユニフォームのスカートが翻る。変だけど…似合っているとは思うし可愛いと思う。言い過ぎたかな？

仕方が無い。軽い冗談で機嫌取りを図るか…

「すいませーん…」

「はい、ただいま」

呼んだらすぐさまひかりがオーダーを聞きにやってきた

「えっと、塩焼きそばとアイスコーヒー…」

「申し訳ございません。当店は洋風喫茶なので塩焼きそばはございません」

笑顔だが…っ、冷たい…仮面を被っているように表情に変化無く笑顔で応対するひかり、知り合いのよしみでツツコミを期待したんだが…くそ、意地でもその仮面を剥ぎ取ってやる

「そうなの？じゃ、アイスコーヒーとナポリタンでいいや。あと、水野ひかりをテイクアウトで」

「――っ!？」

ボンっという感じで顔を赤くし俯くひかり。やりすぎた…慌ててフオローを入れる

「い、いや…バイト終わるまで待っててやろうと思ってな…。今の時間にいるんなら、夕方くらいには終わるんだろ？そしたら、ケーキでも奢るよ」

「……和人くん……うん。三時には終わるから待ってて！」

嬉しそうに戻っていくひかり

ふう、ようやく学園のアイドルが帰ってきたな…

「いらっしやいませ♪何名様ですか？」

活き活きと働くひかりを見ながら運ばれてきたパスタを啜る。男性陣が見惚れている。鼻屑目無しで可愛いと思うからまあ仕方が無いな。

だが、なんであんなに嬉しそうなんだ？ああ、ケーキを奢ってもらえるからか…

そしてきっちり時間まで働いたひかりが着替えてバックヤードから出てきた

「お待たせ〜ごめんね。待たせちゃって」

「お疲れさん。じゃ、好きなもん頼んでいいぜ」

俺の対面に座り、嬉々としてメニューと睨めっこをはじめるひかり。ようやく空しい一人の空間に花が咲いた

暫くして注文を決めたひかりが同僚を呼ぶ

「なんだ、ひかりじゃない…って、へえ〜バイトが終わったら彼氏

とデートってわけ？良いわね」

「ち、違うよ、へ、変な子といわないで友達、まだ友達なんだからね！」

「ほお、まだ、ねえ？」

「もう、いいから注文とってよ翠！」

からかわれてる…この人なら…

「えっと、イチゴショートとレモンティー。和人くんは何か頼む？」

「俺はラーメンセットと…」

「駅前の満腹ラーメンでの出前でいい？って、喫茶店の注文をして
ってば！」

「グッジョブ！！」

ナイスな対応。素晴らしい…ひかりの時に期待したツツコミが今、
返って来た。

「お主、なかなかやりますな…」

「あはは、あんたもね…で、注文は？」

「モンブランとコーヒーおかわり」

「毎度あり」

マニュアルをほぼ無視した応対。なかなかの猛者だ。

「…ねえ、みどりと仲良いいね」

ジト目で睨むひかり。

「そうか？別に普通だろ」

「どうだか」

何故睨む？どう対応すればいいんだ？

そう思案していると…

「お待たせ〜って、ひかり、なに剥れてんのよ」

「し、知らない！！」

助けが入った。よし、これで和ませよう

「おお〜待ってました。ほら、ひかりあ〜んして」

「へ？…ええ！？」

「あら、見せ付けてくれるじゃない」

俺は目の前に置かれた自分のモンブランをフォークで一口分に切ってひかりに差し出す。だが、困惑しているひかり

ちらちらと他の客の視線を感じる。正直、このまま食べてもらえな
きゃ…俺だけ馬鹿みたいじゃん。

仕方ない…

「……ふう…じゃ、お姉さん食べる？」

「食べる♪食べる♪あゝん」

「あっ!？」

口を開かないので俺はウエイトレスのお姉さんにケーキを食べさせ
た。流石にノリがいいこの人は躊躇なく口を開く。って、

自分でやつといてなんだが仕事なのがいいのだろうか。ひかりは
なんか叫んでるし

「美味しいゝさすがうちのケーキね♪」

「どら…うん、美味い…」

「でしょ、あ、コーヒーもちょっと頂戴」

「ブラックでいい？」

「ええ」

俺のコーヒーを手に取り、飲むお姉さん。というか客のコーヒーを
飲むウエイトレスって奇妙な光景…今までで初めて見た

「ふう〜ありがとう。あんた、面白いね。名前は？」

「氷室和人」

「私は瀬名翠。せな みどりみどりちゃんの良いわよ。私はカズツちって呼ぶね」

「いいよ。よろしくねみどりちゃん」

「じゃ、サボってたら店長に怒られちゃうからまたね」

そういうと颯爽とみどりちゃんは去っていった。さわやかな人だな。親友になれそうだ

「……あーん…」

「？」

「だから、あーん!!」

気づけば睨みながらそんな事をいい、口を開いているひかり…

「ほ、ほら…」

「美味しいね〜じゃ、和人くんもはい♪あーん…」

「いや、俺は恥ずかしいから…」あーん!!」…あ、あーん」

有無を言わさずひかりは自分のケーキを俺の口に突っ込む

「美味しい？」

「あ、ああ」

機嫌が直ったようで笑顔に戻るひかり。そして自分のケーキをぱくつき始めた

なので俺も残り少なくなった自分のケーキを食べ始めた。

暫くして、またみどりちゃんがやってきた。

「カズツち、はい、これ」

「なにこれ？」

渡されたのは紙切れで何か書いてある

「私の携帯の番号とメアド。暇だったら遊ぼうよ」

「いいよ。じゃ俺のも…」

俺は自分の携帯に電話番号を登録して、電話を掛ける

「とりあえず電話番号だけ。アドレスは後で送るから」

「オッケー。じゃね、カズツち」

ひらひらと仕事に戻っていくみどりちゃん。ちなみに登録名もみどりちゃんだ。そこで俺はあることに気がついた

「そういえば…ひかりの携帯番号知らないんだけど。教えてくれな
い？」

なんか睨んでいるひかりにそういう。新しいクラスになってから誰
とも電話番号を交換していなかったのだ

「え、そ、そうだったっけ？」

「ああ、沙耶香とか琴乃のも知らないや…まあ、後で聞くとして。
教えてくれないか？持ってるんだろ？」

「う、うん。これ…」

スツと電話番号とアドレスが書かれた可愛い名刺のようなものを財
布から出してきたひかり。それを見ながら俺はアドレスと電話番号
を登録し、リターンする

「それが俺のアドレスと電話番号だから。用が無くても遠慮なく掛
けて来てくれな」

「うん♪和人くんもどんどんかけてきてね♪」

嬉しそうに紅茶を飲むひかりを俺は可愛いと素直にそう思った

「本当にいいの？」

「ああ、そんな気にしなくても」

会計を済ませる。当初の宣言通り支払いは俺が済ませる…此の辺は男の甲斐性ってヤツだ。爺ちゃんに散々言われたからな…

—Side Hikari Mizuno

会計を済ませている和人くん…それを見ながら、彼の番号が入った携帯を弄ぶ…

「えへへ♪」

「なあに？嬉しそうじゃない」

「み、翠…」

ニヤリと嫌な笑みを浮かべた翠が近くにやって来て話しかけてきた

「いいわね、カズツち。カッコイイし、面白いし、優しそうだし…私も狙っちゃおっかな」

「み、翠！？」

「あはは、冗談だよ。ひかりのお気に入りをとoryしませんって。ま、たまにちょっと借りるけど、そのくらいは許してね」

ペロツと舌をだす翠。勘弁して欲しいよ…ライバルがこれ以上増えたら困る

「お待たせ。あ、みどりちゃん、またね」

「うん、カズツち。また明日」

「いや、そんなに頻繁には来れないって…」

「……………」

—ギュッ

店を出て、すぐ私は和人くんの腕を抓る。

「痛！？ ひかり？」

「なあに？」

「いや、なんで腕を抓ってるのかな？」

「べっつに〜」

だって、ムカムカするんだもん…

和人くんが女の子と楽しそうに話していると…

嫌だな…私、相当嫉妬深いよ

でも、私をこんな気持ちにさせた鈍感な彼は…

「…まあ、いいけどさ。さて、まだ時間があるし、どっか行こうか？」

「うん♪」

私に楽しさ、嬉しさと言う感情も与えてくれる…

今日はめいっぱい楽しもう。だって…今だけは…

「和人くん♪」

「ひ、ひかり!？」

私は彼の腕を取り、歩き出す。

彩花ちゃんも琴乃ちゃんも居ない…

そう…今だけは…私だけの和人くんなんだから

第14話：怒涛のGW 始まり（後書き）

更新完了。

さて、今回は霞ちゃんのお話は少しお休みして、あの子を出してみたい――

ひかり「最近、あまり出てなかったよね。私……」

あ、あはは。だから出したじゃん

ひかり「でも……翠の方が扱いが良かったよね？」

そんな事無いでしょ。和人くんにあーんして貰ったでしょ。憎いねく
ラヴラヴだねく

ひかり「え？そ、そうかな……」

さて、ひかりちゃんも誤魔化せたし、今回は此の辺で……感想お待ちしております。

第15話.. 手紙

—Side Kasumi Misora

「ふう…」

五月三日。よいよ明日だ…

ベットに倒れこみ、ため息をつく。

時計を見ると、もうじき日付が変わろうとしていた…

「帰ってきたんだ…」

もう二度と来ないだろうと、あの時…思った場所に。

今日の仕事を終え、明日のリハーサルに備えるために、一日早く春ヶ丘に帰ってきた。

ボクはホテルの一室でベットに寝転びながら、先輩の事を想う…

「先輩…」

本当なら今すぐ飛んでいきたい…でも、もう深夜。先輩は寝ているかもしれない

「会いたい…会いたいよ………」

明日の午前中はリハーサル。一発で終わらせて、先輩に会いに行く…
左手の小指を見つめながら、ボクは…一年前、日本に帰ってきたと
きの事を思い出す…

回想

「ただいま♪」

駅に着いたボクはまずそう言った。

ここはボクの原点で、ボクの帰るべき、場所がある…

アメリカでの手術は成功し、頑張ってリハビリをした。

その結果……

「~~~~♪」

ボクは鼻歌を歌いながら、右手でハンドバックを持ち、左手を振り、
元気良く歩く。向かう先は…大切な人が居るところ…

あれから三年…

桜が舞う春の季節にボクは此処に戻ってきた。約束を果たすために…
ボクの左腕は大分回復した。まだ、お箸とかはもてないけど、それ
でも感覚が戻り、動かせるようになっただけでも大進歩だ。

けど…

「あゝあ、でも偶にしか会えないな」

お父さんの仕事の都合で春ヶ丘ではなく都心に引っ越した。それほど、遠くないが毎日通うとなると電車代が馬鹿にならない。

でも贅沢は言えないと自分を嗜める。だって…やっと、会える距離にまで来たんだから

「楽しみだなゝまた一緒に歌いたいなゝ♪」

別れた日から先輩とは一切の連絡を取っていない。声を聞いたら会いたくなっちゃうから…

だから、ボクは先輩の事を考えながら歌を歌っていた…

でも、あの歌…『T o g e t h e r』は歌っていない。あれは、ボクと先輩の二人が揃わなきゃ歌えないから…

だから、ボクがいいなと思った歌を歌っていた。

だから先輩と会ってあの場所で、久しぶりにあの歌を歌う。その後で、約束の指切りして…手を繋いで帰ってきて…

そんな楽しい未来に思いを馳せ、懐かしい彼の家に向かう。そして、その淡い期待を抱いた未来は…

「…え？」

もろくも崩れ去っていった。

「……………」

ようやく見えた先輩の家。けど、ボクはそれ以上、足を進める気が無かった。だって家の前には…

「折角の休日だったのに…」

あの時より、大人びて凄くカッコよくなった先輩と…

「ほら、早くしないと遅刻しちゃうじゃない!!」

凄く綺麗な女の人が楽しそうに喋っていた

「…いや、なんでお前が練習行くのに、俺がチャリこぐんだ？」

「どうせ、春休みで暇でしょ! だったら、こぎなさい!!」

「横暴にもほどがあるぞ」。彩花、横暴」

「いいじゃない! 貸しにしといてよ!」

…先輩?

嫌…

「利息はトイチだからな。10分で一割。」

「どっちが横暴よ!! 大体、この場合の利息ってどうなるのよ!」

「100分：1時間と40分で、貸しが二倍になります。嫌ならいんですけどね。ほらほら、ぐずぐずしていると遅刻しちゃいますよ？」

「ぐ、ぐぐ…」

「…くつくく。ふう。十分からかったし、乗れよ彩花」

「あ、あんたねえ！」

「ほら、さっさと乗れ」

その女の人は誰？

ボクの前ではそんな表情、見せたこと無い…

「よっしゃ、飛ばすぜ…体感しろ！春ヶ丘の銀の閃光と呼ばれた俺のスピードを！振り落とされないようにご注意ください」

「わ、わわ。こ、こら！自転車で道路交通法を違反するような…つて、き、キヤー…！！」

先輩は、ボクが歩いてきた道とは反対方向に、振り返る事無く、猛スピードで遠ざかっていってしまった。

「……あ、あはは……」

何やってるんだろ…ボク。

一人で舞い上がって…先輩の家に押しかけようとしたりして…

「馬鹿みたい…」

先輩の傍にボクの居場所なんてない…

「う…ぐす…ほ、本当に…馬鹿みたい！」

歩いてきた道をボクは泣きながら走った。

先輩はボクの事なんて忘れてしまったんだろうか…

あの人は彼女なんだろうか…

ボクに会ったらどんな反応をするのだろうか…

分からない…

分からないよ…

今の先輩が…

泣きながら家に帰ってきて、そのままベットの上でひとしきり泣いた。

「…どうしよう……」

先輩には会いたい、でも、今の先輩はボクの知らない先輩。私のこ

となんて覚えてないかもしれない。

ボクと会ったとき、先輩はどんな反応をするのだろう…

「ボクの事、覚えてるのかな…」

それを確かめる方法…覚えているなら、先輩は笑って私を迎えてくれるはず…

「そうだ…あれが…」

ゴソゴソと財布を漁り、取り出したのは名詞。アメリカの路上で歌っているときに会った、日本の芸能プロダクションの人。

仕事でアメリカに居たその人は、私に名詞を渡してアイドルにならないかと言った。

その時は断ったんだけど…名詞だけは貰っていた。

「デビューしよう。アイドルになって、歌を歌って有名になれば…」

先輩が気づいてくれて、迎えに来てくれると思った。

「最悪のデビューの動機だね……」

先輩に気がついてもらえるように必死になって頑張った。でも…

先輩は来てくれなかった。

デビューしても、シングルを出しても、TVに出れるようになっても…

だから、ボクは…先輩の事を忘れようとしたんだ。

その時から、一人称を私に変えた。その方が、TV受けもいいと前から言われていたけど、先輩に気がついてもらうためにボクと言いつづけた。

けどもう、それもお終い。

先輩は完全に私の事なんて忘れてしまったんだから…

「そんなボクに…また、先輩の事を思い出させてくれた…玄ちゃん。ボク、このままじゃ…駄目だったんだよね」

弁護士さんに渡された…玄ちゃん。先輩のおじいちゃんの手紙だった。

ショックだった。知らなかった。もう、玄ちゃんが居ないなんて…

その時、脳裏に浮かんだのは先輩だった。

亡くなったのは私がアメリカに行った翌年だという。その時、先輩は…一人きりだったはず……

孤独という最も辛い経験を私と先輩は知っている。だが、その比ではないほどの孤独。だって、唯一の肉親が居なくなってしまったのだから…

その手紙には私が居なくなってから、先輩の元気がなくなったこと、毎晩のようにギターを弾いていた事、左手の小指をボーっと見つめて居た事など

先輩が私の事をずっと考えて居たという事、そしてその後は私に宛てた言葉がつづられており…

『霞ちゃん幸せになるんじゃない。辛い事を経験した霞ちゃんだからこそ、幸せになって欲しい。ワシは何時までもあの世から霞ちゃんを応援するからの』

と締めくくられていた。

「…げ…玄…ちゃん」

滲んで文字が見えなくなる。手紙にポタポタと雫が落ちる…

「どうして…どうしてもっと早く！これを持ってきてくれなかったんですか！？」

「…玄統斎さんに言われてたんです。美空さんには治療に専念して欲しい…この手紙を渡したらきつと、和人君の心配でそれどころでは無くなってしまおうと…」

「そ、それは…」

玄ちゃん…私の事をそこまで考えて…

「ですから、完治するまで渡さないように言われていたんです。私が調べた限りでは問題は無いようでしたので、今日、こうして遺書を渡しに来たんです」

「そうだったんですか…ありがとうございます」

私は大馬鹿だ…一人でいじけて、勝手に落ち込んで…自分の本当の気持ちを隠すなんて…

でも、玄ちゃんのお陰で…ようやく自分の本当の気持ちが分かった…勇気が出てきた

先輩はボクの事を忘れてなんて居なかったんだ…会いに行こう先輩に。

今度こそ…約束を果たしに

そんなボクの勇気を…

「美空さん、これを和人君に渡してあげてください。和人君に宛てた手紙です。あなたから渡して欲しいと玄統斎さんが仰っていました」

玄ちゃんは後押ししてくれた。

「……玄ちゃん…先輩…」

左手の小指から、手紙が入っているバックに視線を移す…

明日…仕事が終わったら真っ先に会いに行こう。

『霞ちゃん、もうちっと大きくなったら、ワシと添いとげんかの？』

『えっと…ごめんね玄ちゃん。ちよっと難しい…』

『むう…ワシよりやはり、和人の方が良いか…残念じゃの』

『せ、せせ、先輩は、関係ないよ!』

『まあ、いいじゃろ。霞ちゃんは孫のようなもんじゃからの。和人と結ばれれば、本当の孫になるだけじゃからの…』

『な、ななな、何言ってるの玄ちゃん!!』

ちよつと意地悪だけど優しい。ボクのおじいちゃん…

玄ちゃんとの思い出を振り返りながら、ボクは眠りについた…。

第15話.. 手紙（後書き）

更新完了！

霞「ねえ…先輩がボクに気がついてくれなかったのは忘れてたんじやなくて…」

TVを見ないからですね。

霞「そ、そんなくボクの努力って一体…」

無駄だったわけですね。あはは、ドンマイ！

霞「……喧嘩売ってるよね？」

さて、次回の予定は…

霞「誤魔化した…都合が悪くなると何時も何時も…」

ま、いいじゃないか。次回で会えるんだから

霞「ホント？」

予定だけどね。さて、今回は此の辺で…

霞「何時もご愛読ありがとうございます。次回もまた見てください」

では、感想をお待ちしております。

第16話..ただいま

—Side Kazuto Himuro

「ふう…こんなところかな」

テーブルを拭き終え、部屋を見回す。

5月4日

特に用事も無いので、昼間で惰眠を貪ったのち、ようやく起床

今は、昼食を食べて、ちよつと汚れが気になったので掃除を始め、先程終わらせたところだ。

潔癖症という訳でもないが、掃除は定期的にやっている。じゃないと、おせっかいなお隣さんが文句を言いながら、掃除をしだすからだ…

そのことには感謝なのだが、その前のお説教が堪える

「手と口が同時にでるんだもんな」

流石に、掃除機で殴られそうになった時は死を直感した…。まあ、からかったり、反抗したからなんだけどさ…

「余計なお世話だよ。ったく、彼女でもねえのに」

「…ふふふ…許さない……………殺す！殺してやる！！G u u u！！」

その時に言った事が、何やら、逆鱗に触れたらしく、その日の荒れようは凄いものだった…

「…さてっと…風呂でも入ろうかな」

当時の事を思い出したら寒気がしてきた…ので、忘却の彼方へと追いやり、風呂に入る事にした。

掃除で埃っぽくなることを想定し、あらかじめ風呂を沸かしておいた…準備万端である。

「ふう〜昼間から風呂…。最高の贅沢ですな〜」

家の風呂は檜の結構広い風呂で、自慢の一品だ。爺ちゃんが風呂好きだったからな…

そんな至福の時間を満喫していると…

ーピンポーン！

来客を告げる音が鳴った

「まったく、誰だよ」

一人暮らしはこういう時に困る。

至福の時を邪魔され、セールスとかだったら鳩尾に一発入れてやろうかと思いつながら、身体を拭き、ズボンを履いて、シャツを羽織る濡れた頭をタオルで拭きながら、玄関に向かい、扉を開け：

「…コホー…コホー…」

「……………」

―ボタン！

速攻で閉めた。

「な、なんなんだ？あれは…」

玄関の前にいたのは、帽子を被り、サングラスをし、この陽気な春の気温の中、トレンチコートを着て、極め付けにはマスクをし、顔が一切伺えない：

絵に書いた様な怪しい人…。結構希少な生物だとは思うが、好んで見たいとは思わない生き物である：

見なかったことにしようとか心に誓うが：

―ピピピピピピピ、ピンポーン！！

向こうは帰ってくれる気は無いらしい。それ何処か：

―ガチャ

入ってきやがった。やべ！鍵掛け忘れた！

こうなったら交戦するしかない！

そう思った矢先に：

「ひっどいなく閉めるなんて…感動のシーンが台無しだよ！」

「お、女の声！？」

変質者はどうやら女性らしい…。ん？どっかで聞いたことある声だ
……

「ああ！ちょっと待って、ボクこれ脱ぐの忘れてた！今の無し！撮り直し！」

カメラなんぞ何処にもないぞ

意味不明に、一方的に捲くし立てると不審者Aはそのまま出て行った。いや、Aって…BとかCまでいたら困るぞ。

自分で思ったことに突っ込んでいると：

―ガチャ

「先輩！」

「ん？」

不審者Aは可愛い女の子に羽化して返って来た。

マジマジと様子を見る…

「お、お前…まさか」

身長はやや低め、可愛らしく整った顔立ちには満面の笑顔を浮かべており、男ならナンパしたくなるほどの容姿だ。だが、一番の特徴は…

イルカの髪飾りがついた、白く長い髪…

「か、霞?…」

「うん♪ただいま先輩!」

美空霞が成長した姿で、笑顔を浮かべて目の前に立っていた。

「おかえり!まったく、待たせすぎだ。腕は治ったのか?治ってなかったらすぐ叩き出すからな!」

「わぷ!?!せ、先輩、ちょ!?!ち、近すぎるうう…」

嬉しさと懐かしさで思わず抱きしめる

俺の腕の中でもがいていた霞は、やがてくたくたと動かなくなる。そんなに強く抱きしめたつもりは無いんだが…

「霞?おいしい、霞ちゃん?」

風呂上りで若干火照っている和人。さらに、シャツを羽織っただけの上半身は肌が露になっており…

「…裸が…先輩で…」

そんな格好で抱きしめられ、あまりの刺激に霞はオーバーヒートしてしまった。

「先輩…大胆すぎるよ。あんな格好で抱きつくなんて…」

イヤン、イヤンと首を振る霞。

あの後、居間のソファーに霞を寝かせ、ひとまず服を着替えてコーヒーをセットし、戻ってきてみると霞は目を覚ましていた。

「左手…治ったんだな」

「うん、おかげ様でね」

先程から当たり前のように動く霞の左腕を見ながら、微笑む和人。

「よかったな…本当に…」

「先輩…」

その微笑に霞は見惚れる。

（先輩の微笑なんて…初めて見たけど…ポツ）

「？ 顔真っ赤だぞ？ 具合でも悪いのか？」

「な、なんでんなか！」

「そ、そうか…」

明らかにおかしいが、ここは流しておこう。

「ねえ、先輩。一つ聞いてもいい？」

「ん？」

コーヒーを渡して、霞の対面に座ると霞が切り出した

「ボクを見て、何か感じない？」

「大きくなったな？」

「そりゃそうだよ…。って、違うよ。もっとこう…驚かないの？」

「驚いたよ。あんな格好で唐突に尋ねてきてさ。いつからあんな変質者になったんだ？」

「…………ねえ、もう一つ別の事を聞くけど…S o r a って知ってる？」

「ああ、クラスメートがライブがどうこうって騒いでたな…最も俺

は興味無いけど…」

な、なんだ？ 若干、部屋の温度が下がったような…

「ふくん、興味無いの…」

「ま、まあな。S o r a って人の事よく知らないし、人ごみ嫌いだし。お前も知ってるだろ」

「それは知ってるよ。でさ、S o r a をTVとか雑誌とかで見たこと無いの？」

「？ やけにこだわるな…」

「いいから教えて」

「聞いた話だとデビューしたのが一年前らしいけど…S o r a の存在自体、つい最近知った。TVとか見ないから俺」

何故だろう…殺気を感じるのは…

彩花のようにストレートに来るんじゃないくて、なんつうかこう…じわりじわりと…

「ふ、ふふふ…あはははは…」

「か、霞？」

唐突に霞は狂ったように笑い出し…コーヒーを持ったまま立ち上がると俺の方に歩いてきて…

「…ボクの努力を…想いを…あの気持ちを…返せええ!!」

「な、何キレてんだよ!？」

突如暴れだし、ポカポカと俺を殴りはじめた。

しかし、普段喰らっている彩花の攻撃に比べたら、雲泥の差だ。

下手に避けて刺激することも無いな…

攻撃を受け続け、耐えることにした。

「はぁ、はぁ…」

ひとしきり殴り、若干冷静になった霞は、おもむろにテーブルの上にあったTVのリモコンを手に取り、TVをつけた。

「先輩、TV見て…」

「こんどはなんだ？」

情緒不安定な霞の行動に首を傾げつつも、言われたとおりにTVを見つめる。

「……………は？」

ナンデスト？

霞を見て、TVの画面を見る。うん、間違いない

TVには見知った…というか、今、目の前にいる少女がステージで衣装を纏い、歌を歌っている。

「知らなかった…」

「遅いよ！でもこれで分かってくれ…「お前にそっくりだな…。知り合いか？」…って！違うよ！これボクだよ！！」

「……………」

「……………」

互いに沈黙…今、凄いこと言ったよな？

「待て待て…なんだった？」

「だからこれはボク！ボクがSoraなんだよ！！」

霞がSora？芸能人？アイドル？いや、おかしいだろ！だって、霞が帰ってきたのは今日…とは言わないけど、今年に入ってからのはず…

で、Soraがデビューしたのが…確か、琢磨が去年だって言ってたよな…

どういふことだ？霞がSoraって事は、一年前に帰ってきてたって事か？

だったら、なんで今、会いに来たんだ？そもそも、なんでデビューなんて：

「訳が分からん…。ちゃんと説明してくれ」

「うん…あのね…」

考えても答えはでないので、本人に問う。そして、霞はポツポツと何があったのかを話した。

春ヶ丘に帰ってきたのは実は一年前で、彩花と話していた俺に疎外感を感じて話しかけられなかったこと…

俺に気づいてもらいたくて歌手としてデビューしたこと

連絡がまったく無くてもう忘れようとしたこと…

そんなときに、弁護士から爺ちゃんの手紙を渡され、勇気を出して俺に会いに来たこと…

一部始終を聞いて、俺は…

「痛い…」

霞に近寄り、頭を軽く小突いた。

「馬鹿…俺がお前の事を忘れるはず無いだろう…ずっと待ってたんだぞ」

「ホント？本当に忘れてなかったの？」

「あたりまえだろ！それに、彩花はお隣さんだ。お前とである前からの知り合いだな。まあ、あの頃は仲が悪かったからな…お前が知らなくても無理は無いか…」

隣同士にも関わらず殆ど話した事が無かった。霞と面識が無いのも無理は無い…

「本当なら一年前に会えたのに…回り道しやがって…おまけにデビユー？お前は一体何様のつもりだ？」

「なっ！？それを言うなら、先輩だって！人格が変わってるじゃない！ボクの前では鉄面皮で殆ど笑わなかったくせに！」

俺たちは互いに睨みあうが…

「ふ…ふふふ…」

「ふ…ふはは…」

やがて笑みに変わった。

久しぶりに会ったにも拘らず、心地よく、ずっと一緒にいたような言葉の応酬がとても楽しい…

俺を先輩と慕ってくれる妹の様な女の子。

美空霞が春ヶ丘に帰って来た。

第16話..ただいま（後書き）

更新！

毎度どうもです。久遠です。

霞「最近、忙しいみたいだね」

まあね〜就職活動シーズンですからね。もう、イヤダ…

和人「でも、小説はきっちり書いてもらうぞ」

彩花「そうね、きりきり書いてもらうわ」

鬼！悪魔！

霞「まあ、その辺にして…次回はどうなるの？」

予定では霞ちゃんパートラストだね。そろそろ終わらせないと

彩花「それと、いつもこのヘタレ作者に感想ありがと！」

和人「そうだな、感謝してもしきれないな。こんなのに感想書いてくれるなんてな…」

そこまで言いますかキミ達…

霞「次回もお楽しみに！」

無視かよ…

第17話：約束とプレゼント

—Side Kazuto Himro

「でな、チョークを投げる御堂先生が人間離れしててな。凄い速度で曲がったりするんだ」

「…それって、避ける先輩も十分人間離れしてると思うけど…」

俺達は、互いの空白の時間を埋めるかのように談笑をしていた。

俺は、学校的话题を中心に話し、霞は…

「でさ、そのプロデューサーがすごいい嫌な人でさ…」

「へえ、華やかだと思ってたけど、裏じゃ大変なんだな芸能人って」

芸能界の話題が中心で、あまり耳にする機会が無いので凄く新鮮だった

談笑をしていると、やがて日も暮れてきて…

「お腹空いた」

「飯食ってください？今日はお前の好きなもん作ってやるよ。何食いたい？」

「オムライス!!」

パァッと笑顔を浮かべ、即答する霞

「やっぱそれか…昔から好きだったからな」

というか、霞がいるときはオムライスオンリーだったような気がする…

「それは誤解だよ!別にオムライスが好物って訳じゃなくて、ボクは、先輩のオムライスが好物なの!」

「そんな大層なもんじゃないぞ」

「そんな事無い!あれはオムライス界に新風を巻き起こす!オムライスの革命だよ!!」

力説する霞

いや、オムライス界ってなんだよ…

まあ、確かに、俺のオムライスは普通のと一味違う。何故なら『和風オムライス』だからだ。

「まあ、いいけど。今からだと時間かかるぞ」

「待ってる!!」

「手伝うという発想は無いのかおのれは…」

俺は苦笑いしながら調理に取り掛かる。

和風オムライスの概要は、何のことは無い、チキンライスの変わりに炊き込みご飯、それを半熟卵で包み込み、ケチャップではなく醤油をかけるのだ。

そんな単純な料理だが…

「先輩じゃないとあの味付けはできないんだよ！お母さんじゃ駄目だったもの！！」

「さいですか…」

霞の声をBGMにし、ちゃっちゃと料理を済ませる。作業時間は少ないが、炊き上がりに時間が掛かるのだ。

「よしっと、これで後は炊き上がりを待つだけだ」

フライパンに卵を用意し、オムライスの準備は万端だ。その間に、サラダやスープなどを作る。

霞といえば、何が楽しいのかニコニコと俺が調理しているのを眺めていた。

「さあ、食いねえ！」

「いただきます！！」

出来上がったばかりのオムライスを嬉々として食べ始める霞

「美味し〜♪このトロトロの半熟卵と醤油が絶妙だよ〜」

どうやら、満足してもらえる出来だったようだ。俺も、一口食べてみる…うん、我ながら上手く出来た。

何時もなら、一人での夕食…。

こんなに美味して楽しい夕食は久しぶりだ…それに…

「…？ふぁに？」

「食べながら喋べるな。行儀悪いぞ」

前は力がなく、だらりとしていた左腕。だが今は、その左腕を動かして、おいしそうに食べている…

「懐かしいな…食べにくいからって俺が食べさせた事があったよな…」

「む、昔の話だよ！」

俺は、霞が普通にオムライスを食べるのが凄く嬉しかった。

夕食後、作っているときとは違い、今度は霞も片づけを手伝ってくれた。

「さてっと…じゃ、行くか…」

「うん♪」

考えることは同じらしい。片づけを終え、暫しの食休みをした後、俺達はあの場所…あの約束の場所へと向う事にした…

「ん〜いい風♪」

「そうだな…」

ベンチに座り、ギターのチューニングをしながら、風を感じる。夜風が心地いい…

「この景色を見るのも久しぶり…」

出かけにあの変装をしようとしたので必死に止め、霞には俺の帽子をかぶせている程度の変装をさせ、此処までやってきた。

いや、だって、あれじゃ補導されちゃうって…

今の霞は帽子を取って、髪を靡かせ、風を感じながら、見晴台から景色を眺めている。

「じゃ、始めるか…」

「うん♪」

俺は静に音を紡ぎ…

それに呼応するかのように、霞が歌い始める。

俺と霞のライブの始まりだ…

—Side Kasumi Misora

凄い…先輩…

歌手としてデビューした私は、当然、ボイストレーニングなど歌手として必要な訓練や練習をした。そのお陰で、あの頃よりも確実に歌は上手くなったと自分でも思う…

だが…先輩のギターもあの頃より格段に進歩していた。

プロのギタリストと殆ど差が無い…いや、むしろ…

先輩の方が上手い…

技術面では殆ど差が無いが、多分プロの人の方が少しだけ上手いと思う…けど、先輩の音は…私の歌…私の魅力を最大限にまで引き出してくれる。

それに…

月明かりに照らされる先輩の銀の髪は…とても幻想的で…

だ、駄目駄目。歌に集中しなきゃ…

思わず見惚れそうになり、若干音程がずれてしまった。うう〜プロ失格だよ…

—Side Kazuto Himuro

練習続けてて良かった…

霞の歌のレベルは流石に高く、あの頃の俺のギターじゃ釣り合わなかっただろう

爺ちゃんが死んだときは色々あって練習できなかったが、高校に入ってからギターは続けていた

高校一年の頃に何冊かギターの本や楽譜を買い、弾きに弾きまくっていた…。爺ちゃんの部屋が防音になっていたので彩花からの苦情なども無かったのが幸いだ…

だが…もう一つ、ひそかに練習し、霞と再開したときに驚かそうと思ったものがある。

「〜♪…ふう…久しぶりに歌ったけど…やっぱりいい曲…」

歌が終わり、俺はギターをケースにしまうと、感傷に浸っている霞に近づいて、出来る限りの笑みを浮かべて…

「初めて会ったときも…こんな月夜の日だったな…」

「うん…」

そつと、白く細い霞の左手を取り、小指を自分の小指と絡ませる…

「ちゃんと治ったな…」

「うん…」

あの頃、まったく反応しなかった霞の左手からはきちんと反応が返ってきて…

それが約束が果たされた何よりの証

そして…ゆつくりと…

「「……指きった」」

小指を離す…

絶対に護られる指きり…

だが…俺は……

一度…その約束を破りかけたことがある…

「先輩？」

「……………」

「先輩!!」

「…んあ？あ、ああ、悪い何だ？」

「大丈夫？なんかずっとボーっとしてたけど…」

心配そうに俺の顔を覗き込む霞。俺は苦笑いをし、霞の頭を撫でた

「先輩？どうしたの？本当に変だよ？い、嫌じゃ無いんだけど…」

霞には黙ってしよう…本来なら話すのが筋なのだが…話したらこいつはきつと責任を感じるだろうから…

「さてっと…することもやったし、行くか」

手を話し、場を取り繕うかのように言う

「なっ！？先輩の馬鹿！！もっと余韻に浸らせてくれてもいいじゃない！」

ぷうっと膨れる霞のほっぺを指でつつく

「あはは、実はなもう一箇所、行くところがあるんだよ。俺からお前にプレゼントがあるんだ」

「プレゼント？」

困惑する霞の手を引き、俺は歩き出した。

「ね、ねえ、やっぱまずいって…」

「へーき、へーき。ほら、掴まれ」

塀の上に飛び乗り、霞に手を伸ばす。

「…その跳躍…：やっぱり、玄ちゃんの孫だね」

「おいおい、でこぴんで熊を昏倒させた武勇伝を持つ変態と一緒にしないでくれ」

本人は指先に気を集中させたとか意味不明の事を言っていたが、正直、あの爺さんは人間じゃない…

霞はといえばブツクサ言いながら俺の手を掴み、一気に引き上げる。

そして、俺達は塀の上に立った。

どこの塀かと言うと…

「これ…犯罪だよ。つかまったらスキャンダルだよ…」

「大丈夫だろ。それにここの校長なら許してくれるぜ。なんせ『愛こそ全て!』だからな。デートしてましたとか言っとけば」

光琳高校。つまりは俺の学校の塀である。

門より塀の方が、上にたったときに安定しているので不法侵入には塀を登るのが一番なのだ…

塀から飛び降り、霞が続いて飛び降りるのを下で抱きとめる。

「慣れてるね…」

「そうだな。結構しょっちゅう進入してるからな」

「セキュリティー大丈夫なの？」

「ああ、職員室以外なら鍵もかかってないぜ。取られて困るようなものは無いらしいし、夜の学校は逢引スポットの一つだそうだから」

啞然とする霞。まあ、無理も無い、あの校長の破天荒振りといったら：教頭先生の心中をお察しいたします。

そんな話をしながら、堂々と玄関から学校に侵入し、上履きを履く。霞には適当に彩花辺りの上履きを出してやった。

そして、やってきたのは：

「音楽室？」

「ああ、学校の七不思議スポットの一つ音楽室だ」

困惑する霞を音楽室に入れ、俺はピアノの前に座る。

「え？先輩、ピアノ弾けるの？」

「まあな…。お前が行った後、爺ちゃんから教わった。お前に似合う楽器は、ギターよりもピアノじゃないかって爺ちゃんが言ってな」

その時は中学の音楽室に進入して練習した。当然、光琳のようにセキユリティーが甘くなく、ちゃんと鍵がかかっていたのだが、爺ちゃんがあっさりと開けて簡単に進入することが出来た。

高校に入ってから、週に二回は此处で弾いている。

「プレゼントって…」

「ああ、一曲だけじゃ寂しいからな…お前と会ったときに聞かせようとおもって新しい曲を作ったんだ。曲名は無い…詩とタイトルは霞が書いてくれ」

爺ちゃん直伝のピアノ…

俺から霞への贈り物の曲を奏でる

Side Kasumi Misora

窓からの月明かりが先輩とピアノを照らす

ピアノを弾いている先輩…曲も凄く良くて…

幻想的だった…

「ふう…どうだった？爺ちゃん以外にピアノを聞かせたこと無かったから、あんまり腕には自信が無いんだけどさ…」

「え？他の人に聞かせたこと無いの？」

「ああ。お前と爺ちゃん以外に聞かせるつもりも無かったしな。これはお前の為に作った曲だから」

「――っ!？」

や、ヤバイ…すごく嬉しい。グラッときた…

「? どした? 顔真っ赤だぞ? ライブだったのに体調悪いのか?」

「な、なんでもないひょ!？」

うう。ひよって言っちゃったよ。大体、誰のせいになっちゃったと…

「よく分からないけど、とりあえず帰ったほうがいいな。明日に備えるためにも。送ってってやるよ」

「うん…」

うう。この鈍感…先輩はもう少し自分の魅力に気がついたほうがいいよ…だいたい、あのシチュエーションであんな事言われれば…

そんな私の気持ちを知る事無く、先輩は私の手を引き歩き出した。

「な!？」

「ん? どした?」

「な、なんでもない…」

さらっと手を繋ぐし…。流石玄ちゃんの孫…女の人にモテる要素が目白押しだ…

決定的に違うのは、先輩は鈍感で、こういうことを天然でやってるから玄ちゃんよりタチが悪い…

赤くなった顔を誤魔化すように私は口を開いた

「ね、ねえ！明日のライブさ、見にきてね」

「遠慮しとく」

なっ！？躊躇なく一蹴された！

「な、なんで！？ボクの晴れ舞台なのに…」

「いや、人ごみ嫌いだし」

……それは知ってたけどさ…

「それにさ…」

先輩は私に微笑んで話を続け…

「お前の歌は今日聞いたからな。これ以上の贅沢は無いだろ…霞の独占ライブだぜ？」

その言葉に、ムッとなった私の感情は一気に吹き飛んだ

「そっか…」

「ああ、だから明日はゆっくり家で寝てるよ。うるさい奴もいないし、憎眠を貪る。お前は頑張れ、夢の中で応援してるからさ」

「その応援は微妙に嬉しくないよ」

それに、元気はもう先輩から分けてもらったし…

美空霞の明日のライブに向けての充電は完璧なんだから

明日は何時もより気持ちよく歌える気がした。

第17話：約束とプレゼント（後書き）

更新完了！

和人「ようやく、霞の話が一段落したな」

霞「あれだよな？最初の設定だとボクは左腕の麻痺障害じゃなかったんだよな？」

うん。当初は霞ちゃんは盲目で絵が書けなくなったっていう感じの設定だった。その設定で書いては見たんだけどさ…

和人「書けたはいいが、続きが思いつかず没にしたんだよな」

…うん。これで書いた話は葛藤とかは無く、アイドルの霞ちゃんがいきなり、学校に転校してきたって感じのお話し

霞「そ、それでどうなったの？」

和人「昼を食った俺に、御堂先生の放送が入って校長室に行って、そこで対面。回想って感じの流れ…」

でもさ、盲目だから和人くんの顔を知らないわけさゝで、回想が書きにくかったから没にしましたゝ

霞「むむうゝそんな裏話があったなんて…」

ま、それは置いといて、お疲れ様。霞ちゃんは当分出番はないと思う予定だから、ゆっくり休んでね

霞「うん…って、待てえ！納得できない！」

あっはっは、では次回もまたこのチャンネルにアクセス！。いつも
ご愛読ありがとう！ではまた！！

霞「爽やかに誤魔化すなカラーーーー！！」

和人（な、なんか…彩花に似てきてるぞ霞…会った事ないのに）

第18話：中間テストの期間に入ります

――Side Kazuto Himuro

「Soraちゃん最高!!」

「……朝から何度目だよ。まったく飯くらい大人しく食え」

GWも明け、いつも通りの学校生活。

俺はといえば、合宿で気合十分。妙に、テンションが高い彩花にたたき起こされて今日は遅刻せずに登校。

まあ、二限目まで机に突っ伏して爆睡してたが：

そんなこんなで昼休み。今日は、お馴染みの男子メンバーだけで屋上に集まり、昼食を取っているのだが、これまた妙にテンションが高い琢磨がウザいことこの上ない：

「だってさゝ凄かったんだぜライブ。Soraちゃんも何時もより笑顔だしさ：それに！俺に向かって微笑んだんだぜ!？」

朝からこんな調子だし：はあゝ

「…妄想も此処までくると大したもんだな」

「もう病気だな…」

「僕の情報網でももう琢磨を治せる医者はいつかからなかったよ」

冬至とハジも疲れたようにため息を吐いている。

「お前ら！人をそんな哀れむような目で見るな！！」

「はいはい。それは分かったけど。琢磨、もうそろそろ中間テストだけどいいの？」

「うぐっ！大丈夫さ…多分、補習は免れると思…いたいぜ…」

「たとえば、補習を免れたとしても、クラスの皆からフクロにされなきゃいいがな…」

俺の言葉にビクツと震え上がる。

光琳高校の一学期しよっぱなの中間テストは一筋縄ではいかない。

というのも、この中間テストで今年一年の高校生活がどうなるかを大きく左右するからだ。

この中間テストではクラス平均ごとに順位が決められ、上位者の点数と共に廊下に張り出される。そして、一位のクラスから200P、150、100、というようなポイントが貰える。

このポイントは来月に行われる球技大会のポイントに加算される。これは文武両道の光琳が球技大会で文の部分を考慮したシステムになっている。

さて…ここで重要なのが球技大会についてである。

この球技大会は順位によって賞金が出るのだ

だが、賞金といってもこれはクラスごとに貰えるもので、まあ言うてしまえばクラス予算である。

必要最低限の予算は各クラスごとに用意してあるのだが、+aとしてこの賞金が入ることにより、文化祭で他クラスよりも凝った出し物や派手な打ち上げが可能となるのだ。

さらに、今後の行事の際に特別優遇権が手に入る。

特別優遇権とは文化祭の特別教室が優先的に利用できるという権利である。

その一方で、最下位のクラスは行事などの雑用が義務付けられてしまう…

このシステムは三年になればなるほど、皆、必死になる。最後の学校生活を派手に彩るためだろう…だが、可哀想なのは一年生である。

何も知らない一年生はここで初めて洗礼を受け、来年から必死で勝ちにくるようになるのだ。まあ、皆通った道だから、我慢してくれ。

長々と語ったが、これで中間テストの重要性が分かって貰えたと思う。

「今年は彩花も居るからなく暴走したら手をつけられねーぞ…」

「御堂先生が担任でもあるからな…ご愁傷様、琢磨」

「ま、まだ決まった訳じゃねー」

そうそう：言い忘れていたが、実は優勝したクラスの担任にはボーナスUPという特典があるのだ。だからこそ、先生とクラス一丸となれる。

俺としては動機がすげえ不順だと感じるが：まあ、盛り上がるからいいか

「でもお前のクラス、北條さん居るんだろ？和人も居るし、かなり有利だよな」

「沙耶香はともかく、俺は別にな：普通だろ」

「模試で全国トップとった人間を普通とは呼ばないよ：」

「な、なにいいいい！？マジかそれ！だって、こいつテスト結果だと上位には居ないじゃないか！」

過剰なまでに琢磨が反応する。遅刻仲間だから俺も危険区域人物だと思っていたのだろう：ちょっと心外だ

「僕のデータによるとね。和君の3学期の期末テスト結果の一部なんだけど英語、数学、科学は100点満点なんだ。でも他の教科の平均が65点」

な、なんで、ハジが俺の答案を知っているんだ？彩花にすら見せないようにしてるってのに：

だって、見せたら確実に怒られるし：

「俺も、それは疑問に思ってたんだ…。その3教科が得意って訳じゃないよな？」

「うん、二学期の結果だと、英語が50点、数学が65点、科学が74点だから、それは違うんだ。で、詳しく調べただけ…」

「な、なんだよ！もったいぶるなよハジ！」

琢磨がハジに続きをほだす。ハジは俺に言ってもいい？と目で訴えてくる。

「彩花の耳に入らなきゃ構わない」

「うん、じゃあ、言うよ。和君は…テスト中に寝ちゃうんだよ…」

「「……………は？」」

ハジの突拍子もないことに二人の目が点になる。

「ね、寝てるって…テストなのにか？」

「ま、マジかよ氷室」

「あっはっは、解いてるうちにこてんと意識が落ちるんだ。あのみんなのカリカリっていう筆音と文字、数字の羅列が俺を眠りにいざなう。でも頑張って半分くらいは解いてるんだぞ」

彩花に知られたら『アホかーーーーー！！』って殴られるだろうな。
ああ、怖い…

「じ、じゃ、模試の時はどうだったんだ？朝早かったし眠かったんじゃない…」

「ああ、あの日は前日惰眠を貪りまくってだいたい20時間くらい寝てたからな。流石に眠くはならなかったから」

大体、眠かったら模試なんぞ受けに行かないしな…

「お、お前…成績とか気にしないのか？」

「そんなに気にはしないな。俺の場合、成績が云々と言うより、素行が悪いので有名だからな。成績が多少良くてもそんなに良いイメージに働かないと思うし、そもそも、あんな紙切れで人の価値を図られてたまるか」

「…言ってることは最もみたいな感じだが、それだと、現在の教育全てを否定してるぞ」

「別に、否定してるわけじゃない。ただ、俺とは合わないという意味を自分なりに述べただけだ。感受性は人それぞれ違うからな…。そういう教育システムが受け入れられているということはそれが普通なんだろうな。俺の考え方が人とは違うってだけだ」

良い成績を取るのは、将来のため、自分の力を誇示したいがためとか色々あるだろう…だが、俺には特に理由が無い…

自分の力を誇示したいとは思わないし、将来とかは別に考えない…

今日、一日一日を楽しく生きられればそれでいい。未来のこととか

考えても人間なんて何時死ぬか分からない。

だったら、極端な話したが、何時死んでもいいように、楽しく生きるだけさ。

人それぞれ考え方は違う。これが俺の考え方。

「でもよ…そうは言ってもお前、頭いいじゃん。言ってること矛盾しているだろ！」

納得いかないという風に琢磨が聞いてきた

「俺は昔からは物覚えは良くてな…集中している状態で見たり、聞いたりした事は一回で覚えられるんだ。中学のときに、学校がつまらなくてすることが無かったから、ずっと授業中とか参考書とか教科書読んでたから…その時に覚えたことがテストに役に立ってるんだ」

中学の範囲はすぐに読んでしまったから、高校の範囲まで完全に覚えた。けど、今、一番役にたっているのは、料理のレシピだ。

三分クッキングとかでも一回で覚えられるし、料理番組でもプロの技を記憶するようにしてるから、レシピは豊富だ。

生きる上で食事は大切だ。より安く、美味しく、量が多い物を作る事を目標としてる。

「んなのってありかよ…」

「…秀才と天才の違いか……」

「一文字？」

琢磨が憮然と言い捨てると、ハジがそう呟く。それに関して冬至が問いかける

「ねえ、時雨君、秀才と天才って何が違うか分かるかい？」

「？ 秀才より優れているのが天才なんじゃないのか？」

「間違っていないけど…じゃさ、秀才と天才の線引きって何処からすると思う？」

「え？ うーん…すまん。分からない」

「これは、僕の持論なんだけど。秀才っていうのは、物事への理解度が早く、努力して普通の人より高い位置に居る人だと思うんだ。でも、天才は物事を理解する力がそれ以上で、努力しなくても同じ高みに到達できる人だと思うんだ。だから、世間一般で天才って呼ばれてるのは実は秀才で、天才って言うのはその中でもほんの一握りの人間だと思うんだ」

「つまり…和人は天才って事か？」

「うん、僕の考え方ならならね」

「よ、よせやい！ 照れるじゃねーか！！んな大層なもんじゃねーって！ あ、もうすぐ昼休み終わるし、俺は先に戻ってるからな！」

俺は逃げるように、屋上を後にする。体が何かムズ痒かった…

「さて、第何回目か忘れたけど…とにかく、お馬鹿な彩花救済のお勉強会を開始しまーす」

「ば、馬鹿とは何よ！ちよつと成績悪いだけじゃない！！」

「はいはい、無駄口叩かずやったやった。それにさ、馬鹿っていうのは成績が悪いからじゃなくて、成績悪いのに勉強とか一人じゃやろうとしないから馬鹿って言ってるんだよ」

「ううゝ勉強嫌いなんだもん」

「そりゃ、好きな奴は沙耶香くらいだろ」

軽口を叩きつつ、数学の教科書に向かっていく彩花。

テストが近くなり、恒例の『彩花を救済するための勉強会IN氷室家』を開いている。

剣道一直線のこの子は勉強嫌いという事もあいまって、成績があんまりよろしくない。そんな彩花に勉強を教えて、半ば強制に勉強させ赤点を避けさせてあげているのだ。

ああ、なんて優しいんだろ俺ってば…

「はい、そこ間違いいね。一回目は許すけど、解説した直後に間違えたから夕飯一品減らすからな。さうて、ご飯を食べられるかな」

「？」

「お、鬼！鬼畜！！悪魔！！」

「はっはっは、ちなみに制限時間も設けたから無駄口叩く前にやんなさい」

日ごろの惰眠を邪魔され、たたき起こされている恨みを此处で一挙に発散している感はいなめないのだが…結果的に補習を避けられるのだから問題ナッシング！

――Side Ayaka Tatibana

和人との勉強会。

勉強は嫌いだ、それに和人は意地悪をする…。だけど、この勉強会は嫌いじゃなかった…

本質的に優しい和人は丁寧に教えてくれるし。この意地悪は私にやる気を促すために言ってること…

「その公式間違ってるぞ。まったく…デザートも半分に減らそうかな…」

……だと思いたいわね…

だけど…

「うん、此处は正解だね。よくやりました」

「子供じゃないんだから！頭撫でないでよ！！馬鹿にしてるでしょ！？」

「そんなことありまちなよ」

「こ、殺す！終わったら覚えてなさいよ！！」

この、なでなでが凄く嬉しく癖になる…

口では文句を言うが、実際は撫でももらいたくて頑張っているようなものだ……

これが、俗に言うアメと鞭なのだろうか…だとしたら、効果絶大だと身を持って知った…

今後の剣道部の指導で使ってみようかと考え始める…あ、いけない、集中しなきゃ…

「ん、一通り教えたし、あとは反復で同じやり方で出来る問題をやってなさい。俺は夕食を作るからな。出来上がるまでには余裕で終わるだろうから、早く終わったら休んでいいぞ」

「あ…和人…」

それだけ、告げて和人は台所に行ってしまった。うう…もつと撫でられたかったかな…

「でも、やるしかないか…」

折角教えてくれてるんだし、終わらなかつたなんていったら、夕飯が食べられなくなるから

私は夕飯ができるまでに、計算式との格闘に没頭していった。

第18話：中間テストの期間に入ります（後書き）

更新完了！

霞「今回の話しはちょっと説明ばかりだったね。退屈」

ううゝごめんよゝゝ

霞「べつつにゝ私に謝れてもねゝ出番ないしねゝ当分!!」

ゝ怒ってる、怒ってるよ

霞「で、その分、あとがきに出してくれるんだから感謝しなきゃだよね」

ゝネガティブゝ暗いよ霞ちゃん……

霞「先輩はライブ見に来てくれないしさゝそりゃ、人ごみは嫌いだっていうのは分かってるよ。けどさゝゝそれに、最近になってモテモテみたいだしさ。昔は……」

なんか、ぶつぶつ言い出しちゃったしゝ。ま、まあ、今回は此の辺で、ではまた次回にお会いいたしましょう

霞「ゝなによ。昔はさ、みんなして冷たい目で見てたくせに、掌返してさ」

あ、あははゝ感想いつもありがとうございます。

第19話：カレーと琢磨と勉強会

――Side Ayaka Tatibana

テスト前に恒例となった勉強会。

和人と二人きりの空間で勉強できる…テストも勉強も嫌いだけど、このイベントはちょっと楽しみだった。

だけど…

「……………」

右を見る

「お邪魔しま〜す♪」

「お邪魔する」

「お邪魔いたします。和人様」

ニコニコと笑顔を浮かべているひかりと、若干表情が乏しいけど、口元はニヤツとしている琴乃。天使のような微笑を浮かべる華蓮。

名前で呼び合う仲にまでなった私の女友達で、ライバルの面々

左を見る

「お邪魔します」

「ううゝ感激だぜ！美女達に囲まれての勉強会！！」

「いや、琢磨に脈は無いから諦めといたほうがいいよ」

冬至くんを筆頭に、常盤、一文字くんなどの和人と仲がいい男子生徒たち。

「沙耶香は用事があるからちょっと遅れるってさ。ま、上がれよ。居間はこっちだから」

家主である和人が皆を案内する

「はあ…」

ため息を吐く。二人っきりの勉強会が音も無く崩れ去っていく…

どうしてこうなっちゃったんだろう…

事の始まりはお昼休みの事である。

「で、真面目なところさ、平均点上げていかないと、今年はまずいかも…僕のデータによるとねA組に文武両道の生徒達が集まっているらしいんだ。しっかり対策を練らないといけない」

「そうだね、勉強しないと：頭じゃ分かってるんだけどさ、私って危機感を感じないと勉強に集中できないんだ。テスト前日とか二日前とかじゃないと：一人で勉強するとどうしても誘惑に負けちゃう」

可愛らしいお弁当をつつきながらひかりが言う。でも、ひかりって成績は悪くなかったはず：

「私も：正直、勉学には自信が無いな：」

転校してきた琴乃も、球技大会と中間テストの因果関係を誰かから聞いたのだろう。深刻そうな顔をしている。

「じゃ：、琴乃、今日から俺の家で勉強するか？教えてやるけど」

そう！これだ！和人のこの言葉が、二人の勉強会崩壊の始まりになったのよ！！

「：いいのか？和も勉強しなきゃいけないのに：」

「どっちみち、試験前は彩花にマンツーマンで勉強教えてるからな。一人増えたところで別に負担は掛からないから。」

「ね、ねえ：私もいいかな？」

「あ、俺も」

和人の言葉に、皆が賛成して、めでたくみんなで勉強会となった。

「はあ」

「彩花？」

ため息を吐く私の姿に気がついた和人が怪訝そうな顔をするが、やがて、何かを思いついた様な顔をし

「ああ、心配するな。ちゃんとお前の勉強は見るから」

そういう残し、居間に入っていく。

少しだけ、気分が晴れた……

——Side Kazuto Himuro

皆で勉強会。かつて、俺の家に此処まで人が集まったことは無い……まあ、だからなんだ？と問われてもオチとかはないんだけどさ……

「初めて入ったけど……綺麗にしてるんだね」

「私は幼い頃一度だけ、ここに來た事があるが……懐かしいな」

「ひかりに琴乃、お前ら何しに此処に來たか分かってるか？言っとくが、俺んちで勉強会を開くからには俺流のルールに従って貰う。もちろん、残りの君たちもだ」

「る、ルール？」

「ああ、だが、そう大したもんじゃない。ハジ、頼んどいた物はあるか？」

「うん」

スツと差し出されたプリントの束を受け取り、内容をチェック。うん、流石：いい仕事をする

「さて、このプリントは俺が此の辺がでるんじゃないかね？っていうテスト範囲からの問題をまとめたもんだ。とりあえず、数学と英語な。まず、一通りやってみてくれ。終わったらその後採点する。そこで間違った問題を俺が解説したり、自分で調べるなりしてやり方とかを確認する。まあ、その頃になれば沙耶香も来てるだろうから、一緒に解説役をしてもらうつもりだ。それで、その後で間違った問題をやり直してもらう。ただし、答えの暗記を防ぐためにもう一枚、数字や英文だけ変えてある同じような問題を渡すから、そっちはで間違った問だけやってくれ」

一人一人にプリントを配る。

「皆が問題を解いてる間に、俺は夕飯の準備をしてるからな。そんなで、再テストの問題で解説したのにまた間違えちゃった奴にはペナルティーを与える。これが、ルールだ」

「ペ、ペナルティー？」

「ああ、そうたいしたもんじゃないぞ。ただ、間違え一問ごとに夕飯の品が一品減るだけだ」

「な、なんだって！？おい！そんなの俺が格段に不利じゃねーか！

「!!」

「知るか！日ごろ勉強しないでナンパばかりしてるお前が悪い。あ、そうそう、一つ言っとくけどな。今日は人数が多いからカレーにしようと思ってるんだ。あとスープとサラダ、デザートってどこか：分かるかな拓馬君？ライフポイントは4。つまり、四問間違えたら：夕飯に何も食べられない：」

この衝撃のルール内容に琢磨の顔色が青くなる。

「ひ、人でなし！横暴だぞ！！氷室！！！」

「諦めなさい：そして慣れるのよ。私はこうやって何時も耐えてきた：」

「：苦労してたんだな。橘」

「はいはい、弱者で傷を舐めあわない！あ、一つだけ教えとくけど、没収される品は自分で選べるから、3問間違えならカレーだけは食えるぞ。今日の夕飯時、ヒモジイ思いをするか、リッチな会食をするかは、お前次第だ：と、言うわけで始め」

俺の開始の合図に、問題に取り組んでいく。うーん、テスト本番並み、いやそれ以上の真剣な空気だ。

やっぱ、食べ物がかかっていると必死になるな

そんな事を思いつつ、野菜の下ごしらえをはじめのだった。

カレーのスパイシーな香りが食欲を引き立てる…

そんな中、後からやってきた沙耶香と共にみんなの再テストを採点する…結果は…

「うん、冬至、華蓮、ハジ……そして、彩花は全部正解だ」

「わ、私も？ほ、本当に？」

「ああ、昨日俺が教えたこともちゃんと出来てたみたいだし…えらいぞ。ほくら、いい子いい子」

いつも通り、子供にしてやるように頭を撫で撫でしてやる

「ち、ちょっと！皆見てるじゃない！！」

「俺は頑張った子は褒めるんだ」

「では、私も…」

「そうだな、華蓮も冬至もハジもよく出来ましたっ」と

華蓮たちにも順番に頭を撫でる…

「ふふ…」

「な、なんか…恥ずかしいけど…」

「ちょっと嬉しいね…」

満更でも無さそうな三人。うむ、やはり褒めることは大事だ

「さてっと、次は惜しくも一問だけ間違っちゃった子だ。ひかり…惜しかったな」

「うう…な、撫で撫では？」

「無いな。次に頑張りなさい。ちなみに一品没収だからな。さて、次は2問間違えた。琴乃、飯食い終わったらみっちり扱うからな」

「…すまん…：よろしくお願いする」

「二品没収だが、カレーは食えるだろう。みっちり食べとけよ。さて、最後にはぼ全滅。理解度ゼロのアホたれ。もう、名前を呼ぶことすら不快になる…」

「ひ、ひでえ…：あからさまに態度が違う…：…」

琢磨が未練がましく、言うがそれにしたって再テストでほぼ全滅と酷すぎる…

「…：常盤さん、よく三年生になりましたわね」

「ほ、北條お前まで…」

「いや、むしろ高校生になれたのが不思議だ。なんだこの『I i s h a v e d o g』ってのは…！答えがまるで違う上に！I i n a m d a r o u g a ! いや、そもそも！b e 動詞と一般動詞を同時に使うな…！基本だぞ！中学で何習ってきた…！」

「え？ そうなの？」

ふざけてやってるのかと思ったが、どうやらマジらしい…というか、さっきの解説で沙耶香が付きっ切りで教えていたはずだけど…

「もう…疲れましたわ…はぁ」

「……沙耶香、よく頑張った。ほら、よしよし、元気だせ」

心底つかれきっている沙耶香の頭をポンポンと撫でて励ます。

「和人さん…私…私…何の力も…無力ですわ…」

「いや、お前のせいじゃない。此処まで規格外だと予想できなかった俺の罪だ…すまなかったな。こんなの押し付けたりして…」

「お、お前ら…すごい悲壮感だな…正直、すっごく俺に失礼だぞ。あ、こら！ 憐れみの目で見ろな！！」

俺と沙耶香の脳裏には御堂先生のチョーク地獄とクラスのフクロに晒されて生き絶える琢磨が鮮明に映し出されたことだろう…

「な、なんだよ。失礼だな。俺にだって得意な科目があるなぞ。ほ、保険体育とか…」

「……中間に保健体育はありませんわよ。それに、最低ですわね…」

琢磨に女性陣から冷たい視線が突き刺さっている。

「なあ…冬至にハジ。確かさ、中間テストを入院で受けられない場合、平均の算出の際に加算されないんだよな」

「…そうだね。ここで殺つといたほうがいいかもね…」

「骨折くらいなら球技大会までには間に合うだろう」

「間に合わねーよ!!」ってか、お前ら本気で止めてくれ!! 謝るから、努力するから!! だから、お慈悲をー!ー!!」

土下座する勢いで懇願する琢磨。ってか、もう土下座してやがる

「……いいか、これはお前の為に言ってるんだぞ。琢磨」

「へ? ど、どういうことだよ?」

「こういうことだ。琢磨、此处で俺たちにボコられれば、確かに痛い思いをするだろう。だが、テストは回避できる。いや、クラスに加算されなくなる。そうなれば、お前がいかに悪い点をとろうが、構わない。お前が困るだけだ。だが、もしも…普通に試験を受けて、クラスの平均点を著しく下げたとすれば…」

「す、すれば? お、俺はどうなるんだ?」

「はあ…鈍い奴だな…。御堂先生や他のクラスメイトにボコボコにされるに決まっているじゃないか」

俺の言葉に、ようやく立場を弁えたのだろう。ガタガタと震えだす琢磨。そりゃそうだ、御堂先生に彩花。俺でもこの二人を同時に相手にするとなると…

逃避の二文字以外が脳裏に浮かばないな。

「ど、どうしよ…どうしよう！た、助けてくれ！！氷室！！」

「無理だ！すまん。力に慣れなくて…」

「諦めんのはええよ！！な、なあ、本当は何か手段があるんだろ！？」

縫るような目で見る琢磨。だが、そう言われてもな…

「いいか、俺から言えることは一つだけだ…」

「な、なんだよ？」

「頭と首を護れ。それでまあ、最悪の事態は何とかなるだろう。もしくは、自分から意識を飛ばすという手もあるぞ。ま、起きたときに地獄だな」

「殺られるの前提かよ！！」

「なんなら、俺が最初の一撃で意識を刈り取ってやるけど？ただ、その場合、その後目覚めるかどうかは保障しかねるが…」

「んなこと頼むか！！」

「そうか…なら、頑張るんだな。さて、じゃ、俺らは飯にするか。ああ、琢磨、お前の飯は無いからな。没収だ」

「お、鬼だこいつ…」

未練がましく見ている負け犬を無視して、俺達はカレーを食べ始める…

「美味しいな…」

「お、美味しい！これ、和人君が作ったの？」

琴乃は最初の一口でそう呟き、カレーを凄い速さで食べ始め。ひかりは興奮気味に聞いてくる。うむ、他の面々にも概ね好評のようでは何よりだ…

「まあな。カレーなんぞ、誰でも……いや、訂正。大半の人間は作れるぞ」

「…ねえ、今、私の方を見て言いなおさなかった？」

「お前には前科があるからな。シチューを爆発させたという…」

ニトログリセリンでも入れたのかと本気で疑った。それ以来、彩花が台所に立つ際には緊急災害マニュアルが発動し、俺や彩花の両親は即座に逃げ出すのだ。

爆発もそうだが、試食なんぞ頼まれたら……考えるだけでも恐ろしい…

「うっ…そ、それは…し、シチューだからよ！か、カレーなら作れる！」

「何を根拠にそんな妄言を…大体、ルー以外、大して変わらないだろうが！！作れるわけ無いだろ！！」

彩花に作れる料理はカップラーメンか、トーストくらいだ。まあ、料理と定義していいのか微妙な所なのだが…

「和人様、後でレシピをお教えいただけませんか？」

「ああ。華蓮なら彩花とは違って作れるだろうからな」

「わ、私にも是非…」

「別にいいけど…沙耶香、料理の経験は？」

「…………家庭科の授業なので少々…」

どこか自身が無さそうだ…だが、彩花じゃあるまいし爆発はしないだろう…

「ぐっ！ぐぐぐ…」

「本当に美味いなく。なあ、一文字」

「うん。僕が食べた歴代のカレーの中で一番だよ」

唸り声を上げる琢磨の前でカレーを頬張る面々。

「な、なあ！頼む。一口でいい！食わせてくれ！」

「駄目だな。己の無知を呪え」

「後慈悲を――！何卒お慈悲を与えてくださいませ――！！」

「……しかたねーな。今回だけ特別だからな」

「ああ、氷室様。あなたが神様に見える……」

「まったく、ほら」

「あ、ありがとうございますだ――！」

あまりに憐れだから、ちよつとばかり慈悲を与えてあげた。うむ、
我ながら優しいな俺は……

「って、なんじゃこら――！！！！！！」

と思つたら、奇声を上げる琢磨。まったく、やかましいことこの上
ない……

「今度は何だ？食事くらい静にできないのか？」

「何だ？じゃねーよ！ふざけんな！！なんだこれは――！！！！」

俺が渡した器を差しだし、何やら怒っている琢磨。なんて失礼な奴
だ。折角、慈悲を与えてやったものを……

どうやら、器の中身について俺に問いかけているようだ

「なんだと言われてもな……見て分らないのか？」

「福神漬だけじゃねえか！！！！しかも器いっぱい！なんのいやがらせだー！！！」

「なんだ？よもやカレーを食えると思ったのか？世の中そんなに甘くは無い。それに、そんな事したら真剣にやった奴らに失礼だ。ペナルティーは受けてもらう。でも、慈悲がどうたら言うから、福神漬くらいは食わせてやろうかと……」

俺の言葉に琢磨は何やらプルプルと震えたかと思うと……

「……………ムキイイイイイー！！！！ハグ、ハグ！！パリポリバリポリ！！！」

狂ったように福神漬をかきこみ始めた。

食事を終え、もう暫く勉強をした後、勉強会はお開きになった。

食事の後の琢磨の勉強ぶりは鬼気迫るものがあつた。悔しさもあつたのだろうが……ようやく、自覚したのだろう。自分の生命の危機を……

これなら、どうにかなるかもしれないな……

そんな事を思いつつ、俺は現国と科学のテキストを開き、テスト範囲をまとめ、明日の彩花の勉強用問題を作り始めた。

第19話：カレーと琢磨と勉強会（後書き）

更新完了。皆さん、どうもです久遠です。

霞「S o r aこと美空霞です」

さて、中間テストの勉強が始まりました

霞「いいなくボクも撫で撫でされたいよ」

無理だと思うよ？

霞「ど、どうして？」

だって、霞ちゃん、問題解けないでしょ？

霞「うっ！？痛いところを…」

ちなみに…設定上の霞ちゃんの学力は…

霞「わー！わー！」

ま、止めときましよう。あ、でも英語は喋れます

霞「ふふ、当然だよ。アメリカに居たんだし…」

……でも、他は…

霞「わー！わー！こ、今回は此の辺で！また次回お会いしましょう

！
」

感想を書いてくれてありがとう。これからもよろしくお願いします
ね。ではでは

第20話..屍を越えていけ

—Side Kazuto Himuro

「……………」

奇跡は…起きなかった…

「か、和…」

「琴乃…お前の気持ちは分かる……だが、これは現実なんだ。気をしっかり持て…」

戸惑う琴乃…。無理も無い、転校先がこの個性的過ぎる学園ではな…刺激が強すぎるんだろう……

俺達の目の前には、ボロボロになり、屍と化した琢磨が倒れていた。

今の現状を作り出したの、中間テストの結果である。

三年はA組が見事一位、二位には冬至と華蓮がいるC組。

そして俺達のクラスは…

なんと学年最下位である。

いや、当然の結果といえば、当然なのかもしれない。琢磨の勉強会での成績を思い出す限りはそう思える。

そう考えると…やはり、奇跡は起ったのだろう……。あの成績から琢磨は全教科赤点を免れたのだから…

だが、そこまで奇跡は打ち止めとなった。免れたものの、平均点を著しく提げる結果になったのだから…

他のクラスの平均点の高さも敗因の一つだ。なんせ、一位のAがクラス平均、一科目辺り85.3。二位が85.1。

物凄いデットヒートだ。そして、我がクラスの平均が77.6。琢磨が居て、この平均点…皆の努力が伺える。

「折角、和人が学年トップ、沙耶香が二位だっていうのに…常盤! あんたのせいで! あんたのせいでええ!!」

倒れている琢磨に尚も追い討ちで蹴りを入れる彩花…。鬼だこいつ…

でも、口は出さない。矛先がこっちにきたら堪ったもんじゃない。せめて、琢磨には名誉ある人柱となって貰おう…。

「ふ、ふふふ…負けた…また負けましたわ…こ、ここの計算ミスが! 漢字の間違いが!!」

ダンダンと悔しそうに机にあたるのは沙耶香。

「氷室…。お前はやるときはやると思っていたぞ! 先生はお前を見込んでいた。あたしのチョークをあんだけ避けたんだ! だがな!! 常盤!! てめえが…てめえが…!!」

御堂先生がチョークを投擲。さらに、琢磨に追い討ちをかける。うつわ…マジ怖え。こいつら悪魔だ…

「ほら、僕の言ったとおり、真面目にやっていて助かったでしょ？でも、まさか、全教科満点をたたき出すとはね。流石、全国一位！」

お前が脅したんだろうよ。ハジ…

テスト前、いつも通り、適当にやって寝ようとしていたら、ハジに脅されたのだ。寝たら、その事実を彩花と御堂先生にバラすと…

ふっ…眠気がまったく来ないなんて…久しぶりの現象だった…。恐怖心ってのはスゴイネ…

ま、そんなこんなで、俺と沙耶香がワンツーフィニッシュで頑張ったにも関わらずに最下位という結果。赤点をギリギリ回避し、本人的には快挙を成し遂げたはずの、琢磨が結局ボコられたという事だ。琢磨…成仏してくれ…

そっと、琢磨に黙祷を掲げた。

「その琢磨はまかのせいで、こういった結果が出てしまった以上！仕方がねえ…今日の現国の授業は自習。HRに当てる！いいからお前ら！こうなった以上。球技大会で勝つしか我々には道が無い！実行委員！作戦参謀！頼むぞ！」

「はい!!」

こうして…現国の時間に緊急作戦会議が開かれることとなった。ちなみに、琢磨は倒れたまま身動き一つしない…。誰か保健室に連れてってやれよ…とか思いつつ、壇上に視線を向ける。

壇上には球技大会実行委員の彩花が竹刀と『必勝』の鉢巻。そして、わざわざ俺の替えの学ランを纏って仁王立ちしている…。あれ？さっきまでは普通に自分の制服を来ていたのだが、いつの間に着替えただんだ？

そんな疑問が浮かんだが、すぐに忘れる事にした。考えても分かるわけではない。そして、もう一人、作戦参謀の任を任されているハジが彩花の脇に立つ。手には、膨大なプリントとハジモバイルがある。一体、なんのデータなんだか…

「では、作戦会議をはじめます。参謀の一文字君、お願いします」

って！気合入れた格好してるのに彩花の出番はそれだけかよ!!

そう思ったが、他の生徒は真剣な面持ちで突っ込む素振りはない…。なんでだ？俺がおかしいのか？

「彩花はなんであんな格好をしているんだ？」

「……琴乃！」

思わず手を握る

「な、なんだ和。は、恥ずかしいじゃないか…」

「お前だけは俺の味方だと思ってた！思ってたさ！！」

幼馴染とは偉大だ…俺は、一人じゃなかった…

そんな感激に浸っていると…

「煩い！」

「うっせえ！静かにしろ！！」

竹刀とチョークが同時に飛んできた。攻撃の主は彩花と御堂先生。って、彩花よ。竹刀を投げるなよ…というか！チョークもそもそも投げる道具じゃないっての！

「……すいませんでした。続きを…」

とりあえず、攻撃を避け、心の中とは裏腹に謝罪をし、席に座る。

だって、何時もとは違って教室の空気が殺気立ってるんだもん…

茶化さない方がいいと俺の生存本能が敏感に感じ取った…

「話を続けるよ！まず、各クラスのパワーバランスなんだけど…」

ハジがデータを読み上げる。その間、クイクイっと、袖を引っ張られた。

「…聞きたい事があるんだが…」

引っ張ったのは琴乃。転校してきたばかりで、この空気がいまいち

分からないらしい。ぼそぼそと小声でそう聞いてきた。

なので、この光琳高校の球技大会について説明をしてやる。

光琳の球技大会は他の学校にはない要素が結構ある。まとめると：

1. 中間テストの学年別の順位が球技大会の得点にあらかじめ加算される。

2. 球技大会の順位に応じて賞金がでる。その賞金は今年度のクラスの予算に加算され、文化祭で豪華な催し物が可能となり、優勝クラスの担任にはボーナスが出る。

3. 文化祭で置いての特別優先権を得ることが出来、体育館や視聴覚室などの優先的使用が可能となる。

4. 競技には生徒だけでなく、教師も参加することが出来る。

5. 学校長が開発した新種のマイナー球技が種目にある。

「……………なるほど…」

説明を聞き、ふむふむと頷く琴乃。

「ま、大事なのは2と3だな。賞金と権利が欲しいから皆熱くなるんだ。ま、それが校長の狙いでもあるんだろうがな…」

「しかし、必要最低限の予算は出るんだろ？ 特別教室も優先的な使

用権を得るだけで、使えないという訳ではないのではないか？」

「ああ…。お前は経験してないが、球技大会優勝者と普通のクラスでは出し物が雲泥の差になってしまう。当然、お客も皆持ってがれて、しまつてな…。豪華な打ち上げの片隅で辛酸を舐める事になる…。過去の経験からそんな光景を見てきたんだ、そして、今年は最後の年…。みんな熱くなるさ…」

「…その割には、お前は冷めてるな…。」

「俺は正直、どうでもいいんだ。豪華だろうとなんだろうとな。当日は家で寝てたいくらいだしな…」

「……変わったな……昔のお前は私をお祭りのたびに連れ回していたが…」

琴乃の言葉に、目を瞑る…

確かに、昔の俺はお祭りが好きだった。

俺は琴乃を連れまわし、俺は母さんに連れまわされた記憶がある。

けど…今の俺は人混みが…人間が嫌いになった。

この町に來た頃…周囲が俺を見る視線は二種類。

奇異の視線か、同情・憐れみの視線。このどちらか

俺の事を知らない人間は前者。この銀の髪と、異なる瞳の色。そん

なにとやかく言うほどの事なのだろうか？何故、いちいち絡まれ、怒られるのかが、分からなかった。

俺の事情を知っている…あるいは知った人間は後者。『頑張れ』『可哀想』その言葉が、どれだけ無責任か…人を傷付けるのか…

頑張れ？何を頑張ればいいのだろうか？頑張ったらどうにかなるのだろうか？父さんや母さんは生き返るのだろうか？

可哀想？勝手に俺をそんな目で見るな…。何かしてくれるのか？可哀想と言う事で悲しみを取り除いてくれるのだろうか？そう言われることで、両親が居ないという事を再び認識させられ、余計辛くなる…

だから、俺は中学時代に、人と関わることを…人混みを避けるようになった…

今は、ある程度は人と接することが出来るようになった…けど、人混みが好きかといえば、やはり好きではない。

視線に慣れたとはいえ、いい気分はしない。堪えないとはいえ、悲しくないと言えば嘘になる…

「和？和…」

「…ん？あ、悪いな…ちょっとボーっとしてた…」

「すまん。私の言ったことで不快にさせてしまった…」

「いや、そんなんじゃない。ただ、昔お前と行ったお祭りは楽しかったなって…思い出してたんだ…」

琴乃と行ったお祭りを思い出し、笑みを浮かべる。

「確か、りんご飴とわた飴の両方が欲しくて…だけど、どっちか片方しか買えなくて…結局りんご飴を買ったんだよな…」

「…そして、和がわた飴を買って半分私にくれたんだ。一人じゃこんなに食べられないってな…」

「…いや、それは美化しすぎだ。お前は半分分けたにもかかわらず、俺からわた飴をむしり食って、結局殆どを強奪したんだ」

「そ、そうだった…か？」

そうでしたとも。はっきり覚えている。半分分けたのに、何故か、俺の持っているわた飴を食べ始め。それが無くなると、自分のを嬉しそうに食べていた。

ボソボソと小声でそんな会話をしていると…

「では作戦は以上です！各自健闘を！最後に…」

何時の間にか会議は終了し、彩花が壇上で締めくくるための言葉を延べ、大きく息を吸い…

「私達の目的はなんだー！ー！！？」

【優勝あるのみ！！全てを蹴落とせ！！】

「私達のすべき事は何だー！ー！！？」

【常勝！！必勝！！どんな手を使っても…ただ、勝つことが全て！
！】

「優勝するクラスは何処だー！ー！！？」

【3－D！！3－D！！！！3－D！！！！！！】

ビリビリと彩花の咆哮に続き、クラスメイト達が雄たけびをあげる…

まてまて、明らかに早い。球技大会はまだ先だ…その上…

「今、授業中だぞ……」

止める立場の御堂先生まで加わっている…

暫くした後、三年のみならず、一階下で教鞭を振るっている教師が勢ぞろいし、苦情とお説教と頂戴したのは言うまでもない…

第20話：屍を越えていけ（後書き）

更新完了！

どうも毎度どうも久遠です。

霞「更新早いねえ」

そうなんだよ。実は、明日就職の試験があつてさ…現実から逃避するため…

霞「おいおい…」

うふふ、次回はどうしようかしら♪

霞「駄目だ…逝っちゃってる…」

何やら、新キャラがいつぱいの予感がするわん♪

霞「あ、壊れた…おーい、帰って来ーい」

はっ!？

霞「お、帰ってきた。でさ、今回の話だけど、先輩の人嫌いの理由が少しだけでたね…あ、もしかして！先輩のそんな気持ちを変たのは私とか♪」

ん〜どうでしょ。ま、物語が進めば明らかになるじやろうて

霞「じゃ、早く更新してよ」

うつ、藪蛇だったか……。で、では、また次回お会いしましょう。お相手は私、久遠と

霞「S o r aこと美空霞でした。では、またね♪」

感想、本当にありがとうございます。引き続き頑張ります。

第21話：光琳の教師達

個性豊かな生徒が集う光琳高校：

だが、個性豊かなのは生徒だけではない。教師陣も普通とはいえない、個性の強い面々が揃っている。

校長の狩谷美鈴の『愛の伝道師』。3-D担任の現国教諭、御堂真希の『魔弾の射手』というような、個性の強い教師には得てして称号が与えられる。

誰が与えているかは謎で、何時の間にか、生徒達に認知されているのだが、とにかく、称号が与えられるのだ。

そしてこの二人の他にも、称号を持つ。個性の強い先生達が居る：

「御堂先輩！授業中に騒がないようにきちんと勉強させてください！」

「へーへー…つたく、小姑みてえに。ガミガミガミ言いやがって…」

その日の放課後。職員室では、先程の騒ぎの件で、真希は説教をされていた…

「き、聞いてるんですか！？大体！先輩は毎回毎回…」

「聞いてるって…だから、そう怒鳴るなよ。紅桜」

紅桜 べにざくら 麗 れい 同じ大学の後輩で、教師としても後輩に当たる人物で、担当科目は数学。3-Cの担任で剣道部の顧問、いつも着物を着ているのが特徴的だ。そしてもう一つの特徴が彼女の称号…『紅の舞姫』の所以になっている。

もう一つの特徴…それは、紅色の木刀を常に持ち歩いていると言う事である。

その木刀で行われる剣舞は、剣筋に赤い軌跡が残る…その姿からそう呼ばれるようになった。

授業中でもその木刀は時に断罪、時に教鞭として使用されている…凛とした顔立ちに長く艶やかな黒髪を半ばで一本に束ねており、着物と木刀が合間って。日本的な美を感じさせる。

そのため、初見で生徒達は驚くものの、二度目から誰もが突っ込まなくなる。それがデフォルト化してしまうのだ…

「生徒を導くはずの教師が何をやってるんですか!?!? って!?!? こっちを向いて真剣に聞いてください!」

「今忙しんだよ! チョークを補充してんだからよ! 邪魔すんな!」

しっしつと追い払うような仕草をし、拳銃の弾丸を磨くような仕草をし、チョークを一本、一本、ケースと、ベルトに装着していく真希

「…あなたって人は…言葉で言っても分からないようですね…」

「やろってのか？学生時代からの戦績はあたしの圧勝だ…やるだけ無駄だが…売られた喧嘩は買うぜ……」

互いに木刀とチョークという得物を構え、ビリビリと殺気をぶつけ合う。巻き添えを恐れ、周りの教師陣は既に退避を完了している。

そんな、一触即発といった二人の間に…

「もう。真希ちゃんも麗ちゃんもめっ!!」

一人の女性教師が割ってはい

「うげっ!?恋!?!」

「よ、よよよ…羊ヶ崎先輩!?!」

動揺し、慌てて距離をとり、体裁を取り繕う二人。そんな二人をニコニコと笑みを浮かべて眺めている一人の女性

羊ヶ崎^{ようがさき} 恋。高校時代からの真希の親友で、大学の同期。光琳でも同僚。担当科目は英語で3-Bの担任。愛の手料理クラブの顧問である。

ふわふわのウェーブがかかったブロンドの髪と見るもの全てを癒し、男性を虜にする微笑を浮かべ、その抜群のスタイルはスーツの下からでも自己主張を忘れていない…

そんな、およそ争いごとには似合わない彼女だが、真希と麗はただらと汗を流している上に、顔色が悪い…それもそうである。彼女

の称号は

『罪惡の女神』である。

その称号は罪惡を司る女神という意味である。恋の微笑みはまさに天使：だが、その笑みが悲しみに染まるとき、人はその罪惡感で押しつぶされそうになるのだ：

本人は自覚しているわけでも、謀っているわけでもない。まさに、純真そのもの。今の世には絶滅危惧種に指定された大人の一人である。

かの氷室和人ですら遅刻をした際に、土下座で謝罪し、以降、恋の授業の際に遅刻をしなくなったことからその力の凄さが伺え：

『いやゝ、羊ヶ崎先生が担任じゃ無くて良かった。本当に助かった！御堂先生ありがとう！！』と和人が述べていたという証言もある。

「喧嘩しちゃ駄目えゝ」

「い、嫌だなくあたしと麗が喧嘩なんて…な、なあ？」

「そ、そうですよ。御堂先輩と私は、な、仲良しです！」

「よかったあゝゝ。それとおゝ、ひーたんは頑張り屋だよねえゝ。恋、いっぱあゝい。褒めちゃうよおゝ」

独特の口調と、唐突に話題を変えられ、完全に毒氣が抜かれた二人は疲れたような顔で、話を聞いていた。

「ひーたん？誰の事だそりゃ？」

「ひーたんはー、ひーたん。氷室くんのことおー。すごおいよねー満点なんてえー」

「ああ、氷室和人君ですね。確かに、数学でも満点でしたし…」

「元々出来る奴だからなく真面目にやりさえすれば。おまけに、あたしの人生で最大の宿敵！ふふふ、ぜってえ、氷室に一発当ててやる」

「あん。駄目よおー意地悪しちゃーいい子なんだしいー」

「そうですよ。幾ら何でも問題がない生徒にチョーク投げは…」

メラメラと燃えている真希を二人が嗜める…

「……………待て…今、なんつった？」

「だからあー、いい子なんだから虐めちゃ駄目よおー」

「そうです。優等生じゃないですか。彼は、確かに外見は銀髪ですが、あれは、生まれつきで、染めたわけではありませんし…」

「……………はあ！？お、お前ら何言ってるんだ！？あいつは遅刻の常習犯で！授業のサボりの常習犯で！居眠りの常習犯なんだぞ！！」

真希の言葉に、二人は顔を見合わせる。何言ってるんだこいつ？的な反応である。

「ひーたんは、めっ！ってしたら、ごめんなさいしたよお。それから、一回も遅刻なんてしてないし。居眠りもしないよお」

「私です。指されたらきちんと答えますし、宿題もやってきますし、遅刻もしません」

「ば、馬鹿な！！あ、ありえねえー！！！」

そう叫ぶ真希。

（いや待て、待て、考えろ。考えるんだ。あいつの寝起きの悪さは橋から聞く限りは相当なもんだ。あたしの授業だけ狙って遅刻するとはおもえねえ…ん？まてよ…となると…）

「なあ、お前ら。うちのクラスの授業は何限目にある？」

「？ えっとお。確かあ、殆どが3限目とか4限目だよお」

「私は6限が多いですね。後は、4限と3限に一コマずつ…」

「麗、曜日とか詳しく教えろ！！」

「え、ええ、構いませんよ」

真希の気迫に若干戸惑いながら、麗は説明をする。

「なんなのお？」

不思議そうに首を傾げる恋。

そして、説明を聞き終わった真希は…

「…あんにゃろ…なるほど、全て合点がいった…」

ボキボキと手に持っていたチョークを握り碎きながら、そう告げた。

大方、真希の推理は当たりだ。真相はこうだ。

まず、和人が遅刻してきた場合の時間は2限目の半というのが大半を占めており、英語と数学はそれ以降。当然、遅刻はしない。

居眠りについても、遅刻してまで寝るのだから眠気もあまり無いと思える。食後の満腹感と春の陽気で5限目も寝ていることが多い居のだが、6限目には起床し、授業を受けている。

そのことから、この二人は和人の素行がいい部分しか見ていないのだ。いや、恋の場合、一回遅刻して、痛い目を見た経験から意図的に注意しているという点があるのだが…

「仮に、御堂先輩の言うとおりの生徒だとしても、私の『紅月』の錆にするだけです」

刀身が赤い木刀…『紅月』の柄の部分のをさわり、不敵に微笑む麗

「いんや、テメーの剣じゃあいつは捕らえられねえよ。あいつを殺るのは…あたしだ」

「……聞き捨てなりませんね…私が遅れを取るとでも？」

「ああ、止めとくのが無難だぜ？プライドが傷つけられたくなきゃ

な……」

「……表に出ましょう。…先程の決着をつけてあげますよ」

「……上等だ。氷室の前に、あたしが……」

再び、殺気の籠った視線が交差する。木刀とチョークを構え、臨戦態勢…

「だからあ、めっ!! 喧嘩しないのお。け、けんかしちゃ…」

恋の声が次第に涙声に変わっていく。途端に、罪悪感に包まれ、慌てて二人が宥め始めた。

「う、うあああ。な、泣くな。ほら、あたしたちは、じ、じゃれ合ってただけだ! な! そ、そうだな? 麗!」

「も、もちろんですよ」

「……ホント?」

「「本当、本当」」

「……よかったあ。皆、仲良しい」

ニコニコと笑みを浮かべる恋と疲れたようにぐったりとする真希と麗は実に対照的であった。

「実際さ、あたしとお前が戦う必要は無いんだよな」

「そうですね…要は私が氷室君に一撃入れればいいんですし…とは言ったものの、理由無く教師が生徒に攻撃するのも…」

二人は恋に聞こえないようにぼそぼそと内緒話をする。恋といえば、二人の仲良しぶりに満足したのか、自分の机に移動し、板チョコを頬張りつつ、二人の姿を眺めて微笑んでいる。

そして、麗の言葉に真希はにやりと不敵に笑い…

「大丈夫だ。戦いの舞台はある…あとは待つだけだ…」

「まさか…あれですか？確かに、あれなら合法的に氷室君と戦うことが出来ますが…」

「ああ、これは機密情報なんだが、既に氷室はエントリー済みだ。強制的にな。お前も出るんだろ？」

「ええ、もちろんです。確か、D組には橘も居ましたね…。ふふ、楽しみです」

何やら画策する二人……。なんだかんだで、二人はいいコンビなのである…

—Side Kazuto Himuro

「…くしゅん……」

「……風邪？」

「…どうでしょう？寒気もするし…今晚は念のため早めに寝ます」

「…可愛いね…」

「何がです？」

「…くしゃみ…」

うつ、なんか嬉しくない…

放課後、何時もなら速攻で帰るのだが、放課後まで倒れたままだった琢磨をようやく保健室に連れて来てやった。

そんな経緯から現在、保健室で先生にからかわれている。

「どうですか？黒羽先生」

「……大丈夫…ちょっと…幽体離脱してるだけ…」

いや、それって駄目なんじゃ…

けど、黒羽先生なら何とかしてくれるだろう。

光琳学園のNO1・ミステリースポットである保健室。その主がこの人。黒羽くろはね 奈緒なお先生である。

保健室の中は暗幕で覆われた闇が支配しており、明かりといえば蝋燭だけ。そんな奇妙な保健室に近寄る生徒は稀であり、それがゆえにミステリースポットとなっている。

黒羽先生も『黒衣の堕天使』なんて称号が付けられており、その名の通り、保険医の象徴たる白衣の変わりに黒衣を纏っている。

外見はまるで中学生といった感じだ。背は低く、顔立ち幼く、クリム色の短い髪も子供っぽく見えるのだろう。性格は内気…というのだろうか。あまり人と話すタイプじゃないのが、保健室の異次元空間と合間って人は寄り付かなくなっている原因だ。

皆は怖がっているが、俺はこの先生が好きである。あ、loveじゃなくて、likeの方でだ。

分かりにくいけど、この人は優しいし、なんか気が合うって言うか…落ち着く。それに、此処は絶好の昼寝スポットだし。暗いし眠りやすい。まあ、明るくても寝れるけど…

「…ヒム君…これ…」

「なんです？」

「…風邪薬…。一人暮らしなんだから…風邪引いたら…致命傷になる…。予防」

ほらね。かなり優しい。まったく、何処が怖いんだか…。

「ありがとうございます」

「ん…。お茶…飲んでくといい…」

「あ、はい。琢磨は？大丈夫ですか？」

お茶の用意をしながら、黒羽先生が言う

「……注射した……そのうち起きる……」

いつの間に…

「さっき…ヒム君が…loveじゃなくて…likeって…言った時…」

いや、言っていないから

「そう？」

黒羽先生は不思議だ…。何故か、考えていることが伝わってしまう。はっ、これがシンパシーというヤツなのか!?

「…ちよつと…残念……」

「…何がですか？」

お茶の用意を終えた先生が戻ってきて、開口一番にそう切り出した。

「…loveがよかった……」

な、なんか、トンデモナイコトヲ言われましたYO!

「えー!? あ、えつと…その…。せ、先生と生徒ですし…問題が…いや、あの校長なら問題は無いんでしょうが、倫理的に…」

「…くす…冗談…」

くっ、やられた。

何気にお茶目なこの人はこうやって俺をからかう。にしても、演技力すげえな…女優になれるかも…

「ならない、カメラ嫌い」

「さいですか」

もう、喋る必要が無いんじゃないかと思い始めつつも、やっぱり、口を開く。うん、やっぱり、伝えたいことは言葉にしないとね

「幽体離脱って、注射で治るんですか？」

「…特別製…肉体にショックを与えて…戻す…」

ズズズとお茶を啜りながら語る。先生が淹れてくれたのは緑茶。日本人の心だなぁ。細かいこと突っ込んだところで理解は出来ないのだから、お茶を楽しもう。無駄な、徒労はしたくない…

「……ヒム君、気をつけて…」

「何にですか？」

「今度の球技大会…マッキーとレイレイが何か企んでる…よくないこと……」

マッキーとレイレイとは御堂先生と紅桜先生のことだ。俺の事をヒム君と呼ぶことから分かるが、この人はちょっと個性的な呼称を

する。

「……気をつけたところで、どうにかなるんですか？」

「……無理…だと思う…」

やっぱりな…

「なら、諦めて受け入れます。でも、忠告ありがとうございます」

「ん…それと…ヒム君」

「まだなんかあるんですか？黒羽先生」

「……それ…前から気になってた……」

「どれです？」

「黒羽先生…じゃない…奈緒……もしくは……ナノオ……て呼んで…？」

「は？で、ですけど、先生ですし…そんな軽々しく…」

「……呼ぶ！」

珍しく、若干強めの口調の黒羽先生。あ、あの…キラリと光る。手に持っているメスはなんなんでしょ

「……メス…だけど？」

「いや、それは見れば分かります。今現在手に持っている理由を聞いて…はいないですけど…聞こうとしたんです」

「…保険医の…必需品……肌身離さず…」

いや、要らないだろ。明らかに…。ああ、でもこの人は確か、医師免許持ってるんだよね…

なんで保険医やってるんだろ？

「…そんなことは…いい……呼ぶ…」

「……ふう…分かりました。奈緒……さん…。奈緒さんでお願いします。呼び捨ては流石に勘弁してください。ナ…オはもっと勘弁してください」

「……分かった……それで…いい」

ふう…よかった。不満そうに言うが、少し喜んでいるみたいだ。

「…じゃ…これ……あげる……ご褒美」

「？ チケットですか？」

黒羽…な、奈緒さんの黒衣のポケットからは二枚の映画のチケットが出てきて、手渡された。

「…貰ったんだけど……興味ないから…ヒム君にあげる……」

いや、俺も貰ってもな…

渡されたチケットをマジマジと見る。この映画は…確か…今、女子の間で有名な恋愛映画だったような気がする。けどなく正直、俺も映画なんぞ殆ど見にいった事がないから興味なんぞ……

「あっ…」

いや、見にいかうとしたんだ。あの日……琴乃と……

「……奈緒さん。これ、ありがたく頂きます」

「ん……デート……頑張る」

奈緒さんがそう言ってお茶を啜る。

さて…今週……琴乃の奴は空いてるかな……

あの時のリベンジじゃないけど…今度こそ。

出来なかった…一緒に映画を見にいきたいという約束を

少し遅くなったけど、果たそうと思った……

第21話：光琳の教師達（後書き）

更新完了。つと、同時にごめんなさい！

霞「ど、どうしたのいきなり…」

いや、勢いで書いたら長々となった挙句、まとまってないような気がしてねえ。修正してまとめようにも、実力不足でして…インポツシブル！！

霞「それで、そのまま更新？」

うわーん…ごめんよ。最近スランプ気味だしさあ。

霞「はあ…ボクを出さないからこうなるんだよ。どう？次回からボクも…」

さて、今回のお話ですが…

霞「無視ですか！？」

沢山、新キャラができましたね。あ、言っておきますが、彼女達は今のところサブキャラでヒロインとかじゃありません。

霞「ほっ、また、強力なライバルが増えるかと思った…あの、保健の先生とか可愛いかったし…」

ふふ、甘いね…あくまで現時点での話し…。反響次第で…霞ちゃん喰われちゃうよ？

霞「ぼ、ボクを出さないのにそれはずるいよ！」

いやね、奈緒先生は結構考えたよ。ほら、保健の先生って大体さ、色気がある大人の人で、男子生徒の集会所みたいなイメージがあるじゃん？

霞「ま、まあ、それが王道なんだろうけど…」

でしょ？だから、あえて子供＋不思議ちゃんって見た。当初は科学の担当ってのも考えたんだけどね。

霞「ふーん」

さてさて、今回はこんなところですかね。あ、よろしかったら感想に教師陣の感想などもお聞かせください。

みんなでヒロインを蹴落そう！

霞「へ、変な先導しないでよ！あ、上の一文は忘れてください。あくまで、純粋な感想をお願いします」

第22話：映画を見に行ったつもりです

「ど、どどど、どうしょ〜」

撫子寮にある琴乃の部屋のベッドの上で、少女は悩んでいた：

悩んでいるのは当然、この部屋に住んでいる。琴乃である。

学校で見るような無愛想で無機質な表情とは正反対で、オタオタと動揺し、幼い頃の：地の姿になっている。

さて、琴乃を此処まで動揺させた出来事とは何か？時間を少しだけ遡ることにしよう：

〜回想〜

夕食を終え、自室で恋愛物の小説を読んでいると、携帯電話が鳴った。

「誰だろ？」

視線を小説から携帯電話に移し、着信画面を確認するとそこには、氷室和人と出ており

「か、かかかか、和くん！？どどど、どうしょ！？お、落ち着け〜、ひっ、ひっ、ふ〜。ひっ、ひっ、ふ〜。あー！えー！いー！おー！うー！ん、んん！テストテスト：和、和：よし…」

偉く動揺するも、そんな経緯を経てどうにか落ち着き、やっと電話を取る琴乃

「も、もしもし…和か？」

『もしもし？和人だけど…今、時間大丈夫か？』

「あ、ああ。すまん早く出られなくて…それでどうしたんだ？」

『ああ…えっと…その…なんだ……。明日さ…暇？』

「？特に予定は無いが…」

『そっか、良かった。じゃさ…一緒に映画見にいかないか？』

～回想終了～

要は和人から映画のお誘いが来たのだ。

そして、琴乃がその誘いを断るはずが無く…即了承したものの……着る服に迷っているのだ……

「やっぱりスカートは…キャラが崩れちゃうよね。でも、初デートにズボンっていうのも……初デート……ふふ♪って、ああ！やはり服決めない！」

そう言いつつも、結局、何度かトリップし、服を選ぶのに数時間必要した…

翌日…、晴天の空の下で待ち合わせの定番となりつつある駅前では…

「ね？だれ、あの子」

「ふふ…美味しそう…じゅるり…」

「声かけてみなよ…」

「…………はあ」

多くの視線…（主に女性）に晒された一人の青年が疲れたようにため息を吐いていた。

太陽光が反射し、輝く銀の髪に、幻想的な異なる両目の瞳を持つ、整った容姿。身長は標準程度なのだが、モデルのように洗練された綺麗な姿勢で立っているため一目を引いていた…

ジーパンに黒いシャツというラフな格好が、一層魅力を引き立て、第二ボタンまで開かれたその胸元には、シルバーのアクセサリーが付けられている。

彼の名は、氷室和人。いま、駅前で大衆の視線を釘付けにし、居心地悪そうに待ち人を待っていた。

（はあ…これだから、人前に立つのは嫌なんだよな…）

愚鈍な彼は、その視線の意味に気がつかない。ただ、見惚れ、どうやって話しかけようか、接点を持つのかという感じの視線なのだが、和人は…奇異の視線に晒されていると解釈しているのだ。昔、その

ような視線と言葉を受けた彼にとってはそれが当たり前の事で、そんな経緯が、彼を鈍感に至らしめた全ての原因である。

つまり、銀の髪はおかしい。異なる色の瞳は気持ち悪い。そんな自分が好かれる筈が無い。

そんな考えから、自分を卑下する思考が身につき、声を掛けてくる女性の事もナンパとかじゃなく、ただ、珍しいんだろうくらいにしか思っていない。

彩花や華蓮がこれまで、さりげないアタックなど、並みの人間なら好意を持っていると気がつく行動さえも、こんな自分に気を使ってくれるなんて、いい奴だな。とか思っちゃっているのだ。

ある意味、天然の女殺し…。始末が悪いことこの上ない……。

「ね、ねえ、キミ？暇かな？お姉さんとお茶でもしない？」

「……すいません。人を待っているんです」

そして…また、一人、犠牲者が増えていく…

「はあ、はあ…す、すまん…待った…：…か？」

「いんや、全然。って、どうしたそんなボケーとして」

暫くして、琴乃がやってくる。迷ったものの結局スカートではなく、ジーンズを履いていた…だが、髪は何時ものように結んではおらず、ストレートに後ろに流している…

そんな琴乃は和人の格好を見て、固まっていた…

基本的に和人は学生服か、家ではジャージなどの動きやすい格好で居ることが多く、着飾ることは少ない。そんな、彼の私服を見て、硬直してしまったのだ…

「？　　おい？　琴乃さくん！？」

「…ハッ！？　す、すまんね！？　少しばっか考え事してたとよ！？」

「……いや、俺に問われても……ま、とにかく、とっとと行こうぜ、目立つっちゃってるし……」

和人の言うとおり、周囲の視線が集中している。本人はただ、騒がしいからだと思っているが、実際のところは…

「ほら、だから言ったじゃん。フリーの分けないって…」

「なによ。あんただって、声かけ様としてたでしょ？」

「うわゝあの子、可愛かったのに…男付きかよ」

「お前に勝ち目ねえって、まさに美男、美女って感じ。お似合いだし」

二人の容姿が視線の原因である。

そして、二人が歩き出す頃には、興味がなくなったのか視線は減りつつあった。

駅前から談笑をしながら歩き、映画館に着く頃には。若干、緊張していた琴乃の緊張も解けたようである。

「今日は何の映画なんだ？」

「…ラブストーリーだ。『某国のお姫様』ってやつ。女子の間で話題なんだろう？」

「……確かにそうだが…以外だな、和がラブストーリーを選ぶなんて…」

「ま、俺が選んだわけじゃない。チケット貰ったからな。それに…昔、お前と見るって言ってた映画もラブストーリーだしな…結局見れなかったから、リベンジってことで」

「…和……ありがとう……」

「ほ、ほら！早く行かないと始るぞ！！」

お礼を言われて照れくさくなったのか、足早に和人は中に入っていてしまい、琴乃は感激の余韻に浸るまもなく、和人を追うように中に入った。

——Side Kotonokasuga

和くんと初のデート…彼のほうから誘ってきてくれたのが凄く嬉し

い……

「飲み物とかはどうする？」

「私には要らない。映画に集中したら飲んでる暇はないだろうから……和は？」

「俺もいらない。途中で絶対に寝るし」

……何も宣言しなくても……そりゃ、寝るって事は分かってたけどさ……

そんな話をしているうちに館内は暗くなり、よいよ映画が始った……

「Z Z Z……すう……」

早！？

隣から寝息が聞こえてくる。宣言どおり、和くんが寝たのだろう……だけど……

「……いくらなんでも……早過ぎるよ……」

本編が始る前、他映画などの予告の段階で寝てしまったのである。

ちなみに、暗くなってからまだ一分たったかどうかといったところ……

彼は、映画を見る気が少しでもあったのだろうか……

（ごめんなさい。いい映画を作ってくれたのに……）

和くんが変わって、心の中で映画の製作スタッフに謝り倒した…

『シャルロットー！』

『エヴィンー！』

スクリーン上では俳優さんが迫真の演技を見せる…。けど…私は……

ーチラ

「…すう…すう」

映画にまったく集中できない。だって、寝顔が可愛いんだもん。

スースーと規則正しい寝息が聞こえてきて、思わず彼の寝顔を見てしまう。映画の内容は当然、頭に入っていない。

（ごめんなさい、スタッフの皆さん。あとでDVDを買いますから…）

再度、心の中でお詫びを申しあげつつ、彼を見つめる

ああ…こんなに近くに居る……

忘れようとした…でも、出来なかった。私の初恋の人が…

手を伸ばせば届く距離に居る。

(……寝てるよね？だったら……)

そっと、彼の顔に近づいていく。

私のファーストキス。本当なら、あの時……一緒に映画を見につてるつもりだったのに……出来なかった。

だから、今

彼との距離がどんどん縮まり……彼の唇にわたしのが触れる瞬間……

『この、卑怯者が……！！寝首を掻こうとするとは……騎士としての誇りを忘れたか……！！』

——ビクウ——！！

バツとすごい勢いで離れる。

まだ、心臓がバクバクいつてる。

映画の台詞がまるで私に向けられて言われたかのようなタイミングだったため、私が怒られたような気がした。

結局、未遂に終わり、その途端に物凄い罪悪感に苛まれた……

(うわ……。寝てる人に不意打ちは駄目でしょ。いくらなんでも……でも、チャンスだし……)

『……貴様！一度ならず二度までも……！！人間の屑が……！！』

「……………」

いや、だって、チャンス…

『言い訳とは見苦しいぞ!! 正々堂々正面からかかって来い!!』

「……………」

すごい理不尽で恐縮だけど…

私はこの俳優さんが大嫌いになった……

「あゝ、面白かったな!」

「……そうだな……」

あの後、あの俳優さんに邪魔され、なんとなくやる気をそがれ、私まで眠ってしまい、瞬く間に映画は終わった。

伸びをしながら白々しく和くんがそんな事を言う。本編一瞬たりとも見てなかったくせに…

「ほら、あれが、その…こうして、ああするところが名シーンだったよな?」

「ああ、あれが、こうして、ああするところは確かにいいシーンだった」

まあ、私も殆ど見てなかったんだけど…

でも、あのエヴィンとかいうやつ顔は忘れない…ふふ、忘れてなるものか……

「こ、琴乃？ど、どした？なんか禍々しいオーラが出てるんだけど…」

「…なんでもない。気にしないで」

いけない、いけない。初デートなんだ…もっと楽しく行かないと…

——Side Himuro Kazuto

怒ってるよな…琴乃の奴

映画が始まる前、ちょっと目を閉じてただけなのに、目を開けた時にはエンドロールが流れていた…うーん。ミステリアス…

とはいえ、自分から映画に誘っという、見てませんでしたじゃ、怒るだろうな…。当然、気が付かれているだろうし…

「な、まだ時間あるよな。お前、来たばかりで此の辺の店には詳しくないだろ。ま、俺もそんなに詳しくは無いけど…。美味しいケーキがある喫茶店があるんだ、行かないか？奢るぜ」

「喫茶店か…」

「ああ、お前ケーキ好きだったし、味は保証するから」

「分かった。行く、案内頼む」

「OK。じゃ、行くか」

「あ…」

「え？あ、ごめん。癖で」

癖で琴乃の手を握ってしまった…。迷子にならないように昔は琴乃の手を引いていたから…

慌てて離そうとするも…

「……………」

ギュッと握り返された…

なんか、急激に恥ずかしくなり、俺達は無言のまま喫茶店に向かった…

仲睦まじく、手をつなぎ二人は歩いていく…

和人達が向かう喫茶店…洋風喫茶『ブロッサム』。

そこでは、一種の修羅場が待ち受けていることを、今のこの二人には知る由も無かった。

第22話：映画を見に行ったつもりです（後書き）

更新完了。それと同時に沢山の感想ありがとうございます！

霞「うんうん。紅桜先生と黒羽先生が人気あるね。さりげなくボクも話題に出てたし。そろそろ出番が…」

出番っていつてもね。てか、キミは何気にヒロインの中で出演してる方だよ

霞「えー！何処が!？」

だって、ほら、あとがきに毎回出てくるじゃないか

霞「でも、本編には出てきてないじゃない」

……さてさて、次回ですが

霞「都合が悪くなったらいつもこれだ：大人ってのは卑怯だ！ぶーぶー」

ブロッサムに行っちゃいます。待ち受けるのは当然、あの二方！

霞「琴乃さん、いいなデートいいな」

果たして…無事、修羅場という戦場を潜り抜けることが出来るのでしょうか。和人君ガンバレ！

霞「……最後まで無視ですか!？」

では、今回は此の辺で…では、今回も感想をよろしくお願いします。

第23話..修羅場拡散注意報

—Side Kazuto Himuro

休み明けの気だるい月曜の平日…。

昼休みの終了間際、俺は映画のチケットのお札を改めて言いに、保健室に訪れたのだが…

「……で？…どうだったの？」

奈緒先生に捕縛されて、誰と映画に行ったかなど詳細の説明を求められていた。

流石に、学校で奈緒さんという呼び方を定着させる訳にも行かず、その事を告げると、奈緒さんは渋々妥協して奈緒先生という呼称に落ち着いた。

「奈緒先生、そろそろ五限目が始まるので、また…」

「…ヒム君のクラス……次の時間は……体育……サボるはず…」

ぐっ、見通されていた。

奈緒先生はテキパキと二人分のお茶を淹れ、お札に俺が持ってきた佐藤和菓子店の羊羹を切り分けて、座った。

「……話す…」

「はい：了解いたしました」

逆らう術を失った俺は先生の対面に座る。それと同時に授業の開始を告げる。チャイムが鳴った：

とりあえず、映画の件を話し終えたところでズズズとお茶を啜る。

クラスメイトの皆は元気に汗を流していることだろう：そんな中で、俺は午後のティータイムを楽しんでいる。考えてみれば、とりわけ、言い洩るような事は無いにも無いのだ：

「……予想通りだけど……予想外……」

「何ですか？」

「……ヒム君：寝ると思った……でも……始まる前に寝るとは……思わなかった……」

「あ、あはは……すいません。なんか、映画のチケットを無駄にしちやって……」

「……構わない……私……興味無かったから……で……その後は……どうしたの？」

「その後は喫茶店に行ったんですけど……何やらおかしいことになってですね……」

お茶を啜り、喉を潤した後、俺は話し始めた。

〳〵回想〳〵

映画を見終わった俺達はケーキを食べにブロッサムにやってきた。

綺麗な音のカウベルが来客を告げ…やってきたのは…

「いらっしや…え!?!か、和人くん…と…琴乃さん…」

「よっ、今日もバイトか?大変だな」

ひかりだった。笑顔だった表情は俺と琴乃を見た後、何故か固まっていた

「こ、こちらに…どうぞ」

暫くして、硬直から解けたひかりが席に案内し、メニューを置いて逃げるように行ってしまった。なんなんだ…一体?

「ひかりは此処でバイトしてるのか?」

ひかりの奇行について考えていると対面に座った琴乃が聞いてきた。

「ああ、俺もこの前来たときに知ったんだけどな」

「ユニホーム、可愛かったな…私もしてみるかな…バイト」

「お前が接客業?やめとけ…」

「…理由を教えてください」

…何時もより3割増しドスの聞いた声で琴乃は言う…こええ

「いや、お前みたいな無愛想なタイプは向かないだろ。ま、俺も人のことは言えないんだけどな」

「……確かにそうかもしれない」

そうは言うもののまだ、若干拗ねている感じがする。

そんな琴乃の表情がちょっと可愛かった…

「あれ〜？カズツちじゃん。おひさ〜」

「あ、みどりちゃん。今日も労働？大変だね」

ひかりの次にやってきたウェイトレスはこの間知り合ったみどりちゃんだった。

「まったくだよ。で、カズツちはデートって訳？いいわね〜って！？琴ノンじゃん！」

「翠さん…あ、ここでバイトしてたんですか…」

「……何だ？知り合いかお前達」

お互いに面識があるらしい二人。みどりちゃんの呼び方から察するに結構親しいのだろう。いや、単にみどりちゃんが気さくな性格を

しているからっていうのもあるんだろうが…

「ああ、翠さんは同じ寮の寮生でな。世話になっている」

「そうです！撫子寮寮生NO6瀬名翠！」

世間は狭いな…まさか翠ちゃんと琴乃が一緒に住んでたなんて…そんな事を考えていると…

「翠！！早く注文とって！ちゃんと仕事する！！」

「はいはいと…はあ…ひかりのやつ…八つ当たりは止めて欲しいわ…。で、二人ともご注文は？」

何だ？嫌な客にでも当たったのかな…不機嫌そうなひかりとやれやれといった感じのみどりちゃん。接客をするべきウエイトレスがこんなんでいいのか？とか思いつつ、俺はメニューと睨めっこをしていた…

ケーキを頼み、それを持ってきたのはみどりちゃん、何故か一人分多かった

「これは？」

「ひかりのだよ。あの子、休憩まだでさ。よかったら相席させてくれない？」

特に、断る理由も無いので了承し、未だに不機嫌そうな表情のひか

りが俺の隣に座り、三人でケーキを食べることとなったのだが…

「そのケーキ美味しそうだね」

「だな、この前のも美味かったし、きっと美味しいんだろうな…」

「うん、凄く美味しそう…」

じーっと俺のケーキを凝視するひかり…

「美味しそうだな」

「……………」

「美味しいんだろうな」

「……食うか？」

スッとケーキをひかりの方に寄せた…だがひかりは…

「うん！ あ～ん…」

「なっ!？」

フォークを刺そうとせず、口を開け、あ～ん…つまりは食べさせて♪という訳だ。この行動には俺も驚いたが、琴乃も声に出し、驚きを表現していた…。

「…い、いや、あのな…ひかり…」

「あゝん！」

「…ほら」

何を言っても無駄だろう。結局、俺はケーキを食べさせるてやる…
なんか、前にも似たような事があったような…

「うん、おいし〜」

どうやら、満足したようだ。さて、それじゃ俺もケーキを…

「…和、私にもだ…あ、あゝん」

あんたもですか、琴乃さん…

ひかりにやっというて断るわけにも行かず、同じように食べさせる。
すると…

「和人くん、もう一回！」

「む！？こっちもだ和！」

……お前らな…

結局二人に交互に俺のケーキを食べさせ、俺はといえば一口も食えなかった。ぐすん…なら、最初から自分達で頼めばいいじゃんかよ…

「すまん、全部食べてしまった。お詫びに私のを食べてくれ、ほら、あ、あゝん」

「!?! か、和人くん! こっちのも美味しいよ、はい、あ〜ん!」

「い、いや、別に…ムグ!? ング!?」

今度は二人して自分のケーキを、拒否を示している俺に無理やり食べさせる。。だが、何故だ? 競い合うようにして俺に味わう暇どころか、飲み込む暇すら与えず、次々にケーキを口に押し込んできて…

「モグ!? ム〜! ム〜!」

息苦しい…。し、死ぬ…

(み、みどりちゃん。へ、ヘルプ…)

(…無理♪ごめんね? カズツち)

友情テレパシーver みどりちゃん。まあ…いわゆるアイコンタクトいわゆるアイコンタクトなんだが…それを使い、みどりちゃんに助けを求めるも拒絶された挙句

「くっ、翠さん!! チョコレートケーキ追加!」

「翠! こっちはモンブラン!!」

「はいはい♪ 毎度ありい〜」

「「急いで!!」」

追加オーダーに応じ、すぐさまケーキを持ってきて、二人の前に置き、再び、俺に押し込み始めた…

こいつら一体何がしたいんだ？

ひかりの休憩時間が終わるまで、その寸劇は続き……その日、俺はケーキに対してトラウマが出来た…

一部始終を語り終え、奈緒先生の反応は…

「……青春だね…」

「何処がです！？あやうく死ぬ所でしたよ！！ケーキで窒息死なんて三面記事に載るのは流石に嫌です！！」

ま、載ったときには俺はもう亡き人なんだが…それでも嫌なものは嫌だ…

「…ケーキは…結局…どうしたの？…食べれたの？」

「…気合で飲み込みましたよ……食道が破裂するんじゃないかと思いました」

当分、ケーキは食いに行かないことを誓おう…

「……それで…二人は？」

「今も冷戦状態です…それに、何故かそこに彩花が参戦して…三すくみて所ですかね…」

時より、三人して俺に睨むような視線を送ることがあるのだが…。
何故だ？仲は悪くなかったと思うが…

「……本気で…分からないの？……」

「…ええ、何を考えてるのか、何がしたいのかさっぱり分かりません。奈緒先生は分かるんですか？」

「……なんとなく…分かる…けど…教えない…」

「ええ、意地悪しないで教えてくださいよ」

「…これはヒム君が…自分で気がつかないと…だめ…」

外見は子供っぽいけど、こうして論すように言うのを見ると…やっぱり大人の先生だと実感する…。それに、この人はこの学校で…いや、俺が今まで出あった教師の中で一番、信頼できる先生だ…素直に助言は受け取って…って、は！？

「……ちよっと…恥ずかしい…でも…嬉しい…」

しまった、この人には考えることが筒抜けなんだ！うわ、という事は何だ？俺は、さっき考えたことを臆面も無く言ったことになるのか？

ヤバイ、顔から火が出るほど恥ずかしい…

「…でも…マッキーが担任…マッキーも…いい先生…信頼できる…」

「いえ、そうなんですけどね……あの人……口より先にチョークがでますから。信頼云々以前に、会話が續かないんです」

確かに、親身になって接してくれるという話しなんだが、俺の場合、一言目には「氷室お!!」で、チョークがくる。まあ、悪いことしてるのは俺なんだけどさ……。

「奈緒先生と居ると落ち着くんですよ……元々教師って人種は嫌いだったんです。皆、俺の容姿で不良だなんだ決め付けて……生まれつきだって言っても聞く耳持たずで……」

「……それは……一緒……私も……不気味だって皆……近寄らない……ヒム君みたいな生徒……初めて……」

ああ……なるほど……この人は霞と同じなんだ……

俺と同じ痛みを知ってる……だからこんなにも気が合って……落ち着けるのか……

「……霞って……誰？」

「うえ!?! いや、あの……先生？」

先生は、自分と同じという霞に興味を持ったらしく、詳細を聞いてくる……

「……話して……」

「……あ、そろそろ体育が終わるな。次は紅桜先生の数学か。い、急いで戻らないと……」

「…大丈夫…ヒム君は…気分が悪くなって…ここで寝てるって…言うから…」

おい、それは職権濫用ですよ

「……普段……使い道が無いから……こういうときに…使う」

不敵な笑みを浮かべながら…再び…

「…さ……話す…」

「…い、いえ、これは…俺の問題じゃなく、霞の身の上話でして…本人の許可無くぺらぺら喋るわけには…」

正論立てて丁重にお断りをする…奈緒先生は懐のメスをチラつかせ…

「……話せ…」

語尾が『せ』になってる!?! 一種の脅迫!! 断ればメスで俺を○○するってことですか!?!

殺気がまったく無いのが逆に怖い…じ、冗談だと思っていたんだけど、目が本気だし……あゝでも、霞の事を本人に黙って語るのもどうかと思うし…

「……会わないから……黙ってれば…平気……」

……ごめんよ霞。俺は最後まで勇敢に抵抗した……けどね? 教師と

いう権力とメスには逆らえないんだ…

心の中で、詫びをいれて…俺は霞の事を話し始めた……

――Side Nao Kurobane

霞という人物の事を話し終えたヒム君を教室に帰してあげた。ちゃんと、怒られないように私の言伝を持たせて…

―カチャ

保健室に一人になった私は、ドアの鍵を閉めて、机の上のパソコンの電源を入れ、立ち上がった後、ヒム君フォルダの宿敵ファイルを開く

「……入力と…修正をしないと…」

モニターと睨めっこしながら、私は今日入手した情報を元にデータを入力、修正していく

橘 彩花 危険度SS 備考 ヒム君の家の隣に住んでいて彼に好意を持っている。要注意人物

白樺華蓮 危険度A 備考 ヒム君に惹かれている様子だが、今年クラスも変わったため危険度ダウン。しかし、まだまだ油断は出来ない。

水野ひかり 危険度S 備考 去年、ヒム君と色々あった挙句、

恋心に発展した模様。学園のアイドルで同じクラスという事もある
て危険度上昇。嫉妬深く、積極的。注意が必要。

春日琴乃 危険度S 備考 幼馴染。幼い頃からの記憶を共有
でき、今回の映画で誘われた相手。この事実により危険度をSにあ
げる。あまり積極的ではないが、強敵

美空 霞 危険度X 備考 超要注意人物。人気アイドルであ
り、ヒム君の話を聞く限りでは元彼女として認識しても間違いでは
ない。寄りを戻されたら：勝負が決まってしまう。

カタカタカタとデータを入力しながら、私は考える。

もうそろそろ動かないとヒム君が取られてしまう……

敵に塩を送りつつ、データを収集してきた。ヒム君は私に対して恋
愛感情は持っていないが、信頼してくれてる……なら、もう少しで恋
愛感情に変わるはず……

「……アプローチを……開始……しないと……」

あんな優しく、強くて素敵な男の子は見たこと無い……ヒム君に
彼女が出来たら私に会いになんて来てくれなくなる……だったら、私
が彼女になるしかない

「大人の魅力で……悩殺する……幸い此処は……保健室……」

既成事実さえ作ればこっちの勝ち。そのための作戦を一人ずつと考
えていた……

第23話：修羅場拡散注意報（後書き）

更新完了よ…

琴乃「完了じゃない！この！！」

ひかり「えい！えい！！」

グッ、ガハッ！き、キミ達何を…

霞「ふふ、これは怒りだよ。ボク達をないがしろにした…」

そ、そんなことは…

琴乃「無いと言い切れるのか！？ああ！？」

こ、怖いっすよ琴乃さん

ひかり「ね、私達はなんなのかな？これじゃピエロ…奈緒先生に全部持っていていないじゃない！！」

いやだって、奈緒先生に持ってくつもりだったし…って、待て殴るな。殴らないで下さい…

霞「おまけにまとまってないし…駄目作者！」

うっ！？確かにさ力量不足は認めるよ。でもさ、駄目作者は無いでしょ…

ひかり「駄目なものは駄目なんだよ」

琴乃「そうだな…一回生まれなおして来た方がいいな」

…ひっどい…あんまりだ…。だってさ…仕方ないじゃん。奈緒先生反響が良かったんだもん。書いて楽しんでんだもん！ちなみに次回は紅桜先生だもん！

琴乃「何！？ちょっと今聞き捨てなら無いことを…」

あ、あははゝで、では、今回はこれでバックれます…感想よろしくうううー！

ひかり「あ！？逃げた！！そっちいったよ霞ちゃん」

霞「ま、待て！！」

琴乃「逃がさない！」

第24話：孤狼と歌姫とお隣さん 前編

ここ、春ヶ丘の梅雨の始まりは早い。

しかし、その反面過ぎるのも早く、6月の終わりには梅雨が開ける。そして、今は6月上旬。梅雨の時期に突入し、例外なく雨が降りに降っている。

洗濯物も乾かない、じめじめとした嫌な空気。そんな要素がテンションを下げる。

だが、光琳の生徒達：主に三年は梅雨明けの球技大会に向け皆が燃えに燃えており、テンションは上がる一方である。

しかし、虚ろな目で窓の外を眺めている一人の男子生徒が居た…。

——Side Kazuto Himuro

今日も一日の業務を終えて帰宅する。だが、何時もと違うのは…

「なあ、家に帰れよ。俺ならもう大丈夫だからさ」

「……駄目よ。この時期にあんたを一人にしておけないもの」

でかいポストンバックを持ち、家に泊まる気満々の彩花が居間に居るって事だ。

「はあ……何を言っても無駄なんだろうな……去年も結局帰らなかったし……」

「あんたは……大丈夫って言ってるけど……見るからにテンションが下がってるのよ。ほっとけないじゃない。それに……」

ギュッと両手を握り締め、目にはうっすらと涙を浮かべつつも、視線はまっすぐ俺の目を見て彩花が……

「もう……絶対にあんたをあんな目に合わせないって、誓ったから」

そう告げた。まったく、こう言われたら断る術は無い……

「はいはい……勝手にしてください。涼香お姉さんの許可はあるんだろ？」

俺の問いにコクリと頷く。この時期になると彩花は暫く家に泊まりに来る。

というのも……昔のあの頃の事件が原因なんだが……

駄目だな……吹っ切ったと思っても、やっぱりこの時期になると色々考えてしまう……

そんな考えを振り払うため、晩飯は何にしようかと思案していると……

ーピンポーン

「？ 客？」

誰だ？平日のこんな時間に…

「彩花、出てくれない」

「いえ、あんたが出るべきでしょ。私はお客さんなんだから」

めんどくさいので彩花に押し付けようとしたが、正論で返された。
ちっ、晩飯の支度をしようとしたのに…

出鼻を挫かれるのが一番腹が立つ…

何かの勧誘の類だったらぶん投げてやろうとか思いつつ…玄関に向かい…

「はい、どちらさんですか？」

ドアを開け…

「……コホー…コホー…」

―ボタン！

速攻で閉めた。

「な、なんなんだ？あれは…」

玄関の前にいたのは、黄色い雨合羽を着た人が居た。フードを深めに被り、表情は伺えず、黒い大きな傘を差している。

絵に書いた様な怪しい人……。結構希少な生物だとは思うが、好んで見たいとは思わない生き物である……。って、あれ？

なんか前にもこんなことが会ったような……

「ぼ、ボクだよ。開けてよ先輩！」

その聞き覚えのある声に再度ドアを開けると……

「ひどいよ……いきなり閉めるなんて」

フードを取った下から出てきた顔は……

「霞？」

いまや、人気アイドルにしてこの間再会を果たした白き歌姫。美空霞だった……

「まったく、来るなら来るって言ってからにしろ」

「電話したよ！でも、先輩携帯に出ないんだもん！」

「……ああ……そーいや壊したんだっけ」

この間、朝起きたら携帯電話が壊れていた。

これで何度目だろう……。寝ているときにあの耳障りな音がなると反射

的に壁に投げつけるらしく、寝る前には電源を切るのだが時々忘れる時がある。

そして、そういう時ほど電話がかかってくるものだ…。世の中不思議だよな。

そんな事を考えながら、霞を座らせ、お茶の用意をしつつ、二人分のお茶を淹れて俺も対面に座った。

「で、仕事はいいのか？」

「うん。お休み貰ったの。だから会いに着たんだ！」

ズズズとお茶を啜りつつ会話する。あれ？なんか忘れてるような…。なんだろう…。思い出さなきゃ大変なことになるような気がするんだが…。現に、嫌な汗を掻いているし

どうにか思い出そうとするが思い出せない…。

「先輩？どうしたの？」

「ん？ああ、なんでもない」

霞に声をかけられ、考えるのを止めた。思い出せないならたいした事じゃない。うん、そうだ。そうに決まってるさ。

お茶を飲んで、そう自己完結しようとしたのだが…

『和人ー！ー！シャンプー！忘れたから借りるわよー！ー！』

「！？　ゲホッ！ー！ゴホ！ー！」

出来なかった…

「せ、先輩…い、今の声…」

咽ている俺に驚きに染まった表情の霞が問いかける。

ま、待て待て。落ち着くまで待ってくれ…

「…はあ…はあ…」

「……………」

ようやく落ち着いたのだが…い、痛い…じとーといった感じの霞の視線が俺を射抜く。ってかさ！彩花さんよ！普通、許可無く人のうちの風呂に勝手に入りますかねえ！！

「で？今の声は何？」

無表情となった霞が若干低い声で聞いてきた。俺はといえば、場の雰囲気から何時の間にか正座で霞の対面に座っていた。

「お、お隣さんに住んでいるお嬢さんの声だ…此処まで聞こえるなんて、余程大きな声だな」

う、嘘はついてないぞ。

「へえ、で！？なんでその隣の住んでいるお嬢さんが先輩の！シヤンプー借りるとか言うの！」

「な、何でなんだろうね？俺にもわかんないや」

く、苦しい……どないせえっちゅうねん

どうにかこの場を収める方法は無いかあれこれ思案する。だが、俺のこの行動は全て無駄になった……何故なら……

「パジャマも忘れちゃったから借りてるわ……よ……って？え？」

「なっ！？」

涼香さんが洗って置いてくれた俺のパジャマを着た彩花さんが髪を拭きながら居間に入ってきたからだ。ぶかぶかな格好が中々に可愛いじゃないか……って、待て、待つんだ俺！

自分に待ったをかけ、状況を整理する。うん、まさに最悪なタイミングでのエンカウトだ……。

幸いなことに二人とも固まっている。よし、今が好機だ！

とりあえず……

「あ！ご飯の材料が無いや！ヤバイな！買い物行かないと！！んじや、行ってくるから留守番してくれ！！じゃ！！」

逃げることにした。

「え!?! あ、ちょ、ちょっと!?!」

「せ、先輩!?!」

二人が俺を呼ぶ声が聞こえたが、耳を貸さず、一気に傘を持ち、家を飛び出た。

――Side Ayaka Tatibana

「……………」

「……………」

和人が出て行った後、私達は互いに向かい合わせで座っており、沈黙がその場を支配していた。

時折、私を睨むような視線を感じるのが気になるけど…とにかく、今は、そんなのは些細な問題だ。そう、一番重要なのは…

そんな視線を送ってくるのが、良く知っている、人気アイドル『Sora』だって事だ。

――Side Kasumi Misora

間違いない…あの人だ。

先輩の家の前で仲良さそうにしていた女の人。

なんで、先輩の家のお風呂に入ってたんだろう…ボクも入りたいな…って、違うって。そこじゃないでしょ！問題は！

彼女なのかな？でも、先輩はいないってこの間言ってたし…そ、そうだよ！きっと違うボクは先輩を信じる！

だから、ちゃんと聞こう。

そう思って口を開きかけたけど…

「ねえ…間違ってたら謝るけど…あなたってSoraだよ？あの人気アイドルの」

先手を打たれてしまった。って、べ、別に争っている訳じゃないから！お、落ち着け、落ち着くん…

「はい…確かに私は芸能界ではSoraと名乗っています」

「そうよね…で、なんでそのSoraが此処にいるわけ？」

うう…この人苦手なタイプだ…物怖じしないでぐいぐいって聞いてくる…活発な人だ。

先輩はこういう人がタイプなのかな…

「先ば…氷室さんには以前お世話になりました…その時から良くして貰っているんですよ」

ふう…危ない危ない。地のボクが出ちゃうところだった。気軽に先

輩なんて呼んだらきつと迷惑になっちゃう。ここはS o r aとしてのキャラを貫き通さないと…

「以前？それって、ここ二、三年の話じゃないわよね…私ずっと一緒に居たけどそんな話聞いたことないし…」

―ピク…

ずっと一緒に居た！？ぼ、ボクはずっと会えなかったのに！！

「た、確かに再会したのは最近だよ！でもそんなの関係ない！！ボクと先輩はもっと深い絆で結ばれてるんだから！！」

「…なっ！？」

…あ。やっちゃった…思わず立ち上がって、地のボクのままで宣言してしまった。

相手の人も、凄く驚いた顔でボクを見ている…と思いきや…

「深い絆！？何言ってるのよ！！私の方がね！！ずっと和人との絆は深いわよ！！」

「…えっ！？」

反応したのは絆と言う部分だった。立ち上がって、そんな事を言うって、待ってよ。今のは聞き捨てならない！

「つい最近現れたあんたには絶対に負けないわ！！過去にどんなことがあってもね！」

「待ってよ！あなただって今の今まで一緒に居て相手にされてないんでしょ！？先輩は彼女いないって言ってたもん！！」

「なんですってええ！！」

「やりますか！！」

喧嘩なんてしたこと無いけど…でも、この人だけには負けない！玄ちゃんもいった。恋する乙女のパワーは何者にも勝る力だって！

暫くにらみ合った末、結局喧嘩にはならなかった。

相手の人が…

「ふう…やめましょ。ここで喧嘩して決着付けても意味無いわ」

と言い出し、座ってしまったからだ。

「そうだね。あなたと喧嘩しても先輩は悲しむだけだと思うから」

そう言っただけでボクも座る。すると怪訝そうな顔で相手の人が…

「ねえ、そのあなたってのは止めて。私には橘彩花っていう名前があるから」

「…分かったよ橘さん。ボクは美空霞。そっちが本名だからそっちで呼んでください」

ようやくお互いに名乗り合って、少しは歩み寄れたかなと思い始めたのだが…

「……今、何て言ったの？」

「え？」

「名前！今なんていったの！？もう一度言ってくれる！？」

真剣な表情。何故か目には怒気が込められている。そんな表情で私にやや低い声で聞いてくる橘さん。

「み、美空霞です…」

若干、気圧されながらもなんとか答える事が出来た…。でも、どうしたんだろういきなり…

「そう…あんたが、霞さんなの……」

それだけ言って、橘さんは静に立ち上がり、私の所に歩いてきたかと思うと…

「え！？」

今、一瞬何をされたか分からなかった。

熱を持った左頬がジンジンと痛みを伝えてくる。

左手でその部分を押さえながらボクはようやく理解することが出来た…

「な、なにをするの!?!」

そう、ボクは橘さんに平手打ちを喰らったのだ。一端、停戦協定を持ちかけておいて不意打ちなんてやるのが姑息だ。けど…

「っ!?!ご、ごめん! 本当にごめんなさい!! あなたが…霞さんが悪く無いのは分かってるの! 分かってるのに止められなかったの!」

どこかおかしい。こんなに必死に謝るなんて…みれば、瞳にはうつすらと涙が浮かんでいる…

「あの事と、あなたは関係ないのに…。けど、あなたがいればあはならなかった。ずっと前からそう考えて、あなたの名前を聞いたら。自然と体が動いちゃっのよ」

「な、何を言って…」

橘さんの言っている事が全然分からない…

「っ!?!そ、そうだ!! か、和人…和人は!?!」

「先輩なら買い物に行くって言ってたじゃないですか…」

「駄目…駄目!! 和人を一人にしちゃ!! 探しに行かないと!!」

「ちょ、ちょっと。落ち着いてください!! どうしちゃったんですか!?!」

本当にどうしちゃったんだろう…明らかに様子がおかしい。

ボクはパジャマ姿で出て行こうとする橘さんも腕を掴み、必死で止める…けど……

「離して!! 離してよ!! 私は誓ったのもうあいつをあんなふうにしないって!! だから行かないと!!」

振り払い、先輩を追おうとする。完全に理性を失ってる…何があなたをこうしたのかは知らないけど…

「ごめんなさい!!」

「っ!？」

ボクはおもいきり橘さんの頬を叩いた。これで少しは冷静になってくれるといいんだけど…

「…はあ…はあ…あいつを追わないと……」

冷静にはなってくれたけど…まだ先輩を追おうとする。

「落ち着いて…先輩なら大丈夫。すぐに帰ってきますから」

「……そんな保障は何処にもないじゃない……あんたは、あいつのあの姿を見てないからそんな事が言えるのよ」

「何があなたをそうさせるの? あの姿ってなんです! ? あなたと先輩との間に何があったんですか! ?」

私の問いに答える前に、橘さんは玄関から聞こえた声に反応し駆けていってしまった。

一体なんだっていうのだろう…けど、はっきりしているのは…

それはとても辛かった出来事で私が居れば回避できたかもしれない事柄であること…そして…

先輩についてのとても大事な出来事だったって事だ…。

第24話：孤狼と歌姫とお隣さん 前編（後書き）

更新完了。

……シリアスな上に、うまくまとめきれていね。あ、あははは

奈緒「…力不足……無能…」

ぐっ…か、霞ちゃんが居ない間の代役って…

奈緒「…私……それと…」

麗「私だ。前話のあとがきで私が出てくるとい話ではなかったのか？」

だ、だってさ、何時の間にかメインヒロインのはずの彩花ちゃんが存在が薄くなっている上に、このままいくと過去編にいくきつかけなくしそうでさ…。当初はね、GWの後ぐらいに持ってくるつもりだったわけなんだよ。

奈緒「……私は…許してあげる…」

ほ、ホントですか？

奈緒「…ヒム君の…過去の情報が……手に入るから…」

麗「私も…球技大会で出番があるのは確定しているようだから構わないが…読者がなんというかな？」

そうなんだよね…コメディーなのに過去編だとしてもシリアスになってしまふのだ。つか、不良って設定上それはしかたなくね？

麗「開き直ったな…なんとふてぶてしい」

奈緒「その辺に…しといて…あげて…それと…私についての感想…ありがと…」

麗「あ、私もそれを言いに来たんでした。えゝゴホン。こ、このたびは、お、お日柄良く」

次回！氷室和人の過去が明かされる！和人と彩花に何があったのか！？何も考えてないスチャラカ作者で本当に書けるのか！？

麗「お、おい！待て、まだ話しの…」

奈緒「…書け……」

メスで脅され、風邪気味の身体でパソコンに向かう…次回もまたこのチャンネルでお会いしましょう。さようなら

奈緒「……感想…ありがと…」

麗「あ、黒羽先輩！私の台詞とらないでくださいよ！」

第25話：孤狼と歌姫とお隣さん 中編

—Side Kazuto Himuro

「た、ただいま…」

最悪だ…

買い物をして時間が立てば少しはほとぼりは冷め、美味しい料理で
ご機嫌を取ろうとしたのだが…

「まさか、財布を忘れるなんてな……」

歩いてる間に、その事実気づき、とぼとぼと帰ってきた。

くそ…こうなったら、やってやろうじゃないか。

彩花の拳でも、蹴りでも、机投げ…は、勘弁して欲しいけど、と、
とになく受けて立ってやる！

さあ、来るなら来い！！

そう思ったのもつかの間…

——ドタドタ

「!？」

来た…奴が来た……

グツと身構え、攻撃に備える。下手に避けると收拾がつかなくなり、余計酷い目に合うのは過去の経験から分かっている。だから、甘んじて受けよう。こ、怖くなんかないぞ！

「和人——！」

叫びながら駆けてきたのはやはり彩花。そして、そのまま……

「……え！？？」

殴られると思いきや、ドンと体当たりをされた。

いや…違うな…体当たりのわりに痛くない……。

「彩花？」

「よかった…ちゃんと帰ってきた……グス…よかったよお……」

ドアを背にした俺の腕の中で、胸に顔を押し付ける彩花……それに……泣いてるし……

彩花のこの症状に思いあたる節が一つだけ……

「……大丈夫…大丈夫だから。もう、あんな事にはならないから」

優しく彩花を抱きしめてやる。

「うん…うん……護るから……私が護るからね……護る……から……」

何時も、強気で活発で元気な彩花がこんな風になってしまう原因を作ったのは、あの日の俺の弱さだ

本当にごめんな彩花：

心の中で詫びながら俺は、彩花が落ち着くまでずっと抱きしめるのだった：

その後、落ち着いた彩花を連れてリビングに戻ると：

「先輩…」

「あゝ。悪いな、お前にも迷惑かけたろ？」

「……和人が黙っていなくなるから悪いんだもん…」

「ちゃんと、買い物に行くって言ったぞ？」

「…許さないもん」

駄目だこりゃ…。今の幼児退化している彩花には、何を言っても無駄だ。

拗ねたりすると時々こうなる…まあ、これはこれで滅茶苦茶可愛いんだけど。普段どのギャップが余計そう見させるのだろう…

そんな事を考えながら、彩花を落ち着かせるため頭を撫でていると…

「…先輩、何があったの？橘さんとの間に…」

「……別に何も…」

「嘘だよ！！何かあったんでしょ！？それにボクも少しは関係してるんでしょ！？橘さんボクの名前が出てそう なっちゃったんだもん！！」

「…そうか…それが原因か…霞の名前を聞いて、当時の事を思い出しちゃったのか…」

あゝ、自分が嫌になる。こうなることは少し考えれば分かったじゃないか。

「……ねえ…話してよ……」

ふう…霞にこう言われたら話すしかない…元々霞には話しておくのが筋つてもものだったのだ…

けど、これを話したら霞がきつと傷つく…いや…違うな。そんな綺麗な理由じゃない。ただ、おれ自身が語るのを嫌だっただけだ…

「わかったよ…けど、一つ言っておく、これはあくまでも過去の出来事。もう終わったことだから。その辺を踏まえて聞いてくれよ」

俺の言葉に霞が頷いたのを見て、俺は語りはじめた。

〳〵回想〳〵

爺ちゃん…

三年前の梅雨の始まり。その日は雨が降っていた…

「…なんでだよ…なんで、皆…俺の前から居なくなるんだよ…」

前から病気を患っていた爺ちゃん。あんなに恐ろしく強く、元気だった爺ちゃんが…信じられないが、それは真実で、今年に入って床に伏せる事が多くなり、俺は学校を休み、必死で看病したのだが…結局…爺ちゃんは父さんと母さんの所にいつてしまった。

親類と縁を切っており、本人の希望もあって葬儀はほぼ密葬。俺と爺ちゃんの親友の武術のライバルである寺の和尚の三人で行った。

そして、仏間の壁に寄りかかりながら、何も言わない仏壇の三人の写真に語りかけた。

もう…何もする気が起きなかった。

何も考えられなかった…

ただただ、俺は座って虚空を眺めていた…

何日過ぎただろうか…時間の感覚が希薄になっていった

全身に力が入らない……あの日から寝てもいないし、食事も取つてない。漠然と、虚空を眺めていただけだ。

死のうと思った訳じゃない。でも、生きたいとも思わなかった。何もする気が起きないのだ……その結果、どうなろうとどうでもよかった。……

意識が薄れる……現実か夢なのかも曖昧だ……ただ、昔の事を思い出す……中でも以前霞に言った言葉……

『生きたくても生きられない人間も居るんだ！死ぬなんて絶対に許さない！』

よくも、あんな偉そうなことがいえたまんだ……

あんなことを言った自分が、まさに許せない行動をしているのが笑えた……

でも、俺には家族なんて居ないから……。悲しんでくれる人、待っていてくれる人はもう居ないから……

あ、でも……

霞、約束護れそうにないや……ごめんな……

世界が傾く、いや、自分が傾いているのか……

ゆっくり目を閉じる。もう目を開ける力も残ってない……

父さん、母さん、爺ちゃん…

目を瞑ったら、きっとまた会えるよね？

薄れゆく意識の中で、俺は遠い昔に聞いたような…懐かしい人の声を聞いた…

目が覚めると、視界には見知らぬ天井が見えた。

「……ここは？」

明らかに自分の家じゃない。それに、視線を横に向けると腕には点滴の管が繋がれており…

「…すう…すう…ばか…」

同じ中学の制服を着た女の子が椅子に座って寝ていた。

そして、俺はそいつに見覚えがあった。

ここに越してきたときに何かと話しかけてきたお隣さんの一人娘だ。もっとも、無視した挙句、険悪なムードになりそれ以来話した事はないが…

そいつの名は橘彩花。当時、俺と同じクラスで学級委員長を努めている活発な女子生徒であった…

「そ、そんな…」

此処まで話し終えると、そんな声が聞こえてくる。啞然としているのは霞…

「先輩が……まさか…」

「いやゝあの時は死にかけたよ」

暗いその場の雰囲気明るくしようとしてそう言ってみたが…

「何言ってるのよ馬鹿!!」

「ふざけてる場合じゃないよ!!」

「…ご、ごめんなさい」

二人に怒られた…

彩花は怒鳴りながら目元には涙が浮かんでいる。幼児退行からは戻ったものの、今度は泣きむし彩花モードに突入してしまったようだ…

「わ、私が来なかったら…本当に危なかったんだから!冗談じゃ済まなかったんだからね!!」

「…その事には感謝してるよ…」

これは本当。彩花は正真正銘俺の命の恩人だ…

「…：私がいればこうはならなかったんだよね？」

「霞？」

声を震わせ、俯いてそんな事を言う霞。

「だって！先輩をそこまで孤独に追い込んだのはボクだよ！？ボクさえ残ってれば、きつと先輩を励ませた！慰めることも出来た！それなのにボクはアメリカでのうのと…」

「…：それは違うぞ、最初に言っただろ、もう過去の話だからって。俺は生きてるし、お前の腕は治ってプロデビューした、丸く収まってるんだからそれでいいだろ」

それに、のうのうとは言うけど、どれだけ必死にリハビリを頑張ったのかは俺にだってある程度の想像はできる。

「お前はな怒っていいんだよ。約束破るつもりだったのかー！ってな」

「で、でも…橘さんは…」

「だ、だから、謝ってるじゃない。あれは八つ当たりだったのよ！だって、むかつくじゃない。私がいっつを病院に連れて行ったときさ、ずっと『霞…ごめん…ごめんな』ってうわ言を言ってるんだも

ん！」

彩花は一体、霞に何をしたのだろう……

「…でも、橘さんに迷惑をかけた……あの事件がきっかけで橘さんは、えっと…取り乱しちゃうようになったんだよね？」

「そ、そんなに取り乱してないわよ！！」

「…知らぬは本人ばかりなりってね…。まあ、それは置いといて、違うんだよ。彩花がああなった原因はこの後なんだ…」

当時、ひねくれていた悔やんでも悔やみきれない行動。

その行動があったからこそ、今の俺達の関係がある。でも、彩花を酷く傷つけてしまった…

「…全部聞かせてくれる？」

霞の言葉に頷いて、俺は続きを語り始めた。

〳〵回想〳〵

こんなところ一秒だって居たくない…

俺は病院が嫌いだ、父さんも母さんも助けてくれなかったし、爺ちゃんの病氣も治してはくれなかった…

繋がれていた点滴の管を乱暴に引き抜き、ベットから降りる…

「…くっ…」

ベットから降り、地面に立ったが、体がふらつく…力が入らない…

「…はあ…はあ…」

壁に手を置きながら、一步一步外に向かって歩く。時刻はもう深夜ということもあり、幸い誰にも会わず事無く病院の外に出来ることができた。

外は梅雨という時期ということもあってか、土砂降りだった。そんな中を、傘も差さず家に向かって歩きすが…

「…はあ…はあ…くそ…体が重い…」

服が雨の水を吸って余計に重くなる…

視界が歪む…視界が傾く…

―ドシャ…

結局、俺は家に辿り着く前に倒れてしまった…

駄目だ…もう動く力も残ってない…

雨水で体がどんどん冷えていく…

「は、はあ、はあ…あ、あんた!!何してんのよ!!」

そう叫びながら、俺を抱き起こそうとする…

「お前は…：橘」

「あ、あんた馬鹿じゃないの！自分が今、どんな状態か分かってないの！？何考えてんのよ！！！」

力の入らない俺を担ぐように背負うと、橘は病院に向かってゆつくりと歩き出す

「降ろせ…俺のことはほっといてくれ」

「はあ…はあ…嫌…よ、ほっとけるわけじゃない！…はあ…はあ…あんた本当に死んじゃうわよ！！！」

「別に、それならそれで構わない…：」

どうせ、生きていても仕方が無い。

「っ！？どうして…？どうしてそんな事言うの！？ふざけないでよ！！そんな事して誰が喜ぶって言うのよ！！悲しいだけじゃない！！！」

「…：居ない…：」

「えっ！？」

そう、もう居ないんだ…

「喜んでくれる人はもう誰も居ない…悲しんでくれる人にももう居

ないんだ……なあ、もういいだろ？」

もう…疲れた……

俺は力の限りを尽くし、立場なの背中から降りそのまま地面に座り込む…

一人で居ることに慣れていたつもりだった。けど、実際は爺ちゃんが傍にいてくれた。だから、俺は今日までやってこれたんだ……けど、爺ちゃんももう居ない…

「辛いんだよ……一人で居ることが……。怖いんだよ……人と接することが、また、俺の前から居なくなってしまう気がして…」

「っ！？だから死ぬって言うの！？そんなの絶対におかしい！！死んじゃったりしたら何もならないじゃない！！！」

座り込んだ俺に対し、橘も屈んで俺の肩を掴みながらそう告げた。

どうして…そんなに怒っているだろうか？俺には分からない…わからなかった…

「…死にたいわけじゃない……けど…生きたいとも思わない」

そう、死にたい訳じゃない、死にたいなら手首を切るなり、首を吊るなりすればいいのだから。けど、生きたいとも思えない。もう…何もしたくない…

「…同情は要らない。お前の自己満足に付き合うつもりもない。ここで、俺を見捨てるのが苦しいならこのまま病院に連れて行った

後で家に帰ればいい。その後で俺がどうなるうが、お前の責任にはならない」

「……ふざけるな……」

俺の言葉に答えた橘の声は、涙と怒りの入り混じった声で、小さくとも心に響くように聞こえた。

そして…

「同情なんかじゃないわよ！自己満足でもない！あんたさっき言ってたわよね！死んでも悲しんでくれる人が居ないって、生きてて喜んでくれる人が居ないって」

そこまで捲くし立てると、涙と優しさを含む声色に変わり、包み込むように両手を広げて俺の顔を自分の胸に抱き寄せながら…

「私は悲しいよ？私は生きてくれたら嬉しい……一人で辛いつて言うのなら…私が一緒に居てあげるから」

「っ！？」

もう…誰の言葉も届かないと思っていた…。けど、その言葉は…紛れもなく俺が一番求めていた言葉で…スツと心の中に入ってきて…

「う…、うあ…あ…」

「…私が孤独という魔物からあなたを護ってあげる…。いつか、あなたが一人じゃなくなるその時まで…私が護ってあげる…」

何時以来だろう…

父さん達や爺ちゃんが死んだときも泣けなかったのに…

雨に濡れお互いに冷え切っている筈なのに、何故か暖かくて…

その温もりを感じながら、俺は橘の胸の中で声を上げて泣いた…。

第25話：孤狼と歌姫とお隣さん 中編（後書き）

更新完了…したのはいいんだけど…あれれ？

奈緒「……どうしたの？…」

う、うん。あまりにヘヴィな話しだから所々にコメディ要素を混ぜただけど…なにやらゴチャゴチャしたこと…

麗「ふむ…けど、友人の合格は貰ったのだろうか？」

うん、リテイクはとりあえずされなかった。だから更新したんだけどね。

麗「なら、問題ない。そもそも、更新してから言い出したのでは手遅れだしな」

そ、そうだよな。今回頑張ったしね、熱にうなされ、メスに脅され、面接の準備に追われながら…

奈緒「……注射の方が…よかった？…」

え、遠慮しますです

奈緒「……そう……すぐ治るのに……」

麗「ま、まあ。いいじゃないですか。と、それよりも、友人からの質問があるのだが…」

ああ、はいはい。先生達の年齢はどうなっているのかだね？その辺は気になっている人もいるから、此处で言うね。ま、年を言うのはメスとかチョークとか刀が怖いから伏せるけど。序列は：

奈緒＞恋Ⅱ真希＞麗

という感じ。なんと、奈緒先生が年下に見えて一番の先輩なのです。

麗「私が敬語を使っていたから気づいた人も居ただろうけどな」

奈緒「……それよりも……お話について……」

あ、そうだね。えっと、今回はとりあえず過去編の一部ってか、一番の暗い部分」

奈緒「……ヒム君…撫で撫でして…あげたい…」

麗「まだ若いのに…なんて強い人……」

先生両名から支持率アップ！そして、彩花ちゃんの人気は果たして上がるのか！？確認しとくが彼女がメインの中のメインヒロイン！（当初の予定）です！

さてさて、では、今回は此の辺でさようなら。感想本当にありがとうございます。

第26話：孤狼と歌姫とお隣さん 中編その2

—Side Kazuto Himuro

「……グス…せんぱあい…」

「…和人お……」

ここまで語ったところで、女性陣二人に涙ながらに抱きつかれる…

「お、おい…」

「辛かったよね？…ごめん…ごめんね？ボク何も知らないで…」

「大丈夫…もう一人じゃない…私が居るからね？」

……あの…。だから、過去のお話だって言ってるじゃないですか。
てかさ、知ってるはずの彩花まで…

けど、無理やり振り払う訳にも行かず、為すがままになる…。ああ
…とつくに晩御飯の時間過ぎてるよ…腹減ったな……

そんな事を考えていると、やっところさお二人さんは離れてくれて…

「…橘さんが…ああなっちゃうのも分かるよ……」

「あゝ、ちょっと違うんだな。直接的な原因はこのもうちょっと後、
笑えるような笑えないような話があってな…」

「笑えないわよ！！あの時ねえ、わ、私が…ど、どんな気持ちだったか…」

そんな事言われてもさ…あれはどうしようもないでしょ？まあ、無考えだった俺も悪いんだけどさ…

――Side Ayaka Tatibana

あの日のことは絶対に忘れないわ…

〳〳回想〳〳

あの後、氷室君を背負って病院まで帰ってきた。

病室着き、看護婦さんと呼んで互いにタオルで濡れた身体を拭き、処置をしてもらった後、私達はこっそり怒られた。

「ったく、このガキヤ…いらねえ手間かかせんじゃねーよ！こちら忙しいんだつうの！今度やったらドタマカチ割るぞ！ああん！！」

随分とガラの悪い看護婦ね…でも、悪いのは私達、というか氷室君なんだけど…。

「す、すいません！あ、それと、面会時間過ぎてるのに、黙って部

屋に残ってたりして……すぐに帰り……あの、今晩は泊まっていっていいですか？」

私の謝罪して、駄目もとでお願いしてみる。今のこいつはこいつを一人にしないで傍に居てあげようと思ったからだ。

私の言葉に、看護婦さんがひらひらと手を振り……

「別にいいぜ。もう面会時間は過ぎてるしな、けどな。そのままだとおめえも風邪引いちまうぞ。院内にある風呂用意してやるからついて来い。なあに、気にすんな。バレねえようにしてやっからよ。親御さんにはいつてあんだろ？」

「いえ……まだ。この後電話で友達の家泊まるって言うておきます」

放任主義な家の両親は電話さえすれば外泊を認めてくれる。あ、でも……後で誰かに口裏合わせてもらわないと……。流石に今の状況を説明するわけにはいかない。

私の言葉に、看護婦さんは感心したように頷き……

「おおやるねえ……それでいいんだ。若い頃にしかできねえからな、いい経験になるぜ。後で後悔するからな。っと、ちっ、ここ禁煙だった」

タバコを啜えながら、そう悪態をつく。ついて来いと私に言う。私がそれについていこうとドアまで行ったところで……

「……もう、逃げちゃだめだからね」

「…ああ」

念のため、釘を刺しておいた。

「すみません。何から何まで…」

「いって。あ、その下着一式はやるから」

お風呂で温まって、お母さんに電話をし終えて病室に戻る道すがらでお礼を言った。

看護婦さんは着替えまで用意してくれて、まさに…至れり尽くせり…後でちゃんとお礼をしに伺わないと…

「着てた服は洗って乾燥機にかけといたからよ。今日のところはそれで我慢してくれ。っていても後は寝るだけだから別に構わねえよな…あ、それとだな、あのガキの隣のベッドが空いてるから寝るならそこ使っていいぞ」

彼の病室は二人部屋。隣には誰もいなかったから、そこで寝るように言っているのだろう…って、ちよつと待って

「そ、それは流石に…。そ、その…いくらなんでも一緒に部屋で寝るわけには…」

「大丈夫だろ。あんなフラフラな奴に襲う体力なんてねえって、あ、それとも…おめえがムラムラしちまうってか？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる看護婦さん

「そ、そそそそんな訳ないじゃないですか！」

「ケケケ、どうだかな。あ、マニアックなのが希望ならあたしの替えのナース服貸してやるぞ？」

多分、私の顔は真っ赤だっただろう…

そんな風にからかわれながら病室に戻ってきてドアを開けると…

「…え!？」

「……ちっ、あのガキ…」

ま、まさか…だ、だって約束したじゃない。もう逃げないって…

彼が寝ているはずのベッドの上は…もぬけの殻になっていた。

どうして? 信じてたのに!!

慌てて、また外に探しに行こうと振り返ると…

「キャ!？」

「…ぐっ」

ドン！っと人にぶつかって、その人を押し倒すような形で床に倒れてしまった…

「ご、ごめんなさい。急いで…って、氷室君！？」

「……何かあったのか？」

「何かあったのかじゃ…ないわよお……ばかあ」

S i d e K a z u t o H i m u r o

なんなんだろうこの状況…

病室のドアを開けた瞬間、橘に体当たりをされて、そのまま押し倒されたかと思ったら、わんわん泣き出す始末。

とりあえず、小さい子供にするように頭を撫でてみる…

「う…ぐす…ばかあああ」

…泣声が増し強まってしまった。

「どうして？居なくなっちゃったのよお、信じてたのに…」

どうやら、俺が黙ってまた消えたと勘違いしたらしい。

「…トイレ行ってたんだ」

自分だけで歩くのはかなり辛かったが……尿瓶にするのは抵抗があったからな

「……で？」

「いや、なんでそんなジト目で俺を見るんだ？」

「当然だよ！トイレ？折角いい話だったのに……ぶち壊しだよ！」

いや……そうは言われてもな……避けては通れないだろ

「あ、あの時の気持ち……私は絶対に忘れないからあ」

「だ、だから何度も謝ってるじゃないか」

だから嫌なんだよ。この話するのは……こうなった彩花を宥めるのは一苦労なんだぞ。

その後……看護婦さんがベットを用意してくれたのだが、彩花は俺の手を握ったまま椅子で眠ってしまい、退院してからも毎日俺の家に通いつめる始末……。信用無いな……俺って

涼香お姉さんから

『あら♪どうせなら同棲しちやいなさいよ』

とか言われた事が懐かしい……まあ、それは当然断ったが……

高校に入ってくらいにやっと普通に戻ったと思ったら…

「ねえ、最近…元気ないわよ…まさか……」

「いや…ちよつとな色々思い出しちゃって…」

梅雨の季節になると爺ちゃんの事を思い出す。そんな俺が暗く、また危ないように見えると彩花が言い出して…

そこから毎年梅雨の季節に彩花が泊まるという行事？が始まったのだ。

説明を終え、何気なく時計を見る。あーあ、今から買い物行くと相当遅くなるな…有り合わせで我慢するか…出前は高くつく分、はずれがあるからな

そんな事を考えていると、説明を聞き、なにやら俯いている霞が…

「……………る」

「ん？」

「ボクも泊まる!!」

「「……はあ!?!」」

とんでもない爆弾発言を落とした…思わず彩花と声を揃えて反応してしまった。

「そんな話を聞いたらほっとけない！だからボクも泊まる！！ううん、今住んでるマンション引き払ってここに住む！！」

「お、おい…」な、何言ってるのよ！！あんたね、自分の立場分かってるの！？」…おい…」

「分かってる！！ボ（・）ク（・）の先輩の為だもん！なんなら芸能界を辞める！！」…もう少し…考え…」…文句ありますか！？」

おいおい、どうしちゃったんだ霞は…というか俺の発言は無視ですか？

彩花は彩花でワナワナと怒りに打ち震え…

「文句あるに決まってるじゃない！！和人はね！あ（・）た（・）し（・）の！あたしが面倒見るの！！」…ちよつと待て…」…新参者は引っ込んでなさいよ！！」

「なっ！？新参者じゃない！ボクと先輩には物凄く深い絆があるんだから！「俺の話を…」…あなたこそ！たまたま隣に住んでるだけじゃないですか！？」

「なんですってえええ！！」

「って、お前らしい加減に…」「煩い！黙ってて！！！」…はい…」

……冬至の家にでも泊めて貰おうかな…

でもなあ…それやったら、二人から物凄く怒られそうな気がするんだよな…。

そもそも…喧嘩の原因はなんだ？俺か？俺が悪いのか？でも、特に何もしてないんだけどな……とりあえず…

「飯でも作ろう…」

怒鳴りあっている二人を無視することにし、台所に向かおうとしたところで…

二人の目がキュピンっと光る。うわ、怖い

「なら、勝負よ…負けた方が出て行くの…」

「いいですよ。ボクもそう考えてた」

何故、そんな結論に到達するのだろう…

「お題は…料理よ!!」

「どっちの料理が先輩に喜んでもらえるか…勝負!!」

しかもよりにもよって料理かよ!!お前らな…自分の力を自覚して
るくせに、なんでそんなに自信満々なんだよ!

二人して気合十分で台所に突貫していく…その後ろ姿を俺はただただ眺めながら…

「はあ…」

重いため息を吐いた。結果は見えてるからだ…二人の後を追って台所に入ると、案の定…

「うう…せ、先輩…」

「はあ…霞、向こうで休んでろ」

真っ青な顔で立ち尽くす霞の視線の先には彩花が持った包丁…

刃物恐怖症というのだろうか？左手が動かなくなったときの事件以来、霞は刃物がトラウマになっているのだ…

あと、血液恐怖症も同様に抱えてしまった…。怪我は治ったとはいえ心はまだ癒えていない…何とかしてやりたいんだけどな…

「つたく、無茶するなよ…こうなることは分かってたろ」

「うう…だって…具なしのチャーハンなら刃物使わないから作れると思ったもん…橘さんは思わぬ伏兵だったよ」

米オンリーかよ……せめて、卵くらいは入れて欲しいぞ。つか、他人が包丁使ってるのを見ても駄目なわけね…ああ、昔から俺が料理してる時に一度として手伝いに来たことなかったのはそんな理由があったからなのか…

ともかく、次は…彩花か…

「…うう…勝負に負けちゃう」

「大丈夫だと思うぞ。さて、俺は胃薬でも用意しておくか」

場合によっては救急車も必要かもしれん。そんな俺の行動を不思議そうに見ている霞。まあ、百聞は一見にしかず。ここは説明をせず黙ってみていれば、俺の行動が理解できるだろう。

「〜♪よし、味付けOK」

しばらくして、台所では彩花の鼻歌を歌いながら、楽しそうに料理する彩花の姿が。作っているのは家にあった材料を駆使した野菜炒めである…うん、いい匂いが家の中を満たしているな…

けど…

「……………」

——バタッ

「…え？」

「…やっぱりな……………」

味付けを確認するため味見をした彩花だが、そのままの姿勢で硬直して…倒れた。

「よっと…」

倒れた彩花を抱きかかえてリビングのソファーに寝かせる。症状は

……B一つてどこか。なら、暫しの休息と胃薬で大丈夫だろう。あまり、凝った料理じゃなかったのが幸いしたな。

「ど、どうなってるの？あんなに美味しそうだったのに……」

「ああ、見た目と匂いはな……だが、惑わされるなよ」

彩花の料理……それは恐るべき毒物料理だ。

何が恐ろしいかというところ……見た目、匂いは完璧。いや、むしろ食欲を誘う魔性の料理だ。だが、魔性の料理とは良く言ったもので、一口食べると、あまりの刺激的な味に倒れてしまう。

「うわあ……それは……なんていうか……」

「唯一の美点は味見をするって所だな……。これにより、他の人に災害が及ばない」

しかし、つくづくすごい才能だと思う。あんな美味そうな匂いをしてるのに、倒れるほどの味。一度、食べてみたいと思うのは人の性か……。とはいえ、俺では絶対に作れないな……

どんな黒魔術を行使してるんだこいつは？とか思いつつ……

「はあ……結局、出前だ……」

材料は彩花の手によってほぼ全滅。この二人が料理をはじめたときから結果は見えてのだが、ため息は出てくる。

「ごめんね……先輩」

「いいよ。さて…勝負は引き分けだな。出前とるから今のうちに霞は風呂に行って来いよ。着替えは俺のを好きに使っていいから」

「え？」

「…泊まってくんだろ？つか泊まってけよ。もう夜だし雨も降ってるし、お前を一人で帰せない。かといって彩花を放置することも出来ない。部屋は彩花が泊まる客室に布団敷くから」

「先輩…うん♪ありがと。えへへ♪」

何がそんなに嬉しかったのか…霞は満面の笑顔で足取り軽く浴室の方に歩いて行ってしまった。

「……はあ…なんかどっと疲れた…」

霞を見送り、ソファで時折苦しんでいるが安らかに寝ている彩花を見つづため息を吐く。

何があったかは良く分からないが、この二人の相性はあまり良くないようだ。

願わくは、一緒に部屋で寝泊りすることによって仲良くなっていて欲しいと思いつつ…

「何食おうかな…」

夕飯で何を取るか考える事にした…。

第26話：孤狼と歌姫とお隣さん 中編その2（後書き）

更新完了！

奈緒「……………」

あ、あの…奈緒さん？ どうして怒ってるんでしょうか？

奈緒「…ずるい……ヒム君の家に……お泊り……ずるい……」

そ、そう言われても…

涼香「ほつといったら？ それにしても、家の娘と来たら…はあ…どうしてこうも料理下手に…」

一話ではトースト作ってましたけど…あれは？

涼香「あれは料理とは言えないでしょ。味付けもしてないし…」

なるほど…

涼香「せめて、味見するように徹底的に仕込んだのよね」

そんなに教え込んでも…駄目だったという風にも取れますが？

涼香「言わないで、悲しくなるから…」

奈緒「…ずるい……ずるい……ずるい…」

ま、まだ言ってるし…

涼香「よっぽど、羨ましいんでしょうね。愛されてるわね♪ライバルも多いし、彩ちゃんは勝てるのかしら」

すっごく…楽しそうですね

涼香「当たり前でしょ。あく私もあと〇年若かったら参戦するのに…離婚しても!」

…なにやらすごい事を言ってますが。こ、今回は此の辺で…感想をよろしく願います。

奈緒「……ずるい……ずるい……ずるい……」

涼香「うふふゝあんなことしたり♪こんなことしたり♪」

……はあ…（あとがきに呼ぶ人選間違えたかも…）

第27話：孤狼と歌姫とお隣さん 後編

——Side Kazuto Himuro

俺は、静かな雰囲気が好きだが、賑やかなのも嫌いじゃない。

ましてや、それが親しい者同士ならなおさらだ。一人で居ることが多かったから余計にそう思う…

だが…賑やかなのと騒がしいのは違う。そして、今の状況はどちらに分類するかというと…

「だから！和人は和食が好きなの！だから此処は和食を選ぶべきでしょ！！！」

「確かにそうだよ。でもね！和食は先輩が作った方が美味しいんだ。だから、家で作れないピザとかを頼んだ方がいいよ！先輩はイタリアンも好きだもん！」

復活した彩花と風呂に入って戻ってきた霞が言い争っている…出前を頼むので和食などの丼や蕎麦にするか宅配ピザ&スパゲティーのイタリアンにするかだ。うん、騒がしいことこの上ない…

ちなみに、俺は特に好き嫌いはない。ある程度の食べられる料理という条件付きだが…

ともかく、俺は、ますます夕食が遅くなると思ったので…

「よし、じゃ間を取って中華にしようぜ。爺ちゃん御用達の店があるから味は保障する。多分、電話のトコに番号とメニューがあったはずだ、持ってくるから待ってろ」

仲裁に入ることにし、この提案に二人は渋々頷いて、事なきを得た。
はぁ…疲れる…

とまあ…こんな調子でドタバタした夕食がなんとか終了し…

「ふう…」

食後のお茶を啜る。生憎と、二人が居るので日課となっている武術の鍛錬は出来ない。まあ、最近オーバークワークだって奈緒先生に釘を刺されてるので、休むいい機会だ。

けどなあ…日課となってることを一日でもやらないと気持ち悪いんだよな…寝つきも良くないし。

鍛錬をした場合、布団に入ってから3秒以内に寝られるが、やらない場合10秒近くを要する…7秒の差はかなりでかい…

と、そんな事を考えていると…

「和人、はい、おせんべい！」

「…いや、今、飯食ったばっかだろ」

台所に行っていた彩花が、せんべいなどのお茶菓子を用意し、戻ってきて、俺に差し出す。何時もなら、こんなことしないのだが…何処か今日の彩花はおかしい…

だが、生憎と夕食を食べたばかりなので食べる気にならない…。そんな様子を見て、ふふんと不敵に微笑む霞…

「そうだよ。まったく、配慮が足りないよ。あ、先輩。お茶注ぎですよ」

「…いや、まだ十分入ってるし」

急須を持ってお茶を継ぎ足そうとするが、まだ一口しか飲んでいないので、当然のごとく茶碗の中には茶が残っている。彩花がお返しとばかりにふふんと嘲笑する。

「そうよ。まったく、配慮が足りないわね」

…なんかバチバチと火花の音が聞こえる。

「た、橘さんに言われたくない！」

「あたしだって、あんたに言われる筋合い無いわよ！！」

……休む機会だと思ったが、どうやら平穏は瞬く間に過ぎ去ってしまっただけらしい。

ギャーギャーと言い合う二人。

「で、結局。あんたと和人の関係って何！？あたしとの事は話したんだから聞く権利はあるはずよ！」

「いいよ。聞かせてあげる。ボクと先輩の甘く、せつないお話を！」

「！」

「……風呂入ってこよ」

ちっとも休めず、いい加減、疲れてきたので、まだ熱かったが我慢してお茶を飲み干し、俺は風呂に向かうことにした：

で、風呂から出てきたら……

「……あんたも苦勞したのね……」

「分かるの？」

「分かるわ……良く分かる。あの超絶鈍感男のせいで私もどれだけ苦勞したか……」

「だよね！？それとなくアプローチしても全然気がつかないんだよね！」

「そうそう……それに、天然の女殺しだし。あの笑みで優しくされたら……落ちるに決まってるじゃない！！」

「……ねえ、学校でライバルって居るの？」

「……私の把握してる限りでは三、四人ってトコかしら。あんたを含めてだけど、みんな強敵よ」

なにやら、雰囲気は一変し、互いの手を取り、意気投合している。

女ってのは…理解できないな。あんなに仲が悪かったくせに…

「ふう…いや、仲良くなったようで良かった」

「……………」

「……………」

「な、何だ？」

声を掛けると二人揃って睨みつけてくる。そして、おもむろにため息を吐くと…

「…まあ、仕方が無いよね」

「ええ、和人だしね」

「負けないよ。橘さん」

「…彩花。彩花でいいわよ。私も霞って呼ばせてもらうから」

「じゃ…彩花先輩って呼ばせてもらうよ。では、改めて彩花先輩、私は負けないから」

「ええ、恨みっこ無しよ」

ガシッと握手をし、笑みを浮かべる二人。

何かなんだか、良く分からないが…仲がいい事はいいことだ。うん、そう思うことにしよう。

俺の生存本能が細かいことを突っ込むなと訴えかけてくるので、強引にそう納得することにした。

「とりあえず、今日は休戦って事にして…ね、よかったら何か歌ってよ」

「いいけど…って、ああ！そうだ。忘れてた。ボク、これを先輩に渡しに来たんだった！」

ゴソゴソとバックの中を漁り、取り出したのは数枚のルーズリーフ

「これって…」

「うん、この前の曲の詩。タイトルは『Meet again』」

「よし、じゃギター持ってくっから合わせてみよう。あの時はピアノだったからイメージと少しずれてくるけど、ま、そこは俺がなんとかアレンジして出来るだけカバーするから」

ギターを持ってきて、チューニングをし、準備完了だ。

「ちょっと恥ずかしいな。霞と爺ちゃん以外の前で弾いたこと無いから…霞は散々大勢の前で歌ってるけど、俺にとって彩花が初めての観客だな…ミスはご愛嬌だからな、許せよ」

それだけ言って、霞に目で合図を送り、曲を弾き始めた…

——Side Ayaka Tatibana

霞から話は聞いたのだが、正直、半信半疑だった。

和人がギターを弾いているところなんて、今まで見たこと無かったし…

けど…ギターを持ってきて、音を奏ではじめた和人と、その音に霞の歌声が合わさった時…そんな考えは吹っ飛んだ。

いや、吹っ飛んだという表現は正しくないかもしれない。しいて言うなら…上書きされた…かな？

この歌を聴いてると、嬉しさとか喜びとか…そんな暖かいもので心が満たされていく。

「ふう…いい歌が出来たね♪」

「ああ、いい仕事するぜ。流石プロ」

「アマチュアでこれだけの曲作ったくせに…そんな事言われても嬉しくないよ」

歌が終わると、二人は楽しそうに会話する。私は、暫く余韻に浸り…考える。

凄かった…歌っているのはあの人気歌手Soraだから上手いのは当たり前だし、すごいのも納得できる。でも…

「ねえ…これ、本当に和人が作った曲？」

「うわ！？最初の感想がそれかよ！」

確かに、自分でも感想としてはどうかとは思うけど…

「だって…いい曲だったから。CDで出たら絶対に買っちゃおうよ
うな…」

「…いや、そこまで持ち上げられると、逆に困るんだが…」

別に、持上げた訳じゃない…本当にそう思ったから……これを和人が作ったなんて…やっぱり信じにくい

「ねね、先輩。こうなったらユニット組んでデビューしちゃおうか
？」

「絶対に嫌だ」

「な、なんで！？實力あるのに…」

「そんな事無いだろ？まあ、仮にあったとしてもだ。大勢の人に注目されるの嫌だし、二度寝が出来なくなる生活も嫌だし、家に帰れなくなるのも嫌だしな」

霞がそこまで言うからにはやっぱり、相当に實力があるんだろう…

「ね、霞とき初めて作ったっていう曲があるんでしょ？」

「ん？聞きたいのか？」

「聞きたい！！」

あ、思わず声が大きくなっちゃった…。

「リクエストも入ったし：霞、もう一曲行くか？」

「うん♪ボクも歌いたかったしね！」

その日、私は素晴らしい歌を聞けて：強敵だけど素敵な友達が出来て…

大好きなあいつの意外な一面を知ることが出来た。

追記

時刻は深夜：皆、それぞれ割り当てられた部屋で眠っている筈なのだが…

「ねえ、休戦しようって言って、あんたは呑んだのよね？」

「も、もう：12時過ぎてるもん。今日じゃないもん」

「そんないいわけが通用するかー！！！」

「なっ、そういう彩花先輩こそ！その手に持っているものは何！？」

「こ、これは…ま、枕よ。わ、私、枕変わると寝られないから…」

「……で、なんでその枕を持って先輩の部屋の前に来たの？」

「……。そ、そういうあんただって！何よ。その格好は！下着の上にYシャツを羽織っただけじゃない！」

「ぼ、ボクは寝るときはいつも薄着なの！こんな感じの！」

「……で、その格好でどうして和人の部屋のドアノブを握っているのよ？」

「……………」

「……………」

「ふっ、やはり私達は相容れないようね…」

「そうみたいだね。残念だよ…きっと出会い方が違ってたら仲良く出来たと思うのに…」

ドタバタという騒音と怒鳴り声が深夜の静寂を破る。こんな状況の中…部屋の中では…

「すう…すう…Z Z Z…」

まったく起きる気配も無く、幸せそうに和人は眠りについてた…。

第27話：孤狼と歌姫とお隣さん 後編（後書き）

更新完了！

琴乃「……………」

な、なんで睨んでるんですか琴乃の姉さん

琴乃「いやな…私は幼馴染……………なのに、何故あの場にいないのかと…遺憾を感じているんだ…」

うつ…

琴乃「枕？下着にワイシャツ？くっくく…小娘ども…いい度胸をしておる…」

せ、性格が変わってる！？い、医者…！！奈緒先生…！！

琴乃「討ち入りじゃー！！」

奈緒「…おー……………」

って、奈緒先生。そっちサイドっすか！？

あ、もういないし…くそ、急いで止めに行かないと…話が無茶苦茶に…。

と、という訳なんで今回は此の辺で…感想よろしくおねがいします。では！

第28話：冷戦と策略

—Side Kazuto Himuro

「ふぁゝ…ねみい…」

梅雨もうじき、明けようとしている…。久しぶりに太陽が顔を出した青空の下へと、四限目の体育の授業をするために更衣室でジャージに着替え、玄関口に向かっていているのだが…

眠い…というより、めんどくさい。そして何より…

「あのギスギスとした空気が嫌なんだよな…この時期は…」

「同感…」

俺の気持ちを、隣を歩いていた冬至が代弁する。体育は二クラス合同…俺らのクラスは冬至と一緒にクラスとの合同だ。なので、冬至もジャージという格好である…

で、そのギスギスした空気の原因となっているのは…

「はぁ…もうそろそろ球技大会だからな…」

「冷戦状態に入ったか…」

球技大会である。

「今年は、お前らのクラスとは敵だからな…うかつに喋ることもで

きないんだよな」

「…というか、今の状態も結構やばいんだ…：過激派がいなくて良かった」

冬至が安心した口調で言う。

光琳の球技大会は異常なほどに盛り上がり、何処のクラスも全力の本気で優勝を狙ってくる。特に最後の年である三年の勝利への執念はすさまじく、毎年数人くらい過激派と呼ばれる連中が出てくる。

球技大会の前に選手を潰すべく、体育での合同練習で反則技を仕掛けたり、また、購買のパンなどに下剤を混入したりなどやることが過激なのでそう呼ばれている…：てか、犯罪ですから。

去年、過激派が所属するクラスの女子生徒が恋人であった別のクラスの男子生徒に話しかけただけで、二人とも過激派の肅清対象になったという恐ろしい事例があり、冬至が恐れているのはそのことだったりする。

で、話を戻すが、ギスギスした空気というのは過激派とまではいかなくても、他クラスは基本的には敵であるため、互いに敵対心を持つており、この時期の体育ではそんな空気になってしまう…：これを俺らは冷戦状態と呼んでいる。

まあ、誰がどれだけ上手いかなどを見極める機会なので、情報収集という面も含まれている…：という意味合いからなのだが、誰が言い出したかは覚えてない…

「お？氷室じゃんか！って…：時雨…：お前…：そこで何してるんだ

「？」

途中で、前回死の淵から見事生還した琢磨と遭遇する…琢磨は冬至を見ると眉をひそめる…

「琢磨、あからさまな敵意を出すなよ…」

「…大変だな冬至も…」

サッカー部部长でエース。運動神経抜群の冬至君は要注意人物指定されており、人並みよりも多くの敵意に晒される。

ハジが言うには、モテる冬至に男子生徒が嫉妬し、ここぞとばかりに攻撃する絶好の機会だからしいが…琢磨を見ればあながち間違えじゃないのかもしれない。

「で、お前は身体の具合はどうだ？」

「ああ！ばっちりだ！！お前と黒羽先生のおかげだな！ありがとよ。これで汚名挽回できるぜ！！」

「ああ、頑張って挽回してくれ…」

お約束な間違いに突っ込むのもだるいので、適当に流しつつ…玄関までやってきたので、靴に履き替え…

「ん？和人？何処に行くんだ？集合場所はグラウンドだぞ？」

安眠スポットでサボろうかと歩き出したところで冬至に呼び止められた。

「ああ：眠いから、いつもここでサボる：筋肉ゴリラには適当に言っといってくれ」

「……ちよつと待て……和人、このペースでサボると後半サボれなくなるぞ。単位が厳しい」

ポケットから出した手帳を確認し、そんな事を言う冬至

「……マジ？」

「ああ、結構サボってるからな。ほら」

冬至の広げている手帳を覗き込む。カレンダーに○印と×印が記されており、○が出席、×がサボりをあらわしているのだが、圧倒的に×が多い。ちなみに、手帳の表紙には『和人の出席状況』とか書かれている。

「つて、なんで時雨がそんなことしてんだよ！」

「…当たり前だろ。和人を卒業させるためのサポートは俺の義務：いや、使命……天命といっても過言ではない。しかし、出来ることなら和人の主義主張を通してやりたい。だから、ギリギリのところまで妥協するべく…その努力をだな…」

ペラペラと饒舌に語る冬至に琢磨は若干引きつった顔をし、俺の耳元で…

「な、なあ…時雨の奴。そっちの趣味があるんじゃないか？」

とか不吉なことをノタマウウのだが、そんな琢磨を無視して、重い足取りでグラウンドへと向かうことにした……流石に、留年はしたくないからな……。

――Side Ayaka Tatibana

放課後。球技大会に向け私達は教室で勝つために、誰をどの種目に出すかの会議をしていた。

メンバーは……

「他クラスのデータだけど、まずサッカーは棄てよう。時雨くんとかが相手となると優勝は無理だから」

作戦参謀。我がクラスの諸葛孔明、一文字啓ことハジ君。

「テニスは幼少の頃から嗜んでいましたの。任せてください」

生徒会長兼クラス委員長。北條沙耶香こと沙耶香

「じゃ、私はバレーと剣球に出るわ」

そして、私。実行委員で剣道部部長の橘彩花の計3人……あと一人、来るはずなんだけど……ちょっと遅れてるみたい。

とりあえず今は四つの机をくっつけて、三人で話し合いをしている。
私の隣が沙耶香、対面にハジ君が座っている。

「で、今日一番の問題は…カズ君…なんだよね…」

スツット、ハジ君が和人が写った写真を中央に置く。ううゝ、写真
嫌いの和人の写真…どうやって撮ったのかは知らないけど、内心、
凄く欲しい…。

そんな私の考えがハジ君に伝わったのか、ふふっと笑うと…

「後で焼き増ししてあげるよ」

「「是非!!」」

沙耶香と声が揃ってしまった…

「だから、今は、カズ君のことを話そう。で…どうしようか？」

気を取り直し、話し合い再開。和人の出場種目…去年も冬至君と頭
を悩ませた議題である。

基本的に無気力でやる気が無いのだが、運動神経は抜群いい和人。

正直、和人無しで優勝は見込めないだろう。だが、当の本人は、先
程の通りやる気が無いので真面目にやらない…。まともにすれば、
何に出てもクラスに貢献できると思うのだけど…

「去年はどうしたんですの？」

「冬至君とサッカーに出て、ずっとキーパーやってたわ」

和人に何故か甘い冬至君が何時の間にかそのように決定を下していた。試合では時折シュートを防いでいたものの、ボケーと突っ立っていたのが印象にある。もしかすると、立ったまま寝ていたのかもしれない。

「僕が聞いたところによると、カズ君はベースボールの外野。もしくはドッチボールを希望してる」

どちらも、割と楽な部類に分類される。特にドッチボールは寝てても勝てるだろう…、まあ、その理由は球技大会が始まれば嫌でも分かるからこの場ではスルー。

「……あの、どの種目にしたとしても和人さんがやる気を出さなければ意味がないんじゃないでしょうか？」

「……それは…そうなんだけど……こればかりは僕でも難しい…橘さんどう？」

「…出来るようなら去年の段階でとくにやってるわよ……怒るのは論外。あいつあれで子供っぽいところもあるから、拗ねちゃって逆効果。物で釣るのも駄目ね、殆ど物欲なんてないし…」

まったく、扱いづらいったらないわ！

「…挑発という手はどうでしょう？」

「…駄目よ……あいつは自分を卑下してるところがあるから、プラ

イドなんて殆どないし、挑発したところで聞き流されるだけね」

いい案が浮かばず、会議は進まない……。そこに……

「おっす！どうだ！？必勝の策は練れたか！？」

遅れていた最後の一人：御堂先生がやってきた。

空いていた席に座った御堂先生に、ハジ君が説明する……

「なるほどな……だが、氷室に関しては既に手は打ってある」

ニヤリと悪どく笑う御堂先生。その自信たっぷりの表情に私達は首を傾げるのだが、詳しいことは話してくれず、和人の名をバスケット球の欄に書き込んでしまい、私達はとりあえず他の生徒達の種目を決めることにした。

—Side Kazuto Himuro

……謀られた

放課後、意気揚々と帰宅し、睡眠に勤しもうかと思いきや、担任の御堂教諭から大事な話があるといわれ、職員室にある第2生徒指導室に呼び出されたのだが……

中には……

「あ、ひーたん♪いらっしやうい」

御堂教諭ではなく…

「よ、羊ヶ崎先生！」

羊ヶ崎先生が居た。

座って♪と言われ、何を言われるのかまったく見当がつかないため、内心恐々と椅子に腰掛ける。

「……真希ちゃんから…聞いたよ」

「な、何をデス!？」

やべえ、滅茶苦茶緊張する…発音がおかしかったし…

「球技大会サボるんだって…」

「……は？」

な、なんだそれは…いや、待て、待ってくれ、サボろうかなとは思っていたが、言葉にした記憶が無い…

「メッ!。球技大会は…クラス皆で…:…:…」

困惑する俺に、先生はスローテンポでまったく迫力の無い説教を始めるが、聞いているほうは拷問だ。睡魔の軍団がこれでもかというくらい襲来する。だが、寝るわけにはいかない!

寝たら、確実に泣くし、絶対泣くし。女の涙ほど強力なものはない

と生前爺ちゃんが言っていたが、この人のは桁が違う。すごい罪悪感に苛まれるのだ…。

くそ…やってやる…やってやろうじゃないか！

到来する睡魔の群れに、一人立ち向かう…大群の群れに突っ込み、攻撃に耐えつつ、睡魔を撲滅していく。

「……だからね。ひーたんも頑張るの」

「わ、分かりました。分かりましたから。全部、羊ヶ崎先生の言うとおりです。ごめんなさい」

ようやく説教という名の拷問が終わった。長かったのか短かったのか…時間の感覚がまったく無い。ただただ必死に睡魔共と戦っていた…精神的に酷く疲れた…もう、夕飯はいつか…帰ったら朝まで寝よ…

「ふふ〜いい子♪じゃ、これ書いてえ、球技大会がんばってえ」

「誓約書？」

渡されたのは誓約書。内容は球技大会でバスケットと剣球に参加し、全力で戦う事を誓うものだった。

「約束破ったらあ、メッてするよお」

「か、書きます。やります。全力で！」

誓約書に名前と拇印を押し、ようやく開放された俺は、家に帰り死

んだようにして眠った……。

翌朝、彩花から出場種目を告げられ反論しないことに酷く驚かれたのは言うまでもない……

第28話：冷戦と策略（後書き）

更新完了！

霞「おっそい！今まで何してたの！？」

いやゝスランプに陥って気晴らしにネットゲやってたさw

霞「……ふう……まあいいよ。ボクの出番は前回までだし、どうせまた出番無さそうだし……」

うんそうだね。ていうか、もう本編でキミのばんないかもー

霞「なっ！？ちょっと！」

さて、今回は球技大会に向けての話し、次回が球技大会本番になる予定さ！

霞「ごまかすなー」

では、次回まだお会いしましょう。では！

霞「わ、逃げた！あ、感想お待ちしています。できれば、このアホ作者にボクの出番が増えるような事を要求するような……って、待てー！ー！」

第29話..決戦前日

明日に迫った球技大会。

静に戦いの時を待つクラスもあれば、明日のために雄たけびを上げ、士気を高めるクラスもある。

だが、各クラスに共通する事が一つだけあった…

――Side Kotonokasuga

…どうしちゃったのだろうか。

その日の昼休み…いつもならカズたちと一緒に食事を取るのだが、その日は珍しくみんなバラバラで…私は管理人さんが作ってくれたお弁当を食べていたんだけど…

何でだろう？私だけテンションが違う…カズから球技大会の事は聞き、そういう事なら全力を尽くそうとは思っている…この気持ちはクラスの皆と変わらないはずだ。

けど…何故だろうか…

クラスの…いや、女子生徒達がバレンタイン前夜の様な雰囲気を出しているのは…

「あれ？春日さんテンション低いね？狙っている男子とか居ないの？折角のチャンスなのに…」

「…何の話？」

そんな私に、転校してから良くしてくれたクラスの女子生徒である、桜さんが話しかけてくるが…話が見えない。意味が分からない。

「あ、そっか、転校してきたから知らないんだね」

「球技大会のルールは聞いているが…」

「あゝそうじゃないんだ。いうなれば、裏ルールかな？ふふ、あのね…光琳の行事は彼氏GETの大チャンスなんだよ。それで、明日の球技大会は最初の行事。好きな人に恋人ができていないから最初で最大のチャンス。いわばファーストアタックなの！」

「……は？」

ファーストアタック？

「ちょ、ちょっと待って、なんで球技大会がチャンスなんだ？確かに、いいところを見れば好きになってくれる人も出てくると思うが…」

そこまで躍起になることでもないだろうと思う…だが……

「あまあああああい！！アイスにあんこと、きなこを大量をふんだんに入れて、抹茶で仕上げたくらいに甘い！！」

「そ、それは、本当に甘そうだな」

「まあ、それは置いて。いい春日さん！」

置いての仕草をし、ビシッと指を指す桜さん。いや、自分で言い出したのに…

そんなことお構い無しの桜さんは話を続ける。

「確かにいいところを意中の相手に見せるって言うのもあるわ。けどね、光琳はそれだけじゃ留まらない。ドサクサに紛れてのタッチが可能なの！」

「た、タッチ？」

「うん、ひらたく言うと、堂々と抱きつくことが出来る。いや、むしろ抱きつかない生徒が周りから浮く！ねえ、春日さん今、好きな人に抱きついてって言われたら…出来る？」

「で、出来るわけ無い！」

な、なんて事を言うんだ…そ、そんな公衆の面前でカズに抱きつくなど…など……てへへ♪

「？ 春日さ〜ん。おーい」

「ハッ！？」

あ、危ない、妄想で意識が飛びかけた…

「ゴホン。話を続けるね。春日さんの言うとおり、今それをやれって言われたら出来ない。それはね、あなた以外にそんな事をする人

が居ない…だから恥ずかしいの！だがしかし！光琳の行事は違う！
活躍した男子に…または自分が活躍したドサクサで皆が皆…男に抱
きつくからよ！！」

「なっ！？」

そ、そんな夢のような…ああ…

〵妄想〵

「はあ、はあ…」

「か、カズ！カッコよかったぞ！」

ーガバツ

「ありがとう…琴乃。」

ーギユ

「か、カズ…」

「琴乃…」

そして…徐々にカズの顔が近づいて…

「……さん！……日さん！……春日さん！！」

「ハッ！？」

ほ、本当に拙い…今、意識が完全に遠のいていた…。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だ」

「そう？それじゃ、話を戻すけど…、皆が抱きついちゃってるんだから恥ずかしくないでしょ？」

「い、いや…しかしだな…」

「とうかね、その時のテンションでさらいといけるってわけ」

簡単に言うけど…恥ずかしいものはやっぱり恥ずかしい…

そんな私に桜さんは意地悪な笑みを浮かべ…

「で？春日さんは誰に抱きつくのかな？」

「そ、そんな人間は…」

「うふふ、冗談だよ。言わなくても分かる。氷室君でしょ？」

「———違！？」

「で、ルールって言うか暗黙の了解って言うか…抱きつけるのは女からだけ。男がやったらセクハラになっちゃうから、だから堂々とやっちゃおう！」

「人の話を…」

「あはは、分かってるって、お互いに頑張ろう」

「だから、違うと！」

否定もむなしく、私は散々からかわれた。けど…せ、折角だし、勇気を振り絞って…うん。明日は活躍しよう…そして、和に…

その日、変な妄想ばかり膨らんで寝付くのに時間がかかった…

S i d e A y a k a T a t i b a n a

「今年…今年こそ…」

お風呂から上がって、寝る前にベットの上で気合を入れる。

明日は球技大会。堂々と和人に抱きつける。

一年の時は和人がサボったので実行できず、二年では球技大会には参加していたものの、何時の間にか姿を消し、何処かで昼寝をしていてやっぱり実行できなかった…

だからこそ、今年は最後のチャンス。あいつにはきちんと呼援に行くように厳命し、一文字君と常盤に連行するように脅…コホン！お願いしておいた。

「華蓮には悪いけどね…」

私と同じ苦渋を味わってきた華蓮はクラスが違うため堂々と和人を応援できない。でも…華蓮、あなたの分まで私が…

そう心に誓い、電気を消した…願わくばいい夢を見ますように…

S i d e H i k a r i M i z u n o

「うう…どうしょ…」

光琳の球技大会…女の子にとってはどういうものか、三年も通っているので当然、私も知っている。

今まで、気になる男の人、好きになった人なんて居なかった…だから、こういうときにどうすればいいか分からない…

「けど…そのままの流れで告白すれば成功率3割増しだって言うし…」

ちなみにこのデータは一文字君が教えてくれた。彼が言うことなら信憑性が高いし、校長先生ならその根拠を独自の理論に基づき科学的に説明できるらしい…

「彩花ちゃんは告白とかするのかな…」

それはしなくても抱きつきはするのかもしれない…ううん。彩花ちゃんだけじゃない。琴乃ちゃんも要注意だ…

頼りになる親友に電話して、事情を説明すると…

『なるほどね〜それで琴ノンは……ひかり……いきなさい!』

「で、でも…」

『告白までしろとは言わないけど、抱きつく位はやらないと! いい? 例えばね、他の子が抱きついてひかりだけやらなかったら、完全に蚊帳の外…カズツち争奪戦から戦線離脱しちゃうよ? それでもいいの?』

「そ、それは嫌だ!」

『でしょ? ならやんなさい。他の子がしてきてもイーブン。逆にひかりだけなら一歩リード。大丈夫、女に抱きつかれて嫌がる男は居ないから、自身を持って!』

「わ、わかった! 頑張ってみる!」

翠に背中を押されて決意を決める。明日は…やる…やってみせる! けど、やっぱり恥ずかしい…かも…

恥ずかしさを誤魔化そうとベットの上でごろごろしていると…

「な、何してるのお姉ちゃん?」

部屋を訪れた妹に奇異の目で見られた…

「な、なんでもない! ちゃんとノックしてよ!」

「いつもはそんなこと言わないくせに…」

妹と話していると少しリラックスできた。よし、今夜は良く眠れそう…

S i d e K a r e n S i r a k a b a

はあ…

やっぱり、憂鬱な気分です。原因は球技大会…

今年こそ、勇気を出して和人様に…と思っていたのですが、クラスが違ってしまった…

クラス替えの日にも落ち込んで…振り切ったつもりだったのですが……行事を前にしてまた思い出してしまった…

正直、他の方達が羨ましい…特に彩花さんは去年一緒に目的を果たせなかった事を慰めあったのですが、私と違って今年もチャンスがあると思うと…

「…っ！？ いけません！ こんな感情！」

自分の醜い…黒い部分が表に出てきます…嫉妬。

そんな自分を戒めますが、暗い感情のままトボトボと下校してると、後ろから軽快な足音が聞こえてきました…

「よっ、華蓮も帰りか？ 一声かけてくれりゃ良かったのに」

「か、和人様！？」

「だから…様付けなんてしなくていいって…ま、それはともかくだ。一緒に帰ろう」

やってきたのは和人様でした。苦笑いをしながらそう言う私の隣に並んで歩き出し、私もそれに少し慌てて歩き出しました…

「たるいよな。嫌になるよな。明日は球技大会だ」

はあ…とため息を吐きながらそんな事を言う和人様。

「でさ、華蓮は何に出るんだ？」

「私は…テニスに…」

「ああ、確か去年それで優勝の手前まで行ったんだよな。なるほどね」

うんうんと頷き納得すると…

「じゃ、俺がでる種目とは被らないから応援にいけるな」

そう言ってくれました…ですが…

「ですけど…クラスが違いますし…」

「ん？関係ないだろ？俺は別に優勝とか勝ちに拘ってる訳じゃないし。友達が出場してたら応援するのが普通だろ？まあ、流石にうち

のクラスと対戦したら表立っては応援できないけどさ…でも、終わってから労うことはできるし、心の中では応援してるからさ」

微笑んで言う和人様…ああ、この笑みを見ていたら悩んでいた私が馬鹿らしくなりました…

「ふふ、でもそれで優勝を逃してしまわれたら怒られてしまいますよ？」

「あはは、そんなときは全力で逃げるさ。万が一の時は匿ってくれよ？」

おどける様にそう言います…これで迷いはなくなりました…

明日は結果はどうあれ、悔いの無いように力を出し切るだけです…

——Side Sayaka Houjou

皆さん…なんて…なんてふしだらなんですの！！

誰がカッコいいだの、後輩に可愛い子が居るからお姉さんがご褒美…とか浮かれたようにそんな事を言っています。

まったく、みだりに殿方に抱きつくなど…など…ふ、不潔ですわ！！

そう思いつつ、いつぞや和人さんに抱きつかれたことを思い出し…

「／／／／／」

ぶんぶんと顔を振ってそれを忘れようとしています。

でも…

彼は暖かくて…体温が心地よくて…っつ!?

い、いけません!!でも…

他の皆様はどうするのでしょうか?

脳裏に女性に抱きつかれている和人さんの姿を想像します……ムカ
ムカしてきましたわ…

くっ、そうですわ!そんなふしだらな事は断固阻止ですわ!

そんな事を考えていると、何時の間にか授業が始まっており、話を
半分ほど聞き逃してしまいました…

S i d e ? ? ?

「ふふ、よいよだ……」

「はぁ…付き合わされる俺の身にもなれ…ってか、完全に逆恨みじ
ゃんか」

「黙れ！！きつと、彼女は…いや、彼女達は騙されてるんだ！もしくは弱みを握られ脅されてるのに違いない！！不憫だとは思わんのか！！」

「別にー。人は人、他人があーだ、こーだ、いう事じゃ無いじゃん」

「ふん、貴様にはこの崇高なる僕の行いを理解するのは所詮無理なんだろう…まあいい。まずはバスケだ、バスケであいつを徹底的にマークし、潰し、力の差を見せ付けてやる…いいな？」

「へいへい。まあ頑張るよ」

「そしてその後…剣球で息の根を止める！！」

「いや、殺すのはどうかと…」

「あっはっはっは！！待ってろよ！！！！怨敵！氷室和人おおおおお！！」

（はぁ…橘つつたっけ？…たたく、女の子に振られたからって完全に方向性間違ってるよ。つか、変にナルシストな所があるからなー。まあ、氷室も氷室で女を侍らせているって言う噂もあるしな…それだけ、あいつが魅力的だって事か…。いずれにせよ俺らはA組、あいつらとは所詮相容れない存在…明日は全力で勝たせてもらおう。……はぁ、なんで俺、こいつと友達やってんだろ？）

何時までも高笑いをしている友人を見ながらため息を吐いた…

Side Kazuto Himuro

華蓮と下校し家に帰って来た俺は、夕食を食べてとある場所に出かけていた。

「あ、来た来た。今回すごい真面目だね、和君」

「おかげさまで…それと和君はやめい！」

不敵に笑うハジと何時もの挨拶を交わす。

そしてハジと挨拶をしていると、向こうで練習していたため、若干汗を掻いている二人がやってくる。そして、その後ろには…

「ぜーぜー、じ、じぬう…」

言いながら、ぶっ倒れている琢磨。

「正直、僕はキミのことを誤解してたかもしれない」

「…ああ、練習にこんなに熱心だとは…」

「別に熱心って訳じゃねーよ。ただ、今回ばかりは真面目にやらな
いと…俺の身が危ないんだ」

脳裏には羊ヶ崎先生の泣き顔と、放課後に二人だけで顔を突き合わせているシチュエーション…うう…考えただけでも冷や汗が…爺ちゃん、確かに女の涙ってやつには勝てそうにねえよ…

そんな事を考えつつ、やってきた二人に言葉を返す。背が低く細身の体格なのが篠原、対照的に背の高い、体格が良いのが岡島。

俺がやってきたのは市民体育館にあるバスケットコート。ハジが押さえたらしい：（相変わらず恐ろしいまでのネットワークと顔の広さだ：ま、それは置いて：）で、目の前に居る二人はうちのクラスのバスケットのメンバーである。

俺、ハジ、琢磨は、バスケット部でレギュラーの篠原と岡島の二人に色々ご教授されているわけで、今日はその総仕上げ。

「で、琢磨はどうしたんだ？」

「ああ、昨日練習サボったから今日その分を前もってやってたんだよ。リバウンドの練習、僕がシュート打って、岡ちゃんが相手をしつつ教えてたんだけど…」

「意外に筋が良くてな：結構本気でやったら、ああなった」

「じゃ、少し休ませといて僕たちは練習しようか？」

バスケットはチームプレイが大事という事で始まった練習。対戦相手の情報はハジが掴み、そのデータからハジとバスケット部の二人が相手の戦略を洗い出し、弱点やこちらの長所を生かせるようなフォーメーションなどの練習。いや、此処までやらないでしょ？普通。

篠原曰く：

「インターハイ地区予選でも此処までやったこと無いねー」

らしい。で、ハジをマネージャーにスカウトしていた…まあ、それはおいといてだ。うちのクラスのバスケメンバーは相当マジで勝つ気らしい。

ハジ曰く…

「ふふ、情報さえ得れば不可能なんて無いんだよ。ほら『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』って言うでしょ？つまりは情報戦こそが戦いの命運を分ける。敵の戦力が分かってるならそれを超えるまでの力を得ればいいだけだしね、それに情報から敵がどう動くかも分かる」

と講釈をし、最後に負ける要素がないねーと締めくくった。

ふう、此処までやったら勝つしかないよな…

「そうだ！俺達にかあああつ！そして女の子は俺のもんだあああああああ！！」

ぶっ倒れたいた琢磨も復活。相変わらずこういつたときには恐るべきパワーを発揮する。煩惱パワーとでもいうのか…だが…

「俺の胸に飛び込んで…ふぎゃー！！」

あんまりにも喧しいので手に持ったボールを投擲する。ふむ、御堂先生とまでいかんがそれなりの速度とコントロール…見事に脳天を直撃した。

「うるさいぞ琢磨」

「まったく、近所迷惑だよ」

と、注意するも、ガバッと起き上がり…

「待ってろよ！紗希ちゃん、美樹ちゃん！」

再び叫ぶ琢磨。どうやら、アドレナリンのせいで痛覚が麻痺してるみたいだ…

こうして、テンションがあがり時折叫ぶ琢磨に度々ボールをぶつけながら最後の練習をするのだった…

第29話：決戦前日（後書き）

更新完了…

霞「……今まで何してたの？」

…え、えっと…

霞「何してたの!？」

は、はい！暑かったんで、クーラーがある部屋でゴロゴロしたり、ゲームやってました!!

霞「ふうん…いいわけにはならないよね？おまけに…ボク出てないよね!！」

はい、なりません。すいませんでしたー。でもさ…構想は練ってたんだよ？ただ、文章にする気力が暑さとかで奪われてただけで…

霞「だから、いい訳にならないよね？」

なりませんね…ごめんなさい。本当にごめんなさい…

霞「で、次の話しは？」

あ、うん。大方できてるさ。ただ…後半部分が納得できないから書き直そうかと…ま、出来次第更新するよ

霞「で、ボクはでてくるの？」

……では、次回もがんばっていきます。感想ありがとうございます。
時間があるときにレスしますんで……では今日はこれで……

霞「ふざけるなー！ー！いいよ！アイドルなんてやめてやる！転校してやる！ー！出番は自分の手でもぎ取ってやるもん！」

第30話：開幕！激闘球技大会 第一幕・死闘の末に…（前書き）

作者はあまりスポーツのルールなどに詳しくなく、間違った解釈で書かれているかもしれません…ご了承ください。

第30話：開幕！激闘球技大会 第一幕・死闘の末に…

—Side Kazuto Himuro

歓声と熱気が体育館を支配している…

「和人いけーーーー！！」

「か、和人君、頑張ってーーーー！！」

「負けたら承知しませんわよーーーー！！」

「和！お前ならやれる！！」

…はぁ、好き放題言ってくれてるよ……

「ふふふ…氷室、此处でお前に引導を渡してやる！勝負だ！！」

こっちはこっちで睨んでるし…って、誰だこいつ？

異様なまでの盛り上がりを見せる体育館。

男子バスケットボール決勝戦。

時間は少し遡る…

朝…幸せに眠っていたところをお隣さんに理不尽に起こされ、これまた理不尽に送迎の運転手（自転車）をやらされた挙句、教室で再度惰眠を貪っていたところを、体育館に引き摺られた……ぐすん…今日は諦めよう…

この二日間に渡っての球技大会。各クラスは球技大会でのユニフォームとなるべきプリントTシャツを作った。その為、体育館では様々なデザインを施したTシャツ別に一列に並んでいる。

俺らのクラスも同様に、空と羽根をモチーフにしたデザインのTシャツを着ている。

水色の生地、背中には天使を思わせる二対の羽根。その中央に『Fly High』の文字。腹部の辺りには雲、その上の右の胸元には小さい羽根が一枚。

このデザイン…実は俺が持ち込んだものだ。いや、正確には俺じゃなくて…電話で話題に出した際、霞大先生が筆を取り、ファックスで送ってきたデザインがそのまま採用されたのである。

SoraデザインのTシャツ…琢磨が知ったら、喜びまた嫉妬に狂うだろう……うん、黙ってよう。

とにかく、このTシャツで開会式に臨み、狩谷校長の

「愛こそ全て！いいですか皆さん！ほとぼしる汗、熱く火照った身体、そして恋する表情！！ああ、青春とはなんと素晴らしい言葉で

しょうか！今日は無礼講です！私が許します！いくところまでアタックあるのみです！私は恋する皆さんを全力でサポートすることを誓います、怪我の無いように気をつけて、意中の異性をゲットしちゃってください！以上をもって開会の宣言とします！」

球技大会と殆ど関係ないような開会の言葉で開始された……さて、初の出来事をハイライトでお送りしよう。

エピソード1 ドタッチボール

グラランドで行われたドッチボール：その決勝戦だが：コートの半分は地獄と化していた。

「ひっ！？に、逃げ…ぐあ！？」

「武くん!? 武くん!? い、いや…来ないで…来ないでええええ!」

生徒達の断末魔の叫び声が響き渡り、次々と屍が増えていく。ある者は恐怖に顔を歪ませ、またあるものは親しいものが血に（顔面直撃の鼻血）に染まり、絶望に浸りながら倒れていく。いや、ドツチボールだよな？これ

そして、全ての元凶たる魔王……もとい、屍を生産しているのは我らがクラスの担任。

「つたく、最近の腑抜けでなってねえな。手ごたえ無さ過ぎだぜ…」

『魔弾の射手』御堂真希である。

クルクルと右手人差し指の上でボールを回しながら、つまらなそうにボールを投げるのだが、速度が半端じゃない。的確に相手にあって、また計算しつくされているかのようにリバウンドしたボールが手元に戻ってくる。

まさに、リバウンドを制するものはゲームを制すってやつだな。意味合いが違うような気がするが…

ともかく、一回戦からこの繰り返しで、まさにドッチボールは一種の惨劇と呼べるであろう結果となっている。

ちなみに、顔面直撃は無効となるのだが、喰らったものは起き上がれないのでまったく意味が無いルールである…いかに向こうだろうと起き上がらなければ、そこで試合終了となる。

二年や俺達三年は去年の経験からこうなることは目に見えていたが、一年生達は悪夢を見ているような感じだろう。この経験を来年の球技大会に生かし、逞しくなってほしい。

「流石だよねー投げる競技だったら、お手のもんだ」

「…相手が気の毒でならないぞ…だが、チョークよりも若干軌道とスピードが落ちているみたいだ…やっぱりボールは専門外みたいだな」

「いや、十分すげーよ。ってか！あのチョークを避ける氷室も氷室だ！」

コートの脇から、ハジ、琢磨とともに観戦中…あんまり近づくと俺に向かって投げてきそうだしな…事実、一回戦では…

「ちっ」

「先生、コートとは反対方向なんですが？」

「いやー。わりいな。手がすべっちゃまって…よ！！」

「……つと…はあ、先生がコントロールをミスる訳無いでしょう…真面目にドッチボールをしてください」

と、何回かボールがこっちに飛んできた…避けて、そう言ったら分かってくれたみたいで飛んでこなくなったが…ぼそりと『ちっ、やっぱりチョークじゃねーと…』とか聞こえたのは気のせいだと思いたい。

そんな事を思い出していると、琢磨が人選についての疑問を口にする。

「で、なんで先生をドッチにしたんだよ？野球でも良かったんじゃないの？」

「うーん、そうなんだけどね…先生は無意識に人間に向かって投げる傾向があるから野球だと死球…デットボールになっちゃうんだよ

…文字通りね…」

……納得。流石に球技大会で死人がでるのは拙いだろう。ただでさえドッチボールで相手にトラウマになるほどの恐怖を与えているのに…

再びコートに視線を向ける…

「後、三人か…くつくつく…さあて…誰から逝きたい？」

「く、くそ！さ、避ける。なんとかして避ければ…「おせえ！！」…ぐぎゃ！？」

一人…

「まったく、べらべら喋ってるんじゃないよ。んな暇あったら逃げろ。もっとも…」

―ヒュ！

「ぐげえええ！！」

「無駄なんだかな…」

また一人とアウトにし、あっという間にあと一人である。いや、しかし、ここまで物語に出てくる敵の魔女だの魔王役がはまる人間はそうはいないな…。物語と決定的に違うのは、それを討伐するべき勇者が居ないことか…

慈悲も無く、奇跡も起こらず…

「お、おかあちゃー！ーん！！！」

最後の一人も地面に倒れ、ドッチボールはたった一人の魔王的存在のおかげで我がクラスの優勝が決まった。

エピソード2 テニス

女子テニスのシングルスは決勝戦を迎えていた。決勝戦はともに圧倒的強さで勝ち上がってきたうちのクラスの沙耶香とC組の華蓮の対戦となった。

ちなみに、男子テニスは早々にして負けてしまい隅っこで黄昏ている…うん、そっとしておこう…

「ふふ、少しはやるようですわね…」

「いえ、北條さんほどではありません」

コート上ではネットを挟んで互いに牽制し合う両者。

「…北條さん、一つだけ言っておきます」

「なんですの？」

「…やすやすと和人様には抱きつくという愚行はさせませんから」

「なっ、何を言って…」

「ふふ、あなたには分からないでしょうね：別のクラスになり、私にはその資格が無くなってどんなに絶望したか：」

「し、白樺さん：」

「ですが、あの人は応援してくれると言ってくれた：嬉しかった：でも：やっぱり、同じクラスであるあなた達が羨ましい！ですから負けません！！」

「……な、なんか：」

「な、なあ、冬至。黒いオーラが華蓮から出てないか？」

「……俺には気持ちが良く分かる：何故、俺達が争う必要がある！俺達は好き好んでお前の敵になったんじゃない！その辺の所は分かってくれ！！頼む！」

「：いや、質問の答えになってないから」

「なんかさ：皆さん、テンションがおかしいぞ？いや：」

「お嬢！やっちまってください！！」

「姉御！！いてこまじったってくれ！！」

「沙耶香お姉様！そんなかた楽勝ですわ！」

「あーら、何を仰いますの？華蓮姉さまに勝てるわけありませんわ！」

…おかしいのは俺なのか？ そうなのか？

周りで応援している男女ともに妙なテンションだ。

そして、試合が始まった…

「はあ、はあ…いい、いい加減に降参したらどうですか？」

「はあ、はあ…さ、沙耶香さんこそ、そろそろ諦めたら如何ですか？」

す、すげえ…

試合の内容は熾烈を極めていた。

生粋のお嬢様である沙耶香はテニスの経験も豊富のようでテニス部
顔負けの動きで鋭いサーブ、きわどいリターンを決める。

だが、華蓮も負けていない。テニスとは違うが優雅でソフトな動き
と、まるで勝利の女神を味方につけたようなコードボールを連続で
決めている…

確か、日舞やってるって言ってたな…それに、運もここまでくる
と…まさか超能力か？ 奈緒先生というお人も居るわけだし、可能性
は否定しきれない。先生曰く

『世の中結構そういう人…居る…みんな…気付いていないだけ…』
らしいから…

そんな事を考えつつ、試合を見ていたが良い世大詰め。

ルールは6ゲームの一セットマッチで行われており、これまで互いに自分のサービスはキープしているのでタイブレークに突入。

先に7ポイントを取った方が勝ちなのだが、ここでも均衡した戦いを見せ、現在互いに15ポイント

互いに6ポイントを取った時点で2ポイント差がついた方が勝者となるのだが、決してそれを許さないで此処まで来たのである。

「も、もうやめて…」

「お姉さま…」

周りで見ている女子生徒の悲鳴と泣声…もはや互いにボロボロである。

「…白樺…エースだ…エースを目指せ」

「…おい、冬至。サングラスは校則違反だぞ。って！そもそもどこから出した！」

なにやら腕を組んでえらそうにそんな事を言っている冬至に突っ込むが。ううむ。此処までくると二人とも知り合いだからどっちにも負けて欲しくないな…引き分けでいいだろうと思う。

でも、そんな事になるはずも無い…勝者は一人、もう、技術は関係ない。気力の勝負…

「私は負けません…絶対に…あなたには…あなただけには!!」

サービスは華蓮。残りの体力を振り絞ったサービスは本来のキレのまま沙耶香のコートに突き刺さった…

「くっ」

ここでサービスエース。マッチポイントである。

「まだです…私も…負けられない…負けられないんですわ!!」

今度は沙耶香のリターンエース。決着はいまだ着かず…

まさに、気合と気合。意地と意地のぶつかり合い。けど…

「……冬至、ちょっと席外す。すぐ戻るから…」

「お、おい。最後まで見てろよ」

「大丈夫だ。2分で戻る…それにまだ暫くは決着つかねーよ」

そして…試合は決着の時を迎える。

21—20。華蓮のマッチポイント…

沙耶香のサーブを最後の力を振り絞り華蓮は打ち返すが本人はそのまま崩れ落ち…ボールはネットに当たり…コードボールとなって沙耶香のコートに吸い込まれていった…

『ゲームセット！ウォンバイ白樺！7－6』

「やばい！白樺さ…和人！？」

コールされると同時にコートに駆け込む。冬至を始め、固まっていた者たちも動きだし、騒ぎ始める。華蓮が倒れたまま起き上がらないのだ…

「は、はあ…はあ…か、和人さん？白樺さんは…」

「ああ、大丈夫だ。なんせ暑いからな…涼しいところで水分とって横になってればすぐに良くなるさ…」

倒れている華蓮を抱き起こし買ってきたスポーツドリンクを額に当てながら告げる。こうなると思って買ってきたんだけど…水分を取れる状態じゃないな。とりあえず移動するか…とその前に…

「ほら、お前も無理すんな。水分取らないとお前も倒れるぞ」

もう一本。沙耶香の分のドリンクを投げ渡し、華蓮を抱き上げる。所謂お姫様抱っこって奴だ。恥ずかしいが手っ取り早いし、一人では背負えないので仕方が無い。

「あ、ありがとうございますわ」

「じゃ、俺は保健室に華蓮を連れて行く。冬至、後ヨロシクな」

ギャラリーが騒ぎ出すが目もくれずとっとその場を後にする。後で噂になるかもな…華蓮に謝っとくか

「ん…んん……か…和人…様？」

「気がついたか。今、保健室に連れてってやるから…」

「あ、あの…試合はどうなったんですか？」

道中で華蓮が目を覚ました。なにやら困惑しているようだ。試合中と今の状況の記憶が繋がらないんだろう…

「…試合は終わったぞ。最後の打球が見事に入って華蓮の勝ちだ。けど、そのまま倒れちゃったんだよ。で、保健室に搬入中だ」

—Side Karen Sirakaba

目を覚ますと…和人様の顔が近くにありました。

話を聞いてるうちに、私は試合に勝ったらしいのですが倒れてしまったらしいです。

私は抱きかかえられたまま保健室に運ばれて、クーラーが聞いた部屋でゆっくりと水分を取って横になっています。

和人様は暫くは居てくれたのですが、自分の出る種目だからと一言謝って行ってしまいました…

けど…

「…頑張ってよかったです」

彼の優しさ…冷たいドリンクと暖かい温もりを感じることが出来ました…

他のクラスになったのにまさかこんな形で念願が叶うとは思ってもありませんでした…

「今度はこちらが和人様を応援する番ですね…」

表立ってはできないかもしれませんがそれでも応援をしようと思います。

ちょっと休んで…きっと和人様なら決勝まで勝ち進むでしょうから…

――Side Kazuto Himuro

困った…

バスケットの初戦で勝てたのはいいが、それよりも厄介な相手が出た…

「グス…なんですか？」

涙声混じりの不機嫌声で睨んでいるのは沙耶香である。

テニスで負けてしまい、悔し涙を浮かべたという事や不機嫌なのは分かる。

だけどさ…

「いや…なんでもない」

俺を睨むのはおかしいんで無いかい？

「なら、何処かへ行ってしまう方がいいでしょう！私の事はほっといて下さいな！」

「じゃ、お前も一緒に行こうぜ。こんなトコで不貞腐れてないでさ」

そう、俺達は体育館裏に居るのだ。

試合を終えた俺に冬至が沙耶香が此処で落ち込んでいる。フォローしろ。お前の責任だと若干強めに言われ、ほっとけないので体育館裏の段差に座り込んでいる沙耶香の元へやってきたのはいいが…

正直、困っている。

沙耶香は負けたからといって塞ぎ込んだりはしない。むしろ燃え上がり、努力して必ずリベンジをしようとする。俺にテスト云々で色々言ってくるので、そういう人間だというのは分かるのだが…

何故、今回に限ってこんな状態なのかが分からない。

とりあえず隣に座って愚痴を聞いているわけで…

「…グス…ま、負けた私よりも勝った白樺さんの所に行けばいいじゃないありませんの」

「はぁ？何言ってんだよ。そんなの関係ないだろ？」

「…どうせ、私は負けましたわ。役立たずですわ…」

「誰も、んなこと言っていないだろ…」

…駄々をこねている子供を相手にしているような錯覚に陥る。普段しっかりしてるのに案外ガキっぽいところもあるんだなコイツ。

「あのなあ…俺にとって勝ちとか負けとかはどうでもいんだよ。別に球技大会で優勝しようが最下位になろうが興味ない。つうかさ、準優勝だろ？何が不満なんだよ…」

「…優勝できませんでしたわ」

つたく、この娘さんは…

「……自惚れんな阿呆」

「なっ!？」

俺の言葉に俯いていた顔を上げ、表情には怒りが浮かんでいる。だが、反論するよりも先に俺は言葉を続ける。

「自分が何でも一番になれるなんて思うな。どんな奴でも負けるんだ。勝ちだけの人生なんて奴は居ないんだよ。第一つまらないだろ…。いいじゃん、次ぎやる時に勝てばさ、今までもそうやって来たんだろ？」

ポンポンと頭を撫でつつ：

「落ち込むとかよりもやることあるだろが。他の連中を応援するかさ…分かってるか？お前はうちのクラスの委員長…いわばリーダーだ。頭がそんなじゃ勝てる勝負も勝てなくなるだろ。落ち込んだところで結果は変わらない。なら、今自分に出来る事をしろよ」

彩花機嫌回復用のノウハウが功をそうしたのか、またガラにもない言葉が届いたのか沙耶香の怒りの表情は笑みに変わり…

「…：そうですね…その通りですわ…：すみませんでした。私らしくありませんでしたわ」

「まったくだ。一体何事かと…」

「お、お黙りなさい！そ、そういう事もありますわ！」

撫でていた手を振り払いキツと睨みつけてくる。うんうん、こうじやなくっちゃ

「じゃ、行こうぜ」

先に立ち上がり沙耶香の手を取り立ち上がらせるたが…

「…お、おい！？」

「……………」

そんなに強く引き上げたつもりは無いのだが、沙耶香は勢い良く立ち上がり、そのまま抱きしめられた。

そして、トンと軽く突き飛ばされ…ピッと指を指し

「こ、これは…先払いです！私がこうして抱きしめて差し上げたのですから、必ずバスケツトで優勝しなさい！」

「んな、無茶苦茶な…」

「無茶じゃありませんわ！真面目にやればあなたなら出来るはずです！ですから、不真面目にならないように激励です！それに言いましたよね？私に今、出来ることをしろと」

「いや、言っただけだよ…」

「いいから！！優勝しなさい！！……それに、勝てたら続きを…」
ボソボソと小声になる沙耶香

「何？後半のが聞き取れなかった」

「な、何でもありませんわ！か、勝たなかったら許しませんわよ！！」

「って、おーい」

言いたい事だけ言うと、足早に行ってしまった…

「…ま、元気になったからいいか」

そう自己完結し、それも沙耶香の後を追った…

番外エピソード

グランドの端っこに設置された黒い大きなテント。そう、そこは救護テントだ。

毎年、どっかの魔女が大量の犠牲者を出すので熱射病関係以外はそこに収容され治療される。

中は怪我をした人間がところせまじと横たわり、まるでどこかの戦場を思わせるようだ。

「…マッキー……おしおき…」

「ま、待ってくださいよ！えっと…わ、ワザとじゃないんすから！それに奈緒先輩のお手を煩わさずともそこら辺に転がしときゃ大丈夫……すんません」

視線がきつくなったのを察し謝っているのは、この惨状を起こした張本人である御堂真希。そして、きつい視線を送りつつ治療に当たってるのは黒衣の堕天使、黒羽奈緒である。

といってもそれほど重い怪我の生徒はおらず、寝かせとけば勝手に起きるといった感じで別段忙しくは無いのだが、元来、人を避ける奈緒はすごぶる不機嫌だ。

毎年、手を抜くようにしろと言い聞かせてるのにこの始末。

「…覚悟…いい？」

「えっ！？ま、待ってください！！後生っすから！！って、なんすか！？そのおどろおどろしい液体の詰まった注射器は！？」

「…痛くない…と思う？」

「って、なんで疑問系！？う、うわ！や、止め…止めてえええええ！！！！」

普段の彼女からは考えられないような悲鳴が上がり……そのままパタリと崩れ落ち、ピクピクと痙攣している。

「…悪夢君試作三号……2時間後には目が覚める……ふふ…いい夢を…」

強制的に悪夢を見せるという恐ろしい効能、しかも限りなくリアルなので本人は夢と認識できず、また睡眠薬をブレンドしてあるので、目が覚めることもない…

時折上がるうめき声を気にする事無く奈緒はコーヒーを啜り、暫く休憩をする事にした…

第30話：開幕！激闘球技大会 第一幕・死闘の末に…（後書き）

更新終了！

霞「また、出番ないよ…ボク…」

ん？そんなことないでしょ？

霞「あるよ！出たの名前だけじゃない！それも数行！！おまけに…あ、あんなに先輩とくっ付くなんて！！許せないよ！破廉恥だよ！ボクだけがやっていいことなんだよ！！」

どーどー

霞「はあ、はあ…」

ほ、ほら、その代わり、感想の返信には霞ちゃん出たじゃん！

霞「そうだね…。それは嬉しいよ。それに、いつも感想書いてくれる人にはいい加減、久遠での返信は飽きるからね。って、話逸らすな！！次はボクでるんでしょ？」

あゝそれはねーよ。さらに誠に言いづらいけど次回はもっと辛いかもヨ？

霞「えっ！？ま、まさか…あのアマ…ボクが居ないからって…好き放題…大体からして、毎日のように先輩の家に行ってるだけでも万死に値するのに…」

あゝダークモードになってしまった…では、今回は此の辺で…感想
よろしく願います。

第31話 競え！激闘球技大会 第二幕 恋する乙女とライバルと（前書き）

前回同様、作者はスポーツに詳しくないので、これ違うんじゃない？
などと思うかもしれませんが御了承ください。

第31話 競え！激闘球技大会 第二幕 恋する乙女とライバルと

エピソード3 サッカー

――Side Kazuto Himuro

グラウンドにて行われるサッカーの試合を見に来たのだが…

「なあ、彩花」

「何よ!？」

何で怒鳴るんだよ…

「い、いや、えっと……あ、琴乃」

「……何か用？」

うう…視線が冷たい…

「……うつ?…ひかりさん？」

「……………」

無視ですか…

そう、なぜだがすごい機嫌が悪いお三方……向こうではハジが膝を抱えて震えている…

「…仕方が無いじゃないか…僕に和君が制限できるわけ……」

なんかブツブツ言ってるし、そつとしよう……

えっと…俺じゃないよな？うん、今日は殆ど会ってないし。何かあって機嫌が悪いんだろう…

そう結論付け、今度は打って変わって上機嫌の沙耶香に話しかける事にした。

「でさあ、さっちゃん、ついてねーよな！」

「誰がさっちゃんですか！！馴れ馴れしいですわよ！！」

「いやゝ殺伐とした空気を和ませようとしたおちやめなジョークじゃん」

「……………逆効果だと思えますわ」

何っ！？

おそる…オソル…視線を向けると

ひっ！？

呪詛でもかけるのかって位に睨んでくる三人…なんでじゃ！？

ああ…もう泣きてえ…

「…はあ……………確かについてませんね。よりにもよって初戦から時雨

さんのクラスが相手ですし…」

「だよな！いやーついてないよな」

俺が出来ることといえば、気にしないことしかない。そうだ、無視だ。俺は何も悪いことなんてしてない！さっちゃん…もとい沙耶香が話を戻してくれたので俺もそれに乗った。

「時雨さんといえば…去年、国際試合にも出た実力者ですわ」

「……ああ、U17だっけか？すげえよな」

名実ともにサッカー部のエース。当然、うちの学校のサッカー部は強い。だが…

「ですが、全国制覇は成し遂げられていませんわ…」

「冬至曰く、決定打にかけられるらしい。フォワードにストライカーが欲しいって言ってたしな…」

去年の春…いや、一昨年の冬だったかな？何度かサッカー部に誘われた記憶があるが…ことごとく断った。俺なんて戦力にならんし、朝連…考えるだけでぞつとするな…

そんな事を考えているうちに…どんどん人が集まってきて…

『時雨先輩！いい！！』

『頑張ってください！！』

女の子から黄色い声援が飛ぶ…

「相変わらずモテモテだな…ま、うちの学校のスターといっても過言じゃないしな」

「まあ、うちの三大美形の一人でもあるしね…」

復活したハジが俺の言葉を返す。

「三大美景？」

「違うよ三大美形。うちの学校での美形、上位三人って事。ちなみにファンクラブもあるし」

マジか！？我が親友よ。お前は何処まで行くんだ！？

「ん？って事は、後、二人居るって事だよな？」

「うん居るよ。A組の滝川俊吾と…」

「知らない名前だな…。で、最後の一人は？」

むっ？なんでそこで俺を見る。

「和君だよ」

「…そうか…あいつかあ…って、はあ！？今なんつったよ？」

「だから、和君。氷室和人だよ。僕の目の前にいるね」

呆れたように言うハジだが…ははあん…

「あっはっは、冗談にしては中々に笑えるな」

「いや…冗談って…」

「あり得ん！俺は奇異の目で見られることはあってもそんな目で見られたことは無い！その証拠に冬至のようにラブレターやラブコールも受けたことが無いぞ！！」

今までの人生を振り返ってみても…分かる。大体、こんな目の色や髪の色がそんな分けないのだ。

「はあ、もういいよ」

肩をすくめるハジ。何だよその態度は…

その態度について問い詰めてやろうと口を開くが…

「はっはっは！！残念だったな時雨！！この勝負は俺が貰った！！」

フィールドの中央。高らかに笑う琢磨ぽかの声が聞こえてきた…

『冬至くんを侮辱する気！？』

『常盤先輩なんて負けちゃえー！！』

「ふっふっふ！！聞け！周りも俺の応援をしてくれている！」

そーういや…バスケのほかにサッカーに出るって言ってたっけか…

「都合のいい耳…いや、この場合脳みそだな」

「テンションが上がって、アドレナリンも多くなってるから、都合のいい脳内変換機能が働いてるんだよ」

幸せな奴…

そんな事を考えながら琢磨を見ていたのだが…

「こらあああ!!」

「無視!!」

「しないでよ!!」

「どわっ!?!」

放置していた三人が襲い掛かってきた…

そうこうしている内に…

7—0……試合終了!

「…くそおおお!!」

キヤーキヤー言われている冬至を尻目に、項垂れる琢磨。

「つか!てめえ、イチヤついてないで応援しろよ!!」

ビシッと指を指す。その視線の先では…

「これがイチャついているように見えてるのか？」

心底疲れた……あれから、怒りの原因を聞いたが、どうやらバレーの応援に行かなかったことらしい……

その件について、ご機嫌を取り、必死に宥めて今に至るわけだ……

「そんなのいいから行くわよ！」

「ああ、そろそろ私達の試合だ」

「うん。ちゃんと見ててね♪」

そんなの扱いされた琢磨はますます落ち込み。俺はその姿を見て、同情という感情を抱きながらずると三人に引きずられていった。

エピソード4 バレーボール

――Side Ayaka Tatibana

バレーの一回戦ではあいつは見学に来なかった。

けど、二回戦からはちゃんと私達を見てくれている……チャンスだ！否が応でも気合が入る。

バレーのルールは15点で一セット。先に2セット取った方が勝ちである。

そして、今は14－9。相手のセットポイント

「だから！！私が打つって言うてるでしょ！！」

「いいや！これだけは譲れない！私が決める！！」

「ううん！！ポジション的には私が行くべきだよ！！」

「「私にトスあげて！！」」

とかやっている間に…一セット取られた……

——Side Kazuto Himuro

「何やってるんだかな」

涙目で困惑していたセッターの役割をしている子が可愛そうで仕方が無い。名前は………なんだっけ？

「あいつら、あんなに仲悪かったか？」

「……別の要素が関与してるんだよ」

むむう…何故、そこでため息を吐くんだよハジ

「どういう事だよ？」

「なんでもない………よし！このままじゃ負けちゃうよー！！いい

のー！？負けたら元も子も無いでしょう！！」

ハジが檄を飛ばす。何のことだ？負けたらなんかあるのか？

——Saide Hikari Mizuno

一文字君の檄が聞こえた：そうだ。確かにこのままじゃ、和人君に
どうこうするっていう話じゃなくなっちゃう：

そうだ！何もアタックなんて打たなくても……ちゃんと、和人君は
私の頑張りを見てくれるはずだ！

そう考えると、今までの事が馬鹿らしく…そして恥ずかしくなっ
てきた

「私、レシーブに専念するね」

「仕方が無い。私を取るから決めてよ！」

「私がリベロを努めるから。あとは頼む」

あれ？

三人して顔を見合わせる。考えることは同じだったみたい。

「ふふ、じゃ、その場その場でちゃんとやろうね」

「そうね。でしゃばるのは止めましょう」

「ああ、誰が打っても恨みっこ無しだ」

よし、方針は決まった！

そして、2セット目で私達は…

「私を取るね！彩花ちゃん！」

「おっけー！行くわよ琴乃！！」

「任せろ！」

流れるようなレシーブ、トス、アタック…

そこから生まれたキレのあるスパイクが、相手コートに突き刺さった。

——Side Kazuto Himuro

おお！クイック決めた！

「やっと、本来の力が出始めたね」

「…ああ、素敵だ…うおお！！俺と結婚してくれえええ！！」

変な咆哮に…じゃない、方向にテンションがあがりつつある琢磨を誰もが無視しつつハジに…

「ああ、あれくらいは当たり前だ。あいつら運動神経いいからな」

総合的に見て、うちのクラス的女子は運動神経が高いのが揃っている…こりゃ、貰ったな…

そして、その後、試合をひっくり返し、そのままの勢いで決勝へと駒を進め…

「よし！最後は！」

「三人で！」

「決めるわよ！！」

上がったトスに三人して飛び、そのままアタック。

「と、トリプルアタックだど！？」

「ま、漫画の世界だね…」

「……ま、決まったからいんじゃないね？」

そのまま、相手のコートに叩き込み、優勝を決めた。

わぁっと歓声上がり、選手達を褒め称える。何故か、満面の笑みを浮かべて両手を広げて…

「ふふ、どんとこーい」

とかほざいている琢磨。……何がしたいんだろうか？

「和人おー！」

「和！」

彩花、琴乃の二人人が駆け寄ってくる……っておい！

「っ!？」

一切、減速せずそのままだとぶつかりそうなので咄嗟に左に避けた。
ふう〜危なかった…

「…何故に睨むよ？」

避けたのに二人人から睨まれた。何故だ!？

とか思っていると、

「えい♪」

ポフツと後ろから誰かに抱きつかれた。

「「あ!？ああ!?!?？」」

「えへへ、時間差だよ♪」

「ひ、ひかりさん…えっと、あのですね…」

あの、柔らかくて、あったかくて…男には無い…形容しがたいものが背中に当たってるんですが…

「ゴロゴロ♪すりすり…」

猫を思わせるように身体を摺り寄せてくる。あのですね、自分の魅力が自覚してください。俺も、男なわけで、今のひかりは凄く可愛くて…何気に銀狼なんて呼ばれていたわけで…

猫は捕食対象なんですヨ？

って、む！？

殺気を感じ、咄嗟にひかりから飛びのき、後ろを振り向くと…

「どわ！？」

さっき避けた二人が突っ込んできて、そのまま押し倒された…。ひかりから飛びのくタイムラグで回避行動が遅れたのだ…。まあ、ひかりを巻き込むよりはいいか…

「あ！？ず、ずるいよ！私が堪能してたのに！！」

「どっちがよ！ひとりだけいい思いして！！」

「ああ、和ちゃんだ♪和ちゃんだ♪くんくん…和ちゃんの匂いだあ」
♪

押し倒した二人にひかりも加わる。頑張れば跳ね除けられるけど、こいつらを怪我させるしな…。

つか、琴乃さん、くすぐったすよ。それにくんくん匂いを嗅いではにゃーっとならないで下さい。ってか、性格変わってる！？口調が昔になってるが、こっちが地なのだろうか。

ひかりが猫ならコイツは犬だな。で、残った一人は…

「……カプ♪」

「か、噛むな！」

か、噛まれた。そりゃ、本気じゃないから痛いというよりくすぐったいんだけど…彩花さんよ。年頃の娘さんが男の首筋に噛み付いちやいけませんよ。

「ゴロゴロ〜♪スリスリ〜♪」

「クンクン♪キュ〜ン♪」

「カプ♪…ハムハム♪」

あゝもう！！突っ込みどころ多すぎ！！ボケ三人に対して、ツツコミひとり処理が追いつかん…

それに！この状態は非常に拙い。場所が場所なら理性君はお空の彼方へ飛んでいるだろう。俺も健全な男だもん。身体の彼方此方に柔らかなのは当たってるわ、女性特有の甘いような体臭と汗が混ざり合った匂いと、火照った身体の熱さが伝わってくるわけで…

心臓バクバクデスヨ…ああ、このまま死ねたら男として幸せなんだろうなあ…

だが、死ぬわけにも行かないので助けを求るのだが…

「よかったね」

ハジは微笑ましげにそれを見ながら、超高速でハジモバイルを操作

しつつ…この野郎！デジカメを構えるな！！

「くそおお！氷室なんて…大っ嫌いだああ！！」

血涙を流しながら琢磨は走り去ってしまった。そこに…

「いい加減にしろさいな！」

「そうですね。これは目にあまります」

「和人。理性は残ってるかー？」

やってきた、沙耶香、華蓮、冬至が三人を引っぺがしてくれて、事泣きを得た…

「ふー！ふー！」

「ばう！ばう！」

「ううう、ぐるうう！」

離された三人は揃って唸っている。完全に獣化モードだ…人としての理性は何処かに置き忘れてきたらしい。まあ、ともかくだ…

「はあ〜。つ、疲れたあ〜…」

なんで出ても居ない競技で疲れにやらんのだ…………

つか、みんなさ今日おかしいよ…………ん？待てよ、民主的に考えると、皆がおかしいって事は…

あれ？もしかして俺の方がおかしいのか？

色々考えてみたが結局答えは出なかった……。

エピソード バスケット

野球、卓球などの種目は残念ながら二回戦と初戦敗退という結果に終わり、残す競技はバスケットと剣球の二つ。

バスケのルールは10ハーフで計20分。んでもってバスケは一回戦から順調に勝ち上がって、決勝まで来た……

「現時点での順位は？」

彩花がハジに聞き、皆はその言葉に耳を傾ける。

「えっと、現時点での1位が3－A。2位が3－C：僕たちは3位だよ」

「バレー、ドッチボールで優勝したのですが：野球と卓球はAに、サッカーと女子テニスはCに優勝を持っていますから：」

悔しそうに言う沙耶香。こいつは、優勝できなかったことをまだ悔やんでるのだろうか？

「このバスケと剣球で優勝すれば逆転できるよ」

とは言うが、状況は厳しい。逆に言えばどっちかを取りこぼしたら

優勝は出来ない。バスケは幸いあと一つだが、剣球は全ての競技が終わってから始まる種目で、優勝に関わってくるので相当盛り上がる。で、その剣球での優勝候補には…

「紅桜先生か…：相当な強敵ね」

部活で嫌というほど強さを知っているのだろう。彩花が小声で漏らす。

「うん、だけど今はバスケだよ。ここで負けたら意味無いからね」

「相手はやっぱAが来たか…」

「バスケ部レギュラー三人に滝川と笈沼がいるしな…：ったく、殆どオールスターじゃねーか」

クラスメイト達が愚痴を漏らす、すると琢磨がふんぞり返りながら

「かっかっか、こっちもオールスターだ!」

「うん、それにAが来るって言うのは大方の予想通りだからね。データ、対抗策、ふふふ、かえってやりやすい相手だよ」

自信満々な琢磨とハジ。

「ま、そのために練習したんだし。負けるきはせんな。なっ!篠!」

「そうだねえ。正直、このメンバーの方がインハイ勝ち抜けるような気がするしね」

バスケ部のお二人もそのようなことを仰っている…

「そっか、なら勝てるわね。和人！」

「俺は勝ち負けはどーでも………「ひゝたゝゝん!!」………ひっ!」
？」

のんびりとした穏やかな悪魔の声が聞こえた。

「頑張ってね〜」

声の先にはやっぱりと言うか、天使のような笑みを浮かべた羊ヶ崎先生が……俺にとってはまさに悪魔！本人に行ったら絶対泣くから決して言わないが…

「ガンバリマスデス」

ああ、もうやるしかない。

んでもって、前の話の冒頭に至る…。

「ふふふ、覚悟しろ！」

さっきから、ウザい事この上ない…何かと突っかかってくるコイツは一体何なんだろう。

「つか、誰？」

率直に聞いてみた。

「なっ！？貴様、この僕を知らないと言っても言うのか！？」

いやゝ知らないから聞いてるわけで……頭大丈夫か？

「Who are you？」

「二度しか言わんぞ！滝川！滝川俊吾だ！！未来永劫覚えておけ！！」

あ、どうやら頭は大丈夫みたいだ。中学生でも分かる英語が通じたぞ。

それに…その名前はどつかで聞いたような……えっと……どこだったか……

と、俺がうんうん頭を捻りながら考えていると…

『そこの馬鹿！！何やってるのよ！！試合始まってるわよ！！』

「うえ！？」

彩花の怒声が聞こえてきて、我にかえる。スコアは既に0－2。あはは、点取られとる…

Side Shungo Takigawa

「ふはっはっは！！よくやったぞ！！どうだ氷室！！」

「いや、お前何もしてねーから」

怨敵、氷室和人め！！まだまだこの程度では済まさんぞ！

「はあ：聞いてねーのか……とりあえず、ディフェンスだ。あっちのバスケット部レギュラーのシューター。篠原には関根がボックスワンで付くから、俺達は四人でゾーン組めってさ。俺は右後ろ。お前は俺の前な」

「断る！！」

まったく、我が親友。笈沼山太郎とあろうものが……

「はあ？」

「ボックスワンとは、特定のプレイヤーにマンマークする戦法だろう？ 僕が氷室につかずしてどうするのだ！！では、そのように！」

「……はあ……分かったよ。関根達には俺が行つとくから好きにしろ……」

うむ、ようやく分かったようだな。そうだ、氷室は僕が潰すのだ。そうすれば、我が妃となる橘も呪縛から解けるであろう……

さあ、来い、叩きのめしてやる！

Side Kazuto Himuro

「もう！何やってるのさ！」

「いやゝわりい。なんか、変な奴に絡まれちゃってさ」

自分のコートに戻り、ハジに怒られつつボールを受け取る。さて……
あらかじめハジに渡されたデータと作戦を思い返す。

〵〵回想〵〵

それは夜の練習の初日のミーティングのことだ…

「……で、注意すべきはA組。予想のポジション取りは、P Gに
関根。S F、P Fに天山と木本…この三人は現役のバスケット部レギュ
ラーで、公式試合でもこのポジションで動いてるんだよね？」

「その通りだ」

「…に対して、こっちはS Gに篠原君、Cに岡島君が居る……岡島
君、インサイドで天山と木本に勝てる？」

「二人同時はきついな。五分五分だ……」

「そう…で、考えられる相手の戦法だけど…」

バスケット部からパクって来た作戦版に磁石を置いて行くハジ。ご丁寧に磁石には名前が書いてある紙が貼り付けてある。うん、わかりやすいな

「多分、関根が篠原君にマンマークしてくるね。で、残った四人で岡島君を止めにくるはず。二人はうちのポイントゲッターだと思われるだろうしね」

「ん？ちよつと待て！俺達は！？俺達は眼中にねえってことか！？」

「…というより、それはゾーンで何とかなるんだ。経験者じゃない僕達はゾーンの中に切れ込む技術もないし、ゾーンの外から…つまりはスリーポイントも殆ど運任せで入らないだろうから」

ハジの説明に琢磨が憤慨し、篠原が補足する。って、勝ち目ねえじゃん

「けど！それはあくまで向こうの常識！！こっちには常識をくつがえすカードがあるんだ…：エースとジョーカーがね」

正直、自身がねえんだけど…

ちらりとハジを見れば…こくりと頷く。はあ…ま、やってみますか…

S i d e M a m o r u S e k i n e

篠原と岡島を潰すこの作戦…こうなれば、こっちの勝ち揺るがない。

残っているのは不良とインテリと馬鹿の三人だ…

後は俺が完璧に篠原を押さえ込む！

「はっ、スリーポイントは打たせねえぜ！」

「ふふ…」

スリーポイントラインに居る篠原に密着マーク……って、何！？

「な、なんでお前が此処にいる！？ボール運びは……氷室！？」

どういうことだ！？フロントコートにボールを運ぶのもガードの役目。これまでの試合は、篠原と一文字で運んでいたはず。なのに…

「正気か！？氷室がPGだと！？」

PG。サッカーで言う司令塔の役割をするポジション。ゲームメイク、パスセンスに加えて、相手にボールを取られないドリブルの技術も要する。素人が出来るようなポジションじゃない…

「本気さ……キミよりPGとして向いていると思うよ？彼は」

「っ！？」

なんだと！？

「はっはっは、来たまえ！！」

早速、滝川がマークに付くが…

「ハジ！」

即座に一文字にパス。だが、一文字はゾーンの外。そこで貰っても何も…

ーパシュ

「なっ!？」

す、スリーポイント!？馬鹿な!？

一文字は迷わずシュート。ボールは綺麗な弧を描いてゴールに吸い込まれていった。

S i d e K a z u t o H i m u r o

「ナイツシュ!!」

「相変わらず化け物じみてるぜ…」

「うわ!？決めたのにそういう事言う? 琢?」

いや、琢磨の言うとおりだ。

ハジのスリーポイント。これは狙ってやったものだ。なんでも、様々なデータ収集の結果、左右の45度の位置なら9割がたスリーポイントを決められるらしい。いや、データつってもさ、限度があるっしょ?

ハジ曰く：

「リングは動かないし、ボールの重さも変化しない。あとは重力とかからのデータからシュートを打つ際の力、角度を計算すればどうってことないよ。ま、これがサッカーとか野球とかだと話は違うんだけどね。人相手だと幾らでもデータが変わってきちゃうから：

らしい：お、恐ろしい奴：

「氷室もナイスパス！！」

「うんうん。僕の見込みは間違ってたね！」

「ま、このくらいはな。御堂先生のチョークを避ける際の能力の応用だからどうってことないさ：それよりもディフェンスだ」

「だね！」

俺達のディフェンス。それはハーフのマンツーマン。つまり、一対一。

篠原の相手は：

「くっ、取られたら取り返すだけだ！！」

「抜かせないよ」

PGの関根。

天山には岡島、笈沼にはハジ！そして：

「氷室和人おおお！！何故、僕に付かない！！臆したかーーーー！！！」

「知るか…」

滝川に琢磨、で、残った俺の相手は当然、本山。

「…舐めてんのか？」

「…ああ、正直、俺もどうかと思うが、チームの決定だ」

憤怒の本山。そりゃそうだ。本山のポジションはSF。バスケット部の点取り屋。何故に、素人の俺がつかにやなんのだ？

『大丈夫、いけるよ』

根拠が知りたかったなハジ

『へへへ、いつでも俺が代わってやるぜ！そうすりゃ…うへへへ…』

逝っちゃってる琢磨よりは…まあ、俺がやったほうがいいな…

えっと…確か…

『いいか？相手に抜かれないという事を第一に考えるんだ』

『腰を低く、両手を上げて…後はフットワークで相手のドリブルの進行方向を身体で塞ぐ感じで…カットは取れるようなら狙ってもい

いけど、まずは抜かれないように』

練習中のやり取りを思い出しつつ…本山に対峙する。

そして、関根から本山にボールが渡る……

右…いや、左かな

「くっ!？」

フェイクにかからず封じ込める。爺ちゃんとの武術の稽古でもフェイント…騙しは常識だった、これくらいなら俺は騙されない……爺ちゃんに比べたら赤子のようなもんだ…

ま、熱くなってるから余計に動きが読みやすいんだが…

—パシッ!

そして、カット。焦って強引に來た隙を付く。動きもそんなに速くない。ま、あの変態染みた動きの爺ちゃんや、人外指定の御堂先生に比べたらな……

で、そのまま篠原にパスしてダッシュ!ドリブルに慣れていないので自分で運ぶよりはパスで繋いだ方が速い。そして篠原から…

「行け!!」

ロングボール!速攻!!そのまま、ボールを受け取り…

「てりゃ…」

ジャンプして、リングに叩き付けた…

Side Sayaka Houjou

なんなんですよ…

非常識にも程がありますわ…

「 Dankなんて…」

和人さんの身長はそんなに高いわけではなく。平均的…175…
ぐらいに見えます。

普通ならリングになんて届くはずがなく、 Dankなんて出来る筈が
ない…ですのに……

結果は軽々とリングに手をかけた。それを可能にしているのは…あ
のジャンプ力。

他のクラスメイト達も目を見開いて驚いています…ですが…

「…今回は結構やる気みたいじゃない。どんな手を使ったのか…」

「…やっぱり、和ちゃんはお母さん似…!!? ……コホン!! ……や
っぱり、あの女の子供だな……」

彩花さんと琴乃さんは別段驚いた様子がありません……いえ…琴乃
さんは驚いていたよう…素の言葉に戻っていますわ…

「まっさか、マジで狙うとはな…」

呆れたように言うのは時雨さん…

「どういう意味ですか？」

それに白樺さんが首を傾げながら問う…

「えっとな、あいつシュートはあまり得意じゃないから俺に、どんなシュートが一番入るかって聞いてきたんだよ。で、 Dank なら直接リングにボール叩き込むから外れないだろうって、言ったんだ。マジで実行できるとは思わなかったが…俺はまだあいつを過小評価してたみたいだな…」

そう言うと、懷から和人帳なるものをとりだし、何かを書き始めました…後で、見せてもらえるよう頼んでみましょう…

はっ!?! いけません!! 今はそれどころではありませんでしたわ!!

「か、和人さん!! な、ナイスシュートですわ!!」

これなら…勝てるかもしれません…って、どうでしょう!!

「勝てたら…私…」

抱きしめると約束したんです…あうう…

試合よりもそっちに意識が行ってしまい、悶々と考えている時に…

それは起った……

「和人さん!？」

S i d e K a z u t o H i m u r o

スコアは15－7。流れはこっちだ……

「くそ!こんなド素人に……どけええええ!!」

強引に突っ込んでくる本山。その進路上に身体を滑り込ませる。このままなら、本山のチャージングでファール。マイボールとなる。だが……

「氷室和人おおお!貴様は僕が!!本山あああ!!ボールを寄越せええ!!」

横から、滝川が突っ込んできて……

「ぐっ!？」

もつれるように三人で床に倒れた……

即座に笛が鳴り、当然、ファールでマイボールとなるが……

……ちっ、左足……やっちゃったな……

……倒れた時に捻った……痛みからして結構重度な捻挫ではなからうか……

けど、折れてないなら問題ない。走れるし、歩ける……これくらいの痛みならどうってこと……

「和君……大丈夫？」

「ああ、問題ねーよ」

「!?!?…その足！」

真っ先に気付いたのはハジ、流石に情報収集力に長けているだけあって、観察眼も見事だ。

「大丈夫だ。走れるし、跳べる」

「……ふう……どうして何時もはちゃんぽらんでいい加減なのに、こういう時は無茶するのさ」

呆れたようにそんな毒舌を吐くハジ。……若干、怒ってるな。

結局、諦めたのか……そのまま試合は続行。予定外のこと起きたがそのままバスケットでは何とか優勝が出来た。

S i d e S h u n g o T a k i g a w a

「なんたることだ!?!」

この僕が……怨敵、氷室和人に負けるとは!?!みとめん!?!ありえん

!!

そうか!!

「これは、チームプレイ!! 向こうのチームが優れていただけで！断じて、僕が負けたわけではない!!」

やはり、勝負は対一。僕と氷室和人の二人でつけてこそだ!!

最後の種目、剣球：

「今度こそ、男子剣道部部长たる僕の力を見せ付けてやる!!」

「……いいから、整列しろよ。ったく」

…無粋なやつめ、折角の高揚した気分が害されたではないか……

まあいい。氷室和人…これで勝ったと思うな!!

S i d e R e i B e n i z a k u r a

「ふっ! はああああ!!」

— ヒュン!! —

数回愛刀を振るう。コンディションは悪くない…むしろいいと言える。

「ふう〜。さて…氷室和人。御堂先輩の言っていたことが本当かど

うか…確かめさせてもらうぞ…」

第31話 競え！激闘球技大会 第二幕 恋する乙女とライバルと（後書き）

霞「更新完了。ヘタレな作者が風邪を引いたらしいので、今回は出てきません……逃げたなこのやろ……」

霞「……え？ちよ、ちよっと相手役が誰も居ないの！？ボク一人！？球技大会だから忙しいって言うの！？まてよ、ボクだってね過密なスケジュールがあって忙しいんだよ！！最近先輩にだって、会えないって言うのに！だいたいね！なんで、ボク以外のところで盛り上がっていることに、ボクがコメントしなきゃいけないの？嫌がらせか！？嫌がらせなのか！！ボクの扱いって一体何！？」

霞「はあ、はあ……ちよっと、すっきりしたかも♪じゃ、次回またあとがきで会いましょう」

第32話：剣舞！激闘球技大会 第三幕 銀の騎士現る

—Side Hajime Itimonji

「はぁ…」

この惨状。どうしたものかな…

「和人！？和人は！？」

「何処にいったの！？」

「うう…約束を護るわけには…ですけど、人前でなんて…ふしだらな…」

「カズちゃ…カズ！？カズ！」

挨拶の前に、怪我をしたカズ君を黒羽先生のところに行かせたんだけど…

目の前の…橘さん達が怖い……我先にとカズ君を探している。

「みんなー！！勝った…」「」「邪魔よ（しないで）（ですわ）

「！！」「」ぐへえ！？」

サムスアップしていた塚に橘さんがハイキック！口々に邪魔扱いされている…うゝん、形振り構ってないね…

「ど、どして…こうな…る？」

ガックリと琢がお空に旅立つ。琢…それが、キミのキャラって奴なんだよ。

さて、それはそうと…

「大丈夫かな、カズ君」

黒羽先生なら治療の心配はないけど…その後の剣球に出たらどうなるかが、心配だ…

S i d e K a z u t o H i m u r o

残っている競技が、剣球だけということもあってか、救護テントには他にけが人の姿はない…ないのだが…

「あの……なんで怒ってるんですか？」

「……怪我……したから……」

きつめにテーピングをまく奈緒先生。いや、いちいちぺちぺちと叩く必要はないでしょ？

「…おしおき……」

うう…不条理じゃ…

だが、腕は確かだ。シップとテーピングで大分痛みを感じなくなっ

た。これで、剣球は…

「…駄目……」

「…いえ、だいじょ…」駄目!!」……ですから、本当にだい…」
…駄目!!」……」

睨まれる。少女みたいに可愛らしい容姿のくせに、この迫力。やっぱり、年上なんだなと…そう思った。だけど…

「奈緒先生、やりますよ。俺は…」

嵌められた…。そんなきっかけで出場が決まったが、やると決まったからには全力を出す。

「…だけど…その足じゃ……」

「でも、やります」

奈緒先生の目をまっすぐ見つめて、自分の意思を伝える。

「それに…いざとなったら、奈緒先生がいますしね」

S i d e N a o K u r o b a n e

「っ!？」

ずるい……そんな微笑を見せられたら……

「奈緒先生、顔赤いですよ？……って、痛！？足、叩かないで下さいよ！」

「……知らない！……」

でも…

「…無理だけは…しちゃ…駄目だから……」

「ええ。ありがとうございます」

Side Kazuto Himuro

『えゝ剣球に出場される生徒は更衣室に集まってください！！』

治療を終え、テントを出るとアナウンスが聞こえた……更衣室？あゝ面とか防具つけんのかな……嫌だなあ……重いし動きづらそうなんだもんなあ……

実は、俺は剣球のルールを良く知らない。去年、一昨年と見学をサボったから…剣球という競技があるのは知っているだけだ……

確か、球を剣で割るとかなんとか…だから立派な球技！みたいな屁理屈を狩谷校長が言っていたのは知っている。

そんなことを考えながら俺は体育館にある男子更衣室に向かった…

Side Koton Kasuga

体育館中が生徒で埋め尽くされ、盛り上がり盛りに盛りがってる……しかもこの競技には……

『お待たせしましたああ……放送部部长。実況のお姉さんこと……三谷千里……三谷千里が剣球の実況をさせていただきます……す……！』

実況が居るし……

でも、実況はありがたいかも……私はこの学校に転校してきたから、この競技を良く知らない。当然、前の学校にはこんななかったし……

その疑問には実況のお姉さんこと三谷さんが答えてくれた

『さて……！剣球なんです！一年生をはじめ、何人かはどんな競技かは良くわかっていないと思います……！簡単に説明しましょう……！ずばり……！剣球とは剣で球を割ること……！これが勝利条件です。使っているのは剣のみ……！打撃、投げ……！その他一切の攻撃をした場合、反則となります……！』

え？剣……？って竹刀とか？危ないんじゃない……？

『剣といってもショック吸収のゴム繊維で出来ている子供向けのおもちゃ……！しかし、剣道の授業で取り入れられているという優れたもの……！スポーツSAMURAIソードを使用しますので安全です……！いいですか……！？侍でも、サムライでもありません……！……！SAMURAI……！！アルファベットですから間違えのないように……！！』

……変なところですが……いお金かけてる……

『次に使用する球です。これは、水風船のようなものを想像してください。中には血液に似せた塗料が入っており、割られたらアウト！！着ている服が、真っ赤に染まります。ですがご安心あれ！気化と同時に色は落ちますので漂白剤がいりません！！これも、子供向けのおもちゃです！！』

……最近の子供はすごいハイテクな遊びをしてるなあ……

『そして、ルールです。上半身に球をつけて、割れば勝利です。ただし、球は背中につけてはいけません！それと、球以外の所に打ち込むのもありますが、明らかに卑劣な行為。スポーツマンシップにのっとっていない行為を行った場合は、御堂先生の投擲チョークで断罪！！即座に失格となります！！男女混合のトーナメント方式！戦うのに男も女も関係あるかああ！！まさに、死闘。最後に残った一人がチャンピオンとなります！！』

和ちゃん……大丈夫かなあ……

『さらに！！剣球の出場選手は……なんと！専用コスチューム……所謂コスプレで決戦に挑みます！戦闘にTシャツ！？あまりに味気ない！！』

……は？ちょ、ちょっと、予算かけすぎでしょ！？？

『衣装は過去に演劇などで使われた演劇部、衣裳部屋からの提供です！！様々な衣装で、舞台を飾ってくれることでしょう！！』

……なるほど、それなら大丈夫だ

『ここで、解説と、特別ゲストを紹介しよう!! 解説は、格闘技に詳しく、しかも自身も人外レベルの戦闘能力者。御堂真希教諭!! そして、漆黒の衣を纏い、あらゆる怪我を治療し、人体に詳しい黒羽奈緒養護教諭と発案者でこの学校のボス。狩谷美鈴校長を特別ゲストとして、放送席に迎えております!! お三方よろしくお願います!!』

『ああ、よろしくな!』

『……しく……』

『ふふ、よろしくね♪さて、どんな青春物語が生まれるんでしょうねえ〜♪』

放送席には超個性的な三人が座っている……すごい事になりそう……

『よいよ、始まるわけですが……注目選手などはいますか?』

『んなもん、あたしの天敵。氷室の奴に決まってるだろ! ガキどものへなちよこ攻撃があいつに当たるかよ!』

『……ヒム君……』

『ふふ、彼には私直々にとびっきりの衣装を着せたわ! あれを着こなせるのは彼以外に考えられないわね』

『おっと!! お三方から絶大な支持だあ〜。氷室選手の活躍に期待しましょう! では、こっちで勝手に決めたトーナメント表の発表です!!』

パッと体育館の巨大スクリーンに映し出されるトーナメント表。知っている人の名前を目で追うと：

Aブロックに和ちゃん。Bブロックに彩花ちゃんと、紅桜先生の名前があった……決勝までこの二人と当たらないんだ……

『では、早速試合といきましょう。まずはAブロック第一試合。三年A組、滝川俊吾選手VS一年B組伊藤正人選手です！』

そして、試合が始まった。

S i d e H i k a r i M i z u n o

和人君の試合はAブロックの第五試合……第一試合から着実に剣道部などが勝ち上がっていく。

皆、武士、忍者、くの一など、華やかな衣装で登場し、白熱した試合などを見せ場を盛り上げていく。

そして、よいよ第五試合……

「…っ!？」

登場した彼の姿に誰もが目を奪われた。

輝くような銀と透きとおるよう青が織り成すコントラスト。そんな甲冑で身を包み、漆黒のマントに銀の髪、整った容姿に左右の異なる色の瞳。

まるでファンタジーの世界から飛び出たような騎士がそこに居た……

Side Kazuto Himuro

「はぁ〜〜」

最近、加速度的に多くなったため息を吐く。

よく、ため息を吐くと幸せが逃げると言うが、それは逆だ。幸せが逃げているからため息を吐くんだ。幸せな奴がため息なんて吐くか！！

周囲の視線がいたい……だから、こんなの似合ねえって行ったのに……あの校長クソババア

しかも、これ幾らかけてんだよ。

鎧の癖に何で出来ているのか軽く、それに動きを邪魔しない。しかも……

「剣までこれかよ……」

そう、通常のスポーツSAMURAIソードはむき出しだ。にもかかわらず、わざわざ日本刀仕様にしたり、忍刀仕様にしたりと、改造を施してある。まあ、演劇の都合上で必要なんだろ受けどさ……

で、俺のは西洋剣仕様の片手剣。金などの様々な装飾がされた剣と鞘付き……派手だ……

まあ、大剣じゃないのは不幸中の幸いだ。んなもん、持ったことねえし、爺ちゃんとの鍛錬はもっぱら木刀だったからな……

『…はっ!? わ、私としたことが一瞬目を奪われてしまいました! しかし、これはすごい!! 騎士ですか!?!』

『ええ♪ね、彼しか似合わないでしょ? あの髪、あの目……ああ……今度の文化祭の主演は彼で決まりね♪』

……なにやら、すごい嫌な単語を聞いた気がする。き、気のせいだ……あ、あははは……

『……ヒム君……カッコいい／＼／』

そして、対戦相手を見て、ますます憂鬱になる……

女の子かよ……しかも一年生。

野郎なら気兼ねなく戦えるんだけどなあ……しかも彩花みたいな戦闘民族種じゃなくて、小柄な小動物を思わせる子だし……

衣装は何故か獣耳をつけた格好で短刀を握ってるし……って、おい! 武器の差があったらフェアじゃねえだろ!?

ああもう、最悪だ!! 足は痛てーし

「あ、あの!」

とか思っていると、相手の子が審判に声をかけ

「……この試合……棄権します……」

なんもしてないのに、試合が決まった。

「え？えつと……いいの？」

「は、ハイ！！そ、その代わり、あ、握手してください！！」

お、おいおい。なんでそうなるよ。

でも、戦うよりはマシだ。そう思って、結局握手した。しかし、小さい手だ……こんな子を剣球に出すなんて、何考えてるんだ？一年共は…

『し、試合終了！！労せず勝ちましたああ！！しかし、どういう事なんでしょうね？』

『ふふふ、ラヴよ！！何も強い者だけが、剣球に生き残る訳じゃないわ。自分の魅力を精一杯使って戦うものも居る。過去、何度か色仕掛けで女子生徒が勝ち進んだっていうこともあったしね！』

なるほど…これで合点がいった。

恐らく、この子は容姿で選別されたのだろう。こんな小さな女の子に切りかかれるはずが無いという、人の良心に訴えた作戦だ。事実、俺もどうしようか悩んでたし……よかった、棄権してくれて……

さて、そろそろ引っ込むか…この視線がきついしな……

続く二回戦…

相手は…二年の体格がいい男。衣装は…

「なんじゃワレエ!？」

黒いスーツにサングラス。武器は長ドス。ヤがつく職業の人だった…しかし、似合ってたな〜

『銀の騎士VS街のヤクザ。このような構図がかつてあったでしよ
うか!？』

『んなもん、あるわきゃねーだろ!!』

皆を代表して御堂先生が突っ込んだ。

『では、試合開始!!』

「おんどりやああああ!」

開始と同時に長ドス片手に突っ込んでくる…

―パン!

それを、左に重心を移動させて避け、そのまま右に持った剣を薙ぎ、相手の腹部にあった風船を割る……

「ぐふ…お、おやっさん…すいやせん…」

そんな棄て台詞と吐き、倒れる相手……すげえ!役になりきってる

!!

『試合終了!! 強い! まさに電光石火!! まさに、守護騎士! 姫を守る騎士は伊達じゃない!!』

え!? そういう設定があるの!?

まあ、何がともあれ二回戦突破だ……

そして、第三試合準々決勝。相手は……

「わっはっは!! よくぞ此処まで勝ち上がってきた!!」

着物を着た侍スタイルの……

「御麟廻螺?」

「な、なんだねその珍妙な名前は!! そのような字、一体何人の読者が読めるというのだね!? もっと考えたまえ!! ああ!! 論点がずれてしまったではないか!!」

しるか…

「滝川!! 滝川俊吾だ!!」

「おっけー。タッ〇ーだな」

「おい!! その呼び方はやめたまえ! なれなれしい上に、色々とまずい!!」

このやかましい声……あ、思い出した。

「いつぞやのバスケの時の奴だ」

「いつぞやとは何だ!! まだ、数時間も経っていないぞ!!」

「ワリィな…人の名前覚えるの苦手なんだよ」

動物なら得意なんだがな。ポチだのタマだの……

『はやくも、火花を散らす両者!! 片や剣豪、方や騎士。まさに、和と洋の対決!! いやゝ解説の御堂先生。どう見ますか?』

『滝川の野郎は仮にも男子剣道部部长でインハイの常連だ…普通なら滝川が十中八九勝つだろうが…』

『…ヒム君は…負けない……』

『…まあ、そういうこった』

『では、お二方は氷室選手が優勢という事で…狩谷校長はどうですか?』

『そうねえ…どっちも美形だけど。銀髪、オッドアイに白い肌…希少度から考えると和坊の方が上ね…』

『はっ!? あ、あの…突っ込みどころが多すぎるんですが……と、とりあえず、氷室選手と面識があるんですか?』

『まあね♪』

……何を話してるんだろうあの人は……

自分から公私混同はやめようとか言ってたくせに……

「ぐっ、き、貴様……先生方に好感を持たれていると、調子に乗るな
よお……！」

こっちは、こっちで睨んでるし……はあ……もう、帰ってえ

そんなドタバタがありつつ……

『始め!!』

試合が始まった。

『試合が始まりましたが……両者動きませんね……』

『滝川はな動きたくても動けねえんだよ……氷室の方は動く気がねえ
だけだ』

『と、言いますと?』

『氷室の球の位置をってみろ。右肩についてるだろ? って事はだ、
一番友好的な攻撃は右の袈裟切り……その他に右からの攻撃だ。んで
もって、左からの攻撃は不可能』

『なるほど!! それによって、右からと攻撃を絞り込んでるので

すね!?!』

『そうだ。さらに言えば、滝川は生粋の剣道部部长。生粋の剣道野郎だ。剣道の有効打はなんだ?』

『面と、左右の胴と籠手……それと突き……そうか!! 剣道では右肩を狙うような攻撃はしない!!』

『その通りだ。そのため、滝川は打ち込む位置を変えるしかない。だが、慣れていないため、剣速は鈍る……対して、氷室はカウンタ―タイプ。攻撃を避け、相手に隙が出来たところをつく。その忌々しい回避能力は周知の通り。つまり、仕掛けたくても仕掛けられねえんだよ』

どうすっかな…

相手が仕掛けてこない。でもなあ、こっちから仕掛けるにしても踏み込むと右足が痛むんだよなあ……

理想は、攻撃に来たところを、左足への重心移動で攻撃を交わして、腕の力だけで剣をふるって球を破壊……右足を極力使わないこれがベストなんだが……

よし!

「…おい、早く来いよ。それでも剣道部部长か?」

「だ、黙れ!!」

「でかい口叩いてたくせに。大体、バスケでも何もできなかったじやねえか…ほら、いいところ見せろよ」

「だ、黙れと言っているんだあああ!!」

おつ、挑発に乗ってきた。単純な奴。

後は、二回戦のリプレイ。剣道部部长とはいえ、剣速は御堂先生のチョークの弾丸よりも遥かに遅い。避けるのは比較的簡単だ…

ーパァン

攻撃を避け、胸にあった球を割る…

『し、試合終了!! あっさり、実にあっけなく終わってしまいましたあ。この騎士を阻むものはや誰もいないのか!!』

「し、しまった!! 僕としたことが…あ、あんな安っぽい挑発に…お、おのれええええ、お、覚えてろよー!!」

見事な棄て台詞と共に、去っていく。分かった、お前の名は忘れな
いぞ、小笠原……

さて、なんだかんだで準決勝か……

『いやゝベスト4が出揃いましたが、レベルが高いですねえ…』

『ふふ、皆素敵よ♪』

『…レイレイ…張り切ってた…』

『ああ、あの野郎。相手が気の毒だぜ…』

『では、改めて。ベスト4の選手を紹介しましょう。まずは三年A組の西島京選手。露出が多い、くの一衣装と、フェロモンたっぷりな大人びた容姿から繰り出される色っぽい視線と笑み。豊満なボディで男達を悩殺。ここまで悠々と勝ち進んで参りました〜！同じ女として言わせて貰います！！死ねばいいのに！！』

『あら、あなたも魅力的よ♪』

『校長先生大好きです！！さてさて、気を取り直して…続いては優勝候補の一角である。滝川選手を破った、三年D組、氷室和人選手…現代に舞い降りた騎士。準決勝はこの二名が争います』

うわ…相手女かよ…

『続きまして、もう一方…Bブロック。まずは着々と突き進む、ミスマズネス。こちらも三年D組、橘彩花選手。しかしながら、本人は物凄く衣装を嫌っているようですが？』

『あらあら…困ったちゃんね♪』

「困ったちゃんじゃないわよ！！何よこれは！！どうせなら…ど、ドレスとか…そ、そういうのにさ…」

離れたところから彩花の視線を感じる。なんだ？

『……ぷっ』

「わ、笑ったわねえ!!」

ギャーギャーと校長先生に文句を言うが、流石に大人だ…逆にからかわれてる

『最後の一人、昨年度のチャンプの貫禄を見せ付けます。クイーンオブソード、紅の舞姫。三年C組担任、紅桜麗先生、圧倒的強さでここまで勝ち上がってきました。』

和服に身を包み、静に眼を閉じ、正座をしている紅桜先生……ちょっと、楽しみになってきた。

どのくらい強いのだろうか?とか、爺ちゃんと比べてどうかとか?そんなことを考えてしまう……ああ、俺のキャラじゃないのに…

『いずれも、総合得点上位のクラス。剣球で優勝した者が、総合優勝を決めます!さあ、熱くなってまいりました!!では、準決勝、第一試合。西島京選手VS氷室和人選手の試合を行います』

中央で西島と向かい合う……西島の姿を見て、一言…

「痴女?」

だってさ、無駄に胸元は開いてるし、しかもそこを強調するかのように風船が谷間のところに置いてあるし、ミニスカート?っていうのかなあれ?ま、ともかく、その丈が短いし……

「坊や？いいのよテレなくても…」

同年か？年上のようにしか見えないんだが……まあ、いいやどうでも…

『さて、試合が始まっていますが、またもや両者動きません。いや、西島選手はしきりにアプローチしてます』

『あらあら♪女の武器を心得ているわね』

『けけけ、無駄無駄。あの鈍感朴念仁の枯れ木野郎にんな戦法通じるかよ。見ろよ、あいつの目を…』

『……冷ややか……』

『な、なんと！？数多の男子生徒を魅了してきた西島フェロモンがまったく、通じていません。一体どういう事なのか！？男色の趣味でもあるのか氷室…ひっ！？』

無礼な実行に腰に差して居た鞘を投げつける。まったく、なんと失礼な事を…俺はノーマルだ…

鞘は当てないように投げたので、威嚇程度だが…効果は十分だったみたいだな

と、そこで…

—ギリッ

「ん？」

「……あんた…この私を無視……無視したわね……」

こ、怖え……なんでだろう。背後に蛇が見える……

「これでどう!？」

『はあ、はあ…こ、怖かった……あ、き、気を取り直して!!に、西島選手がジャンプ、その場でジャンプを始めました、一体何の意味が……あ!？揺れて…豊満な胸が上下に揺れております!!』

【おお!!!!】

『男どもからの歓声!!私は再度、女性として…いや、胸が小さい女性の代表として言わせて貰います!!死ねばいいのに!!』

突如ジャンプを始めた西島。何がしたいんだコイツは？

でもま、隙だらけなんで…遠慮なく

―パン

距離を詰め、球を叩き割った。

「……あんた、何者？」

球を割られて、唾然としていた西島さんが口を開くが…はて？

「三年D組の氷室和人だけど？」

「そうじゃないわよ！！私ってそんなに魅力無い！？あんたにとってさあ！！」

…何が言いたいんだろ？ま、それはともかく…

「……ほら」

纏っていたマントを西島にかける

「は？」

「んな、格好してたら風邪引く上に、御両親が泣くぞ？」

まったく、年頃の娘が……眼のやり場に困るっての！

「……遅いわよ…今更顔を赤くするなんて……」

「？ 意味が分からんが……」

「さっきまでは普通に私を見てたじゃない！」

「色香に惑わされて負けるなんていう愚行は俺は絶対に侵すつもりは無い。近くに反面教師が居たんでは…何度か醜態を見たことがある…」

言わずもがなうちの爺だ。

「まあ、そんな訳で…相手が悪かったな……ま、どっちみち女にはきかないんだから、優勝は無理だったろうさ…」

さて、次の相手は彩花か紅桜先生か……

――Side Ayaka Tatibana

やっぱ、勝ったわね……

まあ、負けたら承知しなかったんだけど……うん、あの女の色香になんて……

基本的にあいつは紳士と言うか……なんというか……時に、女に興味が無いんじゃないかとさえ思う時がある。

だってよ！私がお風呂に入っても覗きに来ないし、薄着で出てきてもなんのリアクションも見せないし……風呂上りに思い切って耳かきしてあげた時なんて、グースカ寝やがったし……

あの時は、女としての自身を本気で失うと共に、大暴れしたんだ……

っと、いけない。今、そんな事を考えてる場合じゃない。

チラッと先生を見る。うわゝ本気だ……そりゃ、麗先生が剣で手を抜くなんてありえないんだけどさ……

しかし、どうしよ……

正直、勝ち目が無い。剣道部の顧問という事もあり、先生とは月に何度か打ち合うが……勝ったことがない……

でも…

「やるだけやるしかないか…」

どっちみち、全力を尽くす以外できることはない。

『では、準決勝第二試合。橘選手VS紅桜選手…試合開始です!!』

先生の球は胸の中央やや左、心臓の辺り…。私はお腹、多分胴がくる…って!?

—ヒュッ

あ、危なかった…

開始早々先生が放ったのは突き。身をよじってなんとか避けたけど…ヤバ、完全に読み外れた…

駄目だ…実力で劣ってるのに後手に回ったら、勝機なんて無い。

「やああああ!!」

此処は打って出る!!それに、何の策も無いわけじゃない。

—Side Rei Benizakura

流石だな橘…見事な剣戟だ…

鋭く、そして重い。今年のインターハイの間違いなく上位に食い込むだろう

だが…まだ甘い。

橘の剣は真っ直ぐすぎる…虚実が無い。

サッカーやバスケットを始めとするスポーツなどでも虚実は使われる。それは、フェイント

相手を翻弄し、騙し、裏をつく。

だが、橘の剣は全てが実のみ。フェイントが無い。ゆえに読みやすい剣で受け、捌いていく。しかし…

「なっ!?!」

「貰った!!」

S i d e A y a k a T a t i b a n a

「貰った!」

私は片手面を放ち、先生がそれを受けたところで空いている左手を伸ばし、着物の袖を掴み…

グイッと先生を引き寄せて…

剣の柄で球を狙う。

ルールは打撃、投げなどの攻撃行為の禁止、袖を掴んで引っ張るのは攻撃じゃない。

さらに、剣で球を割るのが勝利条件。柄は剣の一部だ！！

けど…

『紅桜流歩法術『桜花』

「きゃ！？」

あの、袖を捕まれたままの崩れた体勢からすると、抜け出し…

「見事だ橘。褒美に我が流派の秘剣を見せよう」

『紅桜流奥義桜花乱舞』

振るわれる鋭い剣戟。

一撃目…剣を持っている手に当たり、剣を持つ手が緩む

二撃目…返して剣を叩き落されて…

そして、三撃目…

— パァン

見事球を捕らえる。

『決まった！！不思議な歩法からの高速の三連撃！！一体、あれはなんなのか！』

『あの歩法はあいつの家の流派独特の歩法。剣道のすり足ってのは前後の移動に爆発的な効果を発揮する。それを左右への移動へと応用したのがあの歩法だ…その動きは空を舞う桜の花の如く…』

『な、なるほど！そして、あの攻撃は？』

『あれはあの歩法から繰り出す高速の三連撃。最初の二発は力をセーブして、ピンポイントに相手の獲物を無力化し、最後の三撃目で決める』

『……筋肉の収縮を……利用してる……』

『…また、人外指定人物が登場してしまいました……お二方解説ありがとうございます。狩谷校長からは何かありますか？』

『ふふ、いいわ〜♪美しいわね……ああ、早く和坊とのツーショットが見たいわねえ……異国の戦姫と姫を守る守護騎士……ああ♪』

『……えー、校長先生がトリップしてしまいました…しかし！決勝戦。確かに見ものです！！互いに圧倒的な強さで勝ち上がってきた二名。果たして、どちらが勝つのか！！』

Side Kazuto Himuro

「ごめん……負けちゃった……」

俺のところにやってきた彩花が笑みを浮かべてそう言う……だが……

「あっ……」

「無理すんなよ……」

そう、無理してるのは見え見えだ。悔しくて……泣きたいくせに……

髪を撫でるように触り、そのまま胸に掻き抱いて……

「悔しかったら、素直に泣けよ……」

「……くっ……ひっく……わ、私……負けちゃった……」

「……ああ」

「……じ、実力の差は分かったの……でも……」

「……」

「悔しい……悔しいよ……」

「……その気持ちがあれば、次は勝てるさ……」

泣いている彩花の頭を撫でながら……痛む足を踏みしめて……

決勝戦……マジで勝ちに行く！

第32話：剣舞！激闘球技大会 第三幕 銀の騎士現る（後書き）

更新完了！

霞「ツーン」

霞ちゃん？

霞「フン！」

かつすみ！かつすみ！

霞「……………」

…………ツンデレ？

霞「誰が！！キミなんかになんかそんなことしないよ！」

おっ、反応あった！

霞「…………ツーン」

…そんなにボクのこと嫌い？

霞「…………ツンツン…ツーン」

あ、そうなんだあ。へえ、そっかあ…………残念だなあ

霞「……………」

そろそろ霞ちゃんの時代が来る予感がしたんだけどなあ…

霞「!?!」

そういう態度取っちゃうんだあ…

霞「て、テイクツー！お願いします!!」

うん。じゃ、改めて、更新完了!!

霞「毎度おなじみ霞です！今回のお話は引き続き球技大会！よいよ剣球に突入！」

霞ちゃんは運動はあまり得意じゃないんだよね？

霞「うう…ボクはインテリ派なんだよ」

頭はよくないのに？

霞「げ、芸術に秀でてるんだよ!!もうお金だって稼いでるんだ！立派な社会人なんだよ！勉強なんていらぬもん!!」

それもそうか…

霞「そうそう。ところで、剣球ってユニークだよな」

まあねえ…こういう学園モノに球技大会は王道だし、なんか違うことを取り入れたかったんだ。

霞「スポーツSAMURAIソードかあ…あれね、最近時代劇にも使われるんだよ！確か…作ってる会社はMISUZUだったね…ん？MISUZUって…あれ？」

…では、次号決着。乞うご期待

霞「ま、いっか。いつも感想ありがとう。またね」

やればできるじゃん。って、どったの？

霞「……ボクも…先輩の騎士。見たかったな……」

……ごめん……ごめんよ

霞「いいんだよ…どうせ、僕なんかさ…」

第33話：接吻！？ 激闘球技大会 終幕 ラストバトル！！（前書き）

えゝ今更ながら…

この作品はフィクションです。人間的にありえねーだろ！？とかいう、人外指定の人物が多数出ますがスルーの方向でお願いします。

尚、妙な関西弁がでますが、作者は関東の人間なのでおかしな点があるかもしれませんが、それもスルーの方向でお願いします。

読者の皆様の寛大な心にいつも感謝しております。

第33話：接吻！？ 激闘球技大会 終幕 ラストバトル！！

——Side Rei Benizakura

『決勝戦！！氷室選手VS紅桜選手：果たして、どちらが優勝。そしてクラス総合優勝の座を獲得するのでしょうか！？では：始め！』

合図と共に私は氷室と向かい合う：

『……どうしたんでしょうか？互いに動きませんが：解説の御堂先生』

『けけけ、麗の奴攻めあぐねてやがる：ま、こうなる図式はある程度予想できたけどな』

『と、いいますと？』

『いいか？戦闘における攻撃のタイミングつうのは『先の先』、『先の後』、『後の先』、『後の後』の四つに分類される』

『はあ：』

『先の先は奇襲、相手が動く前に攻撃する。先の後はフェイントなどで相手を惑わし、隙を突く……：自分から仕掛けていくタイプだな。あたしや麗の奴がこのタイプだ』

『……では、氷室選手は？』

『後の先はボクシングなんかカウンターのことだ。相手の攻撃に合わせて攻撃を仕掛ける。リスクも大きいが、成功すれば威力は2倍。そして、最後は後の後。これは最も難しい、相手の攻撃を完全回避し、完全に死に体。つまり、一瞬硬直した隙を突くんだ。だが、相手の攻撃を避ける技術と、一瞬しかない相手の死に体を確実に捕らえられる技術が無いと行うのは不可能だ。氷室はこの二つを得意とする待ちタイプだな』

『なるほど！では、麗選手は迂闊に仕掛けられないという事ですね？』

『そう言うことだ』

実況の言葉を聞き流しながら私は氷室を見据える。

ほう…

思わず感嘆する。隙のない佇まいは元より…纏っているのは正真正銘剣気…いや、闘気か…

面白い！

御堂先輩の攻撃を避け続けているという事もあわせて、とても面白い相手だ。

とはいえ…どう仕掛けるか…

自信がないわけではないが、確実に取れると言う確証もない。避けられれば、隙をつかれて一気に…

「っ!？」

―ヒュッ

―バシィ

『おお!？最初に動いたのはなんと、氷室選手です!! 先程の解説ではカウンター…待ちのタイプだという事でしたが…大方の予想を裏切る展開です!』

『まさか、氷室が先の先とはな…麗の野郎も予想してなかっただけによく受けたな。完全に虚をつく攻撃……（だが…いつもより、動きにキレがねえ?…あのやろう…どっか傷めてやがるな…足か?）』

「くっ!？」

『攻める! 攻める!! 怒濤の攻め!!』

『だけどな…』

「甘い!!」

剣戟は橘の方が鋭い…先程は少々面食らったが…

――Side Kazuto Himuro

ちっ…踏み込みが痛みで甘くなってる……剣戟も鈍るわけだ…

―ヒュン

「ちっ」

『おっと、今度は攻守逆転！紅桜選手攻める攻める！！しかし、当たりません！！』

『相変わらず、忌々しい能力だぜ…』

『と、いますと？』

『あいつのあの回避能力の秘密は…卓越した先見にある』

『せ、先見ですか？』

『ああ、物事の先を見据える能力。ぶっちゃけると未来予測みてえなもんだ…』

『み、未来予測！！そんな超能力…』

『勘違いすんな。お前が言ってるのは未来予知。未来予測はあくまで予測だ…これは誰でも使ってる力…例えば…』

『ひっ！？』

『…今、あたしが拳を振りかぶった時、殴られると思ったろ？それが、先見だ……相手の動作やデータから様々な出来事を予測する。野球のバッターやサッカーのゴールキーパーなんか分かりやすいな。ピッチャーのボールを打つ際にピッチャーのデータから予測したり、

キッカーのシュートを軸足の方向や目線で予測する…』

『な、なるほど…氷室選手はその予測の力が優れているんですね？』

『そう言うこった…だがな、あいつの先見は普通とちと違ってな…
…あいつの場合、データよりも感覚と直感が優れてる…いわば先天的な先見持ちなんだ……さっきのあたしの説明での先見で最も優れてるのは一文字だ。様々なデータから成り立つ先見。それじゃあたしのチョークは避けられない…。氷室のは直感的に相手の行動を予測してるんだ』

『ど、どういった違いが？』

『あいつの先見にはデータは必要ないから、初見でも先見が使える。そのうえ、あいつのはフェイントすら予測する。それに合間って、抜群の身体能力が回避を可能にする。正直、あたしですら、あいつに一撃当てる手段が今のところねえ…橘なんかには先見が使えるねえみたいだから良く殴られてるみてえだな……そのメカニズムさえとければ…』

『ああ、御堂先生が考え込んでしまいました。と、とりあえず、解説ありがとうございます……って、え！？』

『…ヒム君…！』

ちっ、避けるのがきつくなってきたな…

剣を使って攻撃を裁いてはいるものの、痛みで動きが鈍る。だめだ！

バックステップで一旦距離をとる。

このままいったらジリ貧だ。いずれ、当たる…

『こらー！ー！何やってんだ！！てめえに一撃くれるのはあたしだ！！麗なんぞにやられてみる！！ゆるさねえからな！！』

…御堂先生の罵声が響く。

…これしかないか…

避けられないなら、次の一撃を持って決める！！

両手で、剣を構えて…駆ける！！

『紅桜流剣術歩法桜花！』

見える！

『氷室流総合格闘術 剣 瞬斬閃』

〓回想〓

「どうした、終いか？」

「はあ、はあ…ば、化け物め…」

霞と出会って、少し経ったころ、俺達は少し遠くの山までピクニックに着た…筈だったのだが…

「せ、先輩!! ひ、酷いよ玄ちゃん! やりすぎ!!」

「…そ、そうかのう……じゃが…こんなことでは熊には勝て…」

「「勝てるか!!」」

ガバツと起き上がり、叫ぶと、霞とハモツた…

「あんたのような変態妖怪爺と一緒にすんな!!」

「そうだよ! 先輩も普通じゃないけど…まだ、人間よりなんだから!!」

あ、あの…霞さん、フォローなんだろうがちょっと傷ついた…

「そうかのお…先見を使える和人なら十分、ワシを超える素質をもつてるがのお…ん? そうじゃ! その才を生かす戦術をつればええんじゃない」

思いつきで始まったのは古典的な重りのトレーニング

「おい…」

両手、胸、腰、両足にこれでもかと鉛を仕込んだアングルを付けられる…今なら、銃弾も防げるな。

「先見をもつとも生かすのは速さじゃ。カウンターを喰らう事無く、先の先を取れるはずじゃ」

「だからって、動けないほど付けるな！」

「動けないんだ…ねえ、玄ちゃん。この先輩、ボクの部屋に置いてもいいかな？」

「おい…霞」

「煮るなり、焼くなり、襲うなり、好きにせい」

じ、冗談じゃない…

その後、死に物狂いで自力で動けるようになり、どうにか霞のおもちゃにされることはなかった…貞操は護られた。

で、その時の鍛錬の成果によって習得した技の一つが瞬斬閃…

その一撃は瞬きの速さ…

振るわれる剣は鋭く敵を切り裂き…

全ては一筋の閃光の如く…

独特の歩法…だが、詠める！

瞬く間に距離を詰め…

両手で、最速の斬撃を放ち…

―パン

見事、球を割るが…

「…っ!？」

技の反動に足が耐えられずに

「キャ!？」

―Chu♪

そのまま、紅桜先生ともつれるように倒れてしまった。

ん?なんか、変な音が…聞こえたような…それに、この感触は…

―Side Rei Benizakura

氷室の姿勢が低くなったと思ったら、姿が消えたように見えた…

いや、それは錯覚。恐らく、身を屈めて視界から消えたただけだ…だが

疾い!？

距離をつめるのが速い。そのせいで消えたように見えたのだ…

そんな攻撃に、私の桜花も通用せず。私は負けた…負けたのだが…

今の状況が分からない…。

いや、冷静に考えれば、距離を詰めて来た際の勢いを殺せなかった氷室ともつれるように倒れこんだのだが…

この唇に感じる暖かい感触…

目の前には綺麗な左右の異なる色の瞳…

……うちは…うちは…

——Side Kazuto Himuro

一秒、二秒…

静まり返る体育館で時間が経過する。

いや、確かに経過しているのだ、だが、誰も動くものも居ない中、まるで時間が止まったよう…

そんな中で、俺と紅桜先生は互いの唇を重ね合わせていた…

目の前に広がる整った顔立ちと、うっとりと溶けるような表情……あれ？

うっとり？切れ目がちなクールじゃなくて？

って…！そんな疑問に想ってる場合じゃないって…！

「あ…」

「っ！？す、すみませんでした！！ふんばりが利かなくて…！」

「…謝ることあらへんよ」

あらへんよ？あれ？

「は？」

「…うちは後悔してへんよ。嬉しいんや。それに…」

「んぐ…」

ぐいっと引き寄せられたかと思うと、再び口を塞がれて…

「ふう…好きや…うちと一緒にになってえ…」

開放されると同時にそんな爆弾発言をされた…

『え、ええ！？…何やらとんでもない事になっていますが……』

『……麗の好きな男のタイプは自分よりも強い男……今までめぐり合えなかった理想の男に会えたんで、キスでタガが外れちゃったんだろうな…って、な、奈緒先輩！？』

『……レイレイ…いい度胸……ふふふ……何？…マッキー…』

『な、なんでもないっす』

『ふふ、面白くなってきたわね♪』

そんな実況席から徐々に…皆の硬直が解けていき…

『ざけんな、死ね氷室!!』

『何羨ましいことしてんだこらあ!!』

ボルテージの上がった男達の怒号…さらに…

「不潔!! 不潔ですわ!! こ、公衆の面前で接吻など!」

「か、和ちゃんの馬鹿あ!!」

「和人君?なんで嬉しそうなのかな!？」

「和人様?…お話がございます…」

何やら御立腹な女性陣…そして、何より恐ろしいのは…

「かああ!ずうう!とおおお!!!グルウウ」

獣化+バーサクになった彩花である。しかも、この足じゃ逃げることも叶わず…

「ま、待て!!!じ、事故…「G u g a a a!!」…うお!!!」

去り行く意識の中で俺は爺ちゃんが常々言っていたことを思い出していた…

『和人や、女子は時として熊よりも恐ろしく怖い生き物じゃ…決して怒らせてはならんぞ……どれだけ修行をしても勝てるもんではないからの…』

ん…

目が覚めると、視界に見慣れた天井が入った…

教室？ いや…保健室か…

天井から校舎内…教室だと思ったが、周りを見回して保健室だと気付くが…

「……撫で…撫で…」

「……あの……何してるんですか？ 奈緒さん」

いや…そりゃ、この頭の下の方柔らかく暖かい感触とシュチュエーションから、大体の想像はつくんだが…

「…膝枕……気持ちいい？」

「はい！ って、そうじゃなくって！！」

慌てて起き上がろうとするが…

「…まだ寝てなきゃ…めっ」

頭を押さえつけられた…

「……撫で…撫で……」

「……………」

「…撫で…撫で……」

「……あの……あの後どうなりました？」

両腕がズキズキ痛むのは、彩花の爪と牙によって付けられた傷だろう……アハハ…この痛みに慣れてしまった自分が怖ええよ…

「…しぐれんが…ヒム君を運んだ……」

なるほど…

「で…その、あの視界の端でもごもごやってるのは…なんすか？」

いや、なんなのかは分かる…

「むー！むー！！」

手足を縛られ、猿轡をはめられた…紅桜先生だ……

「…ふふふ……おしおき…」

…折角の着物が穴だらけなところを見ると、恐らく御堂先生もグルだな……

とりあえず…

「着替えてもいいですか？」

いい加減、この鎧を脱ぎたい…

「…もうちょっと…寝てる…足の治療中」

見てみると、足に何本か長い針が刺さつとります…

「あ、あの…」

「……針で…治療力…増大…」

す、すげえんだな、最近の保険の先生は…全然痛くないし

奈緒先生に敬意を抱きつつ、言われたとおりジツとする。

……結局ここから20分。俺は奈緒先生に拘束され……ようやく帰れたのは球技大会閉会式の一時間後だった…

翌朝、…彩花は容赦がなった…

―ゲシッ

まどろみの中、そんな音を聞いたかと思うと同時に浮遊感…そして…

「…痛!!」

頭に鈍痛……。なんのこっちゃない、ベットから蹴り落とされたのだ……

「朝っぱらから何……するんでしょうか？」

即座に文句を言おうとするが、俺の怒りは彩花の纏っている絶対零度の冷氣によって一瞬で鎮火された……

こ、こえええ

「ふん、起きたんならさっさと着替えなさいよ」

「……お、おい！……っ！？」

冷たくそれだけ言って背を向けた彩花を追おうとするが、足が痛み、蹈躪を踏む……そっか、怪我してたんだっけ……

「……あ！？」

そんな俺に気付いたのか慌てて戻ってきて、そのまま俺に肩を貸してくれる……なんだかんだで優しいなこいつは

「大丈夫？」

先程の冷氣は嘘のように薄れ、心配そうにそう問いかけてくれる

「……ああ……そのままじゃお前が辛いだろ？その辺に松葉あるから取ってくれ」

大げさなのだが、奈緒先生に半ば無理やりもたされ、捻挫の怖さを

語られ：まあ、痛い思いをするよりいいか：という理由で借りたものなのだが：

しかし、うちの保健室、なんでもあるね

あの心電図の機械があつたのには本気で驚いた：

「わりいな、チャリ漕げなくて：」

「いいわよ。偶には歩いてゆっくり行きましょ」

俺に付き合う感じで自転車を置いて、徒歩で学校に向かうことにしたらしい、朝連は球技大会の翌日もあつて休みのようだ

「それに：聞きたい事があつたしね」

「……ナンデシヨウカ？」

うう…また冷気が……

「まず、問1。あんたの剣術について：」

「いや…あれは……」

「あんたさあ：前にあたしに：『無手の格闘術だけだよってんのは、だから剣なんて握ったことねえ！。悪いな！』って、言っけなかつたっけ？」

「…言っていました……」

「で、昨日のあれは？」

「……ごめんなさい。嘘ついていました」

下手な反論は逆効果だ。素直に謝ろう。何も怪我してる俺を殴り飛ばしはしないだろう……と、思いたい。

「…理由は？」

「いや、剣道部に無理やり入らされて朝連なんてごめんだーとか思っちゃったりなんかしてな」

「……開き直ったわね」

はあ〜とため息をつき

「では、問2。あんたのその怪我について……いつから？」

「…バスケの時。相手の御庶瓦と倒れ時にだな…」

「誰よそれ!! 滝川君でしょ!!」

いいつつ、ペシッと頭を叩く。何時もより物凄く軽めだ

「もう…無茶ばかりして…」

「…すまん」

心なしか声が暗かったので謝る。が、

「あ、あの…彩花さん、痛い…痛いんですが…」

叩いた際にそのままにしてあった手に握力が込められ、ミシミシと悲鳴を上げる俺の頭。

所謂アイアンクロー…

そして…

「…問3。紅桜先生について」

先程とはうって変わってドスの聞いた声…

「…あ、あれは事故です…よ。打ち込んだ際に踏ん張りが利かなくて倒れた拳句に…ちよっとラッキーなハプニング？」

「ラッキーですって!？」

ーギリギリ

「…痛い、痛いって!!だ、だって!!俺だって男の子だし!先生美人だし!!ラッキーとか思うじゃないか!!」

「だ、だからってキ、キスなんて…」

パツと手を離し、恥ずかしそうに告げる彩花…

「なんで、彩花が気にすんだよ!たかがキスくらいで!そりゃ、初

めてなら俺ももつと動揺したけど、初めてって訳じゃ無かったし…
…先生にとっては悪かったとは思ってるけど…事故だったわけだし」

…なんだろ、若干冷気が強まったぞ

「……ねえ、それってどういう事？」

彩花の質問に遠い目をしながら語る…

「俺のファーストキスはとつくの昔に母さんに奪われてるのさ…」

「お、お母!？」

「…それも一度や二度じゃない……」

しかも、ロマンチックとは程遠い…頭をホールドされ半ば無理やり
に……

「…なんでも……『他の牝豚に奪われるくらいなら!!』らしい、
あの頃の俺は、力が無かった…」

その後、一週間口を聞かなかったら二度とそんな事はしなくなった
が…

「…それから、暫くの間…年上の女性が怖くて仕方が無かった……
だから、初めてでない上で、事故でのキスなんて何にも意味がねえ
んだよ」

まあ、暫く騒がれるのは我慢するでしょう…

「で、でもさっきラッキーって…」

「そりゃ、男としての性だな、更に言えば俺が酷く嫌で、落ち込んだ表情してたら、先生傷つくだろ？」

それ位は分かる。伊達に、あの色情の孫をしてた訳じゃない。酔っ払うたびに女心とは…という長話を散々聞かされた。

「それに、済んだ事をうだうだ言ってもしかたねーだろ。ほら、とっとと行こうぜ」

「う、うん…」

二度寝してねーのに遅刻なんて冗談じゃねーからな

教室に入るとクラスメイト達に劳いの言葉と、紅桜先生とのことで恨みがましい言葉を掛けられ、若干戸惑いながらも自分の席に向かうと…

「か、かか、和人さん!!」

格闘漫画よろしく! って感じで俺の行く手を塞ぐように沙耶香が仁王立ちしていた。

「おはよ。とりあえず、遅刻はして…ない…よ?」

【ざわっ!】

教室内がざわめく、挨拶で軽く手を上げた俺をスルーしてそのまま沙耶香さんはギュッと抱きついてきたのだ…

「や、約束は守ります!ご、ご褒美ですわ!」

ーギリギリ……

「…ご…ご…褒美…じゃ…ねえ…」

その力が強い。つか、これサバオリじゃね?

「北條さん、ブレイク!」

ハジが俺のヘルプに気がつき、引き離す。

「はあ、はあ…あ、朝っぱらから何しやがる!」

「なっ!?わ、私のほ、抱擁が気に入りませんの!」

「ざけんな!あんなバイオレンスな抱擁があるか!」

俺の叫びに…

「そうよ!!何してんのよアンタ!!」

「そうだよ!何てことするの!」

「泥棒猫…」

彩花、ひかり、琴乃が加わる。

「あ、あなた達には関係ありませんわ!」

「関係あるわよ!ただでさえ、最近私に構ってくれないんだから!」

「そうだよ!私なんてスタートから遅れてるんだから!北條さんばっかりずるいよ!」

「後から出てきておいてどいつもこいつも……私の和ちゃんに触るな!」

……おい

「何いつてるのよ!和人はあたしのよ!!」

「和人君はモノじゃないよ!」

「そうですわ!」

とりあえず…

「おはよう。ハジ」

「…おはよ。この状況を無視して挨拶するなんて大物だね和くん」

「いや、それが一番被害が少ないような気がするんだ」

そんなドタバタしつつも、チャイムが鳴り席につく。SHRの時間だ
入ってきた瞬間、俺を見つけた御堂先生が舌打ちしたのがちよつと
引っ掛かったが…とりあえず、何事も無く一時限目の現国に突入し
た。

こうして、激動の球技大会は終わりを告げ、いつも通りの日常に戻
っていく…。

第33話：接吻！？ 激闘球技大会 終幕 ラストバトル！！（後書き）

更新完了ー！！

……って、あれ？霞ちゃん？

居ないみたいだ…ふむ、どうやら忙しいみたいだ。

まあ、その理由は次回あたりの更新であきらかになるとして、今回で球技大会はラストー！

とりあえず、麗フラグを立ててみたわけですが……彼女がヒロインになるのは反響次第。つか、なるとしても、一旦本編が終わってからの個別ルートのお話になってからです……何時になるやら…

ではでは、今回は一人で喋ってても寂しいので此の辺で。次回の更新で会いましょう。

第34話：進路！？休止！？彼、彼女の望む未来

——Side Kazuto Himuro

「んじゃ、進路希望調査ちゃんと書いて来いよ。連絡は以上だ。じゃ、明日な」

そう言って、御堂先生が去っていく。

「じゃな、氷室」

「バイバイ、氷室君！」

「あ、ああ…じゃあな」

慣れない…

球技大会が終わってからというもの、クラスの連中に良く話しかけられるようになった。

ちよつと戸惑いつつも、返事をする。まあ、悪いことじゃないけど…

それよりも…

「はあ…」

放課後のSHRを終えたので、皆、挨拶をして、それぞれ席を立ち下校なり、部活になりに行く。

彩花はインハイも近いとため剣道部、ひかりはバイト、沙耶香は生徒会。琴乃も明日が休日と言う事もある、家に帰省するらしく去って行き…ハジは何時の間にか消えていた…

そんな面々を見送り、ため息を吐きつつ俺は席を立つ。

球技大会から三日…後は夏休み一直線なのだがそこに至るまではまだ、二つの問題があった。

一つは期末テスト…ま、これに関しては特に俺は悩んではない…
…唯一苦手な教科があるが、まあ今回に限っては何とかなりそうだしな…

「ほ、補習だけは避けないとおおお!!」

叫びつつ出て行った琢磨ばかには死活問題のようだが…

俺が悩んでいるのは…手元にあるもう一つの問題…

「……どうすっかなあ」

手元のプリントには進路希望調査と書かれている…

教室の外で待っていた華蓮と一緒に学校を出る…

華蓮とは高校に入ってから二人で下校する機会が多い。

三年になって交友範囲が広がったが、一年前までは俺と華蓮に冬至と彩花を加えた四人でつるんでいたのだが、部活がある二人とは下校時間が違うためだ。

なので、華蓮と二人で帰ることになるのは当たり前のこととなっていたのだが、そういえば最近はあるまなかったな。

そのおかげか…

「お、何時も仲が良いねえ。どうだい、若奥さん！いいの入ってるよ！」

「あんたもこんな別嬪さんの良い嫁貰ったねえ」

商店街では若夫婦として扱われている。いい加減、この手のからかいには慣れたが、何故か彩花が居ると烈火の如く怒り出すのは俺の中での七不思議の一つだ。

足は、毎日の奈緒先生の治療の成果もあってか、痛みは和らぎもう松葉は使っていない。

からかわれながら、八百屋、肉屋、魚屋などを一通り周り食材を買う。そこに華蓮が声をかけてきた。

「何かお悩み事ですか？」

「まあね…進路のことだな…華蓮は実家を継ぐんだろ？」

華蓮の家は少々特殊で、父親が神社の住職というのもあってか、神社で、巫女さんをしている。

「はい。そのつもりです」

やっぱりそうなんか…いいなあ、具体的な未来図が見えてて。

そんな事を考えていると、若干恥ずかしそうに…華蓮が

「あ、あの…進路でお悩みでしたら…そ、その…住職なんていかがでしょう？」

………

「…は？」

なにそれ…つまり…婿入りしろってこと？

「H A H A H A！華蓮も冗談が好きだな…ま、ありがと…ちよつと気が楽になった。悩んでる俺を元氣付けようとしてくれたんだろ？」

「…はあ…もういいです！」

むう…なにその反応？しかも若干お怒りになっていませんか？

「…とはいええ、やりたい事が決まっているのは良いことだよ」

俺は漠然と今を生きることしか考えていない。願わくばこんなのんびりとした日常が続きますようになんて考えている。

ピーターパンの気持ち少し分かる。大人になんてなりたくない。

ま、無理だつうのは分かってるけどね…

華蓮と別れて一人家路に急ぎながら…

「はぁ…どうしよ…」

深々とため息を吐いた…

—Side Kasumi Misora

先輩が球技大会で怪我をしたと聞いてから二日後のこと…

ボクが所属する芸能プロダクション…その社長室でボクはマネージャーと社長さんと向き合って、話をしていた。

「……考え直してくれないか？キミは、もはや売れっ子のアイドルなんだ…才能もある。最近はやっとスランプ気味だが…霞くんなら乗り越えられるはずだ」

「そうよ。もう一度良く考えてみて？」

マネージャーと社長がボクを説得するけど…もう、ボクの意味は決まっている。

「ごめんなさい…でも、今のままじゃどのみち、良い歌は歌えないんです」

そう、ボクが歌手となったきっかけ：それは先輩にボクを見つけてもらうこと。でも、その希望はもう叶った。その後には何も残らなかった…

先輩の顔が見たい。

先輩の作ったオムライスが食べたい。

先輩の傍に居たい…

その思いが先輩が怪我をしたと聞いた時に弾けた。

だから…

「だから…暫く活動を休止します」

凄く悩んだ…

きっかけはどうあれ、歌う事は好きだから…でも、これ以上先輩の傍に居られないという事も我慢が出来ない。

ボクが怪我をしていた時に先輩は傍に居てくれた。でも、先輩が怪我をしているのにボクは傍に居られない。そんなのは駄目だと思った…

玄ちゃんが亡くなって、傷ついた心の先輩…それを救ったのは彩花さんだ。今も、彩花さんが先輩の傍に居る…

このままじゃ、先輩が取られちゃう。遠くに行っちゃう。

嫌だ：

考えた結果：たどり着いた結論は：

歌も先輩も好き：なら、両方手に入れる。

凄く我俣な事かもしれない。でも、昔の玄ちゃんの言葉が胸に残っていた。

女の人を口説きまくっていた玄ちゃんを咎めた時の言葉だ：

『じゃがの、好きになってしもーたんじゃからしょうがないんじゃ。魅力は人それぞれ違うからの。道徳心から外れているかも知れんし、侮蔑の視線に晒されるかも知れん……じゃがの、後悔はせんよ。ワシ自身が幸せなじゃからな……そのために負うべき責任は負う。口説いた女子を幸せにするんじゃ』

『霞ちゃんもいつかはそういう我俣かもしれない選択をしてしまうかもしれん。その時は、迷わず自分に正直な道を行くんじゃ。望まぬ結果になったとしても後悔は少しだけですむぞい』

『結局後悔はするんだ？』

『当たり前じゃよ……自分の理想と違ってしまったのじゃからな。あの時こうしていればと後悔するのは当然じゃ。じゃがの、ダメージは少ないぞい。なんせ自分に正直に生きたんじゃからの』

何かを得るためならリスクが必要だ……最悪、歌と先輩の両方を失

うかもしれない。

でも、それでもボクは進む。ボクが求めるハッピーエンドを目差して。

そして、ボクは一礼してから部屋を後にした。よっし、頑張ろっと。

——Side Kazuto Himuro

「はあ」

翌日の美術の時間…とりあえず進路希望調査は出したが…辞めよう考えるのは…

「元氣ないね？ 具合でも悪いの和人君？」

心配そうにひかりが話しかけてくる…俺の代わりに彩花がその疑問に答えた。

「ああ、違うわよ。和人は美術の課題で頭を悩ませてるのよ」

「どういうこと？」

「……そういえば…昔から絵だけは苦手だったな」

首をかしげるひかりに思い出したように琴乃が言う…

「驚きましたわ…和人さんにも苦手なものがあったんですね」

「うん。なんでもできると思ってた」

お前ら、人をなんだと心得る？

ま、確かに俺は絵が苦手だ。いや、もはやトラウマといっても過言ではない。そのトラウマの原因は、今やブラウン管の向こう側の人である少女だ…

『だーかーら！！なんでそこで黒混ぜちゃうの！？』

『ちょ、ちょっと！！描いてるのって、海だよね！？なんで海が真っ赤に染まってるの？演出？要らないよそんなの！』

『そもそもなんで下書きしないで直接絵の具塗りながら筆で絵を描いてるの？…は？めんどくさい？二度手間？…絵を舐めんなコラあああ！！』

あやつの絵の特訓は地獄だった。

つか、そもそも俺には向かないのに…

これがきっかけで絵が物凄く嫌いになったのは言うまでも無く、絵の練習が歌の練習に代わった時は心の中でガッツポーズだった。

ふと過去にひたっていると…

「へっへーん。氷室の弱点見つけたりー！」

琢磨^{あほ}があらわれた。

かずとのじごくづき

「へぶ!?!」

あほののどにかいしんのいちげき

あほはちからつきた

「な、なにすんじゃこらー!?!」

なんと、あほがよみがえった。

かずとの…

「もういいからそれは!?!」

「ええ」

琢磨の突っ込みに、さっきから、妙なナレーションを入れていたハジが口を尖らせる。

「いくら加減したとはいえ、もうちょっとダメージは残ると思ったんだが…打たれ強くなったな。」

「嬉しくねえよ…」

まあ、こいつに構わずさっさと絵を描かねば。

今回の美術の期末テストはこの課題…テーマは自由だ

つまりは、好きなもんを描けて事だ。

風景だろうが人物だろうがなんでもござれ、琢磨なんぞはヌードを描こうと、鼻息荒く女子に迫った挙句に彩花の机投げで力尽きていた……痛いんだよなあ、あれ……

くるくると鉛筆を回してから、一気に書き始める

「は、早！」

「ちょ、ちよつと真面目に……」

周りの声が聞こえなくなる。それほど絵に集中していた。

一つ一つ、手順を思い出しながら嫌になるほどに描いた絵を描く……それは俺が唯一、霞大先生からお墨付きを貰った絵だ。

「……下書き完了っ」と

あっと言う間に描き終える。これが今回の秘策。ふふ、過去の作品から見たらクオリティは雲泥の差だ。恐ろしく高い

絵の中では一人の少女が微笑んでいた。

「この人……どっかで見たことあるような……」

「……あら、ひかりさんもですか？ 私も何処かで……」

首をかしげるひかりと沙耶香。

「なあ……この娘…S o r aに似てないか？」

「…本当だ…しかし…何故、和がS o r aさんの絵を？」

「それに、若干幼いよ。中学生くらいに見える」

琢磨の一言がきっかけとなって、琴乃とハジが訝しげに俺の方を見る。

そして…

「馬鹿ああ!!」

何故か彩花に後頭部を殴られそうになり…

「ずいぶんといきなりだな。このやろ」

首を捻って交わす。その風圧が滅茶苦茶涼しく感じた。

多分、冷や汗＋風圧のコンボのせいだろう。

俺の肩を掴み、ガクガクと揺らしながら彩花は吼える。

「うっさい!なんで!?!これ霞よね!?!なんで霞の絵を描くのよ!?!
?しかも滅茶苦茶上手じゃない!」

まあな…いったい、あいつをモデルに何枚書いたと思っている。

そう、それは地獄の特訓が風景ではなく人物画に及んだ時の事だ。

恥ずかしそうに…

『ぼ、ボクをモデルに描いてみて?』

と、言われたので早速描いたのだが…その絵は速攻で破かれた

『これ、誰!? っていうか、人間にみえないよ!?!?』

そして、幾度も書かされ…

『ぼ、ボクの顔はアン○ンマンじゃないよ。顔がまん丸じゃない!
!』

『つ、角なんて生えてないでしょ?』

『拳句の果てに棒人間!? 2キロ先のボク? やる気あるの!?!?』

泣かれた時には本当に地獄だった…

爺にボコボコニされ、霞には冷たくされた拳句、手当ての際に傷口に塩を塗り込まれた…滅茶苦茶痛いんだぞ?

ま、それをきっかけに死に物狂いで霞だけは描けるようになったのだ。

「ああ、こいつはな俺の絵の先生なんだ。自分だけはまともに描かせたかったらしくて、何枚も練習した。だからこれだけは書けるよ

うになったんだ」

と、説明がめんどくさいので超簡潔に話した。

その後、霞の事について聞く声が多かったが、のりくらりとはぐらかしつつ、授業が終わる。ま、これで問題の一つは片付いたな。後は…

期末テストも近いので授業は普段より多少早く終わり、放課後となる。

だが、この後に控えるのは進路希望調査の2者面談だ。

期末前に進路を決めておきアドバイスを貰うことでやる気を向上させるのを狙っているんだよ。とはハジの談だ

んで、釈然としないのが…

「なんで、初日の最後なんだよ俺…」

そう、俺の順番は初日の最後。俺以外の面子はア行からの出席番号順だ。俺は、ハ行だから後の方なんだが…

ブツクサ良いながらも一旦、家に帰ってから着替えて私服で時間通りにやってきた。

前の奴がでてきたので、教室の扉を開けると…

「氷室おおお!!」

何時もより怒りが3割倍増の御堂先生のチョークの嵐。

咄嗟に、扉を閉めて防御。むこうでカカカッ!とか音がしたが、手裏剣じゃあるまいし…気のせいだろ

んで、改めて扉を開けると、足元にはチョークだった物体の成れの果てが転がっている…掃除が大変そうだな。

「座れ!!」

有無を言わさない迫力で怒鳴られ、静々と対面に座る。

席は真ん中の列の前のほうの席四つをくつつけての面接スタイルで、先生は黒板を背に座っており、一枚のプリントをバンッと荒々しく机にたたきつけた。

ミシッと机が悲鳴をあげたことから、かなりの攻撃力だと推測される。

そして、置かれている紙は俺が出した進路希望調査だ。

「なんて書いてある?」

「? 読めませんか? これでも祖父譲りで字は結構上手いほうだと思いますが…」

「皮肉も通用しねーのか!! まあいい!! この第一志望の幸せ家族

計画！ってのはなんだ！？」

御堂先生の怒りの理由は俺の出した進路希望調査だ。

とりあえず、将来の夢を希望順に書いてみて先生と相談して進路を決めようと思ったのだが：

ちなみに内容は：

第一希望 幸せ家族計画。つまり、幸せな家庭が築きたい

第二希望 幸せ新婚生活。子供が出来ない場合、せめて奥さんと一緒に幸せになりたい。

第三志望 幸せ睡眠生活。独り身の場合、働かないで寝て一日をぐーたら過ごしたい。

という感じだ。とりあえず、描いてある事の意味を話してから、俺の希望を言う。

「先生、男なのに情けないというかもしれませんが、俺は寂しいんです…」

「…氷室…」

——Side Maki Midou

氷室の進路指導調査のプリントを見たとき、私は怒りに打ち震えた。

私への挑戦としか思えなかった。

だからこそ、あいつの面談を初日の最終にしてじっくりと話すつもりで居た。

もちろん、次の日の面談が終わった後も、あいつを呼びつけて話すつもりで居た。

だが…

「先生、男なのに情けないというかもしれません、俺は寂しいんです…」

あいつのその言葉と、寂しそうな…愁いを秘めた目で苦笑いを浮かべた時に怒りは全て吹き飛んだ。

「…氷室………」

あいつの両親は既に亡くなっており、天涯孤独の身となっているのも、橘の親が身元保証人になっているのも知っている。

だが、こんな氷室の表情は初めて見る…。そして、氷室は静かに語りだした。

「普段はあまりそうは思わないんです…彩花がいる。冬至や華蓮が居る…そして、新しく友達も出来た。涼香さん…彩花のお母さんなんです…見守ってくれている人も居る…寂しいと思う暇なんて無いんです。先生も居ますしね？」

やめてくれ…私はそんな立派な人間じゃない…

「でも…家に帰って、夜に一人で居ると、どうしようもなく寂しくなるときがあるんです。時々彩花が、心配だとか言って泊まりにくるんですが…やっぱり、寂しいんです」

私は、気付かなかった。自由に、のびのびと生きているんだと…ふてぶてしい奴だなんて思ってたんだ…。だが…

「橘か…」

あいつは気付いていたんだろうな…

「はは、あいつの前では強がるんですよ俺。あいつは優しいから、寂しいなんていったら毎日泊まりに来るでしょうしね。俺の弱さであいつを拘束したくない。だから、内緒ですよ」

違う…それは違うぞ、氷室。

おめーはつえーよ。精神的にも肉体的にもな…

「だから、家族が欲しい。失ってしまったものは戻らない。だから、俺が作ろうと思ったんです。一人の女性と愛し合って、結婚して…そして、生まれた子には俺みたいに寂しい思いをさせないように、暖かい家庭を作りたい。将来の事を考えた時に、それが俺の夢なんだと気がついたんですよ」

氷室の話を聞きながら、私は自己嫌悪する…そして…

「私は…先生失格だな。お前の抱えているものにまったく気がつけなかった」

と、ポツリと呟いた：

その言葉にきょとんとし、氷室はさも当然に

「そんなの：当たり前じゃないですか？」

そう言った。

「当たり前って…」

「だって、先生は別に人の心が読めるとかのエスパーじゃないでしょう？なら、話してないんですから気がつくわけ無いじゃないですか。普通の人間なんですから」

「………」

「大体、ひとりひとりの悩み事に付き合ってたら先生ハゲますよ？何人居ると思ってんですか？相談してきたら答えてやる：そんなんで良いと思いますよ。それに、俺は割とポーカーフェイスですから…この事は正真正銘のエスパーである奈緒先生にすら気付かれてませんよ」

こいつは…

「くく…」

「あ、信じてませんね？なら、今度ポーカーでもします？言っておきますが俺はポーカー滅茶苦茶強いっすよ？ベガスに行っても通用するくらいに」

何を細かいことに悩んでいるんだ私らしくも無い。

それに、生徒に悩みを解決してもらうなんて…

なんか凄く可笑しかった。

――Side Kazuto Himuro

…：良く分からんが、先生が大笑いしている。変なもんでも拾い食
いしたんだろうか？

やがて、落ち着いた先生が…咳払い一つし…

「悪かったな。で、進路の事だが…とりあえず、成りたいもんとか
は無いのか？」

「特にありません。ですが、進学はしないつもりです。金、ねーっ
すから」

幾ら節約しているとはいえ、大学に行く余裕なんて家にはないのだ。

残してくれたお金にも限りってもんがある。

ま、バイトしてなかったからだと言われたら、耳が痛いんだが…

「…：つまりは就職か。何処でも良いって事か？だが、希望位はあ
るだろ？家から近い方が良いとか」

「ああ、それはありますね。それともう一つ：遅刻しても許してくれるようなところがいいっすかね」

もしくは寝ててもOKな職場だ。ああ、天国。

そんな妄想は：

「んなもん：あるわきゃんねーだろが！！」

先生の怒号とチョークの嵐で吹き飛ばされた。

結局、夏休み中に行われる3者面談までには考えとけて事で面談は終了。

問題を先延ばしにただけに過ぎない結果となった。さてはて、どうないしょ…

進路：それは長く続く道の最大の分岐点。

それぞれの未来を大きく左右する：

高校生活最後の夏が始まろうとしていた。

第34話：進路！？休止！？彼、彼女の望む未来（後書き）

更新完了！。

最近、スランプ気味の上、寒くなってきた：キーボード打つてると手が冷たい：

彩花「根性なしね！」

ひどっ

彩花「うっさいわね。こっちはそれ所じゃないわよ！何よ今回の話！霞ばかりさ！」

だって、球技大会でずっと欠場してたしさあ：正直、ファンレターというか霞ちゃんを出してーの声が多いって言うかさ：

彩花「だからって！」

ふっ、お客様あつての商売のように、読者あつての作家さ。ニーズに答えるのは当然さ。悔しかったら彩花ちゃんも人気を集めればよろし。

彩花「くっ！？」

ふふん。さて、今回からは霞ちゃんの猛反撃が始まる予定。ありやー、こりゃ勝負ついたかな

彩花「まだよ！」

じゃ、それは頑張ってもらおうとして。今回はちょっとだけ真面目に進路の話。次回もその続きかな…

彩花「霞の奴…何をするつもりなの!？」

それは次回のお楽しみ。では、皆さんまたお会いしましょう。この季節、風邪やインフルエンザに気をつけて下さい。では…

第35話：遙かなる高みへ：動き出した白き少女

—Side Kasumi Misora

社長達に休止を宣言して、ボクは夢のために動き始めた。

そして、その第一歩。

「…着いたよ……先輩…」

ボクは春ヶ丘の地を再び訪れた。

今回のボクの格好は過去のととは違い、先輩がくれた帽子とお古の服で完全に男装。

コンプレックスの胸が大きくない…というのが役に立ったのか、見事に男の子に見えるはずだ。

かといって小さいわけでもない。形も良いし、感度も抜群…

「つて、これじゃ！ボク変態さんだよ！」

ツツコミを入れ、ブンブンとおかしな自分の考えを振り払って、ボクは歩き出した。

「おじゃましまーす…」

家主の居ない氷室家。先輩は、学校に行っている筈だ。

ボクは昔に玄ちゃんから貰った合鍵で家の中に入った：

抱えるように持ってきたボストンバックを居間に置いて、ボクは二階に上がる。

そして、先輩の部屋でハンガーに掛かっていた、お目当ての物を発見する。

「先輩の…制服だあ」

手にとって…クンクン…

洗濯したのだろうか？洗剤の匂いとほのかにフローラルな香り…香水かなあ…

「って、これじゃ、ボク変態さんだよ！！」

駄目だ駄目だ…おかしいぞボク。自重しろ

自分を戒めてから、ワイシャツも引っ張り出して、袖を通していく。

「ぶかぶか…」

だが、当然のようにサイズがあわず、ぶかぶかだ。

とりあえず、裾を折って、穿いているズボンのベルトを使ってウエストを強引に止める。これで下はオッケ―

上は…

「このままで行くしかないか」

着替えを終えたボクは家を後にして、先輩の通う学校……光琳高校に向かった…

――Side Misuzu Kariya

早めの昼食を取り終わり、私はもう一度資料に目を通す。

今日、編入試験である面接を受ける国民的にも有名な女の子……

「S o r a…いえ、美空霞さんか…」

顔はもちろん知っている……だけど…

「ふう…何を考えているんでしょうね彼女は」

隣で頭痛薬…いや、胃腸薬かも…を飲む教頭の姿を横目で見つ…私は敏感に彼女からあるオーラを感じる。

「…ラヴ…とてつもないラヴ臭がするわ!」

ふふ、私の目は誤魔化せないわよ。

私の恋を見抜く眼力は伊達じゃないわ。ちょっと頑張れば相関図だって作成可能な程……

何より、アイドルとしての立場を蹴ってまでわざわざ学校に通うな

んて愛：以外に理由があるわけがないわ！

「教頭先生、急いで彼女の制服と教科書を手配して。サイズはこれに書いてあるから」

資料から必要事項を書き写した紙を教頭先生に渡しながら、私は告げる：

「は？あ、あの…面接はまだ…」

「合格に決まってるじゃない♪私が恋する乙女を応援しない訳が無いわ！」

ふふ、詳しくは本人から聞くとして…さてさて…一体、お相手はどんな子なのかしらね。

アイドルと…普通の高校生の恋…ああ、考えただけでもぞくぞくするわ！

—Side Kazuto Himuro

「——っ!？」

昼食時、屋上で購買のパンを食べていると物凄い悪寒を感じた。

絶対に良くないことが起きる。俺はこの手の感を外したことがない。

「…だからといって…どうすることも出来んな…」

何故なら、この手の危険を回避できた事が無いからだ……せめて、最後となるかもしれない昼食を楽しもう。

「…おまえ、さっきから何やってんだ？」

隣で食べている琢磨に怪訝そうに見られる。ちょっと…傷ついた……

——Side Kasumi Misora

光琳高校の校長室。そこでボクは編入の為の面接を行っていた。

「すいません。こんな格好で…」

部屋に入って帽子を取って謝る。こんなぶかぶかの…しかも男物の制服で面接に来るなんて自分でも前代未聞だと思う…

でも、私服で着ちゃったら目立つし…彩花さんに制服を借りるわけにもいかなかったし…変装には丁度よかったっていうのもある…

「いいわよ。ふふ、アイドルも大変ねえ」

校長の狩谷美鈴さんは気さくな人らしく、そう言ってくれた。

「それじゃ、いくつか質問させてね？」

「はい」

何聞かれるのかな？ やっぱり志望動機かな…

「…ほほー。これはこれは…中々な有能物件を狙ってるわね…」

「？」

何の話だろ？

「んじゃ、一つ目の質問ね。和坊の何処に惹かれたの？」

…いきなりの質問に私は驚いた。

「あ、あの！どうしてそれを！？それに普通、最初は自己紹介とか！」

「そんなのつまらないし、時間の無駄じゃない。資料で分かっているんだし。で、なんで私が和坊…氷室和人君にあなたが好意を抱いているか分かるかって言うの？見えるのよ。私には、その人の想っている人がね…」

…は？

「写真とかじゃ駄目なのよ。直接会わなきゃ、あ、でも、その人が恋しているかどうかは写真で分かるわよ。すごいでしょ？」

すごい何も…まだ、ちょっと混乱中……

「でもね、あの子は競争率高いわよ」

けど、その言葉に思考がクリアになる

「勝ちます…」

「霞さん？」

「誰にも…誰にも先輩は渡しません。そのために…ボクは此処に来たんだから」

そうだ…この人がどんな力を持っていようと関係ない。私の恋の相手を知られたところで意味が無い。

誰が来ても…先輩をボクだけの先輩にする。彩花さんにだって負けるつもりは無い。

少し熱くなってそう叫んじやったんだけど…拙い…面接だって事忘れてた…

校長先生はプルプルと肩を震わせて俯いている。

そうとう怒らせちゃったなあ…面接も駄目かも…

目尻に涙が浮かぶ…ボクってだめだなあ…

だけど…

「うふふ…合格！！素晴らしいわ！！愛のために全てを棄てる…ふふ、ラブ…これぞラブよ！！」

ガバツと俯いていた顔を上げ、そのまま一気に立ち上がり、歓喜の笑顔で私の傍まで来て、肩をガシツと掴んで力説する。

「そうね。橘さんや他の娘達もモタモタしててヤキモキしてたんだけど…ふふ、これで面白くなりそう。良い？一気に行きなさい！和坊は鈍いからね、間接的なアプローチは駄目。ゴーゴーゴーっよ！押して駄目なら引いてみる！？ぬるい！！押して駄目なら、もっと押せ！押し倒せよ！！」

暫く、固まっていたが徐々に言葉の意味を理解し、ヒートアップする狩谷校長に触発されてボクもテンションが上がっていく。

「そうなんだよ！ボクもね、色々とアプローチはしてきたんだけど、全然気がつかないんだ。だから、家に押しかけちゃった。先輩にはまだ内緒だけど…」

「同棲！？いいわ！ナイスな攻撃ね！だけど安心しちゃ駄目よ。チヤンスを生かして一気にもってかないと」

意気揚々とまるで友達のように会話する二人。もはや、面接は頭に無い…そもそも、面接前から合格が決まっていたのだから…

傍らで言われたことを終え、面接を静に見守っていた教頭先生はため息を吐き、ピルケースから不本意ながら愛用している薬を取り出し、お茶で流し込むのだった…

——Side Kazuto Himuro

放課後……今日は琴乃と彩花が二者面談を受ける。

なのに、なんで俺まで教室に残っているんだろうか：

面接が始まるまでの少しの時間、俺は何故か？二人に詰問を受けているのだった：

「そ、それで？和の…」

「志望する大学は何処なの！？」

……んで、なんでか俺の志望する大学を聞いてくる二人。

「い、いや…志望も何もさ…」

「か、和の成績なら一流大学ですら合格できるだろう」

「けど…、私だって頑張るんだから」

なんでかやる気満々の二人。つかさ：

「なして、俺が進学と決め付けてるんだ？言っておくが、俺は大学には行かないぞ」

「なっ！？」

「な、なんですって！！」

驚く二人。むうゝそんなに驚くような事だろうか？

「ど、どうして！？こ、今度こそ一緒に入学して卒業できる…：そう

思ってたのに！」

「そ、そうよ！！私の幸せラブラブキャンパスライフ計画をどうしてくれるのよ！！」

：あのー何を言ってるんでしょうか？つか、なんで攻められてるんだろう：俺。

「だってさあ：金、無えし」

今の家を売るなりなんなりすれば、授業料＋安いアパートで何とか成るかもしれない。

けど、あの家を手放すつもりは無い。あの家は、俺の夢の舞台。あの家で暖かい家族：家庭を築きたい。

爺ちゃんの残した：あの家で：

「け、けど！！奨学金とか！？」

「ええ！後で働いて返すって言う手もあるわ。ここから通える春ヶ丘大学を狙えば良いじゃない。公立だし」

「でもなあ：学びたいことなんて無いからなあ。なのに大学行ってもお金が勿体無いじゃないか」

つか、昔は中卒で高校には行かないで働こうとすら思っていたほどだ。涼香お姉さんが断固反対して、高校出なさいと笑顔で脅：コホン。説得の末に今、此処にいるのに。

「そんな訳で俺は就職するつもりだ。じゃ、俺は帰るぞ。ああ、受験勉強で分からないところがあったら、俺でよければ教えてやるからな」

それだけ、言い残して席を立ち、家に向かう。

さて…今晚は何を作ろうかなあ……

――Side Maki Midou

はあ…こいつ等は……

今日も面接。最大の懸念事項であった氷室を終えた今、スムーズに進むはずだったのだが、まだ問題児が居た…いや、正確には問題児共だが…

「てめえもか……ったく、どいつもこいつも…」

本日最後の面接…橘に怒鳴りつける。

こいつは春日とまったく一緒の事をほざいたのだ。

二人の進路は進学が第一志望。具体的な志望校は成績を見つつ、面接で決めるという事だった。

だが、方面…つまり、文系とか理系とかを聞いとかなきや、志望校どころじゃない。

なので、最初にそれを聞いたのだが…

言うに事欠いて、氷室と同じところがよかった……とほざきやがった。

氷室は関係ないだろ。成りたいものを言ってみろ。と言ったら…二人揃って…

『お、お嫁さん…』
と、きたもんだ。

こんなのあたしにどう指導しろつつうんだ。そもそも！なら、家で花嫁始業でもなんでも勝手にやれって感じだ！！

色恋沙汰は校長の管轄だつつうの！！

そして、氷室と同じように三者面談までにやりたい仕事を見つけてそれについてちゃんと調べろ！ってなことで面接は終了。

ああ…頭痛え……教頭に頭痛薬でも貰ってくっかな…

——Side Kotonokasuga

「はあ…先生に怒られちゃったよお…」

ため息を吐きながら帰り道を歩く。

でも、和ちゃんのお嫁さんになるのか小さい頃からの夢だ。

それに、和ちゃんがいるから転校してきたのに、和ちゃんの進路が違っちゃ意味が無い。

「今年中に…告白するしかないかなあ…」

でも、それは凄く怖い…

断られたら…きっと、和ちゃんと話せなくなる。

それはとっても嫌だ…

だから、時間が…欲しかった…

大学に行けば、今まで一緒に居られなかった時間を少しでも取り返せると…そう思った。

「はあ…」

私にはまだどうすればいいか…道が見えない…。

—Side Ayaka Tatibana

「ただいま…」

自分でも不機嫌な声だと思う。

それも仕方が無いじゃない。てっきり進学と思っていた和人が就職な

んだから…あんだけ頭良いのに…

でも、良く良く考えてみれば分かることだった。あいつは中学の時も高校に行かないで働くと言っていた事だし。

「そうだ！」

母さんに頼めばまた、説得してくれるかもしれない。

そう思って、鞆を置いて、着替えをして台所で夕飯を作っているお母さんのところに行き、お願いしてみたが…

「彩ちゃん、甘えないの」

そっけなくそう言われた。

「あの時は和人君はまだ子供だった。でも、今年で18よ。あの子の人生に私が口出しする権利は無いわ…」

「で、でも…」

「それに…三年も時間があつたじゃない。今まで何してたの？彩ちゃん」

その言葉に、ビクッと身体が震える。

「和人君が好きなんでしょ？中学の頃から…ずっと見てきた私は知ってるわ」

「……………」

「仮に一緒の大学に行ったとしても同じ事になるわ。だらだらと一緒に居るだけで肝心な告白が出来ない…」

「そ、それは…」

「丁度いい機会なのよ。和人君と一緒に居られるのは今年いっぱいだと思えば…そうすれば、けじめがつけられるでしょ？」

どうして？

どうして、そんなに冷たいの？

「お母さんは…私の味方じゃないの!？」

思わず、そう叫んだ…でもお母さんは…

「味方に決まってるじゃない。娘の幸せを願わない親が何処にいるの？」

と、そう言って近づいてきたお母さんは、微笑みながら私の髪を撫でる。

「それに…和人君の本当のお母さんになりたいしね。だから…そのために彩ちゃんに頑張ってもらわないと…」

ひとしきり私の頭を撫でた後、その手を肩に置いて、まっすぐに私を見て…

「踏み出す勇気を持ちなさい。動かなきゃ何も変わらない。怖いのは

分かるわ…誰だってそうだもの…怖がらないで告白できる…そんなの本当の恋じゃない。断られたらもうあの人と元の関係で居られない、気まずくて話しかけることも出来なくなるかもしれない。本当の恋をしたら誰もがそう思うの…でも、そこから一歩踏み出したものが、欲しかった幸せを得る資格を持てるのよ？」

「資格…」

「ええ、このままじゃ誰かに先を越されて和人君とられちゃうわよ？それでもいいの？」

「それは嫌！！絶対に嫌！！」

「それじゃ、踏み出しなさい」

そう言って、お母さんは踵を返し再び夕飯を作り始める。そして、私は部屋に戻って一人で自分の気持ちを考えてみることにする。

台所から出る直前…

「彩ちゃん、後悔だけはしないようにね」

後ろからお母さんのそんな言葉が聞こえてきた…

お母さんに言われて、一人考える。

勇気を出して告白か…

私は和人が好き…それは偽りの無い感情…和人には私だけ見てい

て欲しいと思う…

だけど、拒絶されるのが怖い。和人と気まづくなったら、これまでどおり一緒にはいられなくなる。

けど…今、和人は私の傍にいる…卒業したら離れてしまうかもしれない。なら、卒業式の後で告白して、今は一緒の時間を共有するだけで良いのではないかとも思うのだ…

「そうよね…うん。まだ時間はあるわよね…」

臆病な私は未だ、動き出すのを戸惑っている…

この時の私は気がついていなかった。すでに、一歩踏み出した人が居ることを…

—Side Kazuto Himuro

時間は少し遡る…

放課後、詰め寄られた二人から解放されて、俺は家に帰ってきた…

「ただいまー」

返事が返ってくるわけでもないのに、ついそう言ってしまう…

だが、今日は違っていた…

「おかえりー」

リビングのほうから聞き覚えのある声がしたのだ。

現在、この家の鍵を持っているのは家主である俺と彩花、そして保護者である涼香さん…その誰とも違う…

で、残っているのは…

「おまいか」

リビングでだらしなく足をパタパタさせながら、ポテチなんぞを頬張りつつ…寝っころがってテレビを見ている白き歌姫…こと、霞がいた。

しかも、ブラウン管の中にもその少女の姿…どうやら、コンサート
の時の映像らしい…。

そして、テロップには

『人気歌手 S o r a 活動休止!?!』

の文字がでかでかと…って、なにいい!?!?

「おい、霞よ…これはどういう事だ!?!」

テレビでは病気や事件などの様々な憶測がされているなか、話題の張本人は事もあるうに俺の家に居る：

俺は着替える時間も惜しく、制服のまま霞の対面に座ってTVを消してから、そう問い詰めた。

「先輩、制服が皺になっちゃうよ。着替えてきなよ」

「だまらっしゃい！！さあ、話せ、やれ話せ」

深い事情があるなら、俺も問い詰めはしない。けど、こいつのこの能天気な態度からはそれは推測できない。

こいつの癖は知っているため、隠し事をしている可能性もない。なので、強気な態度に出る。

そんな俺の追求は：

ーピンポーン

来客を告げるチャイムで遮られた。

「ええい！何処のどいつだこんな時に！」

まったく、家への来客は毎回間の悪いときにきやがる。

ブツクサ良いながらも、玄関に向かおうとする俺を：

「あ、いいよ。ボクが出る」

と、霞に制された…。

霞の関係者？ ああ、そうか。マネージャーだからプロダクションの誰かが迎に来たのだろう。

そう結論付けて、自分の部屋に戻って着替えることにする。

まあ、後で話を聞けば良いか…と思いながら…

そして、私服に着替えて階段を降りてくると…

「あれ、お前まだ居たの？ ……」

帰ったと思っていた霞がまだ居た…

「あ、先輩。ちょっと手伝って」

しかもダンボールの荷物を抱えて…

急速に嫌な予感がしてきた…

「か、霞ちゃん。それはなんなのかな？」

ダンボールを指差しそう問いかける。

「中身？ えっと…これはねえ…あ、せ、先輩のエッチ！ でも…先輩なら…ぼ、ボクの下着…そんなにみたいの？」

とりあえず、妙なことをほざく霞の額に…中指を十分しならせて

「ていつ！」

「バシィ！！」

「はう！？…いい、痛いよお…」

デコピンをお見舞いした。

額を擦りつつ…涙目で睨む霞…

「うう…顔はアイドルの命なんだよ？」

「お前、アイドル休業中だろ？それに…顔じゃなくてデコだ」

とりあえず、話が進まないのので玄関先にダンボールを放置して霞の手を引いてリビングに連行…

だが、リビングについても霞は俺の手を離さず…

「えへへ♪先輩と手を繋いじゃった♪」

「……………もう一発喰らうか？」

その言葉に、慌てて手を離して正座で座る霞。

それを満足げに眺めて、俺は対面に座る。

「さて、説明しろ」

霞の説明はこうだ。

今までは芸能プロダクションの寮に住んでいたのだが、アイドルを休業したので当然、住んでいるわけには行かず、かといって両親はアメリカに居る。

その結果、家に来たというわけだ。

「先輩、前に言ってくれたでしょ？家だと思ってくれて…」

「…言ったが…」

しかしな…あの時は爺が生きてたしなあ…

現在は俺だけで、住むなら当然、俺と二人きり。

若い男女が二人きり。俺にその気が無いつもりでも、どんな間違いが起きるか分からない。

それになにより…お隣に住んでいる彩花の反応が恐ろしい…

霞が絡むと物凄く機嫌が悪くなり、その矛先は俺に向かう。さらにそれに呼応するように霞の機嫌も悪くなり、累乗効果で俺に危害が及ぶのだ…

「駄目かな？」

ここで上目遣い！？

ぐっ、精神的ダメージが大きい…

さらに…

「でも…そうしたらボク行くところがないし…近所の公園とかに住むしか…」

霞の追い討ちでダメージ加算。もう、俺の精神は虫の息だ…

そしてトドメ…

「うう…きつと、そこらへんの浮浪者か柄の悪い人にボクの純潔は奪われるんだ…そしてボクは絶望の中で一言…『せんぱい…』と呟いて…「…わかった。好きにしろ」…やた♪」

完敗。うう…こいつ、黒くなってやがる。

芸能界か！？あの白い純粋だった霞を変えたのは！？恐ろしい世界だ…

しかし…

「けどなあ、なんで休業なんて…これからどうするんだ？」

理由は聞かないといけない。

「うん…ボクはね……もつと高く飛ぶための翼を…得るために此処に来たんだ…」

静に語り始める霞の言葉に黙って耳を傾ける。

「先輩はボクに勇気と歌っていう翼をくれた。だから、此処まで来れた……でもね……足りないんだよ。もっと高く。大空に羽ばたくためには……」

「……何が足りない？」

俺には霞の望む物が分からない……

「そ、それはね……」

顔を赤くし暫く俯くが、やがて意を決したように……

「先輩だよ……ボクには先輩が必要なんだ！」

は？俺が必要？

今より高みに行くのに俺が必要？

……まさか……霞は……

——Side Kasumi Misora

言っちゃった……言っちゃったよ！

じっくり先輩にアピールするつもりが、その場の勢いでいきなり最終局面！

不安と期待で心臓の鼓動が速まり、ややパニックくる。

そして…

先輩がゆっくりと口を開いた…

第35話：遙かなる高みへ… 動き出した白き少女（後書き）

更新完了。

美鈴「あら♪感心ね。早いじゃない」

ういっす。書いてて楽しっす。

美鈴「そうよね！ラヴは楽しいわよね！？」

そして、今回も活躍した美鈴さんですが次回も活躍予定です。やっぱり愛の伝道師は伊達じゃないっすね！

美鈴「しばらくは、進路指導と霞ちゃんとの話が平行で続く予定よ！」

とりあえず名前順で…となると次は…

美鈴「それよりも、私は和坊の言葉が気になるわ」

TV風に良いところでカットしてみましたからねえ。これで更新の間が空いたら…怒られますよねえ俺。

美鈴「むしろ、私が殺るわ。社会的にね♪」

……（汗）

美鈴「あ、早速書き始めた。ではでは、皆さん次回の更新をお楽しみにいっ♪」

第36話：それぞれの希望：今この瞬間を大切に

――Side Misuzu Kariya

面接を終え、正式に霞さんが我が光琳高校に転入される事が決まった以上。色々と手回しが必要だった。

「それじゃ、マスコミのほうはお願いね♪」

そのため、私は電話をしている。相手は愛娘

『OK♪でも、面白そうで良いなあ…ねえ、こっちも若い子とデートしたいなあ』

「旦那いるでしょうに…ま、いいわ。じゃ、後で和坊を一日貸して上げる」

『やた♪絶対だからね!』

「はいはい」

ふう…まったく誰に似たのかしらねえ…

『で、学校の方は大丈夫なの？生徒さん騒ぐでしょう？』

「そうね。でも何とか成るんじゃない？優秀な教師陣が居るし、苦労するのは私じゃないわ♪」

『うっわー。無責任〜。あ、ごめん。まだ仕事が残ってるからまた

ね。言われたことは早速やっておくからね。』

「ええ、偶には食事でもしましょう」

最後にそう言って電話を切る。

「これでよしと…ふふ、お膳立ては整ったわ。さて、どんなドラマを見せてくれるのかしらね…」

—Side Kasumi Misora

時間は少し遡る。

ボクの一世代の告白…そして先輩の返事は…

「すまん…」

「っ!？」

ふられた!？

泣きそうになる…その場を走り去りたい…

立ち上がろうとしたところで先輩が言葉を続ける。

「だが…俺は知っての通り、人に注目されるのは好きじゃないんだ。だから、お前の希望は叶えてやれない…」

……へ？

「そもそも、俺はそんなに上手くないぞ」

あれ？なんか話がおかしい方向に行っている

「せ、先輩？ぼ、ボクの希望って？」

「？俺にギターのギターが必要で一緒に芸能界に入れて言う話じゃないのか？前にもそんな話があったじゃないか」

……ようするに

ボクは先輩自身が必要。つまり、告白のつもりで言ったのだが、先輩はギターとしての自分が必要だと勘違いしたらしい。

——Side Kazuto Himuro

霞の様子がおかしい：

俺の返答に泣きそうな顔をしたかと思うと、途端に俯き、肩を震わせている。

「霞？具合でも悪いのか？」

そんな俺の心配からの気遣いは：

「先輩の…鈍感！！馬鹿！！朴念仁！！アホおお！！」

霞の叫ぶような罵倒で返された。

しかし、声大きい。流石歌手…腹式呼吸バッチリだね…

それから、妙に不機嫌になった霞の機嫌を取るため、霞の荷物を運んぶ。

部屋は俺の部屋の隣の空き部屋。掃除は時々やってるので綺麗なのだが…

せめて部屋は離れた方がいいといったのだが、霞はそっぽを向き、まったく聞き入れず…

仕方が無いので仰せのままにした。

それが終わると夕飯の支度をする。

和風オムライスだ。正直、時間が掛かるのであまり作りたくなかったのだが、何時もより気合を入れて作る。

その甲斐もあってか、夕飯時にオムライスを一口食べた霞は笑みを浮かべている。

ほっとした…

食後のお茶を啜りつつ、俺は霞に問いかけた。

「んで、お前はこれからどうするんだ？」

はつきりと断った以上、霞は此処にいる理由は無いのだが、荷物を運び込んだことから本人は帰るつもりは毛頭無いらしい。

「ボクは諦めないよ。先輩を籠絡する…」

ろ、籠絡って…

「ま、まあ。それは置いといて」

ジェスチャーをしながら…

「具体的にはどうするんだ？」

との、俺の問いに霞は含み笑いをするだけで教えてくれなかった。

まあ、霞ももうガキじゃないし…あれこれ言うのもどうかと思ったのでとりあえずほっといた。

そして、残っていた美術の課題。色塗りをすることにした。霞先生が居るならよりよい絵が書けるだろう。

だが、それが誤算だった…

絵を見せると…

「わぁ♪ボクだぁ」

と嬉しそうにし…

「でも、なんで昔のなの？」

「それしか、まともにに書けないから」

その返答に霞は暫し考えて…

―ビリッ

「お、おい！」

絵を破いてしまった…

「駄目だよ。昔のままで満足しちゃ。ほ、ほら今のボクを書いてみて…前より上手に」

む、むう…嫌な予感がするぞ？

しかし、先生と生徒という立場になった場合、生徒である俺に逆らう術は無く、渋々、絵を書くことになったのだが…

「…何これ？先輩」

笑顔が怖いです…霞先生

「……………霞」

小声でそうもらすと、霞が持っていた筆が悲鳴を上げて圧し折れる。

「ごめん…聞こえなかったなあ。で、何？」

「……………腕鳴らしに宇宙人を書いてみた」

咄嗟にそう誤魔化する。

「お茶目だねえ…先輩は」

微笑を浮かべそう言うが、目は笑っていない。

「先輩、今夜は寝かせないからね」

普通なら色々な妄想を掻きたてられそうな、一度は言われてみたい言葉だがこのシチュエーションでは嫌な汗しか浮かんでこなかった…

翌日…

「やれば出来るもんだなあ」

徹夜して書き上げた絵を見て、しみじみ頷く。

人間、集中すれば限界を超えた力が出せるようだ。

絵の中の霞は今の霞で、昔より笑みが魅力的。そして、アクセントとして翼を書いた。

昔の霞には無かったものだ…自分でもかなり綺麗な絵に仕上がったと思うし、霞も嬉しそうにしていた。

だが、角は駄目で翼は良いのだろうか？霞の判断基準はよくわからない……

つか、徹夜なんて快拳をやったのけた自分が信じられない。

俺に付き合ったまま、リビングで寝こけてしまった霞を出来たばかりの霞の部屋のベットに寝かせて、片づけをし……俺も寝ようと自分の部屋に戻ろうとしたところで……

「かーずーとー！起きなさい！」

元気良く、彩花さんが来てしまいました……あはは、ねみい

そしてそのまま登校する。

霞が居るとはいえ念のため鍵を掛ける。にしても羨ましい……

俺もねてえ……

彩花との自転車二人乗り（運転手は俺）で登校したのだが、途中で何度か意識が飛び、居眠り運転となり、彩花に怒られ殴られた……

――Side Maki Midou

今日、私は一日中機嫌が悪かった……

朝のSHRから帰りまで一日中、氷室の野郎は寝こけていた。

あたしの投擲も寝たまままで回避、または拳で迎撃し、恋や麗の授業

でも起きる事無く死んだように眠っていた。

誰も…あの橘ですら氷室を起こすのを躊躇い、とうとう触らないようにという事で一日が終わってしまったのだ。

そして、寝ている状態でも攻撃が効かなかった事もあり、かなりの屈辱を感じていた。

そのまま進路診断が始まり、不機嫌だが職務はちゃんとこなして行き…

「あはは、ちっす」

ウチのクラスナンバー2問題児である常盤琢磨の番になった。

そして、希望調査には…

第一希望 ハーレム 俺様王国、野郎は知らん！

第二希望 ホスト 女の子といちゃいちゃ。

第三希望 進学 できれば女子大学。合コンしたい

とりあえず、チョークをお見舞いした。ダース単位で

「進学つう事にしとくぞ。だから、勉強しろ。正直、今のままじゃどこもうかんねーぞ」

復活した常盤にそう言って、家に帰した。

そして、本日の最後。都合が悪く、日程を変更した北條の番となった。

問題と言う問題は無かった。

成績も良く、北條財閥の跡取り娘は明確な未来のビジョンを持っていたから…

なのだが、本人の表情が優れない。納得していないのだと分かる…

「なあ、北條。何を悩んでいるんだ？話してはくれないか？あたしじゃ力になれないかもしれないけど…楽になると思うぜ？」

その言葉に、俯いて暫く考えていたが北條はポツリポツリと語り始めた。

――Side Sayaka Houjou

進路…私の進む道は決まっていました…

用意された道…舗装され綺麗な道…

分かっていて。私は北條を継ぐのだから。お父様が選んだ優秀な方を婿として共に北條を支えていくのだと…

その事に不満は無かった。むしろ誇りに思っていた。だから、私は何事においても一番になることを目指した…

勉強でもスポーツでも…生徒会長となったのも人の上に立つという経験が欲しかったから…

でも…あの方に……和人さんに出会ってしまった。

最初は不快にしか思っていないませんでした…

大した努力もせず、いつも私の上にたつ。

勝つために…彼に勝つために私は努力して……そのうち、彼を意識するようになって…

可愛い寝顔に、何者にも縛られずに…のんびりと気ままな所…

彼を例えるのに狼という話を聞いたことがあります、私には猫を思わせます。

どうしようもなく優しい所…

時折見せる憂いを秘めた瞳…

そんなところに…どうしようもなく惹かれ、気がつくとき彼を見ている…

一緒にクラスになって…私の知らない彼の部分を知っていくうちに…次第に好きになってしまいました…

必死に、否定しようとしてしまった……実らないと…お父様の選んだ方

と結ばれるしかない…そういう運命なのだ…

「でも…でも…諦められないんです！！どうしようもなく…私の中で彼の存在が大きくなっているのです！！」

恋という感情を知ってしまった以上、よく知らない人なんて結婚したくない。

だけど…

「…私は…お父様に立ち向かう勇気がありません…それに…」

――Side Make Midou

あたしは驚いていた。

北條がこんなに感情を見せるところを見たことが無かったから…

そして、そこまであいつを…好きだったという事もだ…

さらに、次の言葉が尚、私を驚愕させた。

「今月の終わり…7月29日。私の18の誕生日に私はお見合いをしなくてはいいけないんです」

苦しそうに…そう言った。

「そのお見合いは私の夫となる人を選ぶための誕生日パーティーなんです……。そこでお父様が結婚相手を決める……」

正直、もうあたしの手には終えない話だ……

なので、最強の助っ人を呼ぶことにした……愛の伝道師を…

――Side Misuzu Kariya

面談中の筈の御堂先生から内線が入り、教室に言って話を聞いてみると…私の心は燃え上がった。

「あなたは…嫌なのよね？」

「……はい…」

「なら、そんなお見合い…ぶっ壊しなさい!!」

まったく、今年の三年生は…どこまで私を熱くさせるの!?! いい話を見せてくれるの!?!

「いい! 愛無き結婚!?! 糞喰らえよ!! 愛こそ全て! 愛なくして幸福はありえない!」

テンションがどんどん上がっていく。

「あなたはそれでいいの!?! 誰のための人生なの!?! 家なんて出くらいの覚悟で! 自分の幸せのためだけに生きなさい!」

「私の…幸せ?」

「ええ。とりあえず、お見合いの件は協力してあげるわ。愛の名の下にそんな暴挙を許すわけには行かないもの！」

日にちを聞き、詳しい作戦はおって連絡すると言って面接は終了。これをなんとかしなきゃ、進路どころじゃないものね！

そして私はその場を後にする。

萌え…コホン！燃えてきたわ！！こんなテンション久しぶり！

——Side Kazuto Himuro

「—っ!？」

寒気がした……どうしようもない悪寒が…嫌だなあ

「先輩、どうしたの？そんな暗い表情をして…」

「いや…なんでもない」

諦めよう。受け入れよう…

もう、不安になるのもばかかしい。どうせ、回避できないのさ…
…アハハ…

夕食後、のんびりギターで適当なメロディを弾き、霞が適当な詩

で歌って遊んでいると…

メールが届く……差出人は冬至だ。

「先輩？」

「……ちょっと出てくる」

霞に一言言って家を出た。

「悪いな呼び出して…」

「まったくだ」

冬至にメールで呼び出されたのは人気の無い学校のグラウンド。

そりゃ、もう夜の9時を過ぎているし学校には人は居ない。

そこに、仕舞いわすれたのか、冬至が持ってきたのか？分からないが、サッカーボールでリフティングしている冬至が居た。

「……………」

「……………」

無言でリフティングする冬至とそのボールを眺める俺。

そして…ゆっくりと冬至が用件を切り出した。

「……俺、高校卒業したらイタリアに…セリエAに行く」

「そうか…」

互いに沈黙。いつしか冬至はリフティングを止めている。

「お前には感謝してる……お前が居なかったら俺はサッカーを辞めていたかもしれない」

「大げさだなあ…」

肩をすくめて返事をするも、冬至はまっすぐに俺の目を見て…

「だから、お前には一番最初に言いたかったんだ…」

「泣いてんじゃねーよ。ばーか」

そう言って、俺は笑う。まったく、イタリアに勝負しに行くのに泣いててどうするんだ

「いいだろ！俺にとってお前はかけがえない親友なんだ！！イタリアに行ったらもう会えないかもしれないんだぞ！」

「んなことない。生きてりゃまた会えるさ」

それに…

「多少離れたところで、俺とお前の縁は切れないぞ。お前と同様、俺も冬至は最高の親友だと思ってるからな」

「和人……」

だから……

「胸を張って行って来い。そして…活躍するまで帰ってくるな。俺に自慢させてくれよ。俺の親友は時雨冬至なんだぜってな」

その言葉に一層泣き出す冬至。まったく、見かけによらず泣き虫な奴だ。それに卒業までまだ半年も残ってるのに……

「和人…俺、残った学生時代を大事に過ごすよ。悔いが無いように…クラスは別になったけどさ、お前と…いや、お前や橘達と今のうちに遊ぶんだ」

「……それはいいけど、彼女を蔑ろにするなよ」

こいつには年上の彼女が居るのだ。見てるだけで暑苦しいラブラブの……男としてちょっとムカついてきた

「ああ。だけど、綺羅は…いい、一緒にイタリアに来てくれるって言うし、今は友達と遊べて…」

むう…尻に敷かれてるのか……

恥ずかしそうに語る冬至。

「まあ、それならいいけどさ。ふられても俺は責任とらねーからな」

そう言って笑い合う。

そして、共に学校を後にして帰り道…

「とりあえずインターハイだ…」

「ああ。応援には行かないぞ。めんどいからな……」

つか、いけないの方が正しいな

彩花の応援に行かないと後が怖い…

「薄情な親友だな」

「知るか！彼女だけで十分だろうが！」

言いながら軽く小突く。

冬至が旅立つ前に…俺に出来る精一杯の応援をして送り出そう…そう思った。

「にしても…」

「？」

「綺羅ねえ……いつから前園先輩を呼び捨てに出来るようになったんだ？」

「——っ！？そ、それは…」

冬至を散々からかいつつ、歩きながら…

今、一緒に居られるこの瞬間を…大事にしたい…そう思った。

第36話：それぞれの希望…今この瞬間を大切に（後書き）

こ、更新完了……

涼香「やるじゃない」

自分でも驚きの…三日連続更新…燃えたよ…燃え尽きた。

涼香「あー、死んでるわねえ。それじゃ、今回はこの辺りで。感想ありがとうねー」

第37話：新たな同居人！今夜は眠れない…

—Side Kazuto Himuro

「……………」

「……………」

沈黙が支配する我が家のリビング。

睨み合っている二人の背景には、鷲と虎が見えるが……気のせいだ
と思いたい。つか、前にもこんなこと合ったような。

なんでだ？ どうしてなんだ？ さっきまでは普通に会話をしてたじゃないか……。

現在うちのリビングでは霞と彩花が、テーブルを間に挟んで睨み合っているのだ。

事の発端は数分前に遡る。

期末が近いので、恒例の『お馬鹿な彩花の勉強会』をするために彩花が家に来たのだ。

んで、リビングで霞と遭遇し、『また来たの？』と呆れ口調で彩花は対面に座ったのだが、別にこの時は平穩だった。

勉強まで少しだけ雑談をしようと言う事になり、お茶を入れにその

場を起ち、戻ってきたら……この状況というわけだ。

とりあえず……

戦略的撤退を試み、腰を浮かせたところで…

「何処行くの？」

冷たい微笑の彩花に声をかけられ、何故か身体が硬直し退路を失い……

「お、お花を摘みに……「座れ」…はい」

逆らってはいけない。彩花が飢虎に見える……逆らった瞬間、奴の牙や爪は容赦なく俺に襲い掛かるだろう……

そつと、なるべく刺激しないように正座で座る……

「で？　どういう事？　霞が此処に住んでるって」

なるほど。冷たい視線の訳はそれですか……

「い、いや…し、仕方が無いんだよ。こ、此処は霞にとっても家みたいなもんだし……泊めてくれて言われたら断れないんだよ。爺ちゃん公認だし」

「そうそう、玄ちゃんに此処を家だと思ってくれ、その代わりにボクを二人目の孫だと思うから…って、言われてるんだよ」

「だからって！図々しいわよ！？そいえば…あんた芸能活動を休んでいるそうじゃないの！？どういう事よ！？」

うん、それは俺も聞きたいな。ギタリストの件は断ったしな。……まさか、まだ諦めて……

「…欲しいものがあるんだよ」

不敵に笑みを浮かべながら俺を見る霞。おいおい……俺が了承するまで居座るつもりか？

「だから、ギタリストになれって言うのは断っただろ！？」

このままでは霞はニート街道まっしぐらだ。俺は断固、拒否するからだ。

「そうだね……でも、決着がついてないからまだ諦めないよ？」

決着って……おい。ってか、何故に彩花に視線を向けたまま？

——Side Ayaka Tatibana

「——っ！？」

霞の態度にピンッと来た。

和人はどういう訳か、ギタリストとか訳分からない解釈をしているけど…霞が欲しいと言っているのは和人だ。

そのために、芸能活動を休んでまで此処に来た……霞は本気だ。

このままじゃ……このままじゃ……和人が取られちゃう！

「わ、私も此処に住む!!」

「……何を言うとするんだ？チミは」

和人が呆れたようにそう言う。

「だ、だって、霞だけずるい！」

「いや…彩花さんや、ずるいとか言われてもな。マジで行く所がない霞と違って、お前は此処から徒歩1分と掛からない所に住んでるだろ？泊まる意味なんてまったくねえだろ」

「だからって！若い男女が一つ屋根の下で寝起きするなんて……何かあったらどうするの!？」

「その心配はないと思うが……」

言われて見れば、確かに……その可能性は限りなく低い。もし、そんなことを和人がするなら、私はとつくに……こ、コホン!……と、とにかく！勢いで言っちゃったが、心配する必要は無いだろう。

和人の三大欲求は睡眠欲が圧倒的パーセンテージを占め、二番目に食欲。せ、性欲は、女に興味が無いんじゃないの!？って言いたいくらい無い…隠してるだけかもしれないけど……

それとも、私に魅力が無いのかなあ……

「？ 彩花さーん！もしもーし！？」

はっ！？

考え事に耽っていると目の前でブンブンと和人が手を振っていた。

「ご、ごめん……何？」

「いや何って…いきなりボーっとするからさ。体調でも悪いのか？今日の勉強会は止めとくか？」

「そ、そうね！？ちょっと気分が悪いみたい……ごめんね。また今度でいい？」

勉強になんて集中できるはずが無い、今はどうにか対策を練らないと……霞に、和人が取られる！

家に帰ってお母さんに相談する。驚くと思いきや、以外にも……

「霞ちゃんでしょ？テレビで見るより可愛いわよねえ。それに良い子だし…」

「知ってたの！？」

「…知らなかったの？」

お母さんは霞の事を知っていた。なんでも、いつも通りに和人の家に洗濯物を取りに行った際に霞と会っていたらしい。

お母さんは、私とのやり取りからある程度を察したようで…

「で、どうするの？」

そう問いかけてきた。

「どうするって…」

それを相談しに来たんだけど…

「私に聞かないでね？これは彩ちゃんの恋…彩ちゃんの問題だもの……」

「——っ！？でも…でも……」

私にも分からない……こんなこと考えてなかった。まだ、時間はあ
ると思ってたのに……。

——Side Suzuka Tatibana

はあ……いつもの積極的な彩ちゃんは何処に行ったのかしらねえ。

こと、和人君の事となるとうじうじと……

これは、あの作戦を実行するしかないわね。パパは反対だって言っ
てたけど……これくらいの後押しはしてあげないと本当に彩ちゃん
負けちゃうし。

「ねえ、彩ちゃん。それはそうと話があるの」

「話？」

「ええ、大事な話よ」

――Side Kazuto Himuro

「つて、事なのよ。よろしくね♪」

「はぁ……」

彩花が家に帰ってからしばらく経つと今度は涼香お姉さんがやってきた。

そして玄関口で、とんでもない事をお願いされた。

曰く、彩花のお父さんである信之助さんが先月から単身赴任しているらしく、涼香お姉さんが健康管理などそう言うことが心配になったので、そっちに行くことにしたらしい。

彩花は高校三年…流石と一緒に連れて行って転校させて新しい友達と卒業式をするより、こっちの学校で親しい友達と卒業式をした方がいいだろうという事で、こっちに残すことにしたのだが…

如何に彩花が豪傑で猛獣化と言っても、生物学的に女…それも世間一般的価値基準で言うべっぴんさん…一人じゃ拙いだろう…って事で。

彩花ちゃんを預かって♪とお願いされちゃった訳なのだ。

「……まあ、涼香お姉さんの頼みですし……そう言う事情なら分かりましたが……いいんですか？」

「…何がかしら？」

「いえ、俺も男ですから……そ、その……」

「ああ、別にかわまないわよ。襲っちゃっても、彩花ちゃんを貰ってくれるならね♪親公認よ」

笑顔でとんでもない事をのたまう……冗談ですよね？

「そ、それに！彩花は…彩花本人は嫌なんじゃ……俺なんかと一緒に住むのは…」

「いいえ、早速荷造りしてるわよ。気が早いわよねえ。今度の休みの日からだって言うのに、私も予定を繰り上げて明日にでも行こうかしら……あ、そうそう。悪いんだけど…重い荷物とかあるだろうし、運ぶの手伝って貰えないかしら？」

「分かりました。んじゃ、行ってきます」

俺はリビングでテレビを見ていた、霞に少し出かけてくる旨を伝えて彩花の家に向かった。

—Side Suzuka Tatibana

和人君が出て行くのを見届けて、私は家にお邪魔する。

そして、リビングにいた霞ちゃんにも事情を伝えた。

「……そうですか」

「ふふ、不服そうね。それはそうか、愛しの先輩との愛の巢に邪魔者がお邪魔するんだからね」

「…そ、そんなこと!」

必死に否定しているけど、バラバレね。そこがすごく可愛いわ。

「ごめんね。本来娘の恋愛には親は不干涉…こういうのはルール違反なんだけど…やっぱり娘が可愛いのよ」

「……それって…」

「だけど、ここからは私は何もしないわ。後は彩ちゃん次第。願わくは、和人君にお母さんって言われたいわね♪」

「——っ!? そ、そんなことないもん! 先輩はボクが!」

「ふふ、その意気よ。霞ちゃんも頑張っつてね…別に霞ちゃんが勝つてもいい…和人君が選んだからね。ただ一つだけ約束して頂戴…」

「なんですか?」

訝しげに私を見てくる霞ちゃんに満面の笑みで…

「結婚式には絶対に呼んでね♪」

そう告げて、私はその場を後にした…

――Side Kazuto Himuro

「よつと……これでいいかな」

「……………」

「ぶう」

彩花の荷物を一階の客間に運び入れて、一息つく。その間、彩花は阿呆な子みたいにポカーンと口を開けて固まっており、霞はよく分かれないけど不貞腐れてる。

とりあえず呆けている彩花に…

―ぺし！

でこピンをしてやった。

「……っ！？な、何すんのよ！」

少し赤くなったおでこを擦りつつ、涙目で批難する彩花。

「何じゃねえよ。そりゃ、俺が運ぶって言ったんだけど……ボケとしてられると働いている俺としては遺憾なわけですよ」

「だ、だって！だからって！箆笥ごと運ぶ奴がいる！？あんな重いもの…正直、人間業じゃないわよ！？」

「だってメンドクサイし、その方が手っ取り早いだろ？それにそんなに重くなかったし…」

中身は服とかだ。まあ、濡れてたりすりゃそれなりに服も重くはなるが、タンスの中の服が濡れているなんてことない。

「それに、家の色情爺のイカれた鍛練よりよっぽど軽い」

「あゝ、あの重りだよねえ？懐かしいなあ……」

霞は昔の光景を思い出し、懐かしそうに笑みを浮かべる。

「いや、お前は気が付かなかったかもしれないけどな、あの重りの重量だんだん増えてたんだぞ？」

「……へ！？嘘！？」

「マジだ……なんでも『海中で鯨に襲われた時に対処できるように』だそうだ…」

と、霞と昔の事で盛り上がっていると、彩花が無言で近寄って俺の腕を触る。

「くっ！？くく……ふふ…あ、あや……ふはは…く、くすぐったい！」

「……やっぱりおかしいわよ！それなりに引き締まっているけど、ムキムキって訳じゃないのに……」

ひとしきり、腕を触ると彩花が離れてそう言う。

「えっとねえ：ボクも前にそれ聞いたことあるんだけど、要は力の使い方なんだって。ただ鍛えてマツチヨにしても、その筋力を有効に使わなかったら意味がない：玄ちゃんはそのう言ってたよね？」

彩花の問いに、くすぐりで呼吸を整えていた俺の代わりに霞が答える。

「ああ、そう言ってたな」

玄ちゃん理論はこう。普通の人間の筋力を100とした場合、その筋力の使い方は：

筋力100×30%≒30となり、つまり筋力100に対して、実際に30しか使えない。

筋トレなどで鍛えた場合でも：

（筋力100＋筋トレでついた筋力20）×30%≒45で、実際に使えるのは45だ。

んで、爺の教えと鍛錬により：俺の場合は

（筋力100＋鍛錬でついた筋力20）×80%≒96。

「となるわけよ。うちのじい様の理論だと……んでもって、100%
つてのは筋肉壊すから使っていないのは8割までらしい……もつとも、
俺も意識してやってるわけじゃないから本当に8割なのか分らない
けどな」

剣球で紅桜先生を倒した技もその応用だ。足の筋力を効率よく使っ
た結果の移動術。

「だから、鍛えるなら筋力をつけるよりも使い方を覚えるほうが効
率がいいんだ」

「じゃ、私にも教えてよ」

「それは無理だ。ノウハウは爺ちゃんしか知らないからな。俺と同
じことやってもできるかどうか分からないし、そもそも何やらされ
たかなんて覚えてないから」

それに彩花なんぞに教えたら、俺への被害が倍增するではないか。

ある程度片づけを済ませ、足りないものは随時取りに行くという事
で、夕食を取る事にした。

ぶーたれ娘が二人に増えてしまったので、機嫌解消のためにハンバ
ーグとオムライスというそれぞれの好物を作り、なんとかご機嫌が
回復した夕食後。

お茶を飲みながら、俺は口を開く。

「よし、それじゃ家事分担を決めようか」

三人で住む事になったので公平に家事を分担する事にしようと思う。

「つていっても、炊事はもう俺なんだけどね。君ら、料理スキルゼロだし。だから掃除か洗濯を二人で決めてくれ」

霞が来てからは洗濯は霞に任せていた。俺が女物の下着を洗うのはどうかと思ったし、まあ、俺の下着を洗わせるのも抵抗があったんだけど、霞自身は特に気にしていないみたいなので、まあ良しとしていた。

そんなこともあり、掃除は彩花。洗濯は霞、炊事は俺と分担が決まった。

その後は適当に話をしながらTVを見る…

その間に交替で風呂に入ることにし、今は霞が風呂に入っている。

「やっぱりいいよな…」

お茶を飲みながらポツリとそう零す。その言葉を聞いて彩花が首を可愛らしく傾げながら…

「どうしたのよ？」

「いや、霞が来てから思ってたんだけどな。やっぱり家に人がいるのはいいなってさ…」

二人が来る前は俺一人だった。

「和人…」

「あー、違う違う。そんなしみりとした顔するなよ。別に寂しいとか辛かったとかそういう意味じゃないんだ。ただ、話をするのが楽しいってだけ。電話とかもあるけど、やっぱり顔見て話したいじゃん」

「……そうだね。それじゃ、いっぱい話しよ！」

「ああ」

とかそんな話をしていると、風呂から上がった霞が入ってくる。

Tシャツにハーフパンツといったラフな格好で、首にはタオルが掛かっており、手にはドライヤーって…

「またかよ…」

はぁーっと溜息を吐くのも束の間、霞はタタッと素早い動きでコンセントを差し込むと、俺の前に背を向けて座った。

「せーんぱい♪」

「いい加減、自分でやんなさいな…」

とか言いつつ、俺は霞からドライヤーを受け取る。ふう…俺も甘いなあ

そしてゆっくりと温風を霞の髪に当てながら、髪を梳いてやる…

「ふにゃあ〜♪ごろごろ〜♪」

「こら！ごろごろすな、乾かせんだろうが」

まったく、この甘えんぼさんめ…

こいつう、ってな感じで霞の頭を軽く小突いた処で…

「な、なにしてんだカラーー！！」

今まで呆然と傍観していた彩花が突然叫んだ。

「何って…先輩に髪を乾かしてもらってるんですけど？」

見ての通りですが？何か？ってな感じで、霞が答える。

「そんなの見りゃ分かるわよ！！なんであんたの髪を和人が乾かしてるのよ！！自分でやんなさいよ！」

「ええ〜、嫌だよ〜。だって先輩の方が上手で気持ちいいんだもん。ゴロゴロ〜♪」

事の発端は昔、まだ霞の腕が治っていない時の事だ。

何度かうちの風呂を貸したことがあるのだが、何かと不自由だと代わりに俺が髪を乾かしていた。

その際に何が気に入ったのかは分からないが、腕が治ってから、家の風呂に入った後は俺に髪を乾かすように要求してくるのだ。

「和人も和人よ！なんで言いなりになって乾かしてるのよ！」

「なんでって：別に俺は嫌じゃないからな」

矛先が俺に来たけど、別に悪いことをしてるわけじゃない。単に髪を乾かしてるだけだ。

霞の髪は白くて、長くて、細くて、すごく綺麗だと思う。それにシャンプーの香りか、いい匂いがするのだ。

それに、俺の髪はそんなに長く無いので、長い髪っていうのは新鮮で乾かす方も結構楽しかったりする。

何に腹が立っていたのかよく分からないが、彩花は：

「私、お風呂入ってくる！！！」

とだけ言って、さっさと出て行ってしまった。

「……………なあ、彩花はなんで怒ってたんだろうな？」

「はぁ〜。まあ、分かってたけどね。先輩はもう少し女心を勉強した方がいいよ？」

霞に彩花の怒りの理由を聞いたが、そう返されてしまった。

そのまま霞の髪を乾かし終えて、しばらくすると、風呂から上がった彩花が、タオルで髪を拭きながらやってきた。

ピンクのパジャマにいつもとは違う、ポニーテール前のストレートヘアである。

そんな彩花がすごく新鮮で、ちょっと可愛く見える。

そんな事を考えていると、さっきまで霞の髪を乾かしていたドライヤーを手にとって…

「ん！」

赤くなった顔で俺に突きつけてきた。

「いや…って、おい」

訳も分からずドライヤーと受け取ると、霞同様座ってしまう。

「……おまえもか…」

彩花の言わんとする事が分かり、ドライヤーのスイッチを入れて、霞と同じように乾かしていく。

「ふぁ〜」

間の抜けた声を出しながら、彩花が凭れかかってくる。

「っと、だからお前も動くなって」

言ってもどかないので、彩花を後ろから抱き抱える感じで髪を乾かす…

…なんか、滅茶苦茶恥ずかしいんですけど…

「ぶう〜」

頬膨らませた霞がジト目で見つめてくるから余計に恥ずかしい。だけれど、それ以上に…

…抱きしめたい…

柔らかくて、小さい体。

石鹸だかシャンプーの香りか？すごくいい匂いがする。

そんな女の子が密着しているのだ。俺だって男の子だもん…

「あっ…」

「——っ!？」

そっとドライヤーのスイッチを切って、床に置いてそのまま両腕で彩花を包み込む。

…あったかいや…それにいい匂いがする…

「か、かかかか!和人!！」

「せ、せせせ、先輩！な、何してるの！！ブレーイク！」

どれほどそうしていたのか…二人の声で我に返る。

「あっ、わ、悪い！」

慌てて、腕を解き立ち上がるが…き、気不味い。

霞は責めるような眼で俺と彩花を睨んでいるし、彩花は顔を真っ赤にして俯いてしまっている。

ここは…

「あ、ふ、風呂空いたよな！！じゃ、入ってくるから！！」

逃げの一手しかあるまい…

—Side Ayaka Tatibana

バクバクと心臓が鳴る。

顔が熱く、きっと私は真っ赤な顔をしているだろう。

「……眠れない…」

霞に負けないように、私も和人に髪を乾かしてくれるように頼んだ。
和人の手が優しく髪を撫でてくれて…霞の言うとおり確かにとても

気持ち良かった。

そして、和人がそのまま私を抱きしめた……

その瞬間、私の頭は真っ白になり、和人の体温と自分の鼓動の高鳴り以外何も分からなくなった。

目をつぶるとその時の感触を思い出してしまう。

眠気なんて全くやってこない。

お風呂から出た和人は、時間を置いて多少落ち着いた私に気の迷いだ。すまなかったと謝ったが、私としては嫌じゃない。

むしろ残念だ。もし、和人が私を想ってくれていて、あんな事をしたら……

「~~~~!!」

ゴロゴロとベッドの上で一人悶える。

今夜は眠れそうにない……

——Side Kasumi Misora

ベッドに入ってもちつとも眠気が来ない。それどころじゃないのだ。ぐるぐると思考がループする。

「先輩、どうしてあんな事したんだろ…」

彩花さんを後ろから包み込むように抱きしめていた先輩。

その姿を見たとき、ボクは一瞬見惚れてしまった。

とても絵になったのだ。そして、その時の二人はまるで恋人みたい
に…

「……やっぱり、彩花さんが好きなのかなあ」

ボクにはそんなことやってくれた事ないのに…

「それとも…胸かなあ。先輩も大きい方が好きなのかなあ」

自分の胸を触ってみる。大きさには自信がないけど、形はいいと思
う。

何でこんなことを考えているんだろう…なんだかむなしくなっ
てきた。

「……先輩の馬鹿」

そうだ、あんなことやった先輩が全部悪いんだ。

そう結論付けて、寝ようとするが、どうしてもさっきのビジョンが
浮かんでくる。

当分寝付けそうにない…

—Side Ather

二人の少女が眠れない夜を過ごす事になった原因はと言えば…

「すう」

平和そうにすやすやと眠りについていた。

氷室和人、結構図太い男である。

翌朝、彼が寝不足の二人に叩き起こされ、八つ当たりされるのは言うまでもなかった。

第37話：新たな同居人！今夜は眠れない…（後書き）

更新完了〜。

そして、今まで放置していてごめんなさい。

和人「まったくだ、これからはちゃんと書くようにしろよ」

うん。とりあえずはデイズを書こうかと…

和人「Rumbleを書けよ！」

そっちも書くさ。んで持って、次回あたりにヒロイン別にルート分岐しようかと…

和人「よいよか…」

そうだね。どうなるか分からないけど。とりあえず書いてみるさ。

和人「頼りないな…」

はっはっは、俺の辞書に計画性という文字はない！計画を立てても実行できないからな！

和人「威張るな！」

あはは、では次回またお会いしましょう。あ、励ましの言葉や感想ありがとうございました〜。

和人「これからもRumbleをよろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8374a/>

R u m b l e

2010年10月9日15時54分発行